

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書 **PDF**

Web報告書もくじ

[はじめに](#) **PDF****I 調査の概要** **PDF**

- [1 調査の趣旨](#)
- [2 調査の内容](#)
- [3 到達基準の設定について](#)
- [4 調査の対象](#)
- [5 調査の実施方法](#)
- [6 調査結果の処理](#)
- [7 調査結果の返却](#)
- [8 到達基準による判定と今後の指導に向けて](#)

- [平成21年度分析ツールダウンロードはこちら](#)
- [平成21年度問題構成表・音声問題のダウンロードはこちら](#)
- [平成20年度Web報告書はこちら](#)
- [平成19年度Web報告書はこちら](#)

II 調査結果の概要**PDF**

- [1 学習状況調査\(ペーパーテスト\)における全体の概要](#)
- [2 児童生徒に対する意識調査から見た佐賀県の子ども像
\(小5/中1/中2\) \[共通グラフ\]\(#\)](#)
- [3 児童生徒に対する意識調査から見た佐賀県の学習者像
\(小5/中1/中2\) \[小5グラフ\]\(#\)/\[中1グラフ\]\(#\)/\[中2グラフ\]\(#\) / \[共通グラフ\]\(#\)](#)
- [4 教師意識調査から見た佐賀県の教師像\(小学校\) \[小学校グラフ\]\(#\)
\(H20小学校/H20中学校\)](#)

III 各教科等の調査結果の分析

- | | | |
|-----|--|------------|
| 小学校 | 1 国語: 言語活動のねらいや表現様式に合わせて知識・技能を活用し定着を図る | PDF |
| | 2 社会: 社会的な思考・判断力を高めるためにも、当事者意識を持たせる授業を | PDF |
| | 3 算数: 算数的活動を授業に取り入れ、活用できる形で知識・技能の定着を | PDF |
| | 4 理科: 科学的な思考の育成は良好 技能や表現の育成の一層の充実を | PDF |

- | | | |
|-----|--|---------------------|
| 中学校 | 1 国語：自分の考えを表現し、交流する活動を取り入れた授業づくり | PDF |
| | 2 社会：小中7年間の社会科を通して、現実社会につなげる授業を | PDF |
| | 3 数学：思考の過程や判断の根拠などを説明するような数学的活動を通した授業を | PDF |
| | 4 理科：観察・実験やものづくりなど、生徒の直接体験の充実を図る授業づくり | PDF |
| | 5 英語：文構造の定着、書く活動の充実がポイント | PDF |

IV 意識調査の結果の分析

[PDF](#)

意識調査結果の分析に当たって

児童生徒意識調査問題の構成	教師意識調査問題の構成
-------------------------------	-----------------------------

[PDF](#)

児童生徒

[PDF](#)

- [1 学校生活](#)
- [2 学習動機](#)
- [3 学習活動\(教科全般\)](#)
- [4 生活習慣](#)
- [5 家族関係](#)
- [6 課外活動や部活動、地域における生活](#)

教師

[PDF](#)

- [1 教科全般における指導法の工夫](#)
- [2 学習環境の活用](#)
- [3 家庭学習への関与状況](#)
- [4 教師の指導観](#)
- [5 学校組織マネジメントに対する意識](#)
- [6 TT・少人数指導の成果と課題](#)

V 自校データの分析と活用

[PDF](#)

調査結果の分析から学校改善へのステップ

最終更新日： 2009-07-17

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

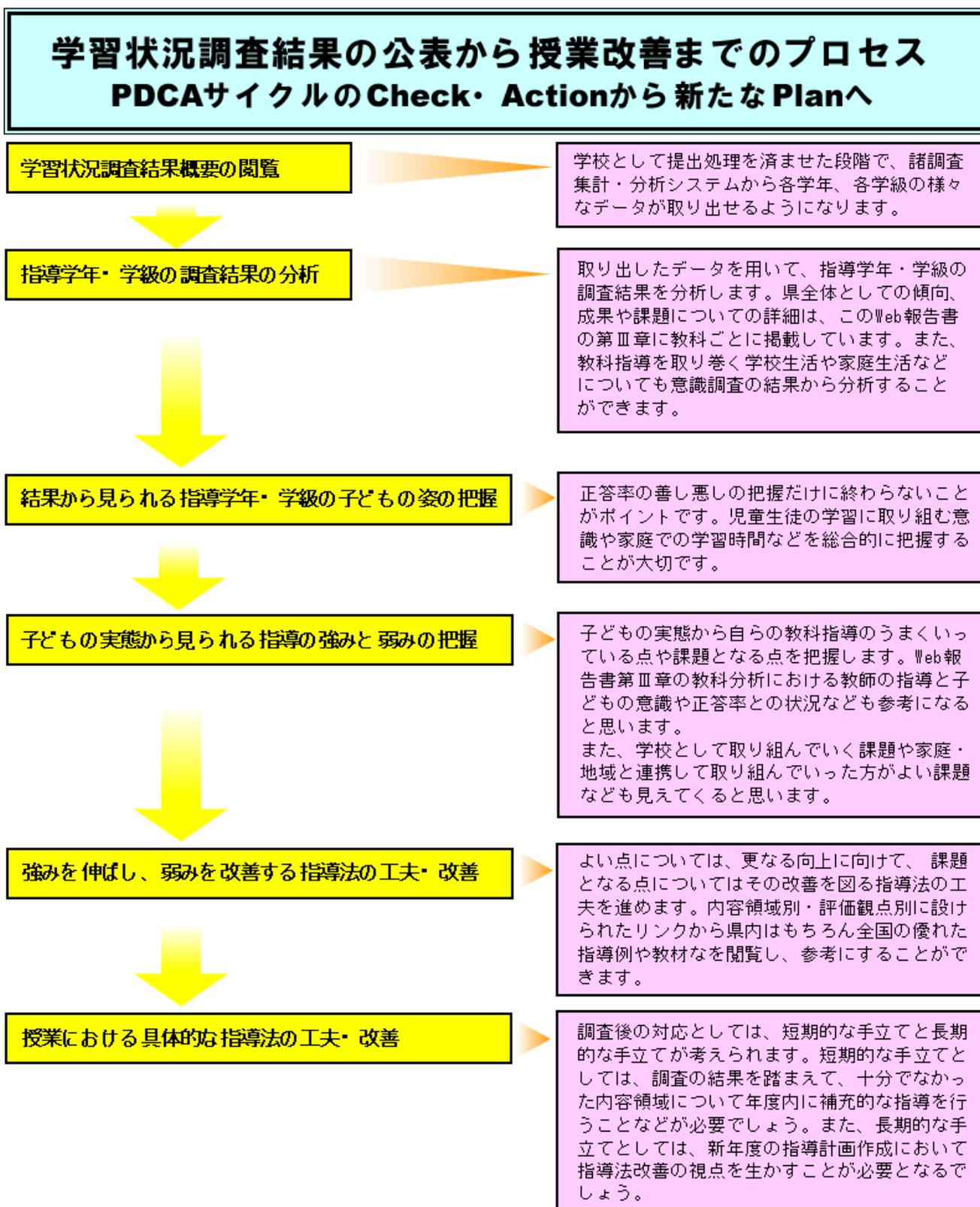
[Web報告書もくじ](#)>はじめに

はじめに ～学習状況調査を生かした授業改善までのプロセス～

1 学習状況調査Web報告書公開の趣旨

佐賀県では、平成14年度から小・中学校学習状況調査を抽出調査で実施し、佐賀県の学力に関する課題の把握に努めてきた。平成18年度からは県としての把握にとどまることなく、各学校の教師が児童生徒一人一人の学習状況や学習・生活に対する意識等の実態を具体的に把握し、改善を図ることができるように、全数調査を実施した。また、調査結果をできるだけ学校現場の教師が生かしやすいように返却することに努めてきた。平成19年度より調査報告書をWeb発信することにより、より多くの教師が必要に応じて、必要な部分を活用できるようにした。平成21年度は、調査実施期日が4月に移行したのに伴い、6月5日に県平均正答率を公表し、6月9日より個票のダウンロードを開始した。6月中にデータを返却することにより、各学校での分析について早期に着手できるようにした。

Web報告書では、佐賀県における今回の調査の結果概要や小学校・中学校の各教科における学習状況について詳細に分析し、学習指導及び児童生徒の学校生活・家庭生活の見直しに向けての示唆となるように努めた。各学校における児童生徒の学習状況や生活状況を把握し、よさや課題を見出すとともに、解決の一つのアイデアとして、Web報告書の関係ページをひも解いていただくことを期待する。よさや課題はそれぞれの地域や学校によって異なる。また、学校においても学年・学級、さらには児童生徒の一人一人によさもあれば、課題も抱えている場合もあるであろう。教師がよさや課題に目を向けて指導を行っていくためにも、Web報告書を活用していただきたい。



上の図は「学習状況調査結果の公表から授業改善までのプロセス」を図式化したものである。多くの学校において、すでに調査結果の分析が進んでいるものと推察される。分析を進めていく中で、今年度中に早急に手立てを取ることが必要な短期的課題や、次年度の教育課程編成や年間の指導計画作成に当たって考慮すべき長期的課題などが見付かるであろう。今年度内に見極めと具体的なアクションを起こしていただきたい。

また、小学校であれば、調査対象である第5学年だけのこととしてとらえるのではなくて、中学年、低学年での指導はどうであったかというような視点をもって取り組むことが大切である。中学校であれば、第2学年での結果が最終学年である3年生でどのようになっているのかという視点をもって、義務教育修了までの指導の在り方について考えることも必要であろう。さらには、小学校第6学年から中学校第1学年というつながりの部分についても、校区内での連携を図ること

が期待される。大切なことは、教師一人一人の取り組みとともに、学校や地域が組織的、継続的に取り組みをすすめることにあるのではないだろうか。

3 報告書の概要と活用に向けて

第Ⅰ章は「調査の概要」についてまとめている。児童生徒意識調査と教師意識調査における設問の意図やカテゴリーについても説明をしているので、各学校での分析の参考にさせていただきたい。また、平成19年度から導入した到達基準の設定と到達基準との比較による調査結果の分析方法についてもまとめている。各学校における目標設定の参考にさせていただきたい。

第Ⅱ章は、「調査結果の概要」についてまとめている。各教科の教科正答率、評価の観点別正答率など県全体の傾向を把握することができるようになっている。各学校の調査結果を重ねてみることで、各学校のよさや課題が見えてくるであろう。また、児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(主に子どもの学校生活・家庭生活の様子が概観できる)、佐賀県の学習者像(学習に対する意識や取り組む態度などが概観できる)、教師意識調査から見た佐賀県の教師像(教師の指導の様子や指導に対する意識などが概観できる)をまとめている。

第Ⅲ章は、「各教科の調査結果の分析」についてまとめている。各教科における学習と指導の状況や成果と課題、さらには、具体的な設問を取り上げての指導法改善の視点などをまとめているので、関係教科を読み、参考になる部分については、生かしていただきたい。

第Ⅳ章は、「意識調査の結果の分析」についてまとめている。「児童生徒意識調査」については、児童生徒の学校生活・家庭生活など学習を取り巻く生活の状況について分析している。正答率等との関連が見られる部分については、その結果を記載している。学校生活におけるよさや課題の把握を進める上での参考になるであろう。また、家庭への協力を依頼する場合においても参考となるデータが得られるであろう。「教師意識調査」については、教師の意識と正答率等との関連について記載している。また、複数の教科に関係する内容や総合的な学習の時間の取り組み、学校組織マネジメントにかかわることなどについては、「複数教科に関連した指導法等」にまとめている。グラフなども示しているので、各学校の状況と照らし合わせながら、必要な部分について読み、参考になる点については指導に生かしていただきたい。

第Ⅴ章は、「自校データの分析と活用」についてまとめている。根拠に基づく学校改善にかかわって、自校の調査結果を活用する視点について述べている。

4 授業改善のヒント

まずは、一人一人の教師が、自分の目の前にいる児童生徒の様子を思いうかべながら、自由に報告書を眺めていただきたい。「自分の学校の子どもはどうなのか?」とか「自分が指導している子どもたちはちゃんとできているのか?」と思ったことについて、諸調査集計・分析システムからデータをダウンロードして、調べてはどうだろうか。そこで見付かったよさや課題について、「もっと伸ばしてあげたい」「何とか改善を図りたい」ことについて、報告書の中の提言などをヒントにしながら、よりよい指導方法を自校の学習環境や自分の授業に取り入れることが授業改善の第一歩であろう。

しかしながら、個々の教師の取り組みだけでは、学校全体としての改善には至らない場合も多くある。1人の教師が6年間(中学校では3年間)を通して指導するというはまれであるし、中規模以上の学校では、学級集団も毎年変わるのが一般的である。系統的、継続的な指導を進めていくためには、どうしても学校としての共通理解・共通実践が必要であろう。また、様々な取り組みが行われてはいても、取り組みの教育的な意義や取り組む際の留意点などを指導する側のすべての教師が認識していなければ、数年で形骸化してしまうこともある。

問題を解決するためには、調査の結果や、日々の指導から得た経験知の中から、自校の課題となることを、すべての教師が共通に認識することが第一歩であろう。学校内での校内研修や教科部会において、システムから得たデータや報告書における提言などを参考にして、自校の児童生徒について考えてみるのが大切であろう。

よさについては、自校の成果として保護者や地域に対してもアピールすることができるし、更に伸ばすための手立てを考えていけば、ますますよい結果をもたらすであろう。課題については、改善に向けて、何らかの共通実践が必要であろう。どのような実践が望ましいかということについては、報告書の中でも多岐にわたって、提言がなされている。これらを参考にしつつ、目の前の児童生徒のことをしっかりとイメージして、必要な実践内容を導き出していきたい。その際、関係するすべての教師が、継続的に共通実践できる内容であることをしっかり確認することが大切であろう。

課題となることは国語、算数(数学)、理科、社会、(英語)の教科だけにかかわることではない場合もあろう。調査の対象とはなっていない教科においても、授業の進め方や宿題の出し方、学習形態の工夫など共通に取り組むべきことが多い。関係教科だけの課題とせずに、学校全体として取り組むことが大切であろう。

教科指導における課題だけでなく、学校生活にかかわることや家庭生活にかかわることについても課題は見付かるであろう。課題の解決に向けては、生徒会(児童会)担当や養護教諭などが中心となって、手立てを考えていくことや、保護者会などを通して保護者に協力を求めていくことなども考えられる。この際もシステムから得たデータや報告書の資料などが有効に活用できるであろう。

採点・入力と多くの教師の尽力によって実施された学習状況調査だが、得たデータには無限の可能性がある。教師一人一人のアイデアや学校としての創意工夫で、授業改善・学校改善が実現し、佐賀県の児童生徒によりよい指導がなされることを望みたい。

最終更新日: 2009-07-17

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#) > I 調査の概要

1

調査の趣旨

本県児童生徒の学習の状況を明らかにし、各学校において、学校全体として組織的に指導法の工夫改善に取り組み、基礎・基本を確実に定着させるために、県内公立の小学校第5学年と中学校第1学年及び第2学年のすべての児童生徒を対象とした全数調査を行い、本県児童生徒の学力向上を図る。

2

調査の内容

(1) 学習状況調査 (ペーパーテスト)

ア 学習状況調査の目的

小学校学習指導要領(平成10年告示)・中学校学習指導要領(平成10年告示)に基づく教育課程の平成21年度の本県児童生徒における実現状況について把握することを目的とする。

イ 学習状況調査の概要

(ア) 実施教科

小学校第5学年は国語、社会、算数、理科の4教科

中学校第1学年は国語、社会、数学(算数)、理科の4教科

中学校第2学年は国語、社会、数学、理科、英語の5教科

※中学校第1学年の調査問題については、小学校第6学年の学習範囲を中心に出题しているため、内容は算数となる。

(イ) 調査問題

県が独自に作成した問題によって構成する。

「活用する力」を問う問題について

本県学習状況調査においては、全国学力・学習状況調査解説資料において示されている以下の2つの出題範囲・内容のうち、「主として「活用」」にかかわる問題作成の枠組みを基にして、各教科の「活用する力」を問う問題を作成している。

・〔主として「知識」〕…国語A、算数・数学A

身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能など

・〔主として「活用」〕…国語B、算数・数学B

知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などにかかわる内容など

全国学力・学習状況調査解説資料より

(ウ) 出題範囲

前学年で学習した内容を中心に出题する。

(2) 児童生徒意識 調査

ア 意識調査の目的

本県児童生徒の学校生活・学習動機・学習活動やそれを取り巻く生活習慣・家族関係・地域における生活などについて広く調査し、その実態を把握する。学習にかかわっては、更に詳細に各教科の学習に対する意識や学習に臨む態度の実態を把握する。また、それらが児童生徒の正答率(※1参照)とどのようにかかわっているのかということ、及び教師の指導理念や指導法についての意識が児童生徒の学習に対する意識や態度にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする。

イ 調査方法

児童生徒を対象とした質問紙法による調査を行う。

ウ 問題の構成

教科意識調査は次のような枠組で問題を構成している。

(ア) 学校生活

- (イ) 学習動機
- (ウ) 学習活動(教科全般)
- (エ) 学習活動(各教科)
- (オ) 生活習慣
- (カ) 家族関係
- (キ) 地域における生活

枠組みとそれぞれの設問との関係は以下の表のとおりである。

枠組	教科	小学校 [全42問]	中学校 [全46問]
(7) 学校生活		1・2・3・5・6・ 37	1・2・3・5・6・ 41
(イ) 学習動機		(2)・4・39・40	(2)・4・43・44
(ウ) 学習活動 (教科全般)		7・8・9・11	7・8・9・11
(エ) 学習活動 (各教科)	国語	12 ア・13 ア 14・15・16・ 17・18	12 ア・13 ア 14・15・16・17
	社会	12 イ・13 イ 19・20・21・22 ・23	12 イ・13 イ 18・19・20・21 ・22
	算数 数学	12 ウ・13 ウ 24・25・26	12 ウ・13 ウ 23・24・25・26
	理科	12 エ・13 エ 27・28・29	12 エ・13 エ 27・28・29・30
	英語		12 オ・13 オ (31・32・33…中2のみ)
(オ) 生活習慣		10・31・32・33 ・34・35	10・35・36・37 ・38・39
(カ) 家族関係		30・36・38	34・40・42
(キ) 地域における生活		41・42	45・46

エ 設問の意図

(7) 学校生活

設問は[学校適応]と[友達関係への志向性]の2つのカテゴリからなる。[学校適応]は、学校生活の楽しさ・勉強に対する興味・学習状況や教師との関係など児童生徒の学校への適応度について問う。また、[友達関係への志向性]は友達をつくることについての考えなど友達関係への志向の高さについて問う。これら2つの相関から児童生徒の学校生活の実態を把握する。

(イ) 学習動機

勉強に対する興味や有用性、大人になってからかなえてみたい仕事の有無について問うことにより、学習動機の高さについての実態を把握する。

(ウ) 学習活動(教科全般)

授業で分からないときの対応、授業以外の勉強時間や勉強の方法、塾や家庭教師の有無など児童生徒の学習方法全般について問うことにより、児童生徒の学習活動全般の実態について把握する。

(エ) 学習活動(各教科)

各教科についての興味や理解度についての自己評価、各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての児童生徒の興味・関心・意欲・態度について問うことにより、それぞれの教科についての学習活動の実態について把握する。

(オ) 生活習慣

読書時間、テレビやゲームなど自由に過ごす時間、就寝時刻、朝食や家の手伝いの頻度、情報収集の手段など生活習慣全般について問うことにより、児童生徒の家庭における生活習慣の実態について把握する。

(カ) 家族関係

きょうだい数、家族の接し方、家族に対する意識について問うことにより、児童生徒の家族関係に対する

意識の実態について把握する。

(キ) 地域社会における生活

課外活動や習い事の頻度、地域における行事などへの参加の頻度について問うことにより、児童生徒の授業外における活動や地域での活動への参加の実態について把握する。

(3) 教師意識調査

ア 教師意識調査の目的

本県教師の指導理念や指導法についての意識、日々の授業における指導の実態を把握することを目的とする。また、それらが児童生徒の正答率及び児童生徒の学習に対する意識とどのようにかかわっているのかを明らかにすることを目的とする。

イ 調査方法

調査対象学年を指導している教職員を対象とした質問紙法(教職員ポータルを介してWeb上から該当者が直接入力する方法)による調査を行う。

ウ 問題の構成

教師意識調査は次のような枠組で問題を構成している。

カテゴリ	小学校	中学校
(ア) 家庭学習への関与状況	設問2～4	設問2～4
(イ) 学習環境の活用	設問5～8	設問5～8
(ウ) 教科等全般における指導法の工夫	設問9～16	設問9～16
(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫	設問17～24	設問17～25
(オ) 教師の指導観	設問25～28	設問26～29
(カ) 学校組織マネジメントに対する意識	設問29～31	設問30～32
(キ) ティームティーチングや少人数指導の成果と課題	設問32～37	設問33～38

エ 設問の意図

(ア) 家庭学習への関与状況

宿題を出している頻度ならびに出している宿題の質(予習的宿題・復習的宿題)について問うことにより、宿題の出題状況を把握する。

(イ) 学習環境の活用

授業におけるコンピュータや学校図書館の活用頻度とその活用内容を把握する。

(ウ) 教科等全般における指導法の工夫

発展的な課題を取り入れた授業の実施状況、理解が十分でない児童生徒に対する授業外での対応状況、書いて表現する活動や話し合い活動を取り入れた授業の実施(教科の授業・総合的な学習の時間)、身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間の指導、学習方法についての指導状況、学習形態の工夫、目標や評価規準を明確にした授業の実施について問うことにより、発展的学習・補充的指導・表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習方法の指導、学習形態の工夫、目標を明確にした指導などの状況を把握する。

(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫

国語における言語活動、読書指導、社会における調査学習を生かした発表・討論、算数・数学における算数(数学)的活動、問題解決的な学習、理科における見通しをもった観察や実験とそのまとめ、英語におけるコミュニケーション能力を高める指導や書く活動などについて問うことにより、各教科の特性に応じた指導法の工夫の状況を把握する。

(オ) 教師の指導観

教師の指導行動を主に課題達成の意識、集団維持の意識の2点から問うことにより、教師の指導観と正答率に及ぼす影響を分析する。

(カ) 学校組織マネジメントに対する意識

教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解、職員間の雰囲気について問うことにより、学校組織マネジメントが児童生徒の正答率や児童生徒の学習に対する意識に及ぼす影響を把握する。

(キ) ティームティーチングや少人数指導の成果と課題

ティームティーチングや少人数指導に携わる教師を対象に、ティームティーチングの際の役割分担や少人数指導における習熟度別編成の導入頻度など実施方法にかかわる現状、指導法改善の頻度、ティームティーチングや少人数指導の成果と課題について問うことにより、県の施策であるきめ細かな指導の実現状況と基礎学力定着の状況を把握する。

3 到達基準の設定について

(1) 調査結果の解釈に当たって

調査問題の作成に当たり、各設問が事前に設定した設問ごとの難易度に適合したものとなるよう、複数の委員が本県の児童生徒の実態を踏まえながら、指導に当たってきた経験に基づいて、問題内容を協議し、検討を重ねている。

問題の難易度は、受検した児童生徒のうち正答することが期待される者の人数の割合で示し、これを「期待正答率」と呼ぶ。本調査では、「期待正答率」として、各設問に「十分達成」「おおむね達成」という2つの基準値を設定している。

「おおむね達成」は、最低限これを上回る児童生徒が正答することが期待される人数の割合であり、下回っている場合は、学習内容の定着に課題があり、早急に改善の手立てが取られる必要があると考える。また、「十分達成」は、学習内容の定着が十分満足できると判断される水準であり、上回っている場合は、各地域・学校における取り組みの成果として評価できるものとする。

このように、事前に設定した「到達基準」と調査結果の「正答率」を比較することにより、到達度を測ることができる。また、経年的な調査結果の比較により、定着に係る動向を知ることができる。各学校においては、調査結果に基づいて自校の取り組みを検証し、課題に応じた重点目標を設定し、解決に向けた指導の工夫・改善を図っていくことが期待される。

(2) 基準設定方法の選択

到達基準の設定に当たっては、1972年にエーベルが提唱した「エーベル法」に橋本重治が修正を加えて考案した「修正エーベル法(橋本エーベル法)」(※2参照)を基本的な考え方として採用する。採用の理由として、個々の小問の判断に基づく設定方法として理論的に優れている「エーベル法」をより簡略化して利用できるようにしたものであること、この方法は実際に「教研式標準学力検査CRT」などにも採用されていることなどが挙げられる。

(3) 設定方法の概要

各小問(著書の中では「アイテム」と表現)を、関連性と困難度のマトリックスにおいて分類する。関連性は、「基礎的・基本的」(後への関連性が高い目標を測る問題)と「発展的・応用的」(比較的高度で、後の学習への関連性がそれほど高くない目標を測る問題)の2区分とし、困難度は「平易」「普通」「困難」の3区分とする。(表1のとおり)ただし、基礎・基本に分類される困難な目標は現実的ではないので、除外する。すべての小問は、表1中の(A)(B)(C)(D)(E)のいずれかに割り振られる。

表1 修正エーベル法におけるアイテム分類表

	平易	普通	困難
基礎的・基本的	(A)	(B)	
発展的・応用的	(C)	(D)	(E)

また、それぞれの分類欄ごとの期待正答率は表2のように定められている。

表2 修正エーベル法における五つの分類ごとの期待正答率表

	平易	普通	困難
基礎的・基本的	0. 85(85%) (A)	0. 80(80%) (B)	
	0. 65(65%)	0. 60(60%)	
発展的・応用的	0. 75(75%) (C)	0. 70(70%) (D)	0. 65(65%) (E)

	0.55(55%)	0.50(50%)	0.45(45%)
--	-----------	-----------	-----------

(注) 上の数字は「十分達成」、下の数字は「おおむね達成」の場合を示している。

この表に基づいて、到達基準が算出される。

(4) 設定に当たっての具体的な手続き

- ① 調査問題を小問単位で、評価観点別及び内容領域別に分類する。
- ② 評価観点別(もしくは内容領域別)に分類された小問を表1に沿って、(A)～(E)に振り分ける。「知識・理解」「技能」「言語事項」などの観点についての小問の多くは「基礎的・基本的」に属するが、一部に「発展的・応用的」に属するものもあると考えられる。また、「思考」「資料の解釈・利用能力」「観察・実験の能力」「読解力」などの観点については、「発展的・応用的」に属する小問が多いと考えられるが、一部「基礎的・基本的」に属するものも含まれることが考えられる。
- ③ 分類が終わったら、評価観点(もしくは内容領域)ごとに分類表の各欄の小問数を確認する。
- ④ あらかじめ定められた期待正答率表(表2)の値を基にして、各評価観点(もしくは内容領域)ごとに「十分達成」「おおむね達成」それぞれの到達基準を算出する。

表3 修正エーベル法による到達度基準の算出例

分類欄	小問数	十分達成		おおむね達成	
		期待正答率	小問数 × 期待正答率	期待正答率	小問数 × 期待正答率
(A)	4	0.85	3.40	0.65	2.60
(B)	3	0.80	2.40	0.60	1.80
(C)	2	0.75	1.50	0.55	1.10
(D)	2	0.70	1.40	0.50	1.00
(E)	1	0.65	0.65	0.45	0.45
合計	12	合計	9.35 (77.9%)	合計	6.95 (57.9%)

表3は、ある観点(もしくは内容領域)において(A)～(E)に分類される小問がそれぞれ4問・3問・2問・2問・1問であった場合の計算例である。それぞれの期待正答率と小問数の積の合計から導き出した得点を全小問数で割った数値(合計欄の下に示している%)がこの観点(もしくは内容領域)の到達基準ということになる。

(5)本調査で設定した期待正答率表

本調査では、前に述べた理論を参考に、小学校と中学校の学習内容の違いなどを考慮して、次の表4と表5のように期待正答率を設定した。

表4 小学校における期待正答率表

	平易	普通	困難
基礎的・基本的	0.85(85%) (A) 0.65(65%)	0.80(80%) (B) 0.60(60%)	
発展的・応用的	0.75(75%) (C) 0.55(55%)	0.70(70%) (D) 0.50(50%)	0.65(65%) (E) 0.45(45%)

表5 中学校における期待正答率表

	平易	普通	困難
基礎的・基本的	0.75(75%) (A) 0.55(55%)	0.70(70%) (B) 0.50(50%)	
発展的・応用的	0.65(65%) (C) 0.45(45%)	0.60(60%) (D) 0.40(40%)	0.55(55%) (E) 0.35(35%)

4 調査の対象

(1)調査対象

[児童生徒]

県内の公立小学校第5学年の児童全員、公立中学校第1・2学年の生徒全員を対象とする。県立中学校及び特別支援学校の小学部・中学部に在籍する児童生徒も対象とする。ただし、特別支援学校及び小・中学校の特別支援学級に在籍している児童生徒の中で、対象教科にかかる当該学年の学習指導要領に基づく目標・内容等の指導を受けていない児童生徒については対象としない。

[教職員]

上記の調査対象児童生徒のうち、平成20年度に小学校第4学年を担当した教職員。ただし、平成20年5月以降に採用された講師については対象としない。

(2)調査対象学校数及び調査対象人数

[児童生徒]

小学校	174校	第5学年	8,607人
中学校	96校	第1学年(県立学校を含む) 第2学年(県立学校を含む)	8,394人 8,301人
特別支援学校	5校	小学部第5学年 中学部第1学年 中学部第2学年	2人 6人 9人

[教職員]

小学校	第5学年	367人
-----	------	------

5 調査の実施方法

(1)調査実施日及び実施教科

	平成21年4月21日(火)	平成21年4月22日(水)
小学校第5学年	国語・理科	社会・算数
中学校第1学年	国語・社会・数学	理科
中学校第2学年	国語・社会・数学	理科・英語

※ 児童生徒意識調査については別途時間を設けて実施

※ 教師意識調査については平成20年度末に別途時間を設けて実施

- (2)調査時間
- ア 学習状況調査(ペーパーテスト)
小学校 各教科とも45分 各学校で時間を設定して実施
中学校 各教科とも50分 各学校で時間を設定して実施
- イ 児童生徒共通意識調査
小学校・中学校とも20～30分程度各学校で時間を設定して実施
- ウ 教師意識調査
10～20分程度各学校で随時実施。今回は平成20年度に小学校第4学年を担当した教職員のみ対象。

6 調査結果の処理

- (1)採点・入力
学習状況調査(ペーパーテスト)については、各学校において採点を行い、教育センター諸調査集計・分析システムを利用して、Web上から採点結果を入力する。教師意識調査・児童生徒に対する意識調査についても、同様にその回答状況をWeb上から入力する。
- (2)集計・分析
集計作業により教科ごとの設問別正答率、内容・領域別正答率、評価の観点別正答率を求め、本県において設定した到達基準(第7節を参照)との比較により、その実現状況を測る。また、意識調査の回答状況と正答率の相関に着目した分析を行う。その際、各学校における指導の状況を数値化するために学校スコア(※3参照)を算出して分析に用いる。
- これらの集計結果を基に、各教科における傾向及び成果と課題を明らかにし、今後の指導に向けての提言を行う。なお、分析については、教育センターにおいて行う。

7 調査結果の返却方法

- (1)集計・分析システムによる返却
調査対象となった各学校に対しては、教職員ポータルを介して、当該校の調査結果を返却するとともに、今後の指導法改善に生かすことができる情報を提供する。調査結果個票は、各学校を通して、児童生徒に返却する。
- (2)調査報告書による返却
調査結果から見られる県全体の傾向、各教科における成果と課題、これからの指導に向けての提言などをまとめた調査報告書を、教職員ポータルを介して、県内の各学校及び関係機関に配信する。

8 到達基準による判定と今後の指導に向けて

- (1)到達基準を設定することの効用
従前、佐賀県小・中学校学習状況調査においては、国立教育政策研究所が平成15年度までに実施した教育課程実施状況調査の調査問題を使用して、その全国平均正答率を一つの指標として用いてきた。
- 国が公表した全国平均正答率はあくまでも設問ごとのものであって、評価の観点別、内容・領域別については公表されていなかった。そのため、評価の観点別、内容・領域別については、県が便宜的に、国が公表した設問ごとの全国平均正答率を束ねて算出した。また、平成15年度以前に実施された調査の結果との比較という点において、調査実施年の隔たりは年々大きくなっており、その信頼性や客観性についても課題があった。
- 平成19年度には調査問題の多くを、平成20年度より調査問題のすべてを県が独自に作成し、設問ごと、評価の観点別、内容・領域別に到達基準を設定した。
- 本調査では、県があらかじめ設定した到達基準との比較において、県としての成果と課題を明確にすることができるとともに、各学校においても、到達基準との関係において、自校の学習指導の成果と課題を把握することが可能となっている。
- 県平均正答率との比較においては、常に県下の約半数の学校がそれを上回ることはなく、課題意識だけが先行することになるとともに、自校の結果が県平均に比べよければ、全国の中の県の状態にかかわらず、安心してしまう可能性もあった。
- 到達基準を設定することにより、県下のすべての学校が基準に到達できることも現実にも可能となる。また、結果が振わなかった点についても、県平均正答率をいいわけにすることなく、しっかりと自校の課題と

して把握できるようになった。

(2)到達基準の「十分達成」と「おおむね達成」のラインについて

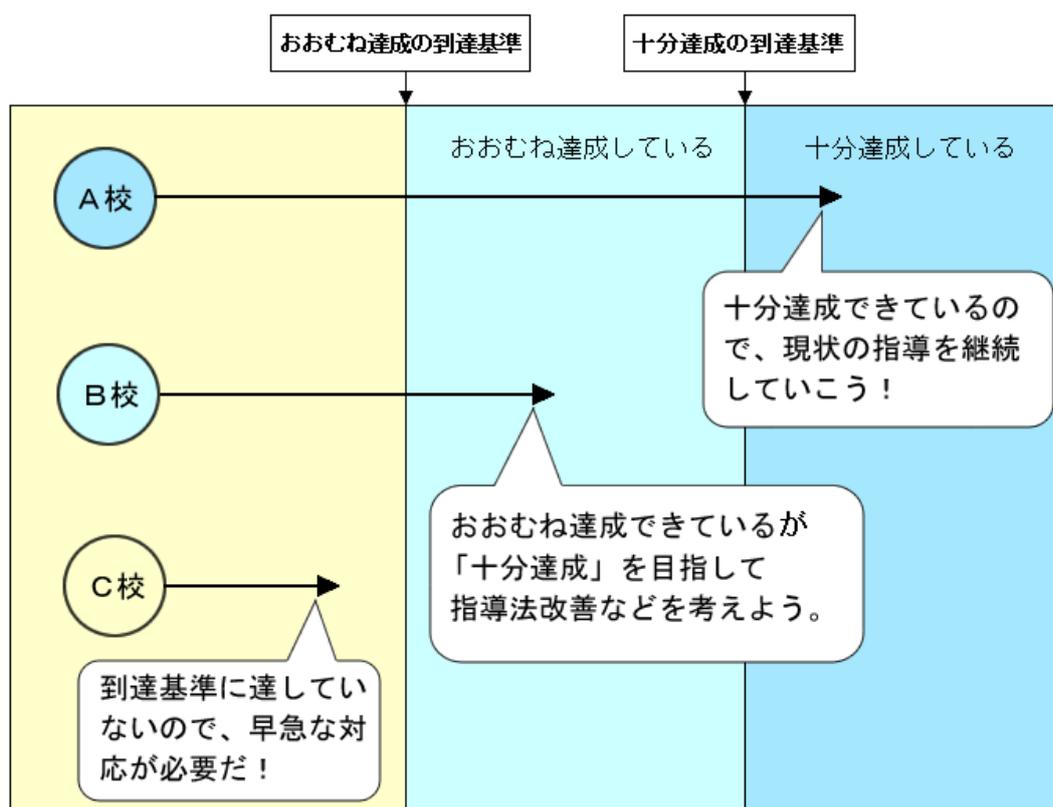
到達基準は、「おおむね達成」と「十分達成」の2つの分割点を設定することにより、各学校における到達の状況が明確となり、目標の設定が容易となった。

「おおむね達成」に到達していない教科や評価観点、内容・領域については、緊急の課題であり、早急の対応が望まれる。必要に応じて年度内の補充的な指導などを施した上で、新年度につなげる必要があるであろう。

「おおむね達成」には到達しているが、「十分達成」には到達していない教科や評価観点、内容・領域については、県が示す最低基準は達成していると考えられるが、更なる向上が望まれる。新年度の教育課程編成にかかわって、指導法改善等に取り組むことが望ましい。

「十分達成」に到達している教科や評価観点・内容・領域については、現状の指導が効果的に働いていることの表われであり、十分に成果が見られると考えられる。現状の指導を継続して差し支えないであろう。

到達状況についてイメージ図



図の中では、便宜上、A校、B校、C校としているが、校内においては、A、B、Cを学級や一人一人の児童生徒とイメージして考えていただきたい。また、矢印(→)を教科正答率としてとらえるだけでなく、教科内における特定の評価観点や内容・領域の正答率と考えることにより、分析の幅が広がるであろう。

以上のように、各学校、各学年、各教科の到達状況を把握し、今後の短期的、又は長期的なビジョンの中で、児童生徒への対応や教師による指導法改善が図られることを期待したい。

(3) 今後の指導に向けて

到達基準との比較により、各学校において、教科、学年、学級などにおける指導の実現状況を把握することができたら、その強みを更に伸ばし、弱みを克服するために、個々の教師が指導法の改善に取り組むこととなる。

諸調査集計・分析システムから自校及び県全体の結果を集計したデータ及び分析ツールがダウンロードできるようになっている。また、県全体の成果と課題、及びこれからの指導に向けては調査報告書の第三章において教科ごとにまとめている。授業改善に向けての提言については、各学校の現状と照らし合わせながら、参考となる点を活用していただきたい。

註

※1 正答率

正答率とは、学習の定着状況を示すために用いる、各設問における正答者数(準正答者数を含む)の解答者数に対する割合である。本報告書では、下記の方法で設問ごと正答率を算出している。

設問ごと正答率＝正答者数の合計÷(解答者数の合計－その他の数の合計)

県正答率	算出の方法
教科正答率	当該教科すべての設問を対象として、 各設問の正答数の合計÷(各設問の解答数の合計－各設問のその他の数の合計)
内容・領域別正答率	当該内容・領域にかかわる設問を対象として、 各設問の正答数の合計÷(各設問の解答数の合計－各設問のその他の数の合計)
評価の観点別正答率	当該評価の観点にかかわる設問を対象として、 各設問の正答数の合計÷(各設問の解答数の合計－各設問のその他の数の合計)

[→児童生徒意識調査へもどる](#)

※2 修正エーベル法

修正エーベル法(橋本エーベル法)の詳細については、下記の文献等を参考にいただきたい。

橋本 重治 『到達度評価の研究 その方法と技術』 1981年 図書文化社

橋本 重治 『続・到達度評価の研究 到達基準の設定の方法』 1983年 図書文化社

[→基準設定方法の選択へもどる](#)

※3 学校スコア

学校スコアとは、教師意識調査及び児童生徒意識調査の結果から、各学校における教師の指導や児童生徒の意識等に関する回答状況を数値化することを目的として、質問項目に対する回答選択肢ごとにポイントをつけて重み付けを行うことにより、独自に算出した値である。

(例) 宿題を出していますか。

- | | |
|----------------------|-----------|
| 1 多くの時間で出している | → 100ポイント |
| 2 どちらかといえば出している | → 66ポイント |
| 3 どちらかといえば出していない方が多い | → 33ポイント |
| 4 全く出していない | → 0ポイント |

各学校の教師、又は児童生徒の回答状況を上記のようなポイントに換算して、その学校の平均値を求めたものを学校スコアとして、分析に用いている。

[→集計・分析へもどる](#)

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要 > 学習定着状況 > 全体の概要

全体の概要

1 全体の概要

○ 小学校・中学校とも、各教科において、県が設定した「おおむね達成」の基準を上回っている。

- ・ 教科全体の正答率から見ると、小学校・中学校ともにすべての教科において、「おおむね達成」の基準を上回った。小学校第5学年の社会は、「十分達成」の基準を上回り、良好な結果であった。
- ・ 観点別の正答率から見ると、小学校では、すべての観点で「おおむね達成」の基準を上回った。中学校では、第1学年国語の関心・意欲・態度の観点、数学の見方や考え方の観点、同じく第2学年の数学の見方や考え方の観点で「おおむね達成」の基準を下回った。

県正答率と到達基準

学年	教科	平成21年度 4月実施			(参考)平成20年度 12月実施		
		正答率	到達基準	県正答率／ 到達基準(十分達成)	正答率	到達基準	県正答率／ 到達基準(十分達成)
小学5年	国語	66.1	79.8/59.8	0.83	74.2	79.0/59.0	0.94
	社会	79.3	76.5/56.5	1.04	64.7	74.0/54.0	0.87
	算数	62.3	78.3/58.3	0.80	64.6	76.2/56.2	0.85
	理科	73.6	78.0/58.0	0.94	76.0	78.7/58.7	0.97
小学6年	国語	-	-	-	79.2	77.7/57.7	1.02
	社会	-	-	-	63.1	76.0/56.0	0.83
	算数	-	-	-	65.1	76.1/56.1	0.86
	理科	-	-	-	83.3	78.2/58.2	1.07
中学1年	国語	64.0	78.6/58.6	0.81	68.0	69.8/49.8	0.97
	社会	62.0	77.4/57.4	0.80	49.3	68.8/48.8	0.72
	数学	66.4	77.4/57.4	0.86	62.6	66.8/46.8	0.94
	理科	73.0	77.5/57.5	0.94	52.5	67.4/47.4	0.78
	英語	-	-	-	68.7	68.2/48.2	1.01
中学2年	国語	67.6	71.7/51.7	0.94	76.2	70.6/50.6	1.08
	社会	61.3	68.0/48.0	0.90	62.9	65.8/45.8	0.96
	数学	52.5	65.4/45.4	0.80	57.0	65.2/45.2	0.87
	理科	50.5	68.2/48.2	0.74	50.3	67.8/47.8	0.74
	英語	64.0	68.0/48.0	0.94	59.3	66.5/46.5	0.89

※到達基準は、十分達成/おおむね達成のラインを示している → [到達基準の設定について](#)

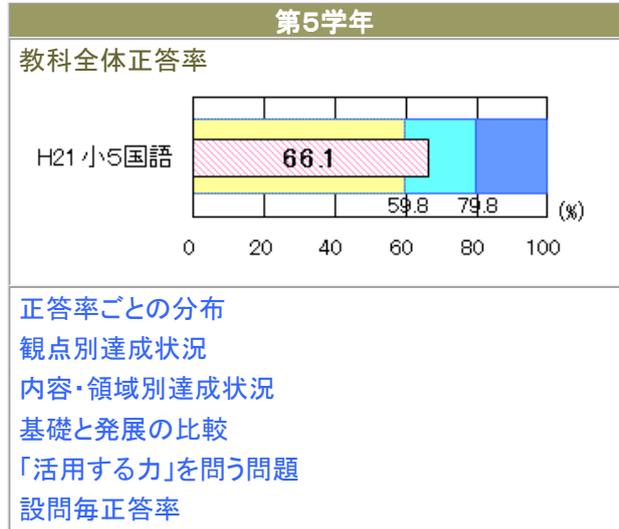
2 教科ごとの概要

県が設定した到達基準に対する各教科の正答率を示す。

(凡例) :到達基準を下回る :おおむね達成 :十分達成

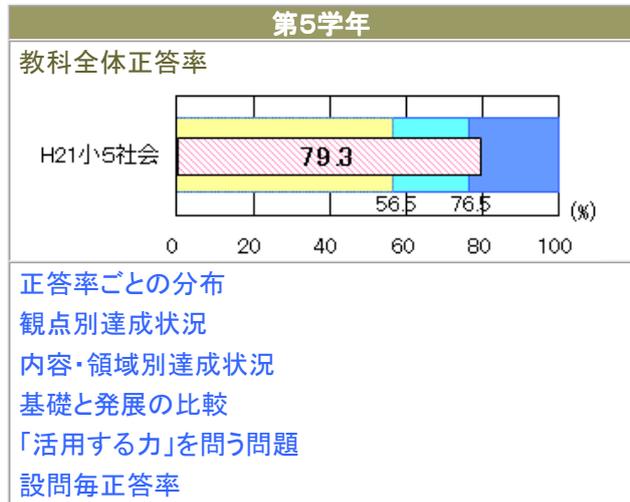
小学校国語

- すべての観点で、「おおむね達成」の基準を上回っているが、「十分達成」の基準を上回る観点が無かった。
- 「活用する力」を問う問題では、「おおむね達成」の基準をある程度上回っているが、発展的・応用的問題については、「おおむね達成」の基準をわずかに上回る程度であった。



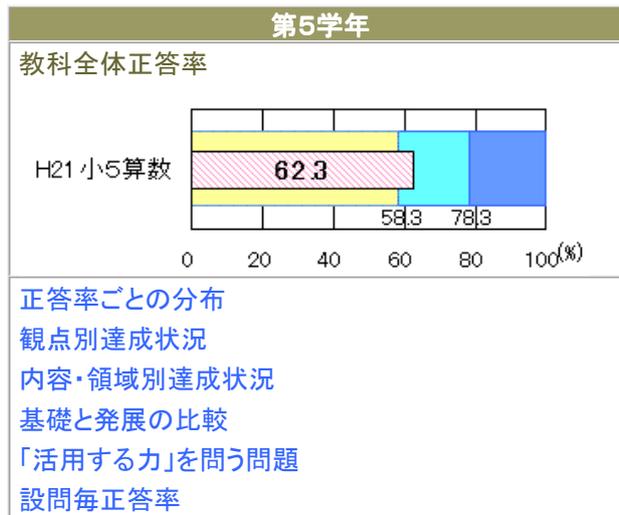
小学校社会

- すべての観点で、「十分達成」の基準を上回っており、どの観点においても高い正答率であった。
- 基礎的・基本的問題、発展的・応用的問題ともに、「十分達成」の基準を上回っていた。また、「活用する力」を問う問題についても「十分達成」の基準を上回っており、高い正答率であった。



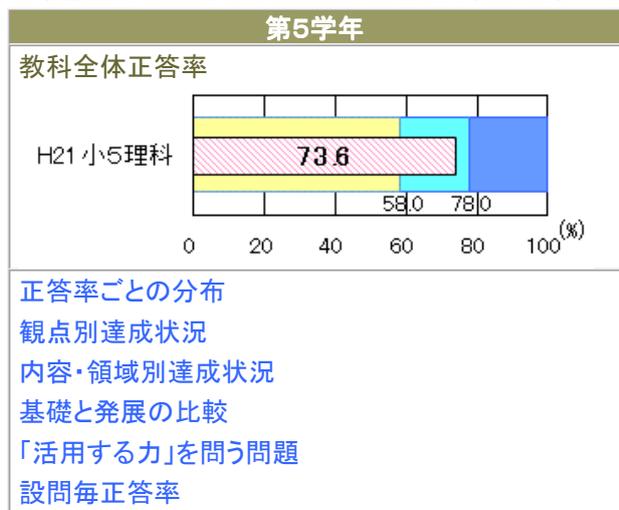
小学校算数

- すべての観点で「おおむね達成」の基準を上回っているが、「十分達成」の基準を上回る観点がなかった。
- 基礎的・基本的問題については、「おおむね達成」の基準をある程度上回っているが、発展的・応用的問題や「活用する力」を問う問題は、わずかに上回る程度であった。



小学校理科

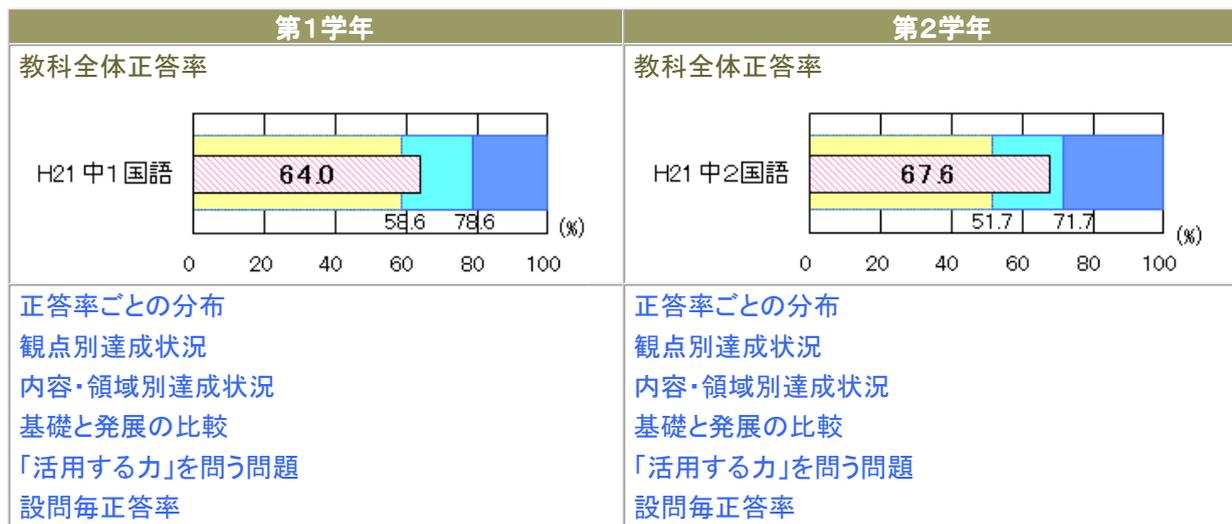
- すべての観点で、「おおむね達成」の基準を上回っており、特に「関心・意欲・態度」の観点で「十分達成」の基準を上回った。「知識・理解」の観点でも他の観点と比較して高い正答率であった。
- 基礎的・基本的な問題に加え、発展的・応用的な問題や、活用力を問う問題についても、「おおむね達成」の基準を上回った。特に、基礎的・基本的な問題は高い正答率であった。



中学校国語

○ 第1学年では、「書く」の観点で「十分達成」に近い正答率であったが、他の観点では「おおむね達成」の基準とほぼ同じ正答率であった。第2学年では、すべての観点で「おおむね達成」を上回っていた。特に、「話す・聞く」の観点では「十分達成」の基準を大きく上回る高い正答率であった。

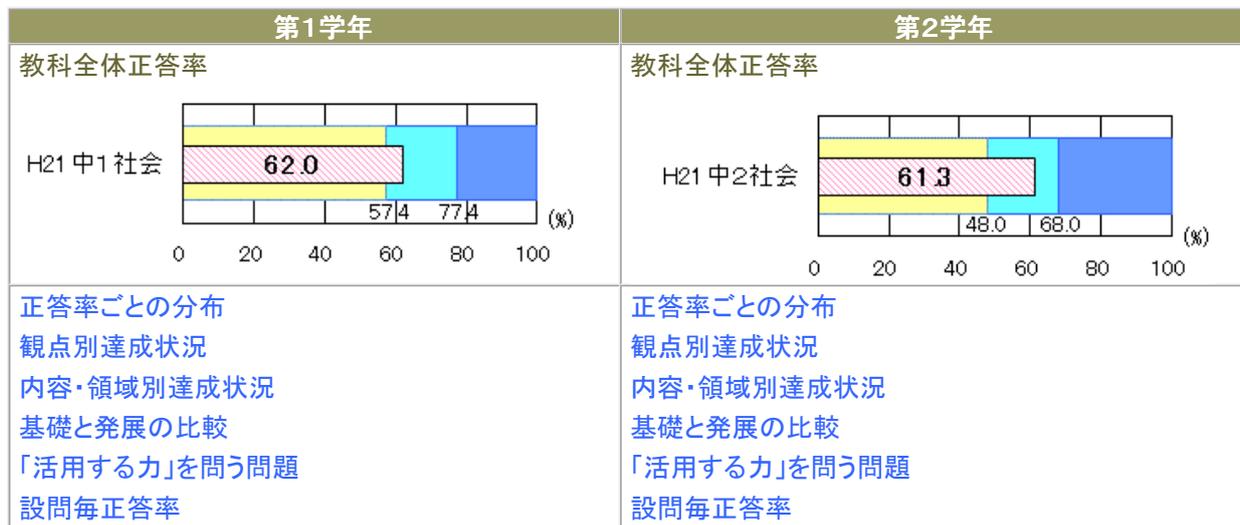
○ 「活用する力」を問う問題で、中学1年は、「十分達成」の基準を上回る正答率であった。第2学年では、基礎的・基本的問題は、「おおむね達成」の基準を上回っているが、発展的・応用的問題については、「おおむね達成」の基準を下回っていた。



中学校社会

○ 第1学年、第2学年ともにすべての観点で、「おおむね達成」の基準を上回っており、特に、第2学年の「関心・意欲・態度」の観点は「十分達成」の基準を上回った。

○ 基礎的・基本的問題、発展的・応用的問題については、第1学年、第2学年とも、「おおむね達成」の基準を上回っていた。「活用する力」を問う問題についても、第1学年、第2学年ともに「おおむね達成」の基準を上回っていた。



中学校数学

○ 第1学年、第2学年ともに「表現・処理」、「知識・理解」の観点は、「おおむね達成」の基準を上回っているが、「見方や考え方」の観点は、「おおむね達成」の基準を下回っていた。

○ 基礎的・基本的問題については、第1学年、第2学年とも、「おおむね達成」の基準を上回っていた。発展的・応用的問題については、第1学年では「おおむね達成」の基準をやや上回っているものの、第2学年においては、下回っていた。「活用する力」を問う問題では、第2学年で、「おおむね達成」の基準を大きく下回っていた。

第1学年	第2学年
<p>教科全体正答率</p> <p>H21 中1 数学</p> <p style="text-align: center;">66.4</p> <p style="text-align: center;">57.4 77.4</p> <p style="text-align: right;">(%)</p>	<p>教科全体正答率</p> <p>H21 中2 数学</p> <p style="text-align: center;">52.5</p> <p style="text-align: center;">45.4 65.4</p> <p style="text-align: right;">(%)</p>
<p>正答率ごとの分布</p> <p>観点別達成状況</p> <p>内容・領域別達成状況</p> <p>基礎と発展の比較</p> <p>「活用する力」を問う問題</p> <p>設問毎正答率</p>	<p>正答率ごとの分布</p> <p>観点別達成状況</p> <p>内容・領域別達成状況</p> <p>基礎と発展の比較</p> <p>「活用する力」を問う問題</p> <p>設問毎正答率</p>

中学校理科

○ 第1学年では、「関心・意欲・態度」の観点が、「十分達成」の基準を上回っており、「思考」の観点でも高い正答率であった。第2学年では、どの観点も、「おおむね達成」の基準とほぼ同じ正答率であった。

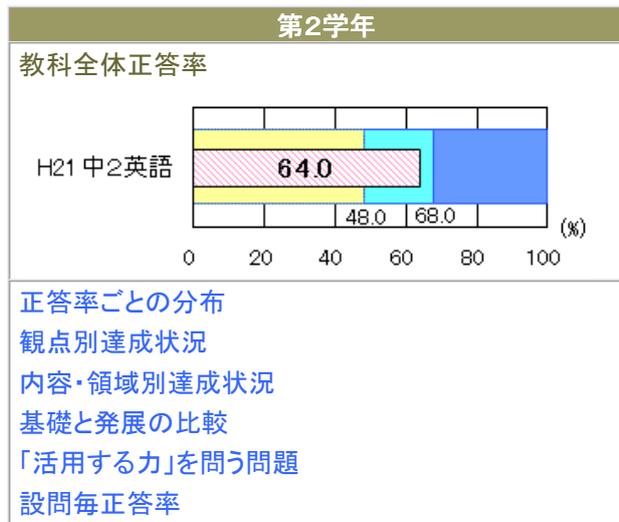
○ 基礎的・基本的問題、発展的・応用的問題については、第1学年、第2学年とも、「おおむね達成」の基準を上回っていた。特に、第1学年の基礎的・基本的問題は高い正答率であった。「活用する力」を問う問題についても、第1学年、第2学年とも、「おおむね達成」の基準を上回っていた。

第1学年	第2学年
<p>教科全体正答率</p> <p>H21 中1 理科</p> <p style="text-align: center;">73.0</p> <p style="text-align: center;">57.5 77.5</p> <p style="text-align: right;">(%)</p>	<p>教科全体正答率</p> <p>H21 中2 理科</p> <p style="text-align: center;">50.5</p> <p style="text-align: center;">48.2 68.2</p> <p style="text-align: right;">(%)</p>
<p>正答率ごとの分布</p> <p>観点別達成状況</p> <p>内容・領域別達成状況</p> <p>基礎と発展の比較</p> <p>「活用する力」を問う問題</p> <p>設問毎正答率</p>	<p>正答率ごとの分布</p> <p>観点別達成状況</p> <p>内容・領域別達成状況</p> <p>基礎と発展の比較</p> <p>「活用する力」を問う問題</p> <p>設問毎正答率</p>

中学校英語

○ すべての観点で、「おおむね達成」の基準を上回っており、特に、「理解」の観点については、高い正答率であった。

○ 基礎的・基本的問題については、「十分達成」の基準を上回っており、発展的・応用的な問題や「活用する力」を問う問題も、「おおむね達成」の基準を上回っていた。



最終更新日： 2009-07-24

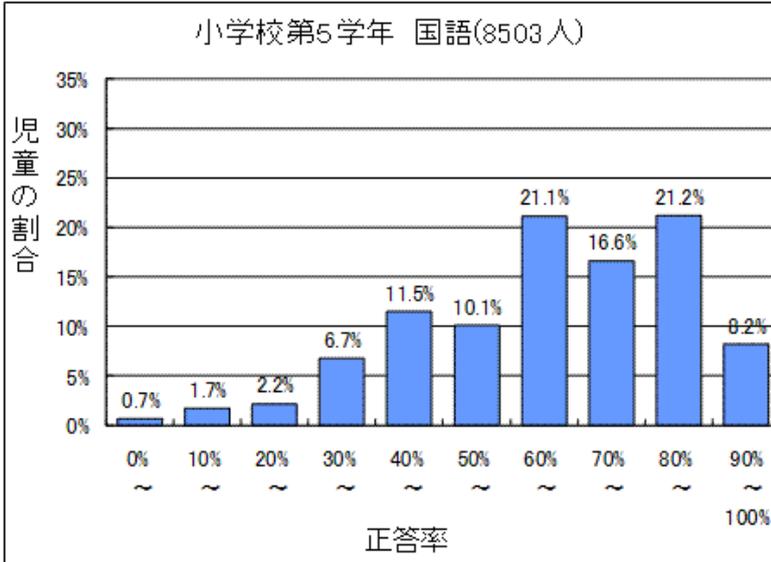
平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#) > II 調査結果の概要 > [学習定着状況](#) > 正答率ごとの分布

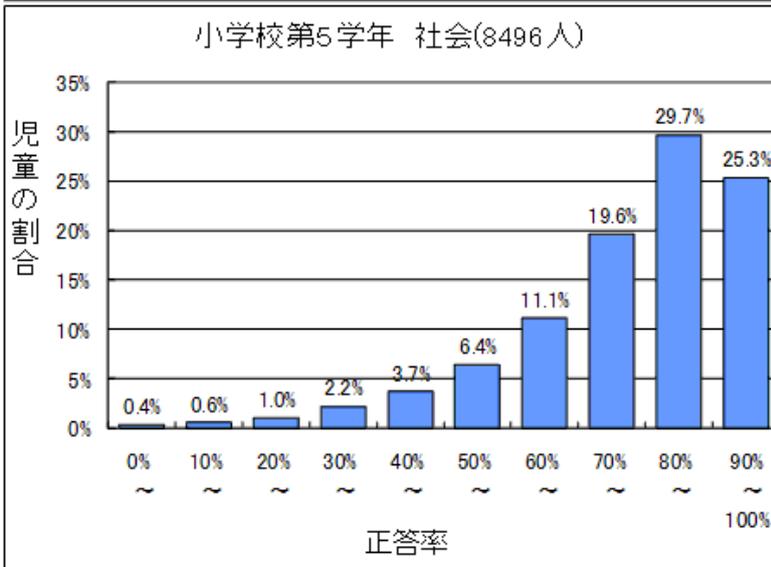
正答率ごとの分布状況

1 正答率ごとの分布(小学校)

○ 小学校第5学年

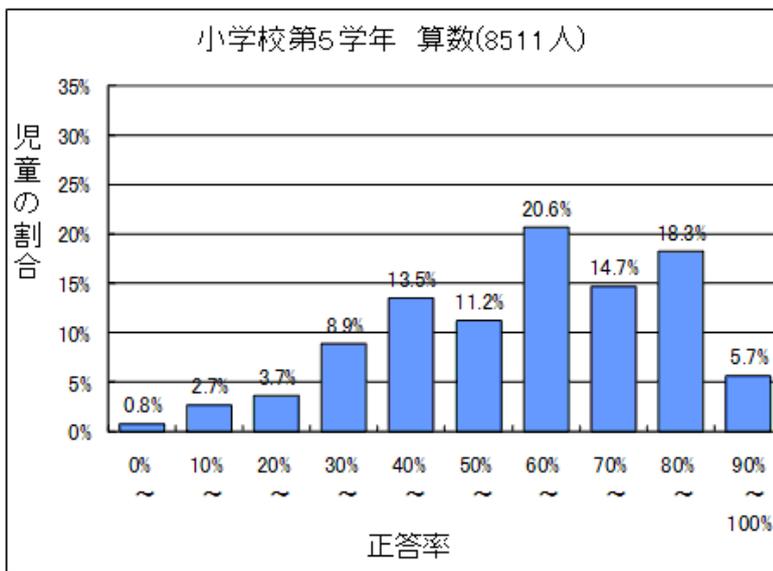


[→全体の概要に戻る](#)

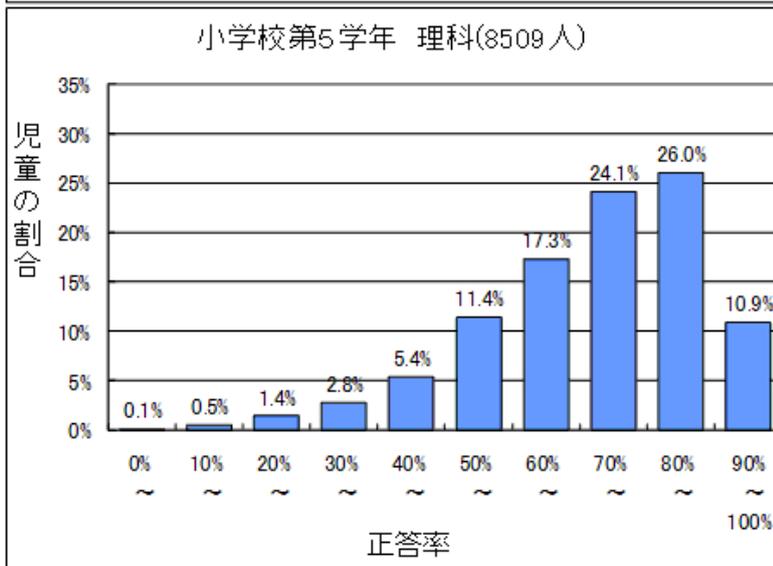


[→全体の概要に戻る](#)

[→全体の概要に戻る](#)

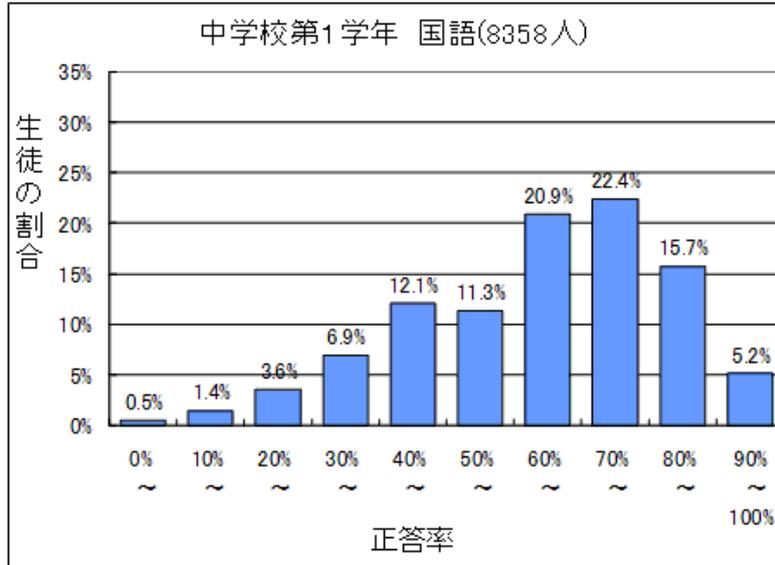


[→全体の概要に戻る](#)

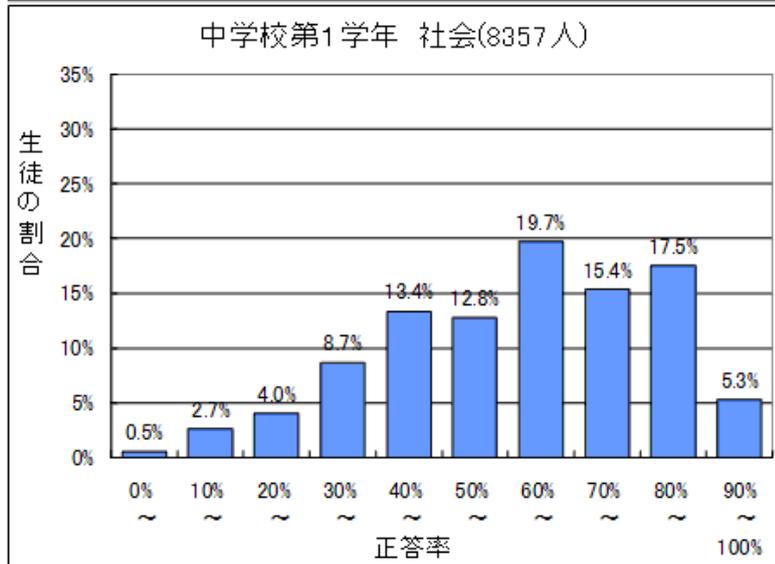


2 正答率ごとの分布(中学校)

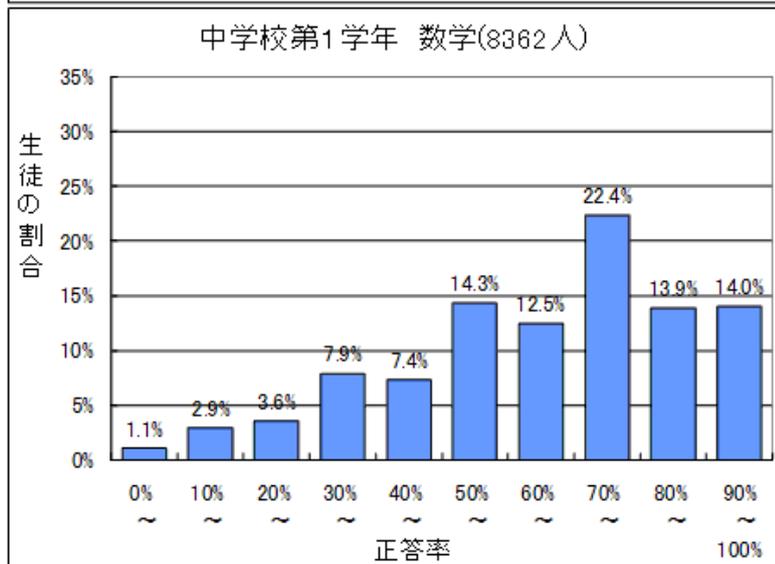
○ 中学校第1学年



→[全体の概要に戻る](#)

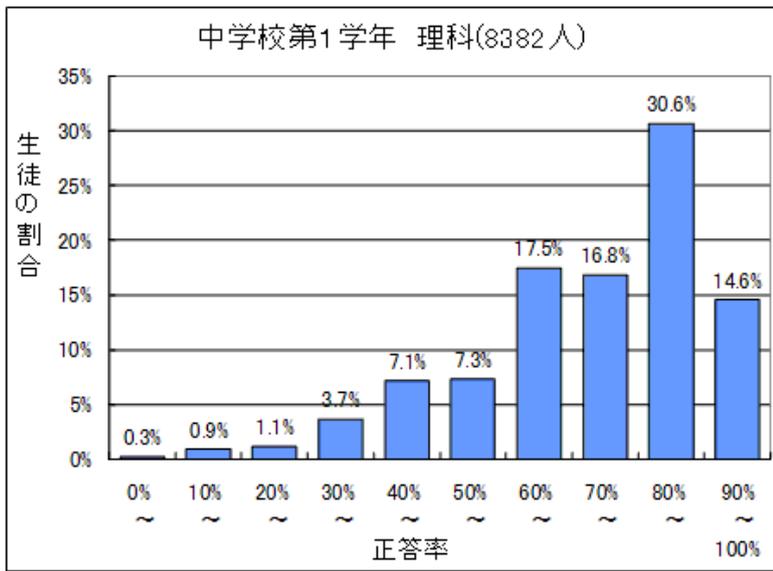


→[全体の概要に戻る](#)



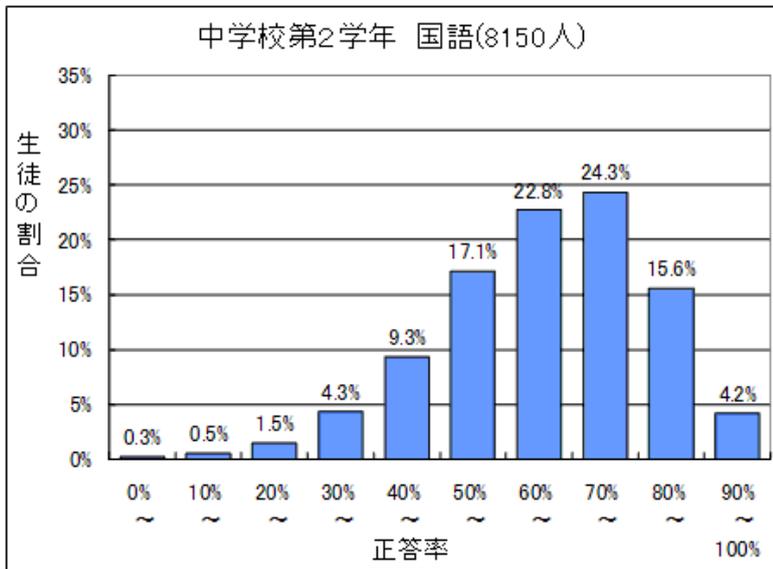
→[全体の概要に戻る](#)

[→全体の概要に戻る](#)

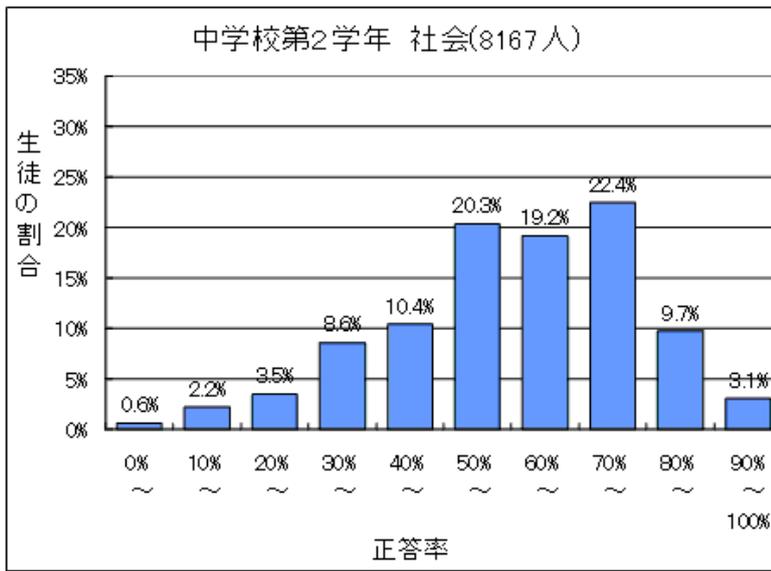


○ 中学校第2学年

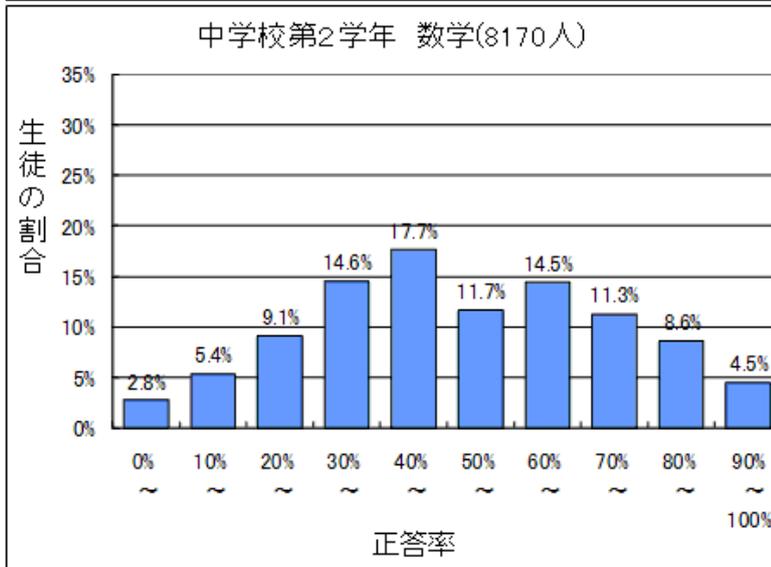
[→全体の概要に戻る](#)



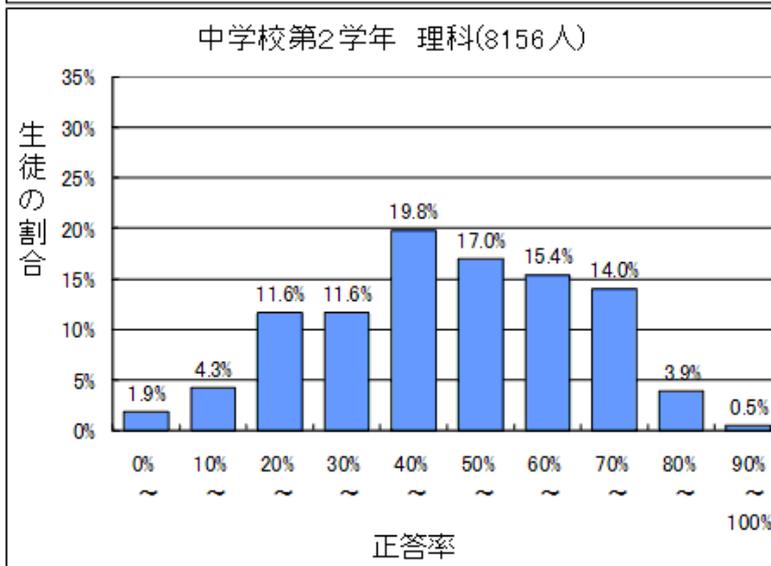
[→全体の概要に戻る](#)



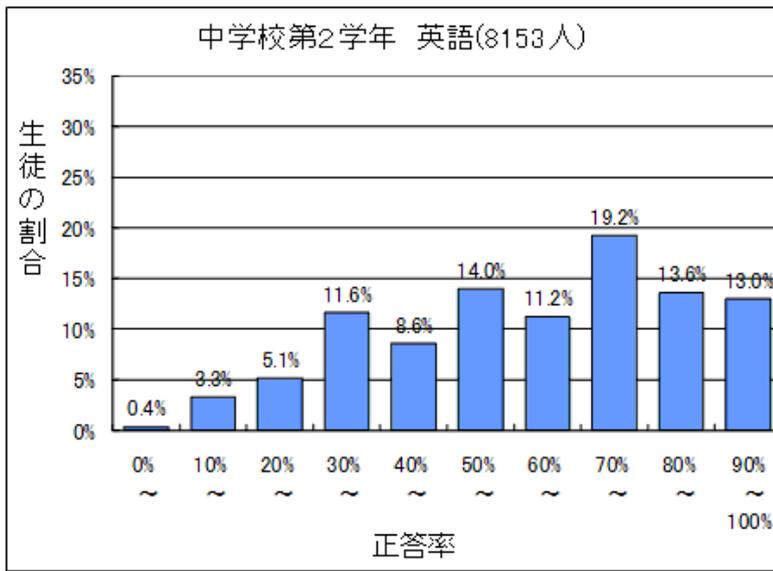
[→全体の概要に戻る](#)



[→全体の概要に戻る](#)



[→全体の概要に戻る](#)



最終更新日 : 2009/7/17

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要 > 学習定着状況 > 評価の観点別

評価の観点別定着状況

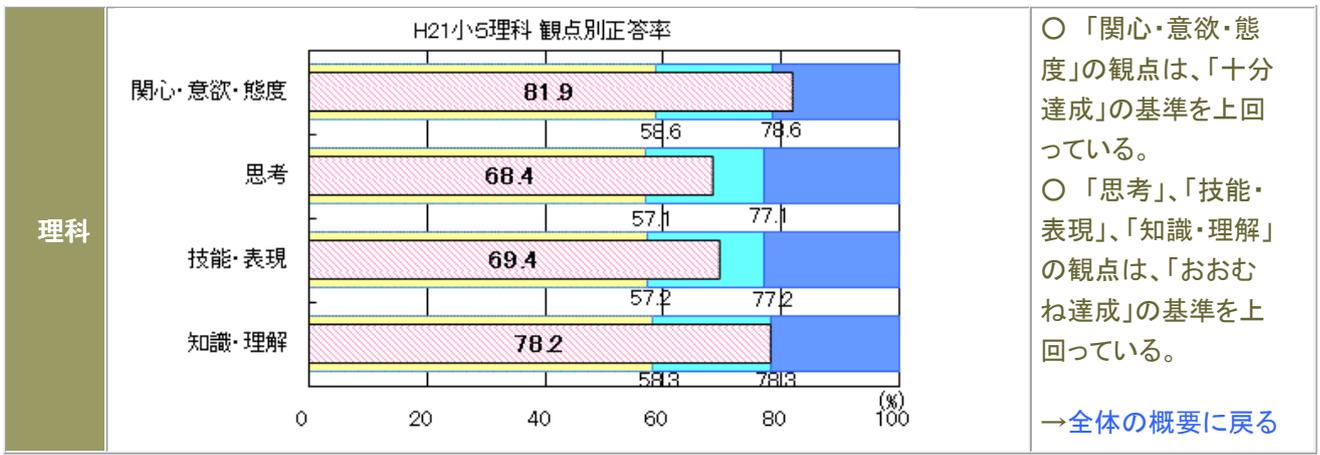
評価の観点別に見た到達基準との比較

各学年ごとに評価の観点別の正答率について到達基準との比較を示す。

(凡例) : 到達基準を下回る : おおむね達成 : 十分達成

○ 小学校第5学年

	到達基準との比較	概要																				
国語	<p>H21小5国語 観点別正答率</p> <table border="1"> <caption>H21小5国語 観点別正答率</caption> <thead> <tr> <th>観点</th> <th>到達基準を下回る (%)</th> <th>おおむね達成 (%)</th> <th>十分達成 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>関心・意欲・態度</td> <td>60.4</td> <td>53.3</td> <td>73.3</td> </tr> <tr> <td>書く</td> <td>64.2</td> <td>60.0</td> <td>80.0</td> </tr> <tr> <td>読む</td> <td>63.1</td> <td>58.1</td> <td>78.1</td> </tr> <tr> <td>知識・理解・技能</td> <td>67.4</td> <td>60.0</td> <td>80.0</td> </tr> </tbody> </table>	観点	到達基準を下回る (%)	おおむね達成 (%)	十分達成 (%)	関心・意欲・態度	60.4	53.3	73.3	書く	64.2	60.0	80.0	読む	63.1	58.1	78.1	知識・理解・技能	67.4	60.0	80.0	<p>○ すべての観点で、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→ 全体の概要に戻る</p>
	観点	到達基準を下回る (%)	おおむね達成 (%)	十分達成 (%)																		
	関心・意欲・態度	60.4	53.3	73.3																		
	書く	64.2	60.0	80.0																		
読む	63.1	58.1	78.1																			
知識・理解・技能	67.4	60.0	80.0																			
社会	<p>H21小5社会 観点別正答率</p> <table border="1"> <caption>H21小5社会 観点別正答率</caption> <thead> <tr> <th>観点</th> <th>到達基準を下回る (%)</th> <th>おおむね達成 (%)</th> <th>十分達成 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>関心・意欲・態度</td> <td>77.2</td> <td>51.0</td> <td>71.0</td> </tr> <tr> <td>思考・判断</td> <td>73.7</td> <td>51.9</td> <td>71.9</td> </tr> <tr> <td>技能・表現</td> <td>79.2</td> <td>55.8</td> <td>75.8</td> </tr> <tr> <td>知識・理解</td> <td>82.2</td> <td>60.0</td> <td>80.0</td> </tr> </tbody> </table>	観点	到達基準を下回る (%)	おおむね達成 (%)	十分達成 (%)	関心・意欲・態度	77.2	51.0	71.0	思考・判断	73.7	51.9	71.9	技能・表現	79.2	55.8	75.8	知識・理解	82.2	60.0	80.0	<p>○ すべての観点で、「十分達成」の基準を上回っている。</p> <p>→ 全体の概要に戻る</p>
	観点	到達基準を下回る (%)	おおむね達成 (%)	十分達成 (%)																		
	関心・意欲・態度	77.2	51.0	71.0																		
	思考・判断	73.7	51.9	71.9																		
技能・表現	79.2	55.8	75.8																			
知識・理解	82.2	60.0	80.0																			
算数	<p>H21小5算数 観点別正答率</p> <table border="1"> <caption>H21小5算数 観点別正答率</caption> <thead> <tr> <th>観点</th> <th>到達基準を下回る (%)</th> <th>おおむね達成 (%)</th> <th>十分達成 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>考え方</td> <td>56.5</td> <td>51.4</td> <td>71.4</td> </tr> <tr> <td>表現・処理</td> <td>63.5</td> <td>60.6</td> <td>80.6</td> </tr> <tr> <td>知識・理解</td> <td>65.4</td> <td>61.0</td> <td>81.0</td> </tr> </tbody> </table>	観点	到達基準を下回る (%)	おおむね達成 (%)	十分達成 (%)	考え方	56.5	51.4	71.4	表現・処理	63.5	60.6	80.6	知識・理解	65.4	61.0	81.0	<p>○ すべての観点で、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→ 全体の概要に戻る</p>				
	観点	到達基準を下回る (%)	おおむね達成 (%)	十分達成 (%)																		
	考え方	56.5	51.4	71.4																		
表現・処理	63.5	60.6	80.6																			
知識・理解	65.4	61.0	81.0																			

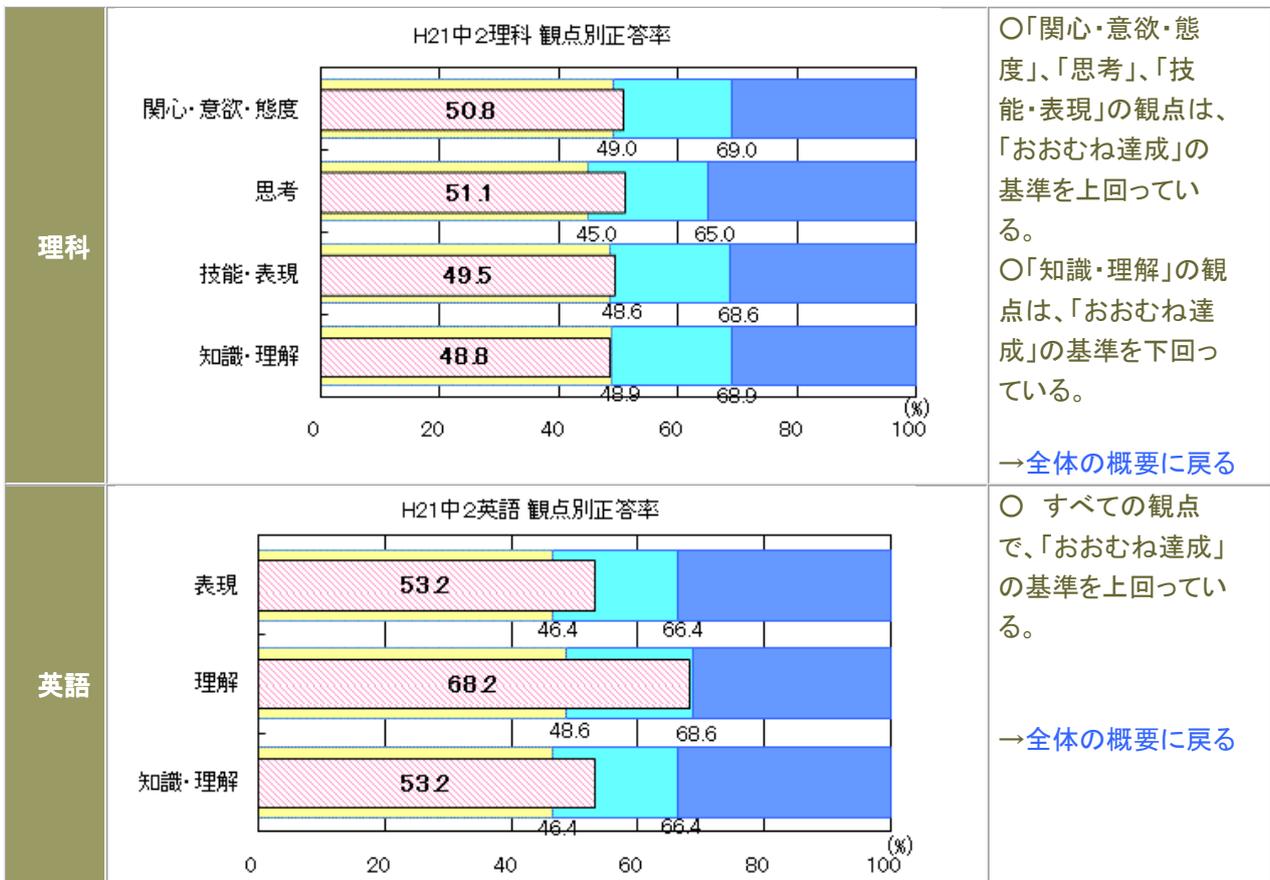


○ 中学校第1学年

	到達基準との比較	概要															
国語	<p>H21中1国語 観点別正答率</p> <table border="1"> <caption>H21中1国語 観点別正答率</caption> <thead> <tr> <th>観点</th> <th>達成率 (%)</th> <th>基準 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>関心・意欲・態度</td> <td>54.7</td> <td>76.7</td> </tr> <tr> <td>書く</td> <td>75.0</td> <td>56.7</td> </tr> <tr> <td>読む</td> <td>57.7</td> <td>75.7</td> </tr> <tr> <td>知識・理解・技能</td> <td>62.9</td> <td>81.6</td> </tr> </tbody> </table>	観点	達成率 (%)	基準 (%)	関心・意欲・態度	54.7	76.7	書く	75.0	56.7	読む	57.7	75.7	知識・理解・技能	62.9	81.6	<p>○「書く」、「読む」、「知識・理解・技能」の観点は、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>○「関心・意欲・態度」の観点は、「おおむね達成」の基準を下回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
	観点	達成率 (%)	基準 (%)														
	関心・意欲・態度	54.7	76.7														
	書く	75.0	56.7														
読む	57.7	75.7															
知識・理解・技能	62.9	81.6															
社会	<p>H21中1社会 観点別正答率</p> <table border="1"> <caption>H21中1社会 観点別正答率</caption> <thead> <tr> <th>観点</th> <th>達成率 (%)</th> <th>基準 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>関心・意欲・態度</td> <td>54.7</td> <td>72.5</td> </tr> <tr> <td>思考・判断</td> <td>62.2</td> <td>72.3</td> </tr> <tr> <td>技能・表現</td> <td>69.8</td> <td>78.3</td> </tr> <tr> <td>知識・理解</td> <td>61.2</td> <td>79.6</td> </tr> </tbody> </table>	観点	達成率 (%)	基準 (%)	関心・意欲・態度	54.7	72.5	思考・判断	62.2	72.3	技能・表現	69.8	78.3	知識・理解	61.2	79.6	<p>○すべての観点で、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
	観点	達成率 (%)	基準 (%)														
	関心・意欲・態度	54.7	72.5														
	思考・判断	62.2	72.3														
技能・表現	69.8	78.3															
知識・理解	61.2	79.6															
数学	<p>H21中1数学 観点別正答率</p> <table border="1"> <caption>H21中1数学 観点別正答率</caption> <thead> <tr> <th>観点</th> <th>達成率 (%)</th> <th>基準 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>見方や考え方</td> <td>48.1</td> <td>70.0</td> </tr> <tr> <td>表現・処理</td> <td>78.7</td> <td>81.0</td> </tr> <tr> <td>知識・理解</td> <td>69.7</td> <td>80.7</td> </tr> </tbody> </table>	観点	達成率 (%)	基準 (%)	見方や考え方	48.1	70.0	表現・処理	78.7	81.0	知識・理解	69.7	80.7	<p>○「見方や考え方」の観点は、「おおむね達成」の基準を下回っている。</p> <p>○「知識・理解」、「表現・処理」の観点は「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>			
	観点	達成率 (%)	基準 (%)														
	見方や考え方	48.1	70.0														
表現・処理	78.7	81.0															
知識・理解	69.7	80.7															
理科	<p>H21中1理科 観点別正答率</p> <table border="1"> <caption>H21中1理科 観点別正答率</caption> <thead> <tr> <th>観点</th> <th>達成率 (%)</th> <th>基準 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>関心・意欲・態度</td> <td>75.3</td> <td>74.0</td> </tr> <tr> <td>思考</td> <td>77.1</td> <td>77.1</td> </tr> <tr> <td>技能・表現</td> <td>62.3</td> <td>78.6</td> </tr> <tr> <td>知識・理解</td> <td>74.7</td> <td>78.7</td> </tr> </tbody> </table>	観点	達成率 (%)	基準 (%)	関心・意欲・態度	75.3	74.0	思考	77.1	77.1	技能・表現	62.3	78.6	知識・理解	74.7	78.7	<p>○「関心・意欲・態度」の観点は、「十分達成」の基準を上回っている。</p> <p>○「思考」の観点は、「十分達成」の基準と同等である。</p> <p>○「技能・表現」、「知識・理解」の観点は、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
	観点	達成率 (%)	基準 (%)														
	関心・意欲・態度	75.3	74.0														
	思考	77.1	77.1														
技能・表現	62.3	78.6															
知識・理解	74.7	78.7															

○ 中学校第2学年

	到達基準との比較	概要																														
国語	<p>H21中2国語 観点別正答</p> <table border="1"> <caption>H21中2国語 観点別正答</caption> <thead> <tr> <th>観点</th> <th>総合正答率</th> <th>十分達成</th> <th>おおむね達成</th> <th>未達成</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>関心・意欲・態度</td> <td>72.5</td> <td>51.9</td> <td>71.9</td> <td></td> </tr> <tr> <td>話す・聞く</td> <td>85.9</td> <td>51.0</td> <td>71.0</td> <td></td> </tr> <tr> <td>書く</td> <td>57.2</td> <td>47.0</td> <td>67.0</td> <td></td> </tr> <tr> <td>読む</td> <td>58.3</td> <td>48.0</td> <td>68.0</td> <td></td> </tr> <tr> <td>知識・理解・技能</td> <td>68.0</td> <td>54.7</td> <td>74.7</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	観点	総合正答率	十分達成	おおむね達成	未達成	関心・意欲・態度	72.5	51.9	71.9		話す・聞く	85.9	51.0	71.0		書く	57.2	47.0	67.0		読む	58.3	48.0	68.0		知識・理解・技能	68.0	54.7	74.7		<p>○「関心・意欲・態度」、「話す・聞く」の観点で「十分達成」の基準を上回っている。</p> <p>○「書く」、「読む」、「知識・理解・技能」の観点で「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
	観点	総合正答率	十分達成	おおむね達成	未達成																											
	関心・意欲・態度	72.5	51.9	71.9																												
	話す・聞く	85.9	51.0	71.0																												
	書く	57.2	47.0	67.0																												
読む	58.3	48.0	68.0																													
知識・理解・技能	68.0	54.7	74.7																													
社会	<p>H21中2社会 観点別正答率</p> <table border="1"> <caption>H21中2社会 観点別正答率</caption> <thead> <tr> <th>観点</th> <th>総合正答率</th> <th>十分達成</th> <th>おおむね達成</th> <th>未達成</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>関心・意欲・態度</td> <td>67.9</td> <td>43.3</td> <td>63.3</td> <td></td> </tr> <tr> <td>思考・判断</td> <td>60.6</td> <td>45.9</td> <td>65.9</td> <td></td> </tr> <tr> <td>技能・表現</td> <td>57.2</td> <td>46.4</td> <td>66.4</td> <td></td> </tr> <tr> <td>知識・理解</td> <td>59.8</td> <td>49.1</td> <td>69.1</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	観点	総合正答率	十分達成	おおむね達成	未達成	関心・意欲・態度	67.9	43.3	63.3		思考・判断	60.6	45.9	65.9		技能・表現	57.2	46.4	66.4		知識・理解	59.8	49.1	69.1		<p>○「関心・意欲・態度」の観点は、「十分達成」の基準を上回っている。</p> <p>○「思考・判断」、「技能・表現」、「知識・理解」の観点は、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>					
	観点	総合正答率	十分達成	おおむね達成	未達成																											
	関心・意欲・態度	67.9	43.3	63.3																												
	思考・判断	60.6	45.9	65.9																												
技能・表現	57.2	46.4	66.4																													
知識・理解	59.8	49.1	69.1																													
数学	<p>H21中2数学 観点別正答率</p> <table border="1"> <caption>H21中2数学 観点別正答率</caption> <thead> <tr> <th>観点</th> <th>総合正答率</th> <th>十分達成</th> <th>おおむね達成</th> <th>未達成</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>見方や考え方</td> <td>36.6</td> <td>41.5</td> <td>61.5</td> <td></td> </tr> <tr> <td>表現・処理</td> <td>58.1</td> <td>46.5</td> <td>66.5</td> <td></td> </tr> <tr> <td>知識・理解</td> <td>58.4</td> <td>46.9</td> <td>66.9</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	観点	総合正答率	十分達成	おおむね達成	未達成	見方や考え方	36.6	41.5	61.5		表現・処理	58.1	46.5	66.5		知識・理解	58.4	46.9	66.9		<p>○「見方や考え方」の観点は、「おおむね達成」の基準を下回っている。</p> <p>○「表現・処理」、「知識・理解」の観点は、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>										
	観点	総合正答率	十分達成	おおむね達成	未達成																											
	見方や考え方	36.6	41.5	61.5																												
表現・処理	58.1	46.5	66.5																													
知識・理解	58.4	46.9	66.9																													



○「関心・意欲・態度」、「思考」、「技能・表現」の観点は、「おおむね達成」の基準を上回っている。

○「知識・理解」の観点は、「おおむね達成」の基準を下回っている。

→[全体の概要に戻る](#)

○すべての観点で、「おおむね達成」の基準を上回っている。

→[全体の概要に戻る](#)

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要 > 学習定着状況 > 内容・領域別

内容・領域別定着状況

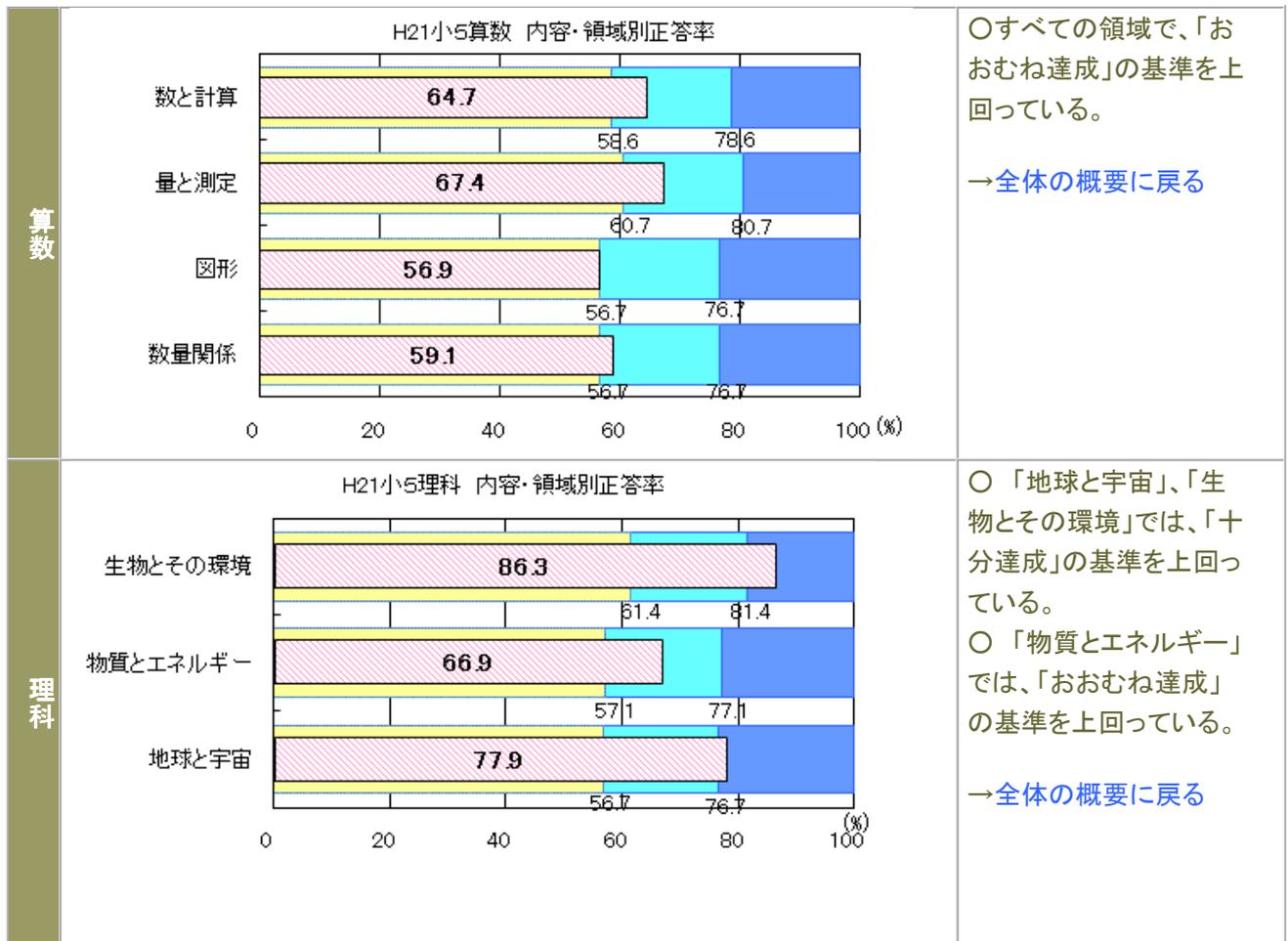
内容・領域別にみた到達基準との比較

各学年ごとに内容・領域別の正答率について到達基準との比較を示す。

(凡例) : 到達基準を下回る : おおむね達成 : 十分達成

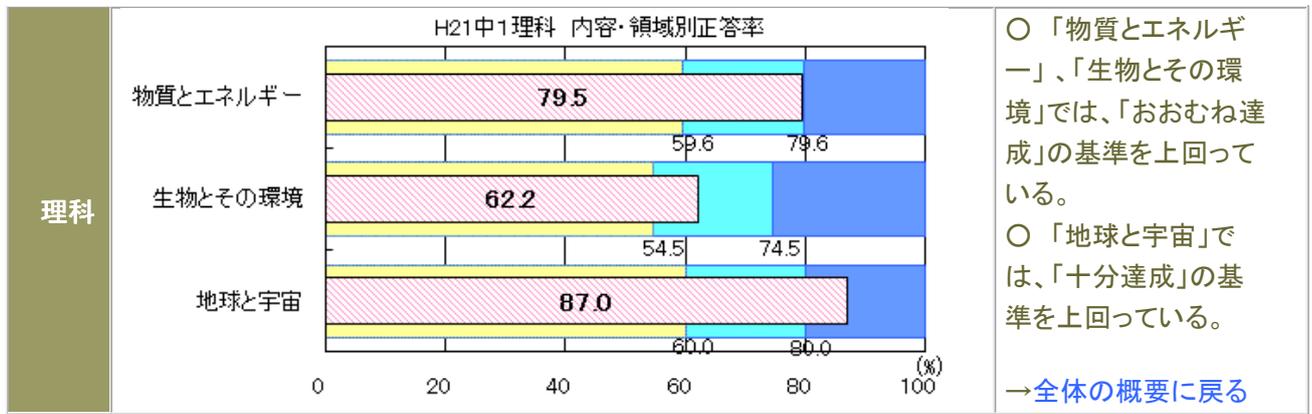
○ 小学校第5学年

	到達基準との比較	概要																								
国語	H21小5国語 内容・領域別正答率																									
	<table border="1"> <caption>H21小5国語 内容・領域別正答率</caption> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>到達基準を下回る (%)</th> <th>おおむね達成 (%)</th> <th>十分達成 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>書くこと</td> <td>67.6</td> <td>61.7</td> <td>81.7</td> </tr> <tr> <td>読むこと</td> <td>63.1</td> <td>58.1</td> <td>78.1</td> </tr> <tr> <td>言語事項(漢字の読み)</td> <td>68.2</td> <td>61.3</td> <td>81.3</td> </tr> <tr> <td>言語事項(漢字の書き)</td> <td>81.6</td> <td>60.0</td> <td>80.0</td> </tr> <tr> <td>言語事項(語句に関する知識)</td> <td>58.2</td> <td>59.0</td> <td>79.0</td> </tr> </tbody> </table>	項目	到達基準を下回る (%)	おおむね達成 (%)	十分達成 (%)	書くこと	67.6	61.7	81.7	読むこと	63.1	58.1	78.1	言語事項(漢字の読み)	68.2	61.3	81.3	言語事項(漢字の書き)	81.6	60.0	80.0	言語事項(語句に関する知識)	58.2	59.0	79.0	<p>○ 「漢字の書き」では、「十分達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 「書くこと」、「読むこと」、「漢字の読み」では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 「語句に関する知識」では、「おおむね達成」の基準を下回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
	項目	到達基準を下回る (%)	おおむね達成 (%)	十分達成 (%)																						
	書くこと	67.6	61.7	81.7																						
	読むこと	63.1	58.1	78.1																						
言語事項(漢字の読み)	68.2	61.3	81.3																							
言語事項(漢字の書き)	81.6	60.0	80.0																							
言語事項(語句に関する知識)	58.2	59.0	79.0																							
社会	H21小5社会 内容・領域別正答率																									
	<table border="1"> <caption>H21小5社会 内容・領域別正答率</caption> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>到達基準を下回る (%)</th> <th>おおむね達成 (%)</th> <th>十分達成 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>地域の生産や販売</td> <td>89.0</td> <td>57.5</td> <td>77.5</td> </tr> <tr> <td>住みよいくらし</td> <td>79.4</td> <td>56.8</td> <td>76.8</td> </tr> <tr> <td>安全を守る</td> <td>75.6</td> <td>58.6</td> <td>78.6</td> </tr> <tr> <td>地域社会の歴史</td> <td>77.2</td> <td>50.0</td> <td>70.0</td> </tr> <tr> <td>県の様子</td> <td>73.0</td> <td>53.0</td> <td>73.0</td> </tr> </tbody> </table>	項目	到達基準を下回る (%)	おおむね達成 (%)	十分達成 (%)	地域の生産や販売	89.0	57.5	77.5	住みよいくらし	79.4	56.8	76.8	安全を守る	75.6	58.6	78.6	地域社会の歴史	77.2	50.0	70.0	県の様子	73.0	53.0	73.0	<p>○ 「地域の生産や販売」、「住みよいくらし」、「地域社会の歴史」では、「十分達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 「県の様子」では、「十分達成」の基準と同等である。</p> <p>○ 「安全を守る」では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
	項目	到達基準を下回る (%)	おおむね達成 (%)	十分達成 (%)																						
	地域の生産や販売	89.0	57.5	77.5																						
	住みよいくらし	79.4	56.8	76.8																						
	安全を守る	75.6	58.6	78.6																						
地域社会の歴史	77.2	50.0	70.0																							
県の様子	73.0	53.0	73.0																							



○ 中学校第1学年

	到達基準との比較	概要																		
国語	<p>H21中1国語 内容・領域別正答率</p> <table border="1"> <caption>H21中1国語 内容・領域別正答率</caption> <thead> <tr> <th>内容・領域</th> <th>正答率 (%)</th> <th>到達基準 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>書くこと</td> <td>75.0</td> <td>75.7</td> </tr> <tr> <td>読むこと(文学的文章)</td> <td>57.7</td> <td>75.0</td> </tr> <tr> <td>言語事項(語句に関する知識)</td> <td>61.3</td> <td>81.3</td> </tr> <tr> <td>言語事項(漢字の書き)</td> <td>50.1</td> <td>80.0</td> </tr> <tr> <td>言語事項(漢字の読み)</td> <td>75.1</td> <td>83.0</td> </tr> </tbody> </table>	内容・領域	正答率 (%)	到達基準 (%)	書くこと	75.0	75.7	読むこと(文学的文章)	57.7	75.0	言語事項(語句に関する知識)	61.3	81.3	言語事項(漢字の書き)	50.1	80.0	言語事項(漢字の読み)	75.1	83.0	<p>○ 「書くこと」、「読むこと」、「漢字の読み」では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 「語句に関する知識」では、「おおむね達成」の基準と同等である。</p> <p>○ 「漢字の書き」では、「おおむね達成」の基準を下回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
	内容・領域	正答率 (%)	到達基準 (%)																	
	書くこと	75.0	75.7																	
	読むこと(文学的文章)	57.7	75.0																	
	言語事項(語句に関する知識)	61.3	81.3																	
言語事項(漢字の書き)	50.1	80.0																		
言語事項(漢字の読み)	75.1	83.0																		
社会	<p>H21中1社会 内容・領域別正答率</p> <table border="1"> <caption>H21中1社会 内容・領域別正答率</caption> <thead> <tr> <th>内容・領域</th> <th>正答率 (%)</th> <th>到達基準 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>我が国の歴史</td> <td>59.8</td> <td>77.4</td> </tr> <tr> <td>我が国の政治の働き</td> <td>64.8</td> <td>78.6</td> </tr> <tr> <td>世界中の日本</td> <td>67.2</td> <td>75.8</td> </tr> </tbody> </table>	内容・領域	正答率 (%)	到達基準 (%)	我が国の歴史	59.8	77.4	我が国の政治の働き	64.8	78.6	世界中の日本	67.2	75.8	<p>○ すべての領域では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>						
	内容・領域	正答率 (%)	到達基準 (%)																	
	我が国の歴史	59.8	77.4																	
我が国の政治の働き	64.8	78.6																		
世界中の日本	67.2	75.8																		
数学	<p>H21中1数学 内容・領域別正答率</p> <table border="1"> <caption>H21中1数学 内容・領域別正答率</caption> <thead> <tr> <th>内容・領域</th> <th>正答率 (%)</th> <th>到達基準 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>数と計算</td> <td>67.1</td> <td>78.6</td> </tr> <tr> <td>量と測定</td> <td>65.8</td> <td>75.7</td> </tr> <tr> <td>図形</td> <td>68.3</td> <td>79.2</td> </tr> <tr> <td>数量関係</td> <td>64.0</td> <td>76.0</td> </tr> </tbody> </table>	内容・領域	正答率 (%)	到達基準 (%)	数と計算	67.1	78.6	量と測定	65.8	75.7	図形	68.3	79.2	数量関係	64.0	76.0	<p>○ すべての領域では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>			
	内容・領域	正答率 (%)	到達基準 (%)																	
	数と計算	67.1	78.6																	
	量と測定	65.8	75.7																	
図形	68.3	79.2																		
数量関係	64.0	76.0																		



○ 中学校第2学年

	到達基準との比較	概要																											
国語	<p>H21中2国語 内容・領域別正答率</p> <table border="1"> <caption>H21中2国語 内容・領域別正答率</caption> <thead> <tr> <th>内容・領域</th> <th>正答率 (%)</th> <th>到達基準 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>話すこと・聞くこと</td> <td>85.9</td> <td>51.0</td> </tr> <tr> <td>書くこと</td> <td>57.2</td> <td>71.0</td> </tr> <tr> <td>読むこと(説明的文章)</td> <td>58.3</td> <td>47.0</td> </tr> <tr> <td>言語事項(漢字の読み)</td> <td>87.9</td> <td>68.0</td> </tr> <tr> <td>言語事項(漢字の書き)</td> <td>43.2</td> <td>55.0</td> </tr> <tr> <td>言語事項(語句に関する知識)</td> <td>73.0</td> <td>75.0</td> </tr> </tbody> </table>	内容・領域	正答率 (%)	到達基準 (%)	話すこと・聞くこと	85.9	51.0	書くこと	57.2	71.0	読むこと(説明的文章)	58.3	47.0	言語事項(漢字の読み)	87.9	68.0	言語事項(漢字の書き)	43.2	55.0	言語事項(語句に関する知識)	73.0	75.0	<p>○ 「話すこと・聞くこと」、「漢字の読み」では、「十分達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 「書くこと」、「読むこと」、「語句に関する知識」では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 「漢字の書き」では、「おおむね達成」の基準を下回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>						
	内容・領域	正答率 (%)	到達基準 (%)																										
	話すこと・聞くこと	85.9	51.0																										
	書くこと	57.2	71.0																										
	読むこと(説明的文章)	58.3	47.0																										
	言語事項(漢字の読み)	87.9	68.0																										
言語事項(漢字の書き)	43.2	55.0																											
言語事項(語句に関する知識)	73.0	75.0																											
社会	<p>H21中2社会 内容・領域別正答率</p> <table border="1"> <caption>H21中2社会 内容・領域別正答率</caption> <thead> <tr> <th>内容・領域</th> <th>正答率 (%)</th> <th>到達基準 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>世界の地域構成</td> <td>61.4</td> <td>50.0</td> </tr> <tr> <td>日本の地域構成</td> <td>66.8</td> <td>70.0</td> </tr> <tr> <td>身近な地域</td> <td>58.3</td> <td>41.7</td> </tr> <tr> <td>都道府県</td> <td>60.8</td> <td>66.7</td> </tr> <tr> <td>歴史の流れと地域の歴史</td> <td>69.5</td> <td>48.0</td> </tr> <tr> <td>古代までの日本</td> <td>74.7</td> <td>50.0</td> </tr> <tr> <td>中世の日本</td> <td>37.4</td> <td>68.3</td> </tr> <tr> <td>近世の日本</td> <td>57.2</td> <td>48.0</td> </tr> </tbody> </table>	内容・領域	正答率 (%)	到達基準 (%)	世界の地域構成	61.4	50.0	日本の地域構成	66.8	70.0	身近な地域	58.3	41.7	都道府県	60.8	66.7	歴史の流れと地域の歴史	69.5	48.0	古代までの日本	74.7	50.0	中世の日本	37.4	68.3	近世の日本	57.2	48.0	<p>○ 「歴史の流れと地域の歴史」、「古代までの歴史」では、「十分達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 「世界の地域構成」、「日本の地域構成」、「身近な地域」、「都道府県」、「近世の日本」では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 「中世の日本」では、「おおむね達成」の基準を下回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
	内容・領域	正答率 (%)	到達基準 (%)																										
	世界の地域構成	61.4	50.0																										
	日本の地域構成	66.8	70.0																										
	身近な地域	58.3	41.7																										
	都道府県	60.8	66.7																										
	歴史の流れと地域の歴史	69.5	48.0																										
	古代までの日本	74.7	50.0																										
中世の日本	37.4	68.3																											
近世の日本	57.2	48.0																											

<p>数学</p>	<p>H21中2数学 内容・領域別正答率</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>内容・領域</th> <th>正答率 (%)</th> <th>目標 (%)</th> <th>達成率 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>数と式</td> <td>53.0</td> <td>46.8</td> <td>66.8</td> </tr> <tr> <td>図形</td> <td>51.3</td> <td>43.9</td> <td>63.9</td> </tr> <tr> <td>数量関係</td> <td>53.1</td> <td>45.0</td> <td>65.0</td> </tr> </tbody> </table>	内容・領域	正答率 (%)	目標 (%)	達成率 (%)	数と式	53.0	46.8	66.8	図形	51.3	43.9	63.9	数量関係	53.1	45.0	65.0	<p>○ すべての領域で、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>				
内容・領域	正答率 (%)	目標 (%)	達成率 (%)																			
数と式	53.0	46.8	66.8																			
図形	51.3	43.9	63.9																			
数量関係	53.1	45.0	65.0																			
<p>理科</p>	<p>H21中2理科 内容・領域別正答率</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>内容・領域</th> <th>正答率 (%)</th> <th>目標 (%)</th> <th>達成率 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>植物の生活と種類</td> <td>45.0</td> <td>49.4</td> <td>69.4</td> </tr> <tr> <td>身近な物理現象</td> <td>46.3</td> <td>45.0</td> <td>65.0</td> </tr> <tr> <td>物質の姿</td> <td>57.4</td> <td>49.4</td> <td>69.4</td> </tr> <tr> <td>大地の変化</td> <td>53.6</td> <td>48.9</td> <td>68.9</td> </tr> </tbody> </table>	内容・領域	正答率 (%)	目標 (%)	達成率 (%)	植物の生活と種類	45.0	49.4	69.4	身近な物理現象	46.3	45.0	65.0	物質の姿	57.4	49.4	69.4	大地の変化	53.6	48.9	68.9	<p>○ 「身近な物理現象」、「物質の姿」、「大地の変化」では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 「植物の生活と種類」では、「おおむね達成」の基準を下回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
内容・領域	正答率 (%)	目標 (%)	達成率 (%)																			
植物の生活と種類	45.0	49.4	69.4																			
身近な物理現象	46.3	45.0	65.0																			
物質の姿	57.4	49.4	69.4																			
大地の変化	53.6	48.9	68.9																			
<p>英語</p>	<p>H21中2英語 内容・領域別正答率</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>内容・領域</th> <th>正答率 (%)</th> <th>目標 (%)</th> <th>達成率 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>聞くこと</td> <td>79.5</td> <td>50.0</td> <td>70.0</td> </tr> <tr> <td>読むこと</td> <td>59.1</td> <td>47.5</td> <td>67.5</td> </tr> <tr> <td>書くこと</td> <td>53.2</td> <td>46.4</td> <td>66.4</td> </tr> </tbody> </table>	内容・領域	正答率 (%)	目標 (%)	達成率 (%)	聞くこと	79.5	50.0	70.0	読むこと	59.1	47.5	67.5	書くこと	53.2	46.4	66.4	<p>○ 「聞くこと」では、「十分達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 「読むこと」、「書くこと」では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>				
内容・領域	正答率 (%)	目標 (%)	達成率 (%)																			
聞くこと	79.5	50.0	70.0																			
読むこと	59.1	47.5	67.5																			
書くこと	53.2	46.4	66.4																			

最終更新日：2009-07-24

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要 > 学習定着状況 > 学年ごとの定着状況

学年ごとの定着状況

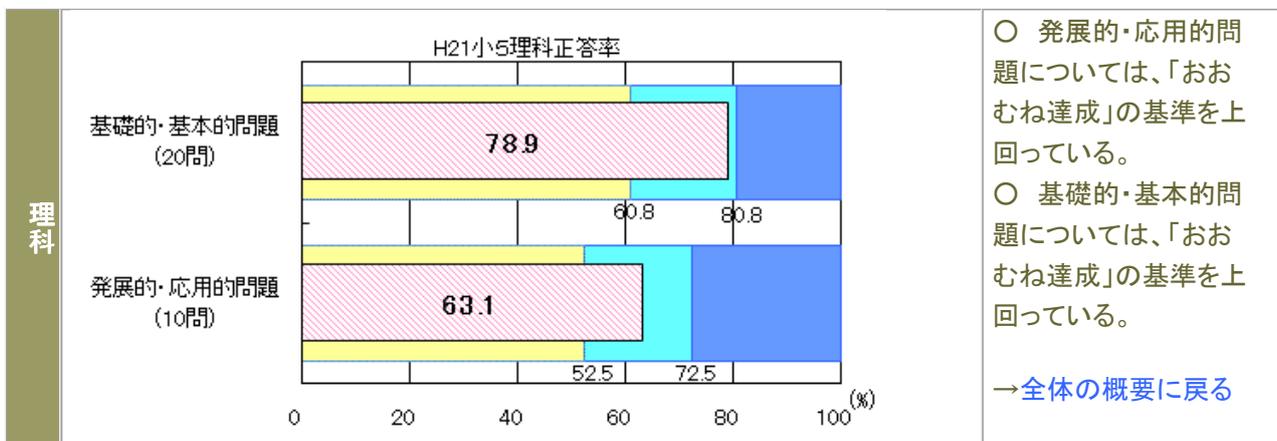
基礎的な問題と発展的な問題の比較

発展的・応用的な力の定着をみる問題の正答率と、基本的・基礎的な力の定着をみる問題の正答率を示す。

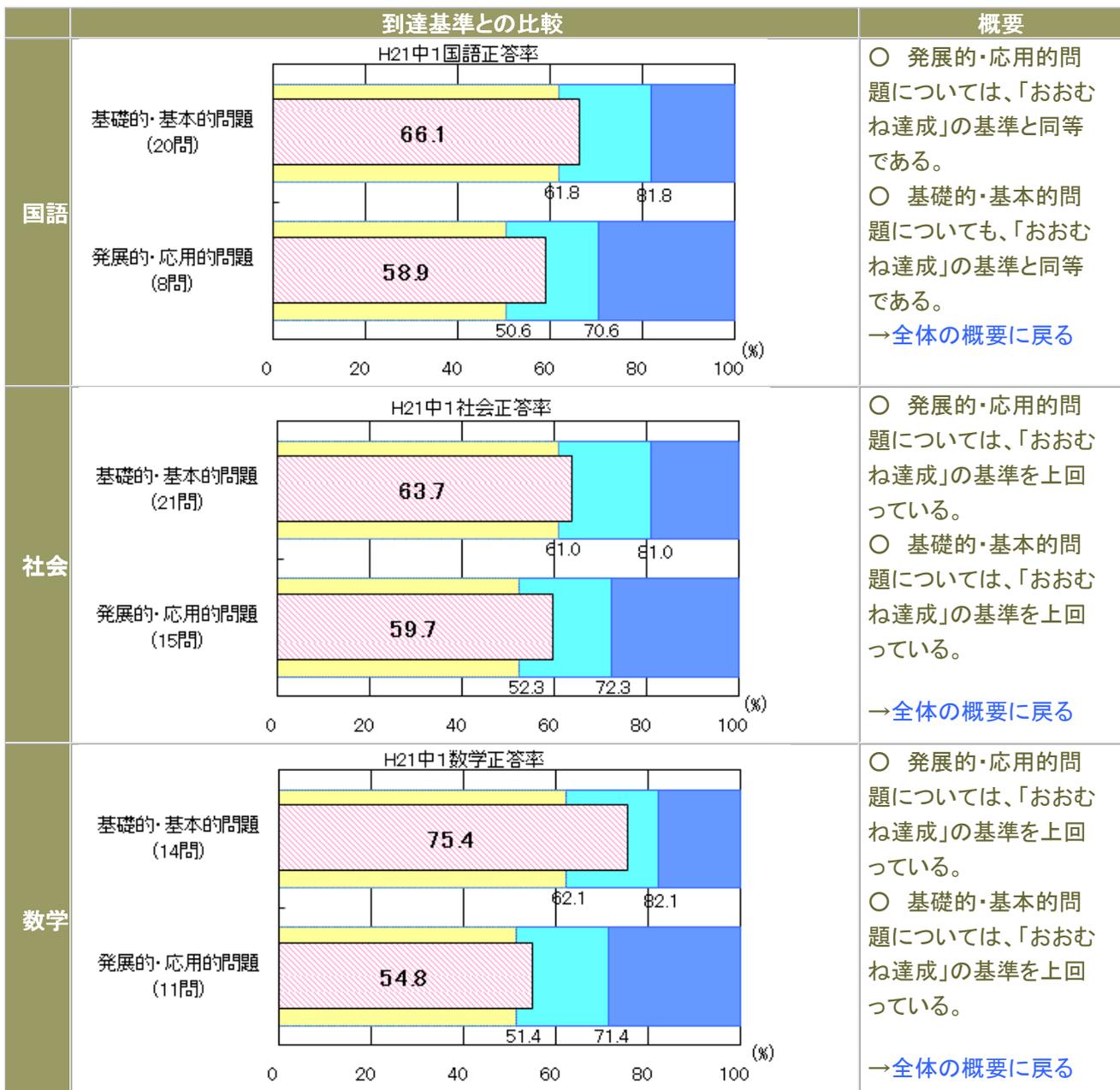
(凡例) ■: 到達基準を下回る ■: おおむね達成 ■: 十分達成

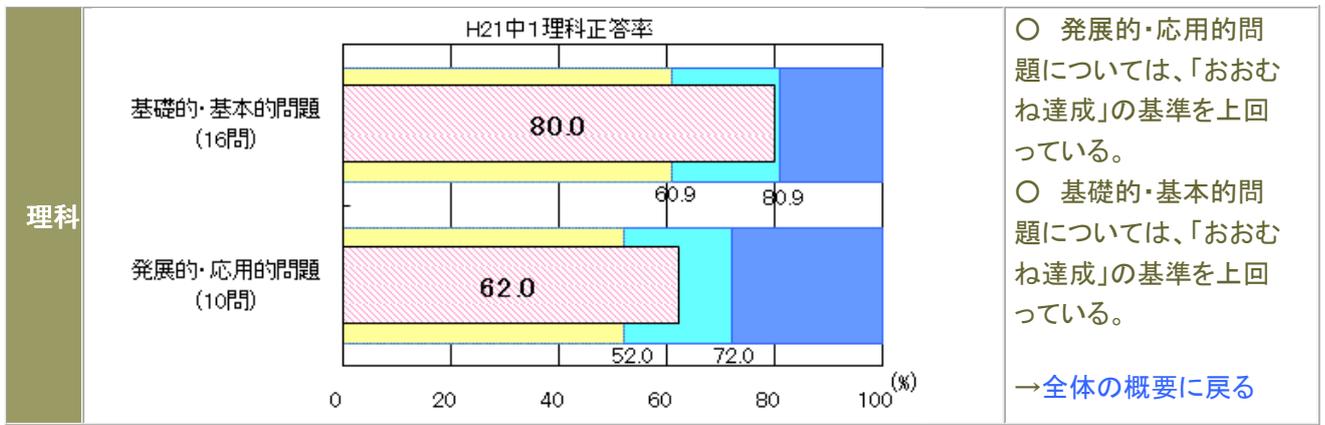
○ 小学校第5学年

	到達基準との比較	概要
国語	<p>H21小5国語正答率</p> <p>基本的・基本的問題 (18問) 71.6 発展的・応用的問題 (8問) 53.8</p> <p>0 20 40 60 80 100 (%)</p>	<p>○ 発展的・応用的問題については、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 基本的・基本的問題については、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
	<p>H21小5社会正答率</p> <p>基本的・基本的問題 (11問) 85.7 発展的・応用的問題 (19問) 75.6</p> <p>0 20 40 60 80 100 (%)</p>	<p>○ 発展的・応用的問題については、「十分達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 基本的・基本的問題については、「十分達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
算数	<p>H21小5算数正答率</p> <p>基本的・基本的問題 (16問) 68.8 発展的・応用的問題 (10問) 52.0</p> <p>0 20 40 60 80 100 (%)</p>	<p>○ 発展的・応用的問題については、「おおむね達成」の基準と同等である。</p> <p>○ 基本的・基本的問題については、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>



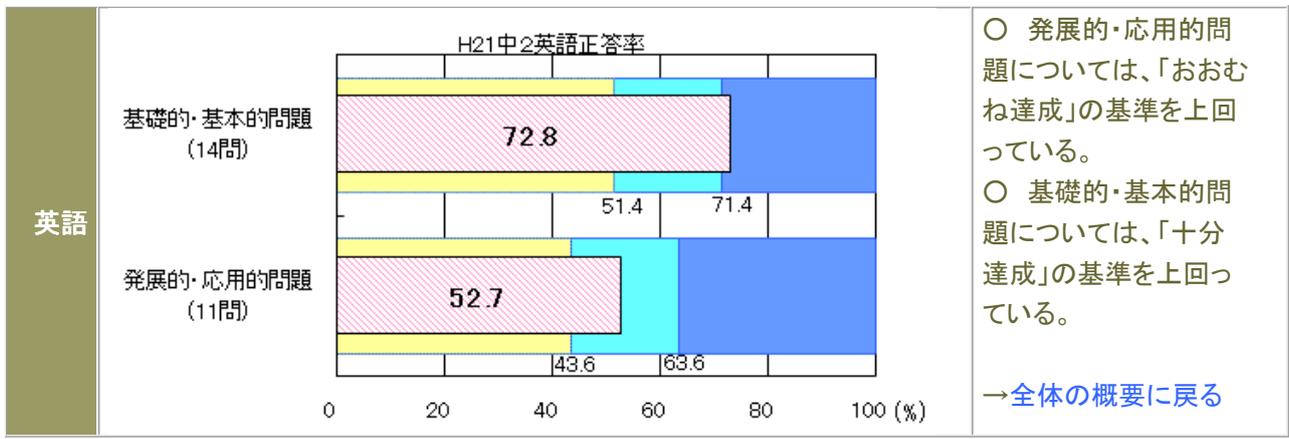
○ 中学校第1学年





○ 中学校第2学年

到達基準との比較		概要
国語	<p>H21中2国語正答率</p> <p>基礎的・基本的問題 (25問)</p> <p>72.6</p> <p>53.4 73.4</p> <p>発展的・応用的問題 (5問)</p> <p>42.6</p> <p>43.0 63.0 (%)</p>	<p>○ 発展的・応用的問題については、到達基準を下回っている。</p> <p>○ 基礎的・基本的問題については、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
	<p>H21中2社会正答率</p> <p>基礎的・基本的問題 (20問)</p> <p>68.8</p> <p>51.0 71.0</p> <p>発展的・応用的問題 (15問)</p> <p>51.3</p> <p>44.0 64.0 (%)</p>	<p>○ 発展的・応用的問題については、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 基礎的・基本的問題については、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
数学	<p>H21中2数学</p> <p>基礎的・基本的問題 (14問)</p> <p>69.7</p> <p>50.7 70.7</p> <p>発展的・応用的問題 (14問)</p> <p>35.2</p> <p>40.0 60.0 (%)</p>	<p>○ 発展的・応用的問題については、到達基準を下回っている。</p> <p>○ 基礎的・基本的問題については、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
	<p>H21中2理科正答率</p> <p>基礎的・基本的問題 (21問)</p> <p>52.4</p> <p>51.2 71.2</p> <p>発展的・応用的問題 (13問)</p> <p>47.5</p> <p>43.5 63.5 (%)</p>	<p>○ 発展的・応用的問題については、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 基礎的・基本的問題については、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>



最終更新日：2009-07-24

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要 > 学習定着状況 > 学年ごとの定着状況

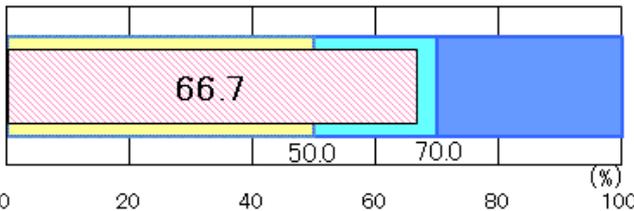
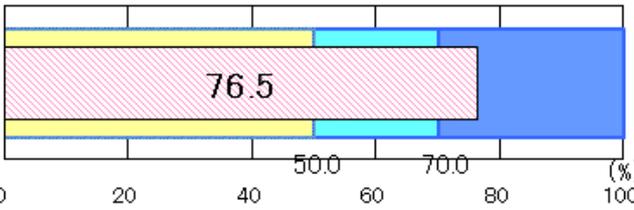
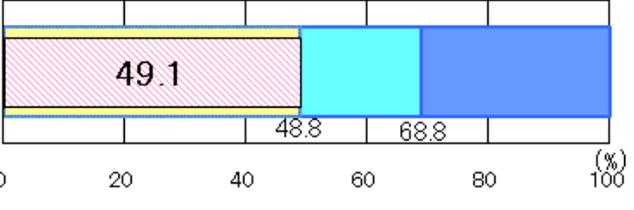
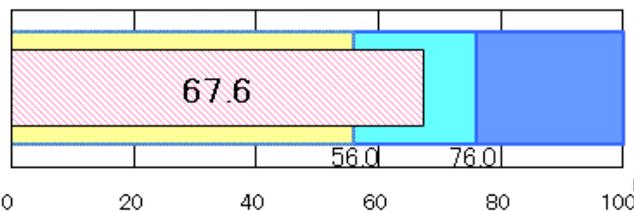
学年ごとの定着状況

活用を問う問題の到達状況

活用を問う問題の正答率と到達基準との比較を示す。

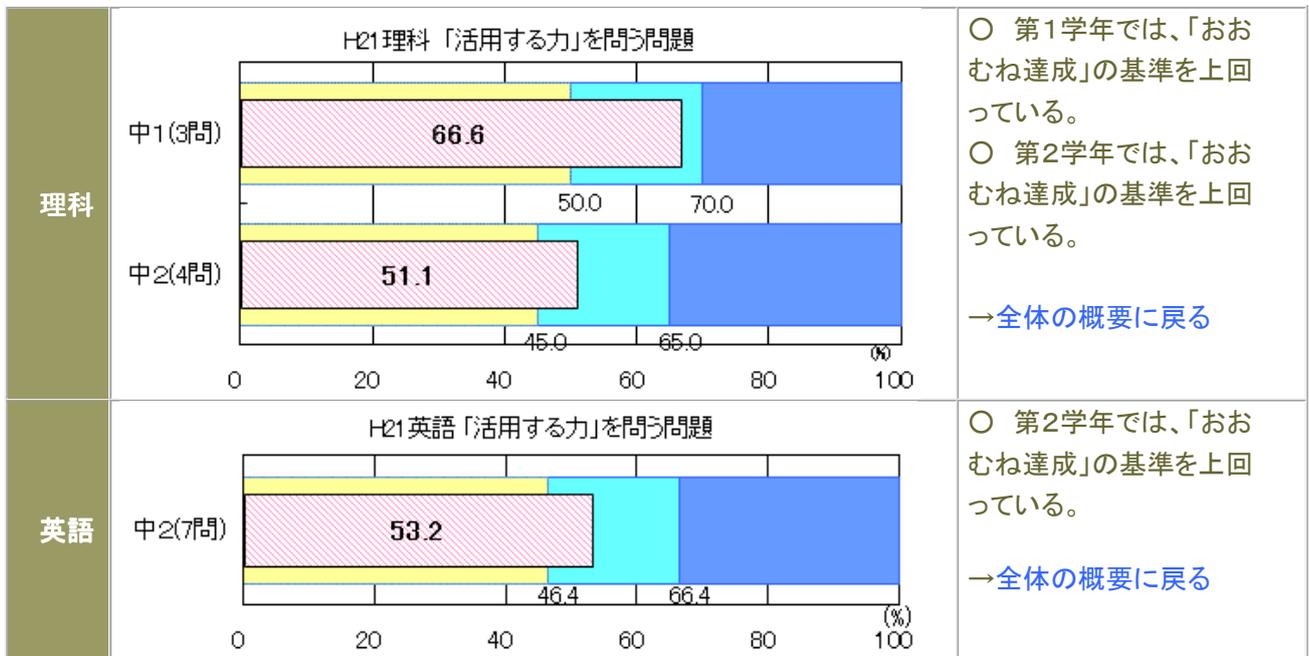
(凡例) : 到達基準を下回る : おおむね達成 : 十分達成

○ 小学校第5学年

		到達基準との比較	概要
国語	H21小5国語「活用する力」を問う問題		
	小5(2問)	 <p>66.7</p> <p>50.0 70.0 (%)</p>	<p>○ 第5学年では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
社会	H21小5社会「活用する力」を問う問題		
	小5(2問)	 <p>76.5</p> <p>50.0 70.0 (%)</p>	<p>○ 第5学年では、「十分達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
算数	H21小5算数「活用する力」を問う問題		
	小5(4問)	 <p>49.1</p> <p>48.8 68.8 (%)</p>	<p>○ 第5学年では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
理科	H21小5理科「活用する力」を問う問題		
	小5(5問)	 <p>67.6</p> <p>56.0 76.0 (%)</p>	<p>○ 第5学年では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>

○ 中学校第1学年・第2学年

		到達基準との比較	概要
国語	H21国語「活用する力」を問う問題		<p>○ 第1学年では、「十分達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 第2学年では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
	中1(4問)		
社会	H21社会「活用する力」を問う問題		<p>○ 第1学年では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 第2学年では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
	中1(6問)		
数学	H21算数・数学「活用する力」を問う問題		<p>○ 第1学年では、「おおむね達成」の基準を上回っている。</p> <p>○ 第2学年では、「おおむね達成」の基準を下回っている。</p> <p>→全体の概要に戻る</p>
	中1(5問)		



2009-07-01 2009-07-01

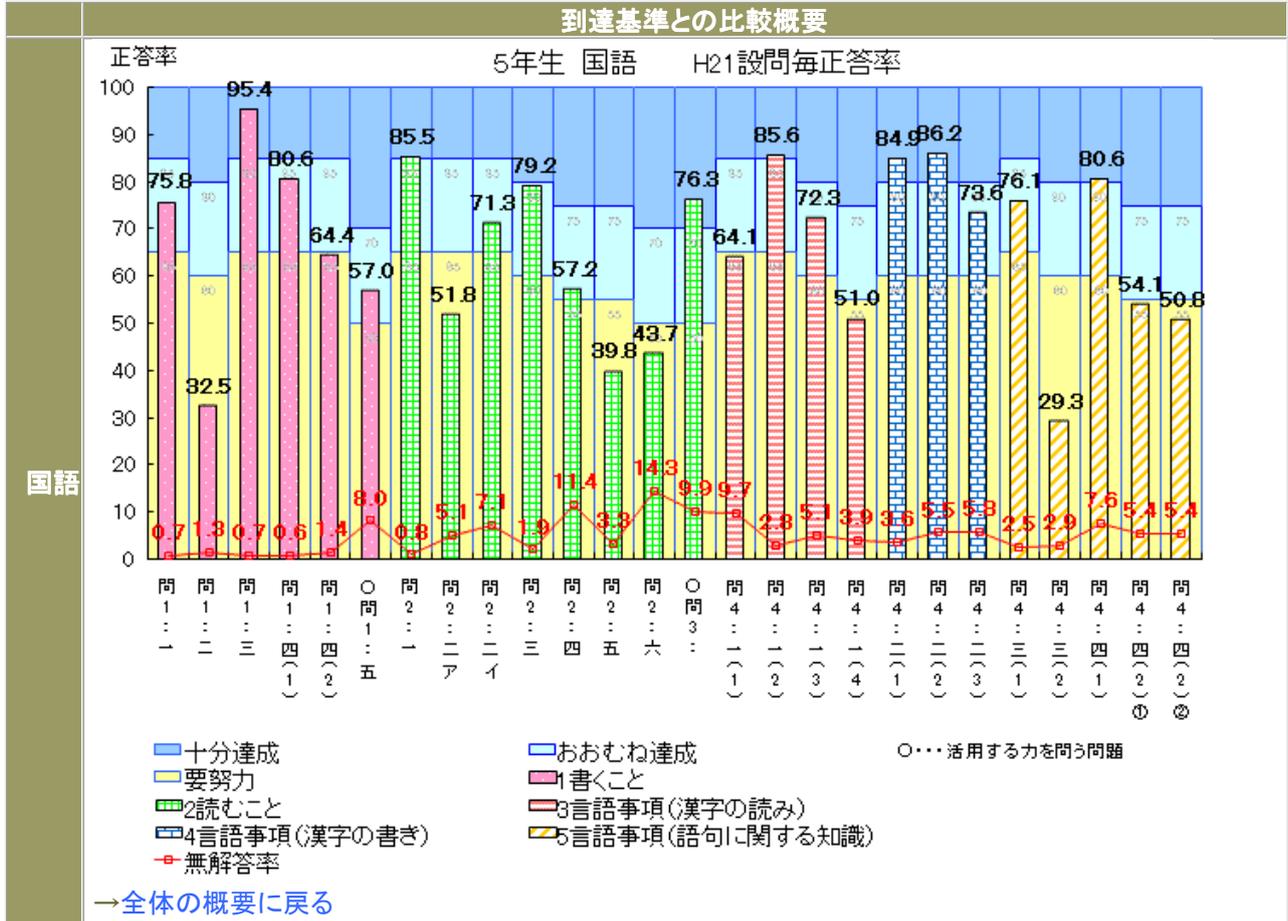
平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

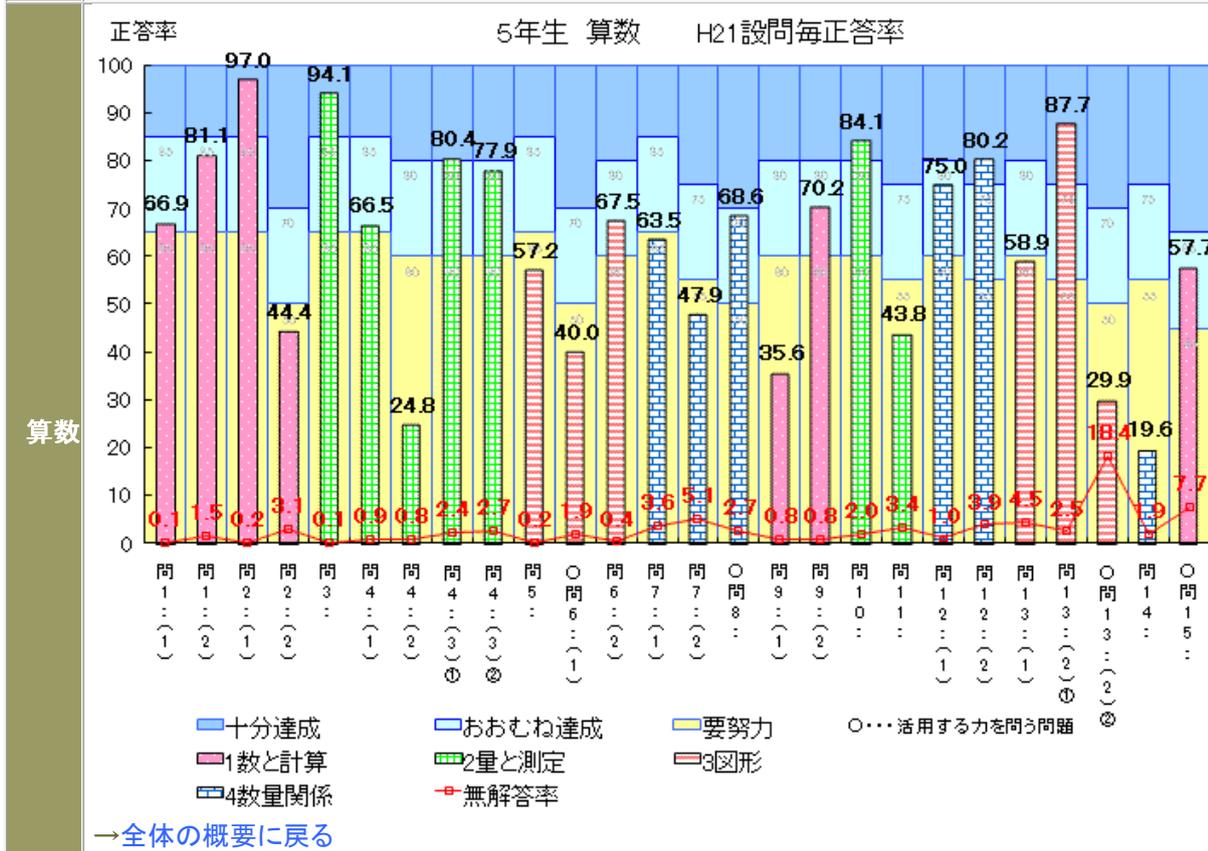
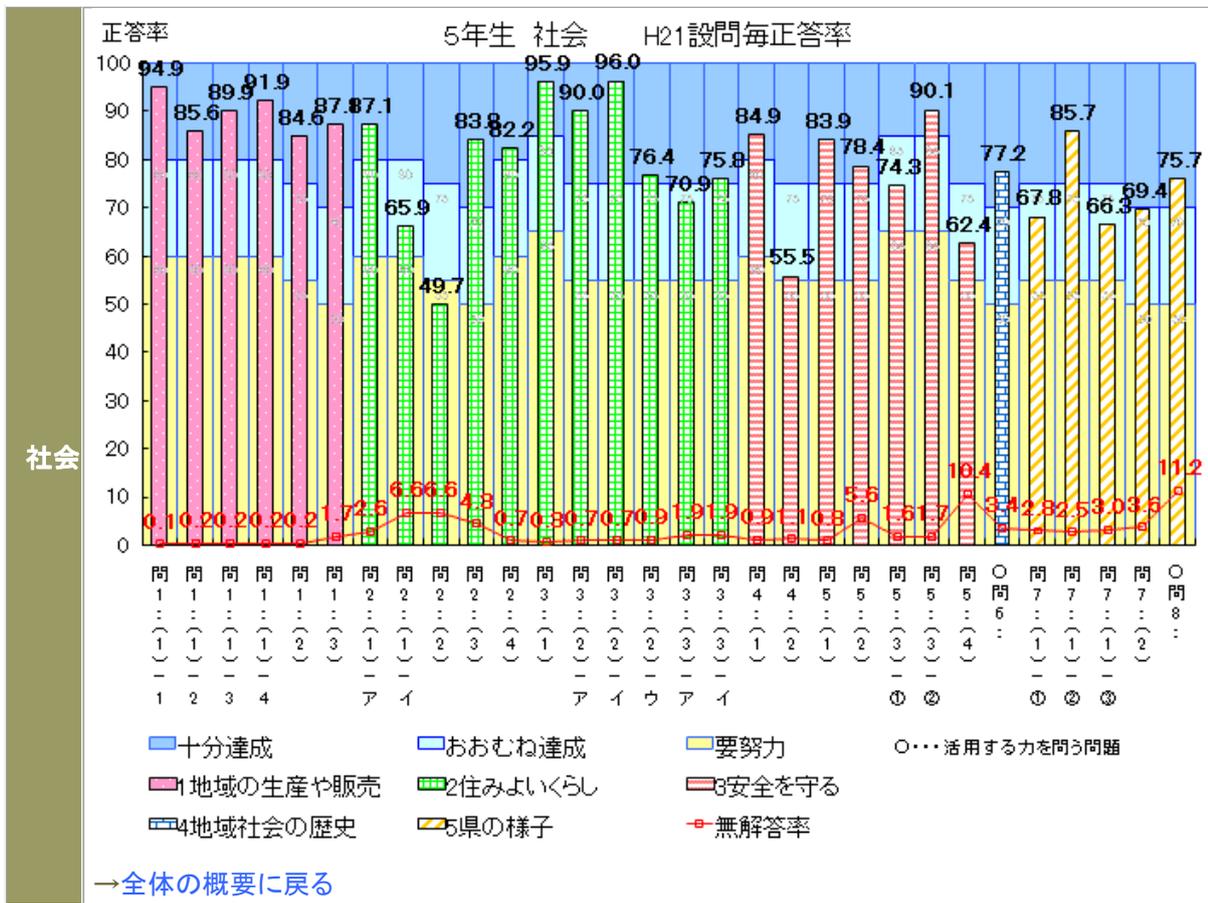
Web報告書もくじ > II 調査結果の概要 > 学習定着状況 > 学年ごとの定着状況

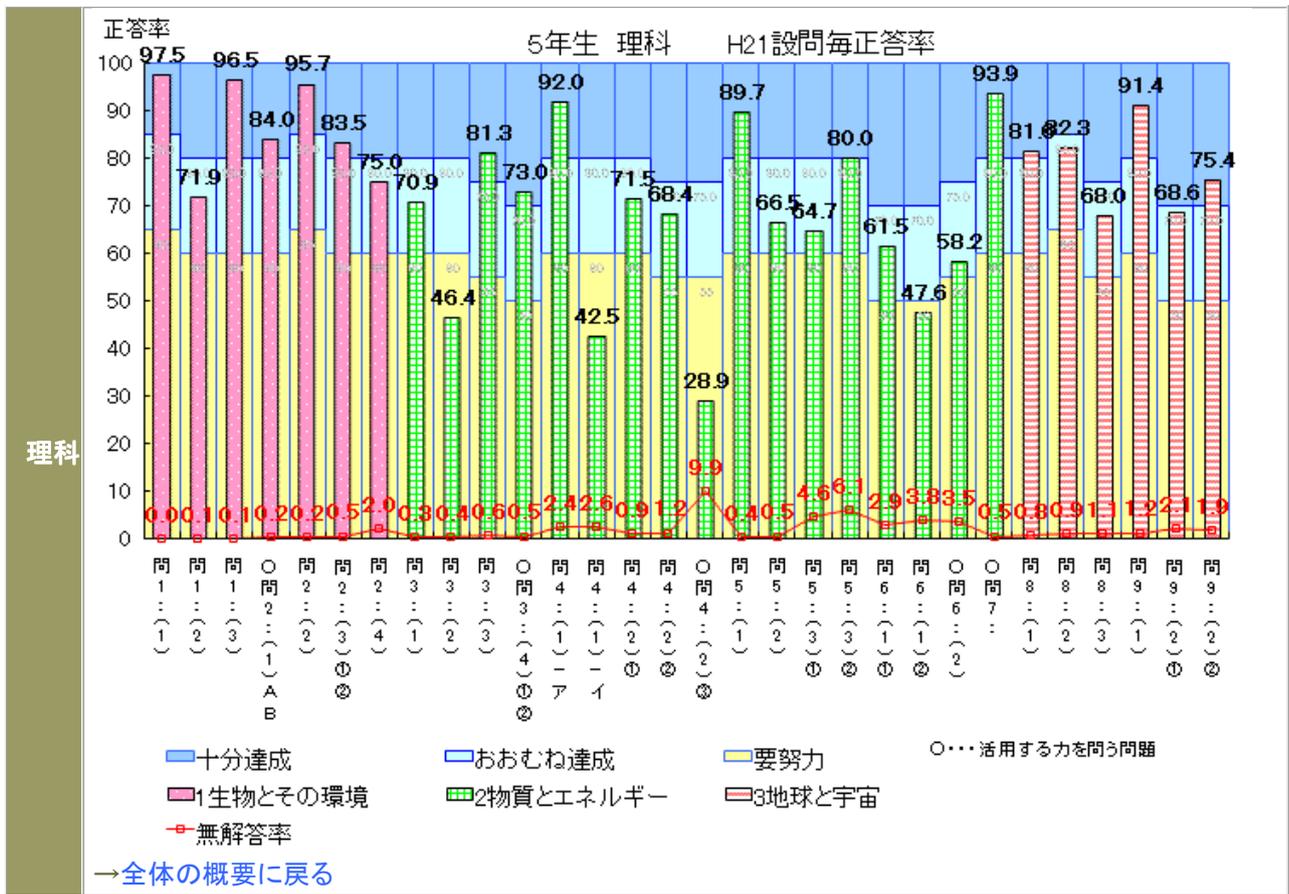
設問毎の定着状況

設問毎にみた期待正答率との比較

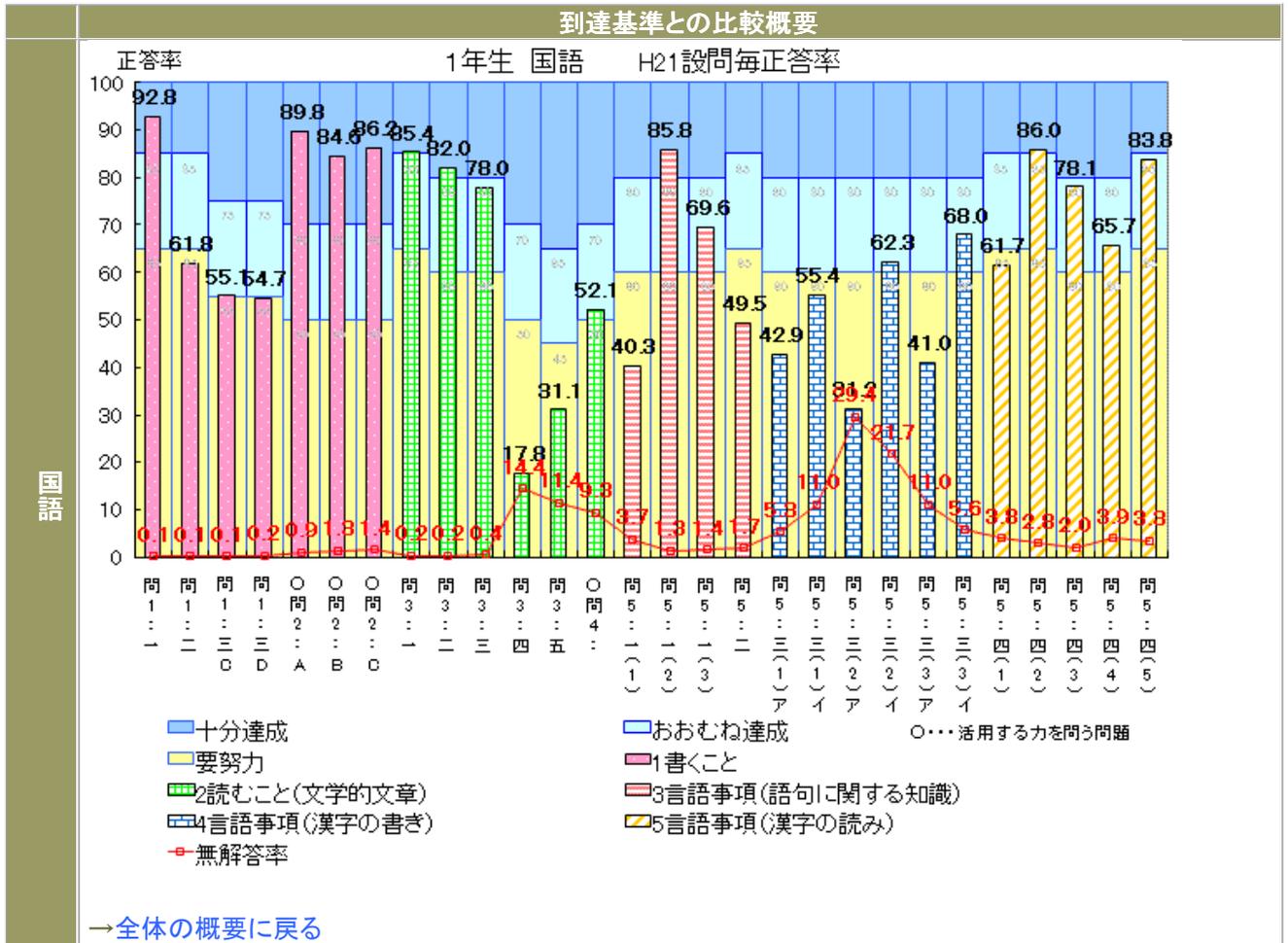
○ 小学校第5学年

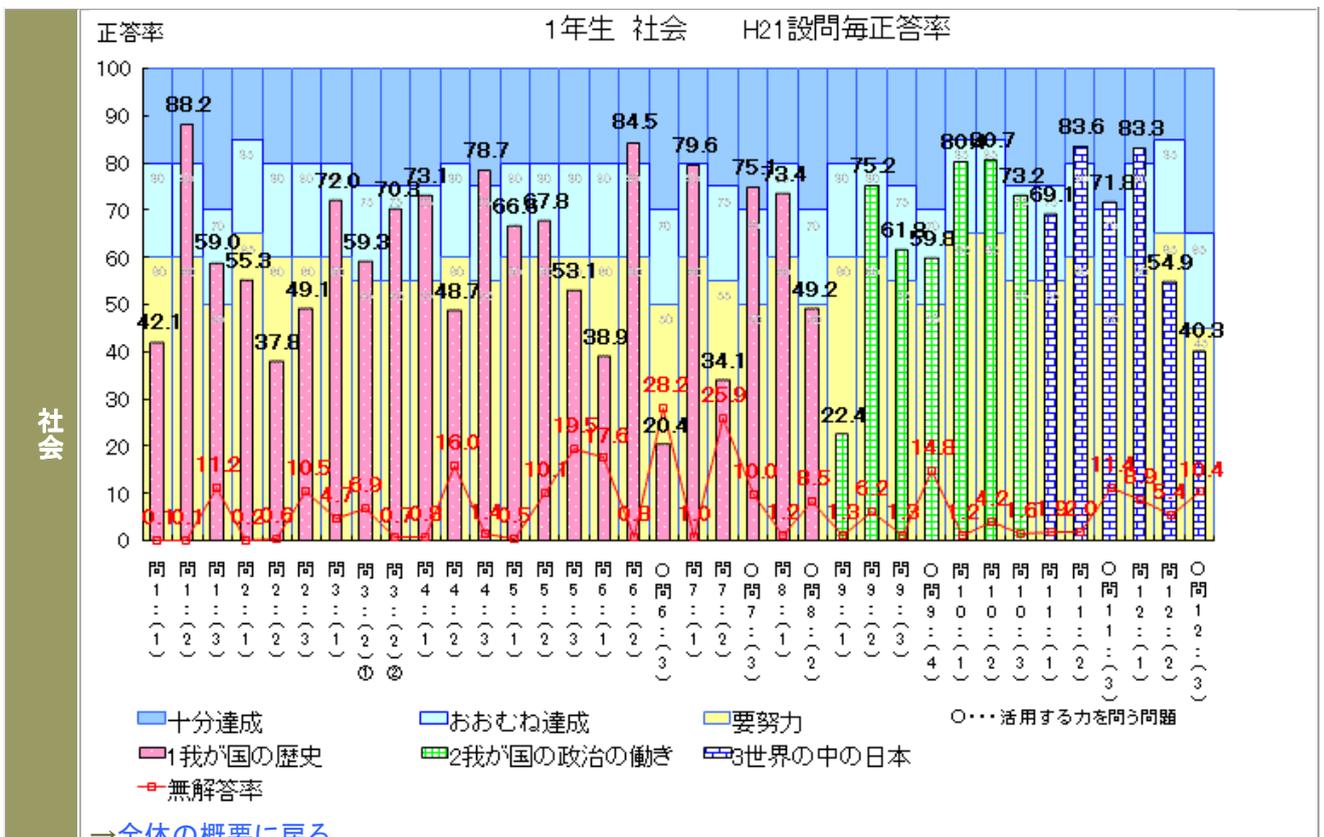




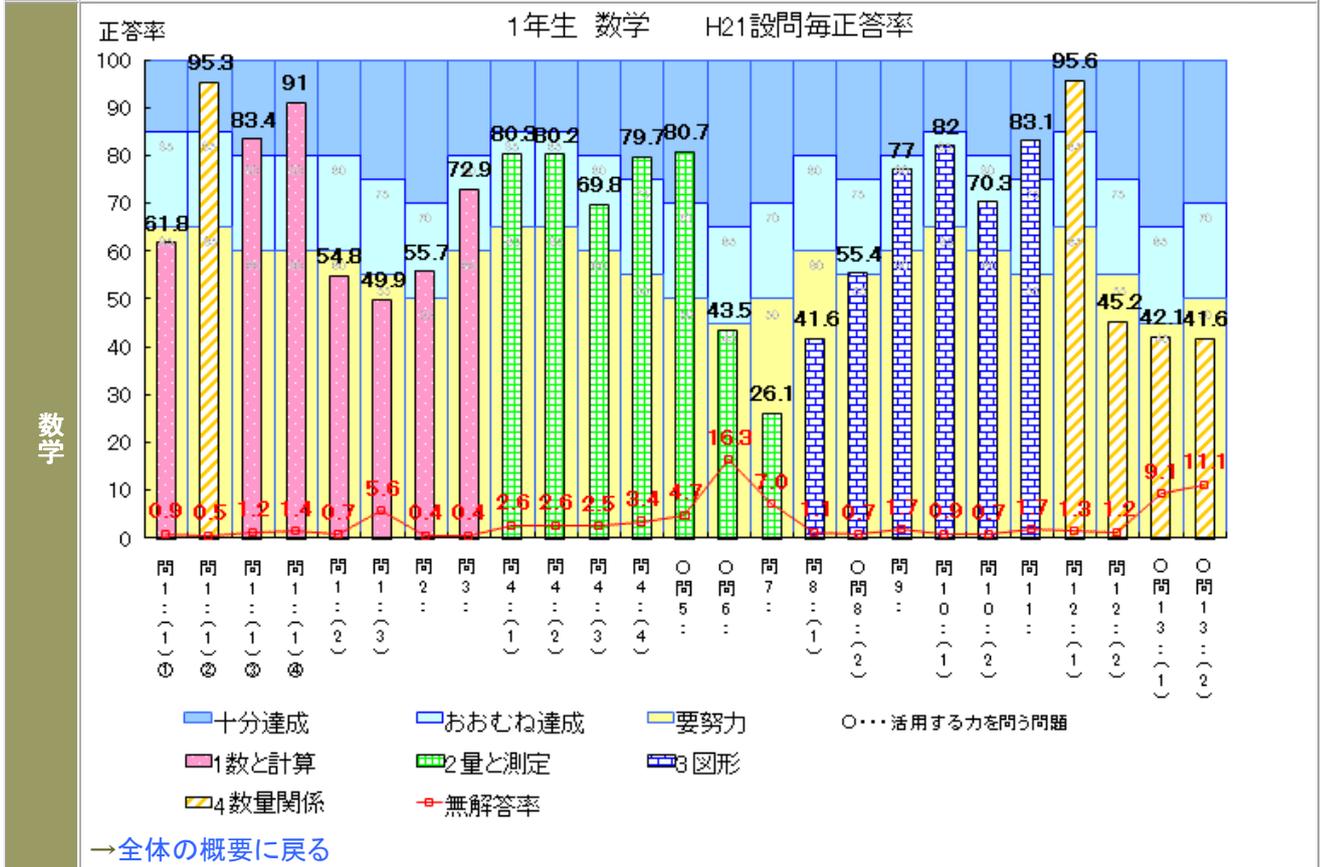


○ 中学校第1学年

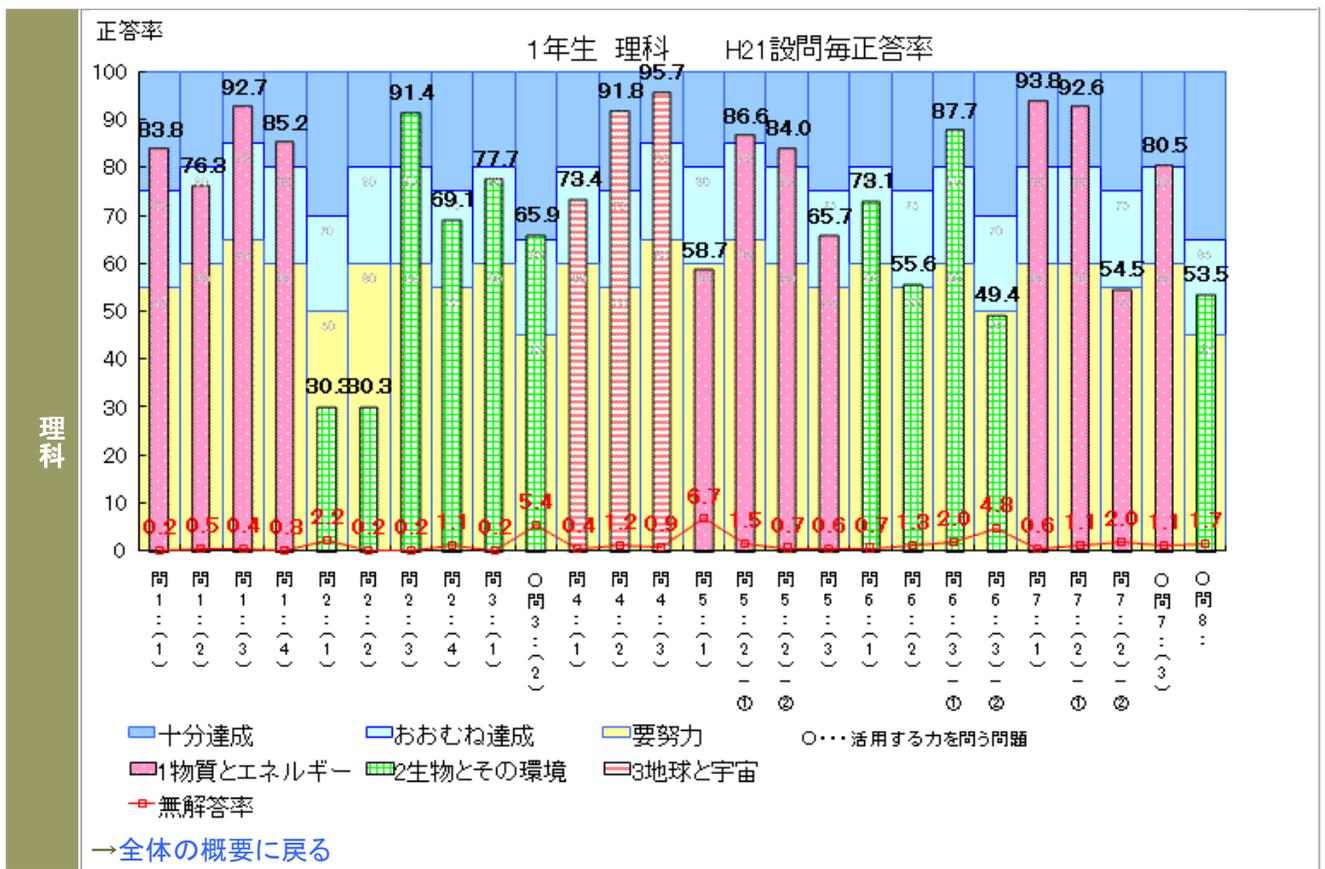




→ 全体の概要に戻る

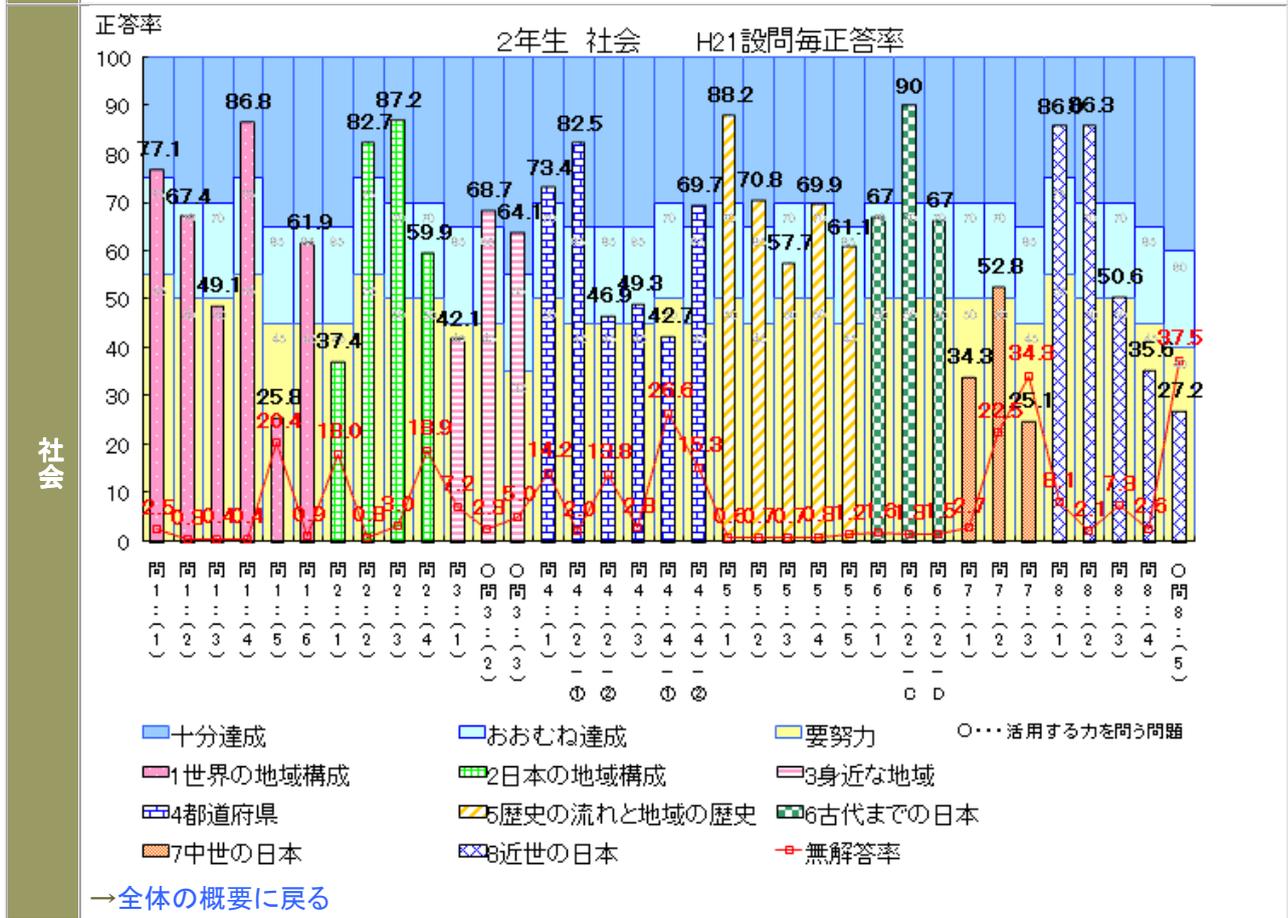
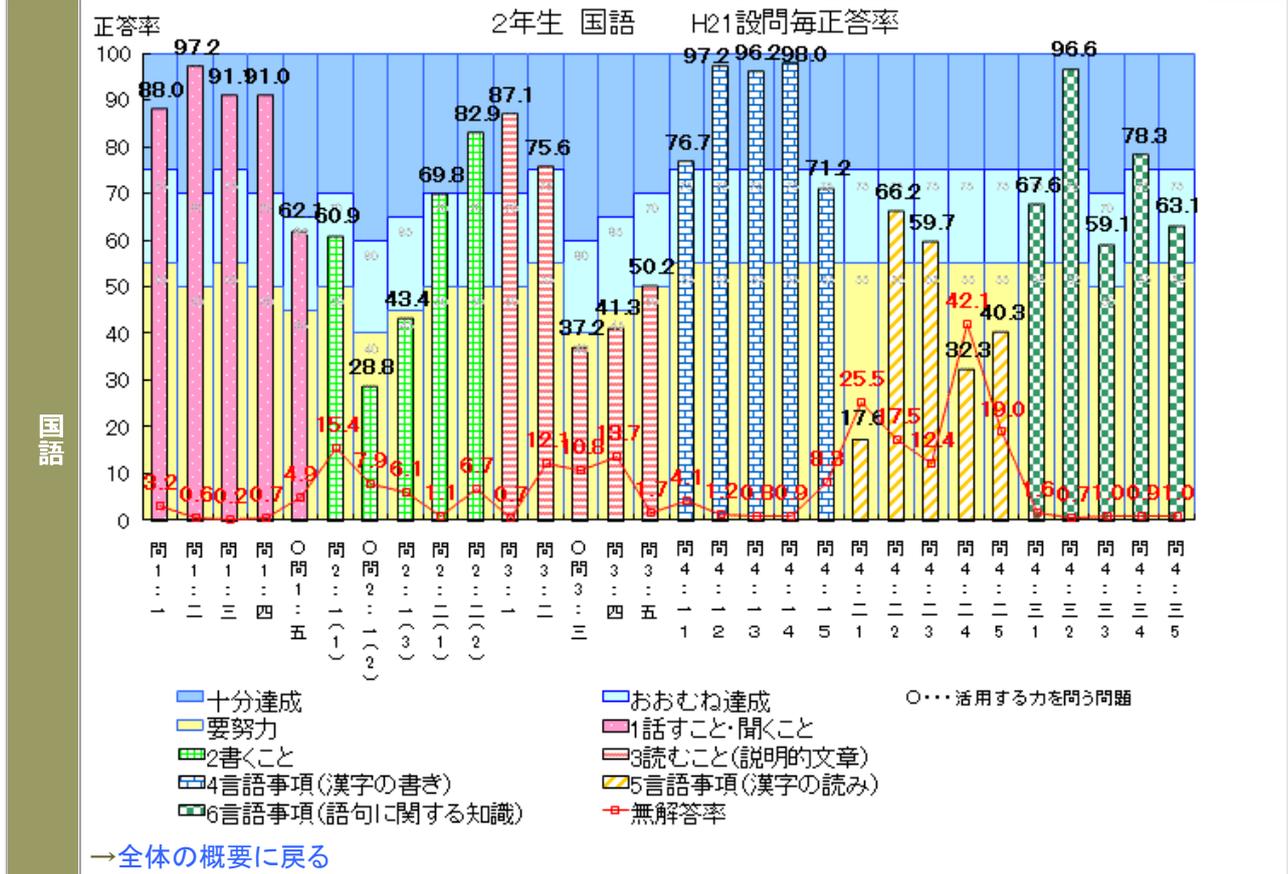


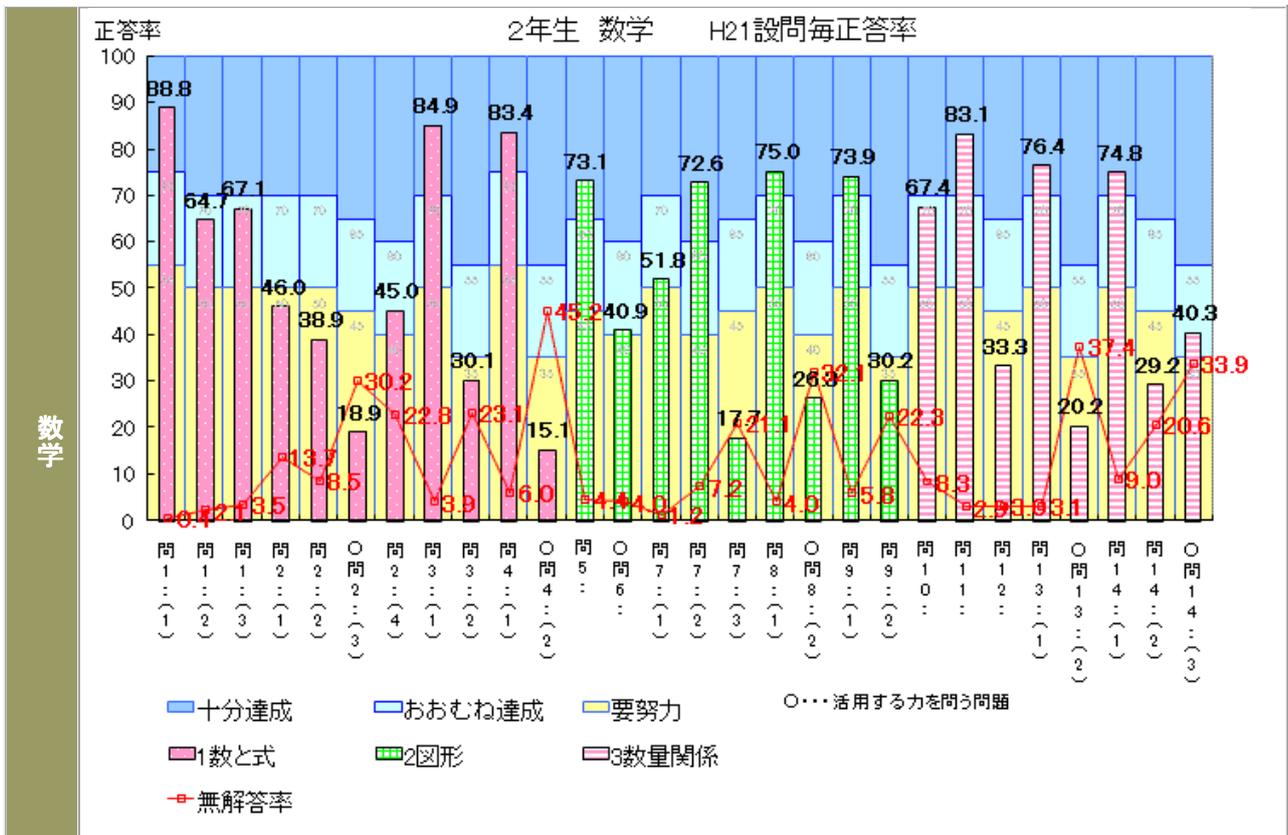
→ 全体の概要に戻る



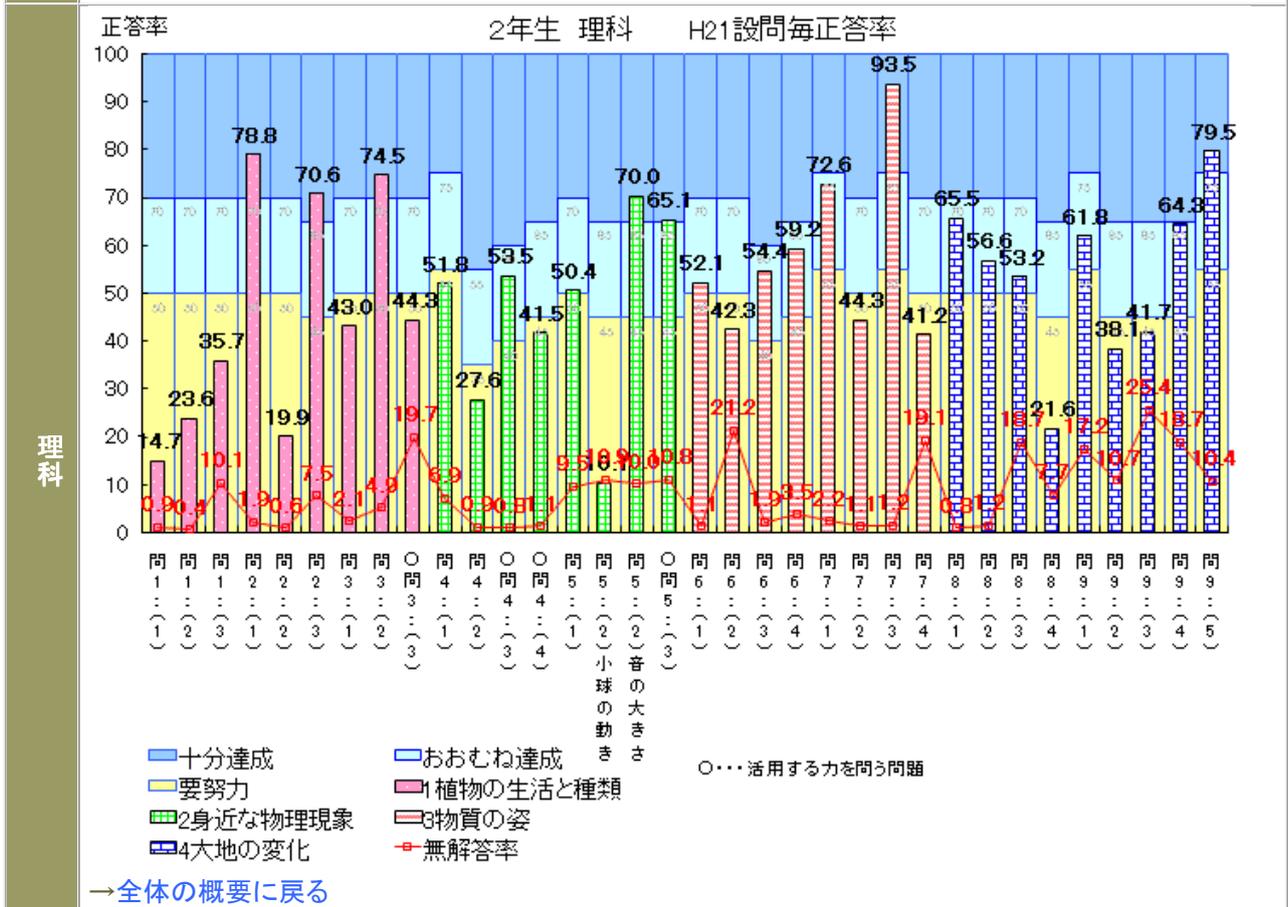
○ 中学校第2学年

到達基準との比較概要

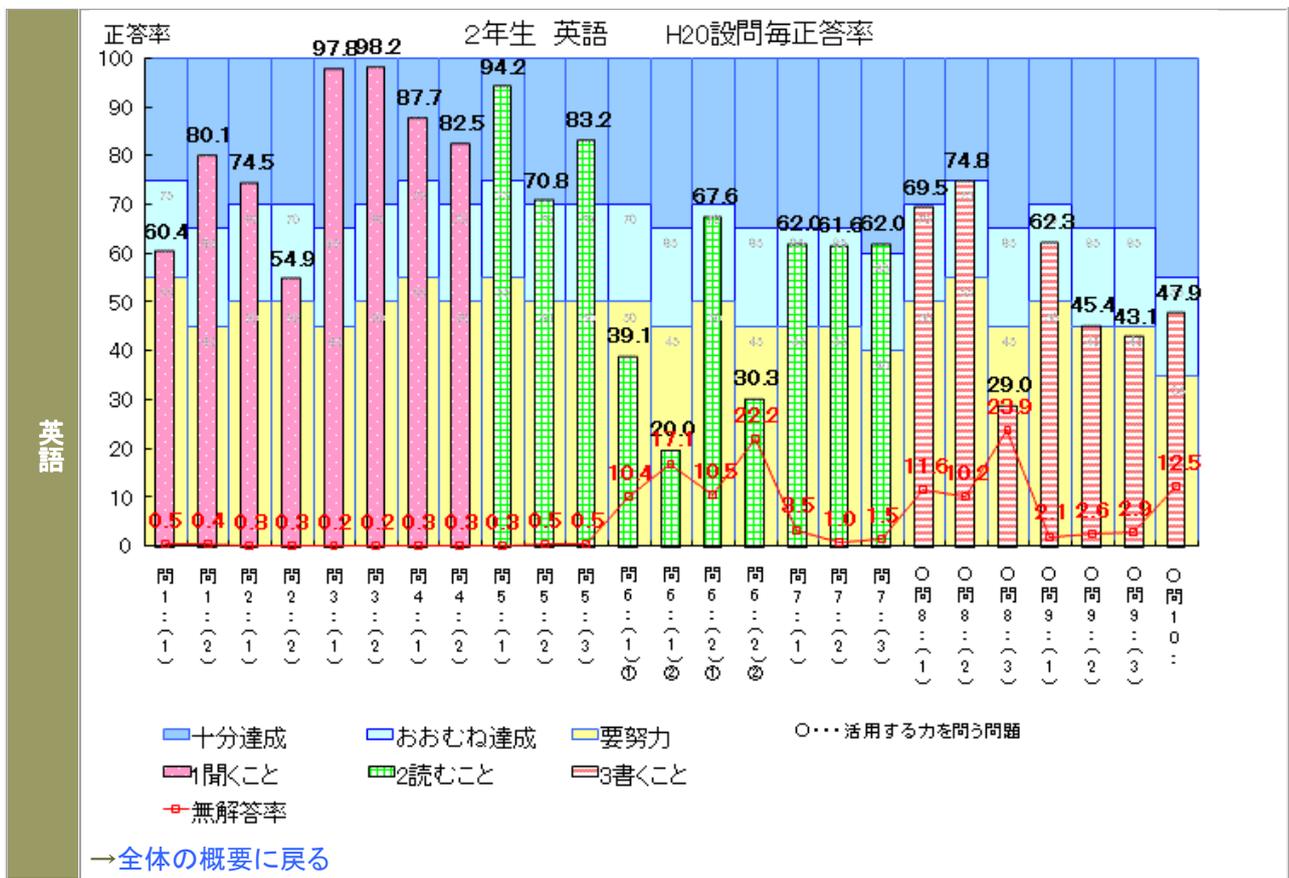




→全体の概要に戻る



→全体の概要に戻る



最終更新日：2009-07-13

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(小学校第5学年) → [中学校第1学年](#) [中学校第2学年](#)

※数値は小数第一位で四捨五入している。

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像 (小学校第5学年)

学校生活

■学校適応 はい・どちらかといえばはい を合わせた割合
 ・学校での生活は楽しい……………86%
 ・勉強が好き……………59%
 ・学校では落ち着いて勉強できている……………75%
 ・なにか困ったことがあったとき、先生に相談する……………49%

■友だち関係への志向性
 ・友だちをつくることは大切……………96%
 ・友だちといっしょにいる方がひとりであるより楽しい……………89%

学習動機

はい・どちらかといえばはい を合わせた割合
 ■学校での勉強は、大人になってから役に立つと思う……………94%
 ■大人になってから、かなえてみたいゆめ(仕事)がある
 ぜひやってみたい仕事がある……………61%
 何となくやってみたい仕事がある……………26%

学習活動

■授業の中で分からないことがあったとき、どうすることが多いか
 友人にたずねる……………59%
 親にたずねる……………50%
 その場で先生にたずねる……………43%
 自分で調べる……………36%

■学校の授業以外に1日どのくらい勉強するか
 ア 月曜日から金曜日
 30分～1時間……………37%
 1時間～2時間……………25%
 イ 土・日曜日や休日
 30分～1時間……………31%
 30分より少ない……………28%

■1週間のうち、何日塾に通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしているか
 していない……………71% 2日……………12%
 1日……………9%

■ふだん学校の授業以外でしている勉強
 宿題があれば宿題をする……………86%
 興味があることについて自分で調べたり、確かめたりする……………30%
 復習をする……………23%
 予習をする……………23%

生活習慣

■朝食
 週5～6回(毎日)とる……………95% 週3～4回とる……………2%
 週1～2回とる……………2% まったくとらない……………1%

■読書をする時間
 30分～1時間……………18% 10分～30分……………35%
 10分より少ない……………23% まったく読まない……………13%

■テレビやゲームなど自由に過ごす時間
 3時間以上……………17% 2時間～3時間……………14%
 1時間～2時間……………22% 30分～1時間……………23%

■家の手伝い
 毎日……………33% 週3～4回……………23% 週1～2回……………21%

■寝る時間
 午後9～10時……………52% 午後10～11時……………30%
 午後11～0時……………7%

■世の中のいろいろなできごとを知ったり、情報を得たりするためにふだんやっていること
 テレビのニュース番組を見る……………70%
 親の話聞く……………43%
 新聞を読む……………27%

家族関係

■ぎょうだいの数(自分のはぞく)
 1人……………40% 2人……………32%
 3人……………11%

はい・どちらかといえばはい を合わせた割合
 ■家族といっしょにいる方がひとりであるより楽しい……………86%

■家にいるとき、家族の人はあなたにどうしているか
 よいことをすると、ほめられる……………61%
 よくないことをすると、きびしくしかられる……………51%
 「勉強しなさい」とよくいわれる……………48%
 「自分のことは自分でしなさい」とよくいわれる……………45%
 勉強についていわれることはない……………18%

地域社会における生活

■課外活動や習い事などをどのくらいしているか
 まったくしていない……………27%
 週に1～2回……………27%
 週に3～4回……………25%
 週に5回以上……………20%

■地域での行事や祭り、ボランティア活動などにどのくらい参加するか
 まったく参加しない……………17%
 年1回～半年に1回……………48%
 月1回～月2回……………31%
 週に1回以上……………5%

最終更新日: 2009-07-17

57

平成21年度 佐賀県小・中学校学習状況調査報告書

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(中学校第1学年) → 小学校第5学年 中学校第2学年

※数値は小数第一位で四捨五入している。

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像 (中学校第1学年)

学校生活

- 学校適応 はい・どちらかといえぬを合わせた割合
- ・学校での生活は楽しい……………90%
 - ・勉強が好き……………42%
 - ・学校では落ち着いて勉強できている……………80%
 - ・なにか困ったことがあったとき、先生に相談する……………42%
- 友だち関係への志向性
- ・友だちをつくることは大切……………96%
 - ・友だちといっしょにいる方がひとりであるより楽しい……………90%

生活習慣

- 朝食
- 週5～6回(毎日)とる……………94%
 - 週3～4回とる……………3%
 - 週1～2回とる……………2%
 - まったくとらない……………1%
- 読書をする時間
- 30分～1時間……………20%
 - 10分～30分……………40%
 - 10分より少ない……………17%
 - まったく読まない……………12%
- テレビやゲームなど自由に過ごす時間
- 3時間以上……………24%
 - 2時間～3時間……………22%
 - 1時間～2時間……………24%
 - 30分～1時間……………16%
- 家の手伝い
- 毎日……………28%
 - 週3～4回……………24%
 - 週1～2回……………26%
- 寝る時間
- 午後9～10時……………24%
 - 午後10～11時……………48%
 - 午後11～0時……………20%
 - 午前0～1時……………4%
- 世の中のいろいろなできごとを知ったり、情報を得たりするためにふだんやっていること
- テレビのニュース番組を見る……………87%
 - 親の話聞く……………49%
 - 友人の話聞く……………42%

学習動機

- はい・どちらかといえぬを合わせた割合
- 学校での勉強は、大人になってから役に立つと思う……………89%
- 大人になってから、かなえてみたいゆめ(仕事)がある
- ぜひやってみたい仕事がある……………54%
 - 何となくやってみたい仕事がある……………29%

学習活動

- 授業の中で分からないことがあったとき、どうすることが多いか
- 友人にたずねる……………78%
 - 親にたずねる……………56%
 - 自分で調べる……………42%
 - その場で先生にたずねる……………32%
- 学校の授業以外に1日どのくらい勉強するか
- ア 月曜日～金曜日
- 30分～1時間……………32%
 - 1時間～2時間……………33%
- イ 土・日曜日や休日
- 30分～1時間……………32%
 - 1時間～2時間……………23%
- 1週間のうち、何日塾に通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしているか
- していない……………69%
 - 2日……………15%
 - 1日、3日……………7%
- ふだん学校の授業以外でしている勉強
- 宿題があれば宿題をする……………94%
 - 復習をする……………47%
 - 試験があれば、それにそなえて勉強する……………41%
 - 予習をする……………39%



家族関係

- きょうだいの数(自分はそのく)
- 1人……………40%
 - 2人……………36%
 - 3人……………11%
- はい・どちらかといえぬを合わせた割合
- 家族といっしょにいる方がひとりであるより楽しい……………79%
- 家にいるとき、家族の人はあなたにどうしているか
- よくないことをすると、きびしくしかられる……………87%
 - よいことをすると、ほめられる……………59%
 - 「自分のことは自分でしなさい」とよくいわれる……………50%
 - 「勉強しなさい」とよくいわれる……………49%
 - 勉強についていわれることはない……………23%

地域社会における生活

- 部活動・社会体育や習い事などをどのくらいしているか
- まったくしていない……………27%
 - 週に1～2回……………21%
 - 週に3～4回……………18%
 - 週に5回以上……………34%
- 地域での行事や祭り、ボランティア活動などにどのくらい参加するか
- まったく参加しない……………17%
 - 年1回～半年に1回……………60%
 - 月1回～月2回……………22%
 - 週に1回以上……………2%

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(中学校第2学年) → 小学校第5学年 中学校第1学年

※数値は小数第一位で四捨五入している。

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(中学校第2学年)

学校生活

■学校適応 はい・どちらかといえぬまい を合わせた割合
 ・学校での生活は楽しい……………84%
 ・勉強が好き……………26%
 ・学校では落ち着いて勉強できている……………72%
 ・なにか困ったことがあったとき、先生に相談する……………28%

■友だち関係への志向性
 ・友だちをつくることは大切……………95%
 ・友だちといっしょにいる方がひとりであるより楽しい……………85%

生活習慣

■朝食
 週5～6回(毎日)とる……………93% 週3～4回とる……………4%
 週1～2回とる……………2% まったくとらない……………1%

■読書をする時間
 30分～1時間……………17% 10分～30分……………38%
 10分より少ない……………16% まったく読まない……………18%

■テレビやゲームなど自由に過ごす時間
 3時間以上……………29% 2時間～3時間……………25%
 1時間～2時間……………24% 30分～1時間……………13%

■家の手伝い
 毎日……………24% 週3～4回……………21% 週1～2回……………32%

■寝る時間
 午後9～10時……………10% 午後10～11時……………40%
 午後11～0時……………36% 午前0～1時……………10%

■世の中のいろいろなできごとを知ったり、情報を得たりするためにふだんやっていること
 テレビのニュース番組を見る……………87%
 友人の話を聞く……………49%
 親の話を聞く……………48%

学習動機

はい・どちらかといえぬまい を合わせた割合
 ■学校での勉強は、大人になってから役に立つと思う……………78%

■大人になってから、かなえてみたいゆめ(仕事)がある
 ぜひやってみたい仕事がある……………42%
 何となくやってみたい仕事がある……………35%

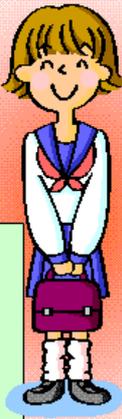
学習活動

■授業の中で分からないことがあったとき、どうすることが多いか
 友人にたずねる……………78%
 自分で調べる……………40%
 その場で先生にたずねる……………38%
 親にたずねる……………38%

■学校の授業以外に1日どのくらい勉強するか
 ア 月曜日から金曜日
 30分～1時間……………28%
 1時間～2時間……………32%
 イ 土・日曜日や休日
 30分～1時間……………28%
 1時間～2時間……………27%

■1週間のうち、何日塾に通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしているか
 していない……………62% 2日……………17%
 3日……………10%

■ふだん学校の授業以外でしている勉強
 宿題があれば宿題をする……………93%
 試験があれば、それにそなえて勉強する……………54%
 復習をする……………38%
 予習をする……………30%



家族関係

■きょうだいの数(自分はそのく)
 1人……………40% 2人……………38%
 3人……………10%

はい・どちらかといえぬまい を合わせた割合
 ■家族といっしょにいる方がひとりであるより楽しい……………89%

■家にいるとき、家族の人はあなたにどうしているか
 よくないことをすると、きびしくしられる……………63%
 「勉強しなさい」とよくいわれる……………54%
 よいことをすると、ほめられる……………52%
 「自分のことは自分でしなさい」とよくいわれる……………48%
 勉強についていわれることはない……………20%

地域社会における生活

■部活動・社会体育や習い事などをどのくらいしているか
 まったくしていない……………9%
 週に1～2回……………7%
 週に3～4回……………7%
 週に5回以上……………78%

■地域での行事や祭り、ボランティア活動などにどのくらい参加するか
 まったく参加しない……………26%
 年1回～半年に1回……………62%
 月1回～月2回……………11%
 週に1回以上……………1%

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

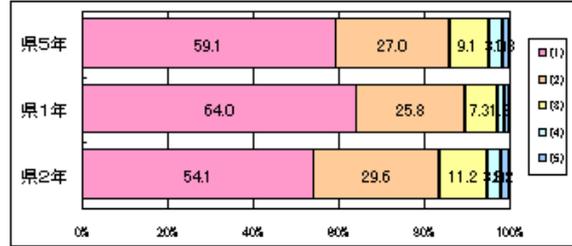
児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像

学校生活

学校適応

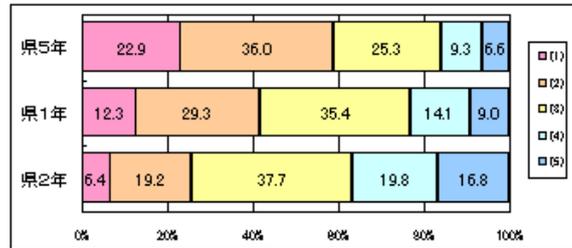
(1) 学校での生活は楽しいですか。

	県5年	県1年	県2年
(1) 楽しい	59.1	64.0	54.1
(2) どちらかといえば楽しい	27.0	25.8	29.6
(3) どちらでもない	9.1	7.3	11.2
(4) どちらかといえば楽しくない	3.0	1.8	3.0
(5) 楽しくない	1.8	1.1	2.2



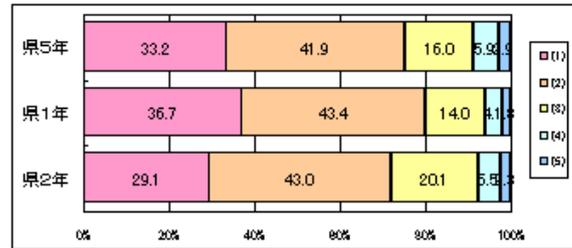
(2) 勉強が好きですか。

	県5年	県1年	県2年
(1) 好き	22.9	12.3	6.4
(2) どちらかといえば好き	36.0	29.3	19.2
(3) どちらでもない	25.3	35.4	37.7
(4) どちらかといえばきらい	9.3	14.1	19.8
(5) きらい	6.6	9.0	16.8



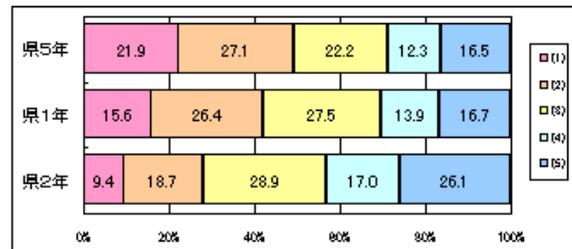
(5) あなたは学校では落ち着いて勉強することができますか。

	県5年	県1年	県2年
(1) できている	33.2	36.7	29.1
(2) どちらかといえばできている	41.9	43.4	43.0
(3) どちらでもない	16.0	14.0	20.1
(4) どちらかといえばできていない	5.9	4.1	5.5
(5) できていない	2.9	1.8	2.3



(6) なにか困ったことがあったとき、先生に相談しますか。

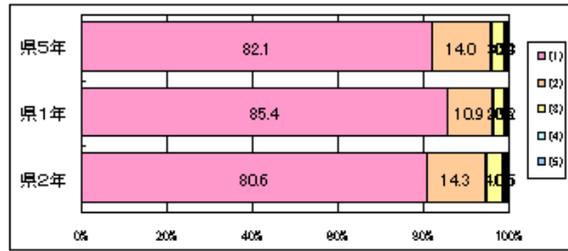
	県5年	県1年	県2年
(1) 相談する	21.9	15.6	9.4
(2) どちらかといえば相談する	27.1	26.4	18.7
(3) どちらでもない	22.2	27.5	28.9
(4) どちらかといえば相談しない	12.3	13.9	17.0
(5) 相談しない	16.5	16.7	26.1



友達関係への志向性

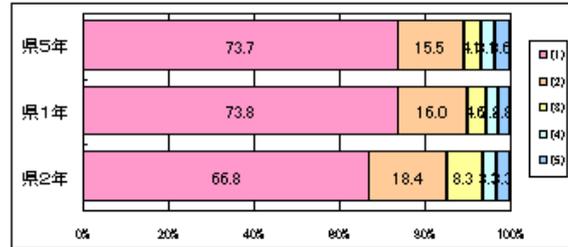
(3)あなたにとって、友だちをつくることは大切ですか。

	県5年	県1年	県2年
(1)大切だ	82.1	85.4	80.6
(2)どちらかといえば大切だ	14.0	10.9	14.3
(3)どちらでもない	3.2	2.9	4.0
(4)どちらかといえば大切でない	0.4	0.5	0.6
(5)大切でない	0.3	0.2	0.5



(4)友だちといっしょにいるほうが、ひとりであるより楽しいと思いませんか。

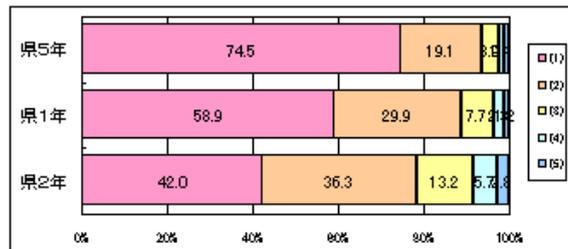
	県5年	県1年	県2年
(1)よくそう思う	73.7	73.8	66.8
(2)ときどきそう思う	15.5	16.0	18.4
(3)どちらでもない	4.1	4.6	8.3
(4)あまりそう思わない	3.1	2.8	3.3
(5)まったくそう思わない	3.6	2.8	3.3



学習動機

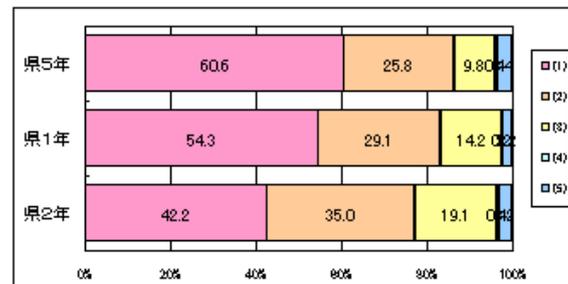
(4)学校での勉強は、大人になってから役に立つと思いませんか。

	県5年	県1年	県2年
(1)そう思う	74.5	58.9	42.0
(2)どちらかといえばそう思う	19.1	29.9	36.3
(3)どちらでもない	3.9	7.7	13.2
(4)どちらかといえばそう思わない	1.4	2.3	5.7
(5)そう思わない	1.1	1.2	2.8



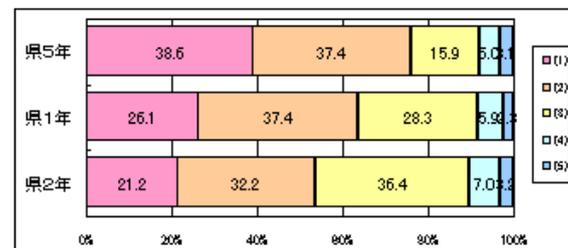
(43)あなたには、大人になってから、やってみたい仕事がありますか。

	県5年	県1年	県2年
(1)ぜひやってみたい仕事がある	60.6	54.3	42.2
(2)まだはっきりしていないが、何とかやってみたい仕事がある	25.8	29.1	35.0
(3)今はやってみたい仕事が見つからない	9.8	14.2	19.1
(4)大人になっても、仕事はしたくない	0.4	0.2	0.4
(5)仕事のことを考えたことがない	3.4	2.2	3.2



(44)[(43)で1または2と答えた人のみ] その仕事は、あなたが大人になったら、できるようになると思いませんか。

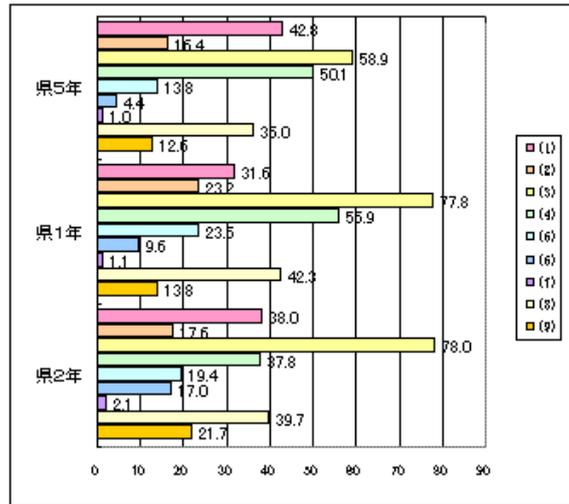
	県5年	県1年	県2年
(1)そう思う	38.6	26.1	21.2
(2)どちらかといえばそう思う	37.4	37.4	32.2
(3)どちらでもない	15.9	28.3	36.4
(4)どちらかといえばそう思わない	5.0	5.9	7.0
(5)そう思わない	3.1	2.3	3.2



学習活動

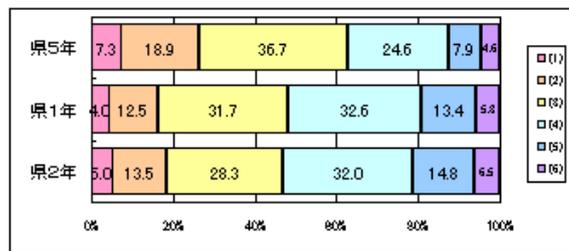
(7) 授業の中で分からないことがあったら、どうすることが多いですか。(複数回答)

	県5年	県1年	県2年
(1) その場で先生にたずねる	42.8	31.6	38.0
(2) 授業が終わってから先生にたずねに行く	16.4	23.2	17.6
(3) 友人にたずねる	58.9	77.8	78.0
(4) 親にたずねる	50.1	55.9	37.8
(5) きょうだいにたずねる	13.8	23.6	19.4
(6) じゅくの先生にたずねる	4.4	9.6	17.0
(7) 家庭教師の先生にたずねる	1.0	1.1	2.1
(8) 自分で調べる	36.0	42.3	39.7
(9) そのままにしておく	12.6	13.8	21.7



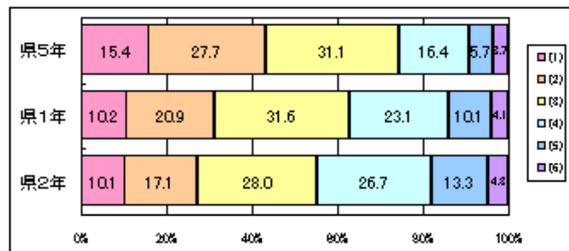
(8) ア学校の授業以外に、あなたは1日にどのくらい勉強しますか。(じゅくの先生との勉強時間もふくみます。) ア 月曜日から金曜日

	県5年	県1年	県2年
(1) まったくしない	7.3	4.0	5.0
(2) 30分より少ない	18.9	12.5	13.5
(3) 30分以上、1時間より少ない	36.7	31.7	28.3
(4) 1時間以上、2時間より少ない	24.6	32.6	32.0
(5) 2時間以上、3時間より少ない	7.9	13.4	14.8
(6) 3時間以上	4.6	5.8	6.5



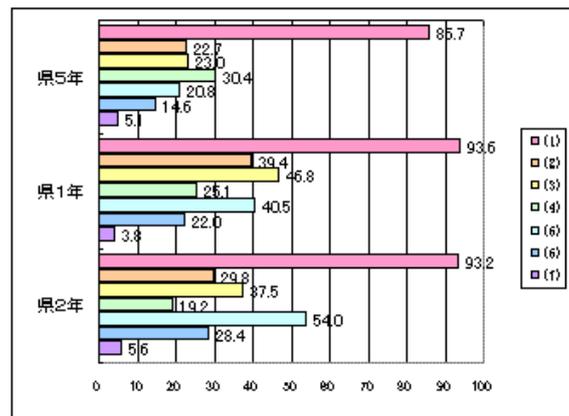
(8) イ学校の授業以外に、あなたは1日にどのくらい勉強しますか。(じゅくの先生との勉強時間もふくみます。) イ 土・日曜日や休日

	県5年	県1年	県2年
(1) まったくしない	15.4	10.2	10.1
(2) 30分より少ない	27.7	20.9	17.1
(3) 30分以上、1時間より少ない	31.1	31.6	28.0
(4) 1時間以上、2時間より少ない	16.4	23.1	26.7
(5) 2時間以上、3時間より少ない	5.7	10.1	13.3
(6) 3時間以上	3.7	4.1	4.8



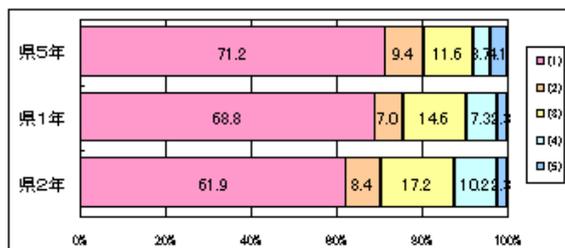
(9) ふたん学校の授業以外で、あなたがしている勉強は、次のうちどれに近いですか。(複数回答)

	県5年	県1年	県2年
(1) 宿題があれば宿題をする	85.7	93.6	93.2
(2) 予習(前もって学習しておくこと)をする	22.7	39.4	29.8
(3) 復習をする	23.0	46.8	37.5
(4) 興味があることについて自分で調べたり、たしかめたりする	30.4	25.1	19.2
(5) 試験があれば、それにそなえて勉強する	20.8	40.5	54.0
(6) じゅくや家庭教師の先生と勉強する	14.6	22.0	28.4
(7) まったくしない	5.1	3.8	5.6



(1)1週間のうち、何日じゅくに通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしていますか。(習い事はのぞきます)

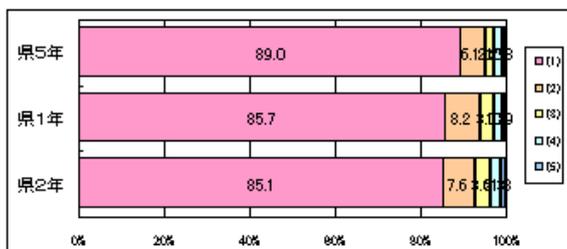
	県5年	県1年	県2年
(1)していない	71.2	68.8	61.9
(2)1日	9.4	7.0	8.4
(3)2日	11.6	14.6	17.2
(4)3日	3.7	7.3	10.2
(5)4日以上	4.1	2.3	2.3



生活習慣

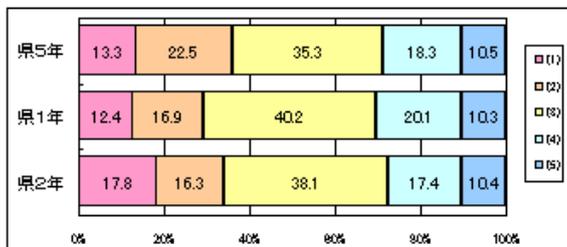
③5朝食をとりますか。

	県5年	県1年	県2年
(1)毎日とる	89.0	85.7	85.1
(2)週に5～6回とる	6.1	8.2	7.6
(3)週に3～4回とる	2.2	3.3	3.6
(4)週に1～2回とる	1.9	1.8	2.3
(5)まったくとらない	0.8	0.9	1.3



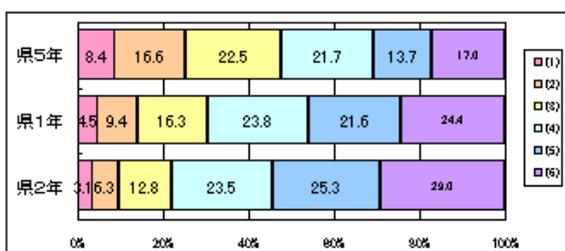
③6学校の授業以外に読書をする時間は、まんがや雑誌をのぞくと、1日にどのくらいになりますか。朝読書や昼休みの読書など学校内での読書もふくみます。土曜日、日曜日はのぞいてください。

	県5年	県1年	県2年
(1)まったく読まない	13.3	12.4	17.8
(2)10分より少ない	22.5	16.9	16.3
(3)10分以上、30分より少ない	35.3	40.2	38.1
(4)30分以上、1時間より少ない	18.3	20.1	17.4
(5)1時間以上	10.5	10.3	10.4



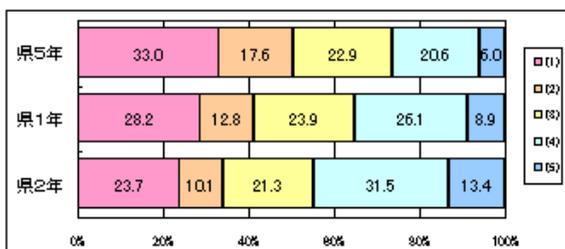
③7テレビやゲームなど、学校から帰ったあとと自由に過ごす時間は、読書の時間をのぞくと、1日にどのくらいになりますか。

	県5年	県1年	県2年
(1)まったくない	8.4	4.5	3.1
(2)30分より少ない	16.6	9.4	6.3
(3)30分以上、1時間より少ない	22.5	16.3	12.8
(4)1時間以上、2時間より少ない	21.7	23.8	23.5
(5)2時間以上、3時間より少ない	13.7	21.6	25.3
(6)3時間以上	17.0	24.4	29.0



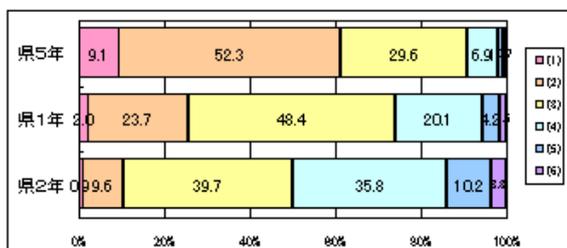
③8家の手伝いをどのくらいしていますか。

	県5年	県1年	県2年
(1)毎日している	33.0	28.2	23.7
(2)週に5～6日	17.6	12.8	10.1
(3)週に3～4日	22.9	23.9	21.3
(4)週に1～2日	20.6	26.1	31.5
(5)まったくしていない	6.0	8.9	13.4



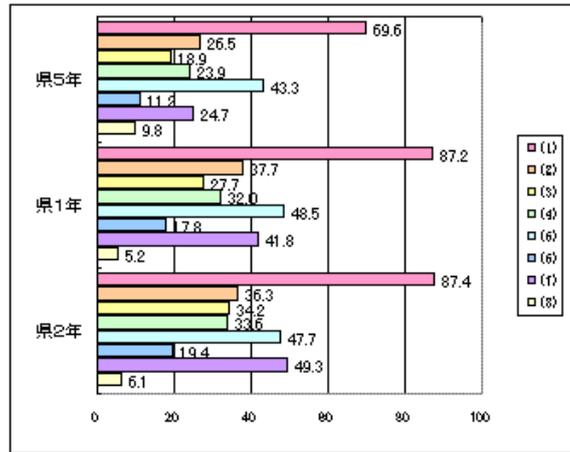
③9夜は何時くらいに寝ますか。

	県5年	県1年	県2年
(1)午後9時より前	9.1	2.0	0.9
(2)午後9時～10時までの間	52.3	23.7	9.6
(3)午後10時～11時までの間	29.6	48.4	39.7
(4)午後11時～0時までの間	6.9	20.1	35.8
(5)午前0時～1時の間	1.4	4.2	10.2
(6)午前1時より後	0.7	1.5	3.8



(10)世の中のいろいろなできごとを知ったり、情報を得たりするため、ふだん、行っていることは何ですか。(複数回答)

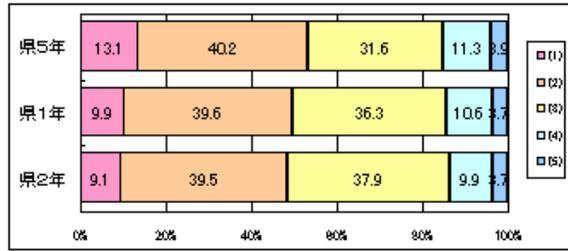
	県5年	県1年	県2年
(1)テレビのニュース番組を見る	69.6	87.2	87.4
(2)新聞を読む	26.5	37.7	36.3
(3)インターネットを利用する	18.9	27.7	34.2
(4)本や雑誌を読む	23.9	32.0	33.6
(5)親の話を開く	43.3	48.5	47.7
(6)きょうたいから話を開く	11.2	17.8	19.4
(7)友人の話を開く	24.7	41.8	49.3
(8)とくに何もしない	9.8	5.2	6.1



家族関係

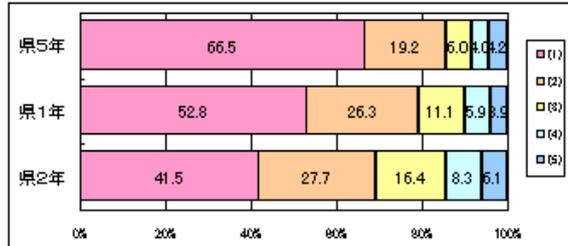
Q4)あなたには何人のきょうだいがありますか。(あなたはふくめません。)

	県5年	県1年	県2年
(1)0人	13.1	9.9	9.1
(2)1人	40.2	39.6	39.5
(3)2人	31.6	36.3	37.9
(4)3人	11.3	10.6	9.9
(5)4人以上	3.9	3.7	3.7



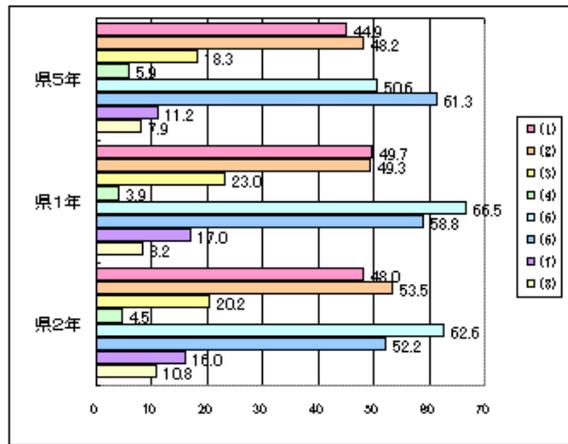
Q42)家の人といっしょにいるほうが、ひとりであるより楽しいと思えますか。

	県5年	県1年	県2年
(1)よくそう思う	66.5	52.8	41.5
(2)ときどきそう思う	19.2	26.3	27.7
(3)どちらでもない	6.0	11.1	16.4
(4)あまりそう思わない	4.0	5.9	8.3
(5)まったくそう思わない	4.2	3.9	6.1



Q40)日ごろ、家の人はあなたにどうしていますか。(複数回答)

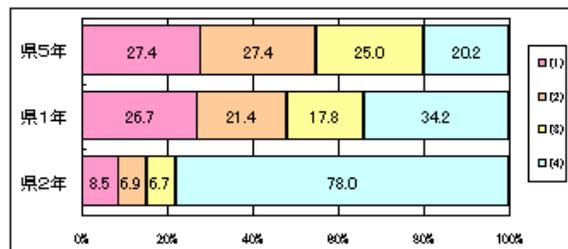
	県5年	県1年	県2年
(1)「自分のことは自分でしなさい」とよくいわれる	44.9	49.7	48.0
(2)「勉強しなさい」とよくいわれる	48.2	49.3	53.5
(3)勉強についていわれることはない	18.3	23.0	20.2
(4)自分にかまうことはほとんどない	5.9	3.9	4.5
(5)よくないことをすると、きびしくかられる	50.6	66.5	62.6
(6)よいことをすると、ほめられる	61.3	58.8	52.2
(7)「あなたが好きなようにしなさい」とよくいわれる	11.2	17.0	16.0
(8)家族の人の考えを自分に押しつけられる	7.9	8.2	10.8



地域社会における生活

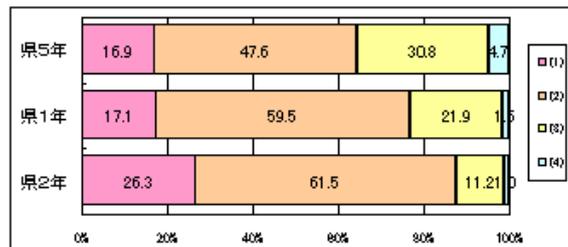
Q45)部活動、社会体育、習い事などをどのくらいしていますか。じゅくや家庭教師の先生と勉強する回数はのぞきます。

	県5年	県1年	県2年
(1)まったくしていない	27.4	26.7	8.5
(2)週に1~2回	27.4	21.4	6.9
(3)週に3~4回	25.0	17.8	6.7
(4)週に5回以上	20.2	34.2	78.0



Q46)地域での行事や祭り、ボランティア活動や体験教室などにどのくらい参加しますか。

	県5年	県1年	県2年
(1)まったく参加しない	16.9	17.1	26.3
(2)年に1回~半年に1回くらい	47.6	59.5	61.5
(3)月に1回~月に2回くらい	30.8	21.9	11.2
(4)週に1回以上	4.7	1.5	1.0



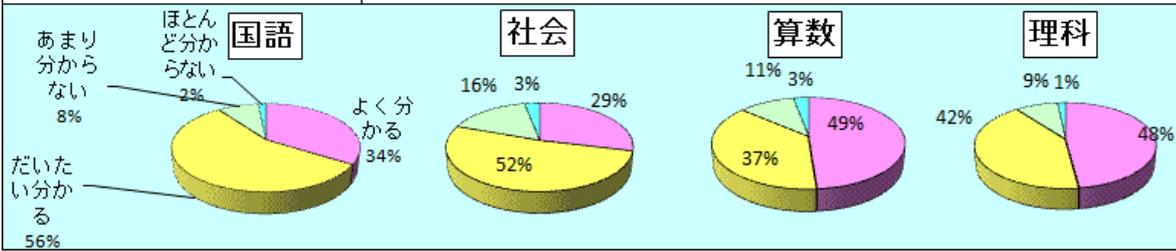
平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もじ > II 調査結果の概要

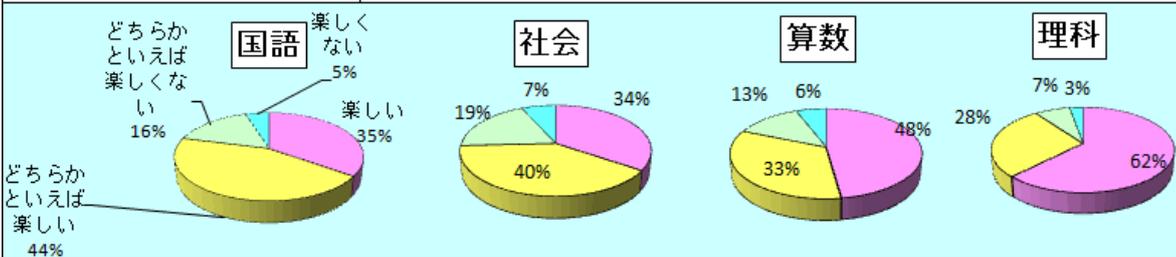
児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(小学校第5学年) → 中学校第1学年 中学校第2学年

※数値は小数第一位で四捨五入している。

各教科の理解度についての自己評価 ※円グラフの数値は自動的に100%になるように調整してある。



各教科の楽しさについての自己評価 ※円グラフの数値は自動的に100%になるように調整してある。



各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての興味・関心・意欲・態度

<p>国語</p> <p>自分が考えたことや調べたことを発表することは楽しい67%</p> <p>自分の思いや考えを文章に書こうと努力している70%</p> <p>自分から進んで本を読んでいる80%</p> <p>新しい漢字の読みや書きを身に付けようとして努力している83%</p> <p>ふだんの生活の中で、ことばのきまりやことばのマナーに気を付けている77%</p>	<p>社会</p> <p>自分が考えたことや調べたことを発表することは楽しい64%</p> <p>調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しい71%</p> <p>新聞やテレビのニュースなどに出てくる国内外のできごとや事件などに興味・関心がある76%</p> <p>工場や遺跡の見学、博物館や郷土資料館など学校の外に出て勉強することは好き91%</p> <p>疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べている59%</p>		<p>算数</p> <p>いろいろな考え方を発表し合うのは楽しい74%</p> <p>問題を解くとき、おはじきや模型などを使ったり、図や表を書いたりして調べている71%</p> <p>新しい内容や考え方などを勉強したら、自分の身の周りの場面などにあてはめてみたり、使ってみたりしている71%</p>	<p>理科</p> <p>いろいろな考え方を発表し合うのは楽しい79%</p> <p>観察や実験をすることは好き94%</p> <p>疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べている66%</p>
---	--	--	---	--

※ 図中の数値は「楽しい」「興味がある」「・・している」と回答した割合と「どちらかといえば○○○」と回答した割合を合わせた数値である。

最終更新日: 2009-07-17

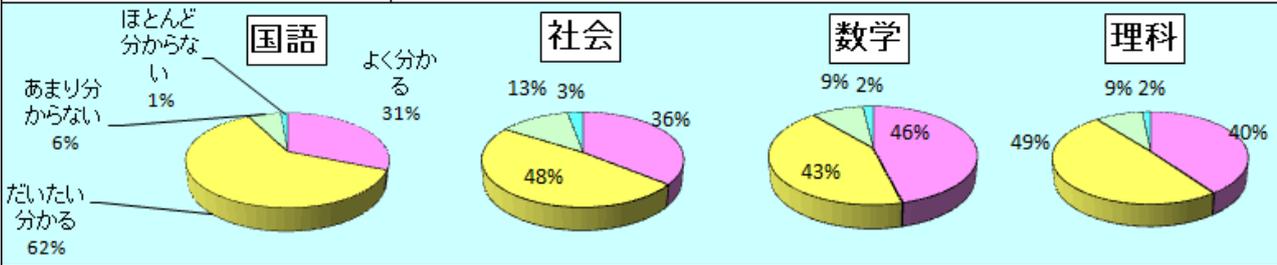
平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

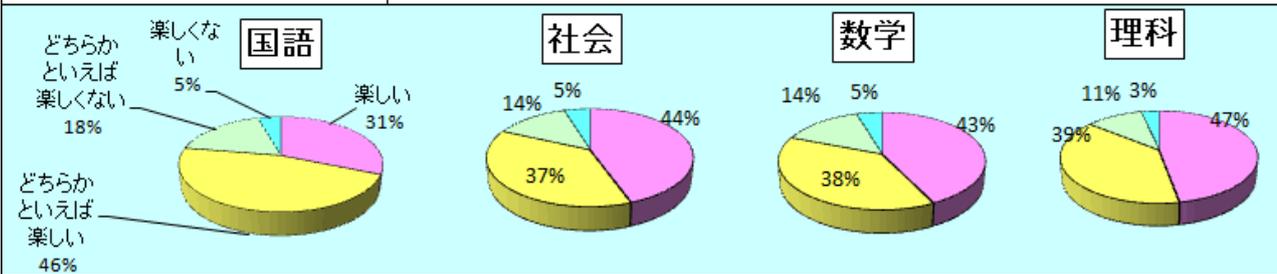
児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(中学校第1学年) → 小学校第5学年 中学校第2学年

※数値は小数第一位で四捨五入している。

各教科の理解度についての自己評価 ※円グラフの数値は自動的に100%になるように調整してある。



各教科の楽しさについての自己評価 ※円グラフの数値は自動的に100%になるように調整してある。



各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての興味・関心・意欲・態度

国語	社会	数学	理科
自分が考えたことや調べたことを発表することは楽しい 41%	自分が考えたことや調べたことを発表することは楽しい 61%	いろいろな考え方を発表し合うのは楽しい 67%	いろいろな考え方を発表し合うのは楽しい 71%
自分の思いや考えを文章に書こうと努力している 67%	調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しい 67%	問題の解き方が分からないとき※円グラフの数値は自動的に0%になるように調整してある。は、あきらめずにいろいろな方法で考えている 85%	問題を解決するために、観察や実験を計画し、実施することは好き 87%
新しい漢字の読み方や書き方を身に付けようとして努力している 86%	新聞やテレビのニュースなどに出てくる国内外のできごとや事件などに興味・関心がある 52%	問題を解くとき、ノートやプリントに図や表をかいたり、模型などの具体物を使ったりして調べている 74%	観察や実験を行ったあと、考察やまとめを行うようにしている 79%
ことばのきまりを意識して、ふだんから生活している 73%	博物館や図書館、郷土資料館など学校の外に出て勉強することは好き 79%	新しい内容や考え方などを勉強したら、自分の身の周りの場面などにあてはめてみたり、使ってみたりしている 59%	疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べている 57%



※ 図中の数値は「楽しい」「興味がある」「・・・している」と回答した割合と「どちらかといえば○○○」と回答した割合を合わせた数値である。

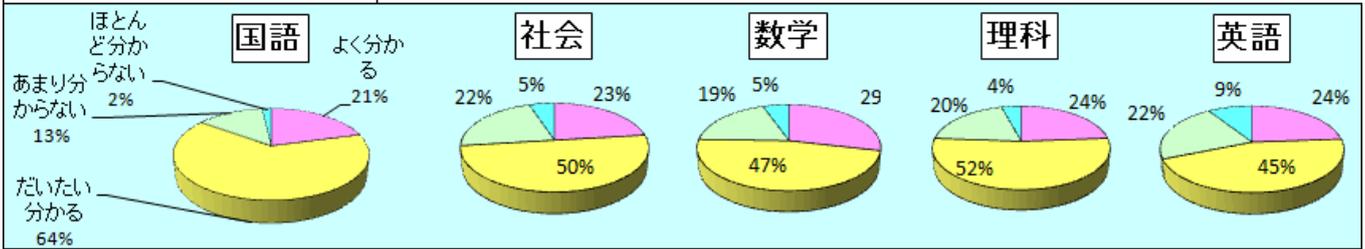
平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

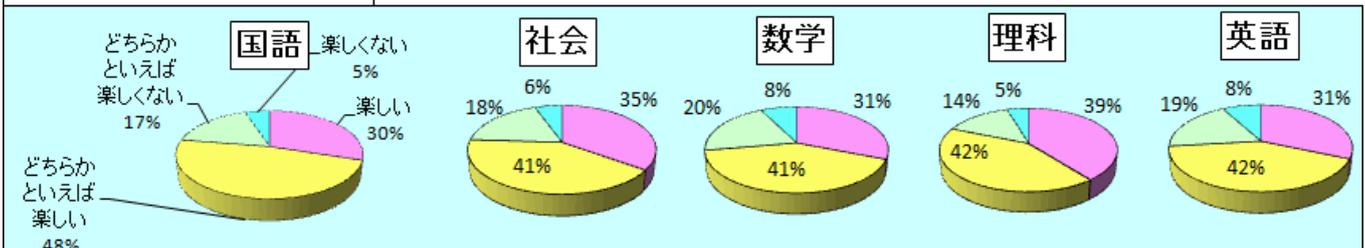
児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(中学校第2学年) → 小学校第5学年 中学校第1学年

※数値は小数第一位で四捨五入している。

各教科の理解度についての自己評価 ※円グラフの数値は自動的に100%になるように調整してある。



各教科の楽しさについての自己評価 ※円グラフの数値は自動的に100%になるように調整してある。



各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての興味・関心・意欲・態度

国語	社会	数学	理科	英語
自分が考えたことや調べたことを発表することは楽しい 35%	自分が考えたことや調べたことを発表することは楽しい 51%	いろいろな考え方を発表し合うのは楽しい 60%	いろいろな考え方を発表し合うのは楽しい 66%	英語を聞いたり、話したりするのは楽しい 69%
自分の思いや考えを文章に書こうと努力している 60%	調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しい 60%	問題の解き方が分からないとき※円グラフの数値は自動的に0%になるように調整してある。は、あきらめずにいろいろな方法で考えている 78%	問題を解決するために、観察や実験を計画し、実施することは好き 87%	英語を使って、手紙や日記、e-mailなどを書くことに興味がある 43%
新しい漢字の読み方や書き方を身に付けようとして努力している 77%	新聞やテレビのニュースなどに出てくる国内外のできごとや事件などに興味・関心がある 48%	問題を解くとき、ノートやプリントに図や表をかいたり、模型などの具体物を使ったりして調べている 65%	観察や実験を行ったあと、考察やまとめを行うようにしている 81%	ALTの先生とコミュニケーションをとることは好き 67%
ことばのきまりを意識して、ふだんから生活している 64%	博物館や図書館、郷土資料館など学校の外に出て勉強することは好き 74%	新しい内容や考え方などを勉強したら、自分の身の周りの場面などにあてはめてみたり、使ってみたりしている 43%	疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べている 47%	

※図中の数値は「楽しい」「興味がある」「・・・している」と回答した割合と「どちらかといえば○○○」と回答した割合を合わせた数値である。

最終更新日: 2009-07-17

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

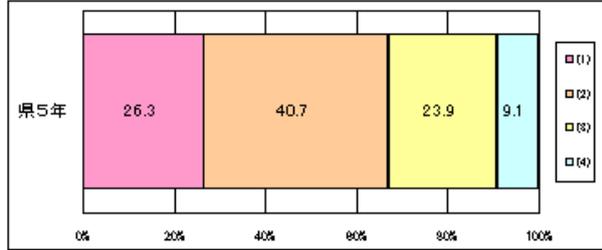
児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(小学校第5学年)

※数値は小数第一位で四捨五入している。

国語

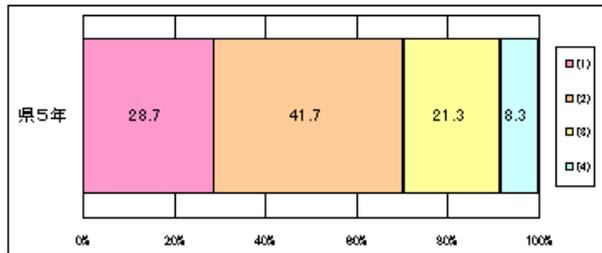
(14)国語の時間に、自分が考えたことや調べたことを発表することは楽しいですか。

	県5年
(1)楽しい	26.3
(2)どちらかといえば楽しい	40.7
(3)どちらかといえば楽しくない	23.9
(4)楽しくない	9.1



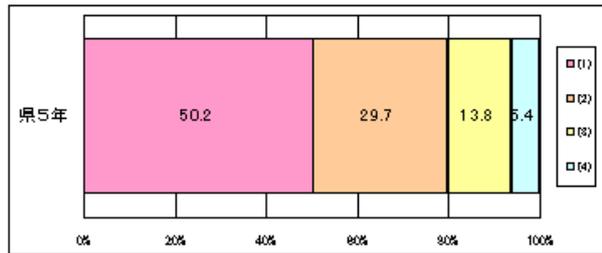
(15)自分が思ったことや考えたことを文章に書こうと努力していますか。

	県5年
(1)そうしている	28.7
(2)どちらかといえばそうしている	41.7
(3)どちらかといえばそうしてはいない	21.3
(4)そうしてはいない	8.3



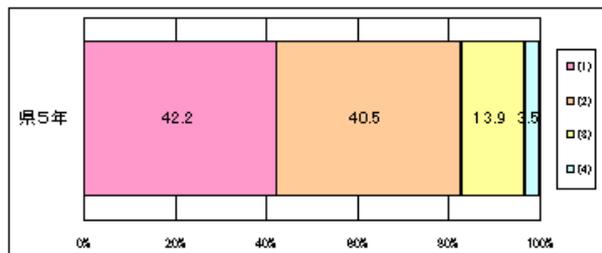
(16)自分から進んで本を読んでいますか。

	県5年
(1)そうしている	50.2
(2)どちらかといえばそうしている	29.7
(3)どちらかといえばそうしてはいない	13.8
(4)そうしてはいない	6.4



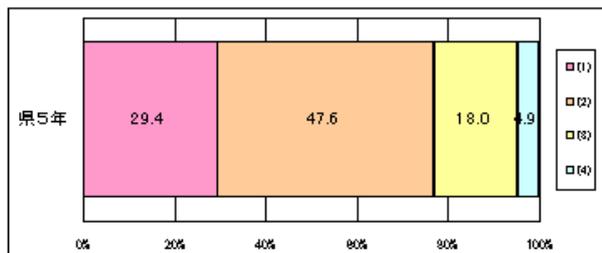
(17)習った漢字を自分で文章を書くときに使うようにしていますか。

	県5年
(1)そうしている	42.2
(2)どちらかといえばそうしている	40.5
(3)どちらかといえばそうしてはいない	13.9
(4)そうしてはいない	3.5



(18)ふだんの生活の中で、ことばのきまりやことばのマナーに気をつけていますか。

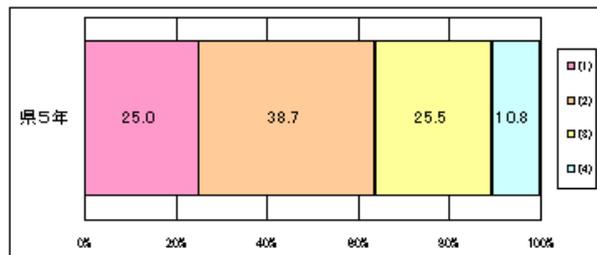
	県5年
(1)そうしている	29.4
(2)どちらかといえばそうしている	47.6
(3)どちらかといえばそうしてはいない	18.0
(4)そうしてはいない	4.9



社会

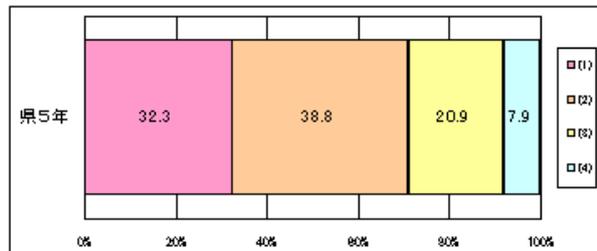
(19)社会の時間に、自分が考えたことや調べたことをまとめて発表することは楽しいですか。

	県5年
(1)楽しい	25.0
(2)どちらかといえば楽しい	38.7
(3)どちらかといえば楽しくない	25.5
(4)楽しくない	10.8



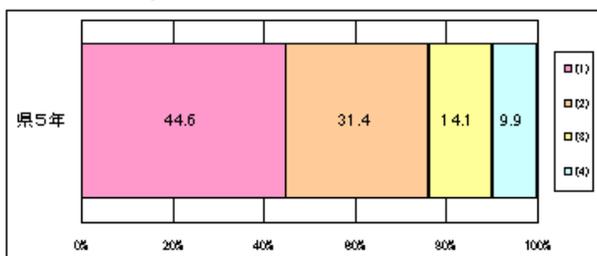
(20)社会の時間に、調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しいですか。

	県5年
(1)楽しい	32.3
(2)どちらかといえば楽しい	38.8
(3)どちらかといえば楽しくない	20.9
(4)楽しくない	7.9



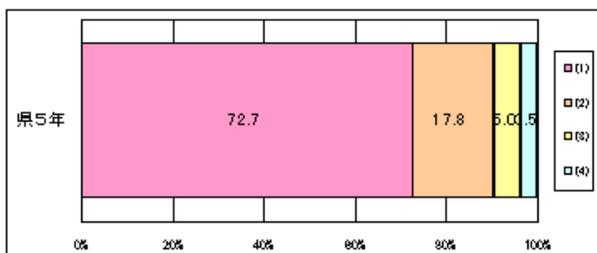
(21)新聞やテレビのニュースなどに出てくる国内外のできごとや事件などに興味・関心がありますか。

	県5年
(1)ある	44.6
(2)どちらかといえばある	31.4
(3)どちらかといえばない	14.1
(4)ない	9.9



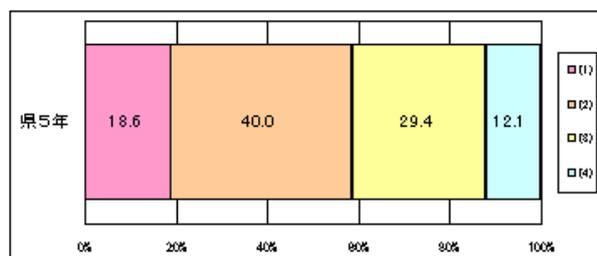
(22)工場や遺跡の見学、博物館や郷土資料館など学校の外に出て勉強することは好きですか。

	県5年
(1)好き	72.7
(2)どちらかといえば好き	17.8
(3)どちらかといえば好きではない	6.0
(4)好きではない	3.5



(23)社会の勉強に関することで、疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べていますか。

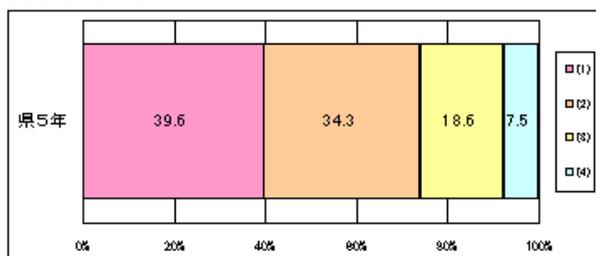
	県5年
(1)そうしている	18.6
(2)どちらかといえばそうしている	40.0
(3)どちらかといえばそうしていない	29.4
(4)そうしていない	12.1



算数

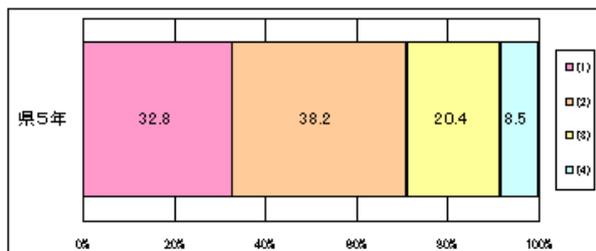
⑭算数の時間に、いろいろな考え方を発表し合うのは楽しいですか。

	県5年
(1)楽しい	39.6
(2)どちらかといえば楽しい	34.3
(3)どちらかといえば楽しくない	18.6
(4)楽しくない	7.5



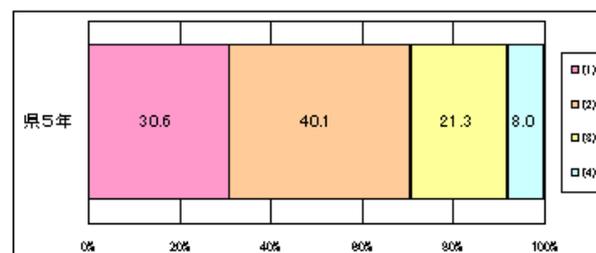
⑮算数の時間に、問題を解くとき、おまじぎや模型を使ったり、ノートやプリントに絵や図、表をかいたりして調べていますか。

	県5年
(1)そうしている	32.8
(2)どちらかといえばそうしている	38.2
(3)どちらかといえばそうしていない	20.4
(4)そうしていない	8.5



⑯算数の時間に、新しい内容や考え方などを勉強したら、自分の身の周りの場面などにあてはめてみたり使ってみたりしていますか。

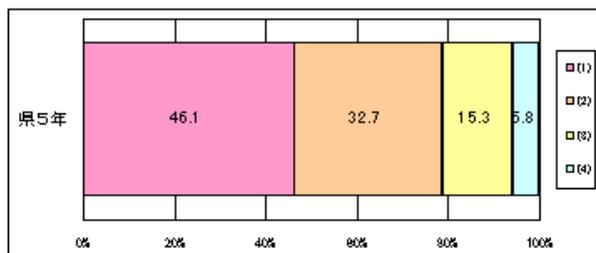
	県5年
(1)そうしている	30.6
(2)どちらかといえばそうしている	40.1
(3)どちらかといえばそうしていない	21.3
(4)そうしていない	8.0



理科

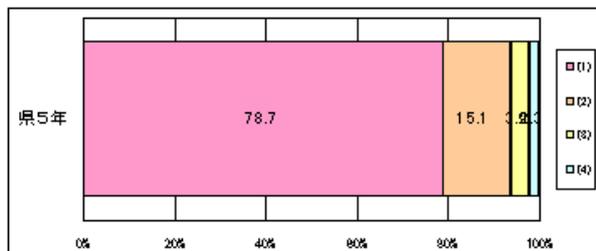
②7)理科の時間に、いろいろな考え方を発表し合うのは楽しいですか。

	県5年
(1)楽しい	46.1
(2)どちらかといえば楽しい	32.7
(3)どちらかといえば楽しくない	15.3
(4)楽しくない	5.8



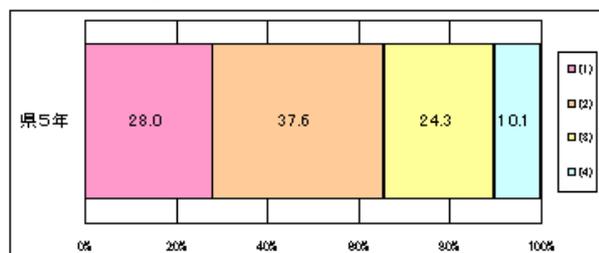
②8)理科の時間に、観察や実験をすることは好きですか。

	県5年
(1)好き	78.7
(2)どちらかといえば好き	15.1
(3)どちらかといえば好きではない	3.9
(4)好きではない	2.3



②9)理科の勉強に関することで、疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べていますか。

	県5年
(1)そうしている	28.0
(2)どちらかといえばそうしている	37.6
(3)どちらかといえばそうしていない	24.3
(4)そうしていない	10.1



最終更新日： 2009-07-17

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

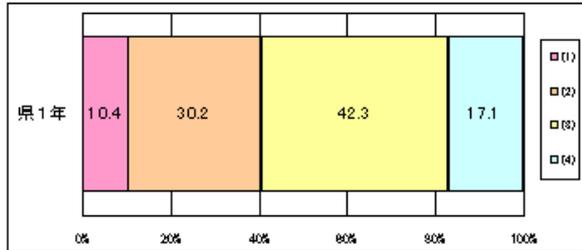
Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(中学校第1学年)

国語

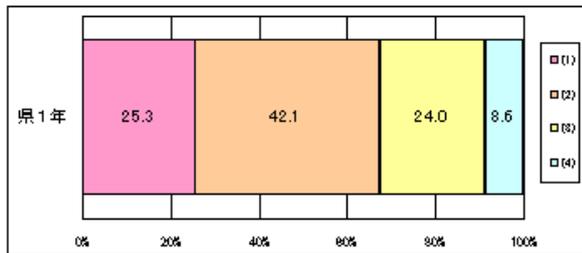
(14)国語の時間に、自分が考えたことや調べたことを積極的に発表していますか。

	県1年
(1)そうしている	10.4
(2)どちらかといえばそうしている	30.2
(3)どちらかといえばそうしてはいない	42.3
(4)そうしてはいない	17.1



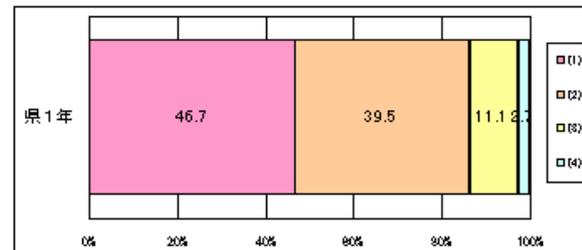
(15)自分の思いや考えを文章に書こうと努力していますか。

	県1年
(1)そうしている	25.3
(2)どちらかといえばそうしている	42.1
(3)どちらかといえばそうしてはいない	24.0
(4)そうしてはいない	8.6



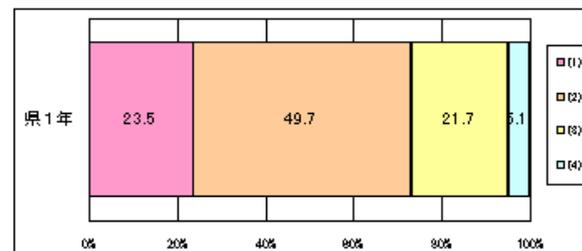
(16)新しい漢字の読み方や書き方を身につけるように努力していますか。

	県1年
(1)そうしている	46.7
(2)どちらかといえばそうしている	39.5
(3)どちらかといえばそうしてはいない	11.1
(4)そうしてはいない	2.7



(17)ことばのきまりを意識して、ふだんから生活していますか。

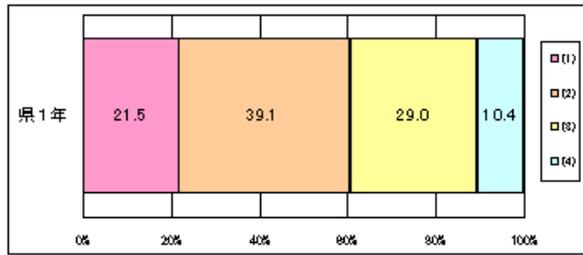
	県1年
(1)そうしている	23.5
(2)どちらかといえばそうしている	49.7
(3)どちらかといえばそうしてはいない	21.7
(4)そうしてはいない	5.1



社会

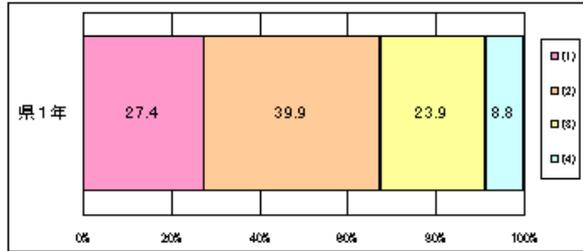
(18)社会の時間に、自分が考えたことや調べたことをまとめて発表することは楽しいですか。

	県1年
(1)楽しい	21.5
(2)どちらかといえば楽しい	39.1
(3)どちらかといえば楽しくない	29.0
(4)楽しくない	10.4



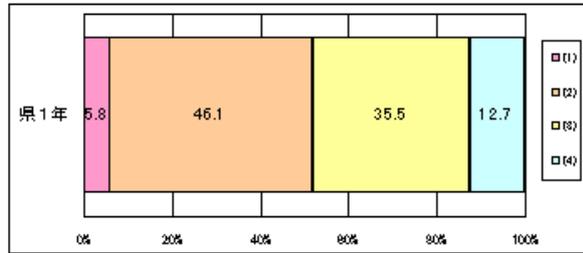
(19)社会の時間に、調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しいですか。

	県1年
(1)楽しい	27.4
(2)どちらかといえば楽しい	39.9
(3)どちらかといえば楽しくない	23.9
(4)楽しくない	8.8



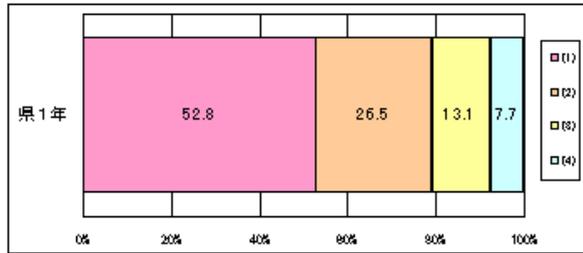
(20)新聞やテレビのニュースなどに出てくる国内外のできごとや事件などに興味・関心がありますか。

	県1年
(1)ある	5.8
(2)どちらかといえばある	46.1
(3)どちらかといえばない	35.5
(4)ない	12.7



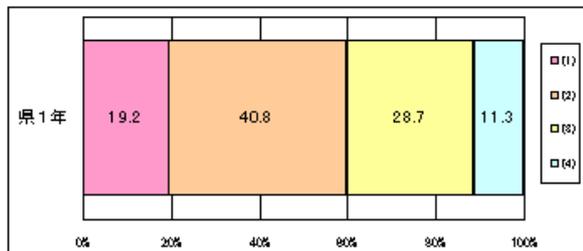
(21)博物館や図書館、郷土資料館など学校の外に出て勉強することは好きですか。

	県1年
(1)好き	52.8
(2)どちらかといえば好き	26.5
(3)どちらかといえば好きではない	13.1
(4)好きではない	7.7



(22)社会の勉強に関することで、疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べていますか。

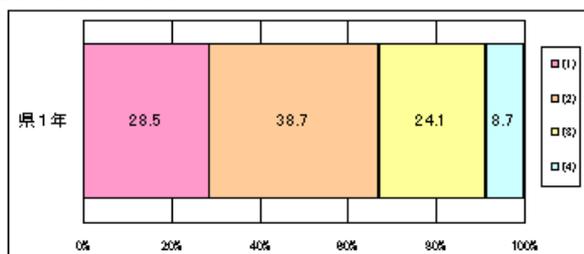
	県1年
(1)そうしている	19.2
(2)どちらかといえばそうしている	40.8
(3)どちらかといえばそうしていません	28.7
(4)そうしていません	11.3



数学

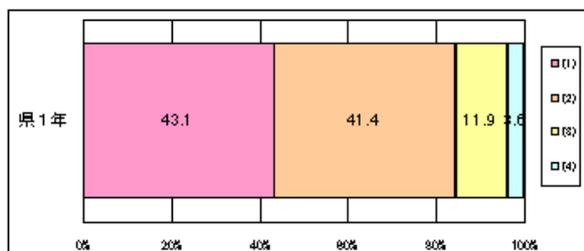
②3)数学の時間に、いろいろな考え方を発表し合うのは楽しいですか。

	県1年
(1)楽しい	28.5
(2)どちらかといえば楽しい	38.7
(3)どちらかといえば楽しくない	24.1
(4)楽しくない	8.7



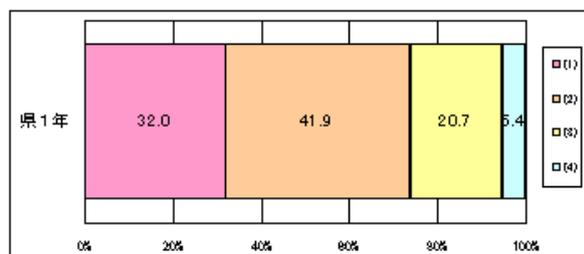
②4)数学の時間に、問題の解き方が分からないときは、あきらめずいろいろな方法を考えていますか。

	県1年
(1)そうしている	43.1
(2)どちらかといえばそうしている	41.4
(3)どちらかといえばそうしていない	11.9
(4)そうしていない	3.6



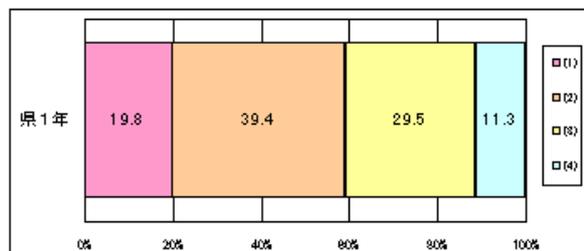
②5)数学の時間に、問題を解くとき、ノートやプリントに図や表を書いたり、模型などの具体物を使ったりして調べていますか。

	県1年
(1)そうしている	32.0
(2)どちらかといえばそうしている	41.9
(3)どちらかといえばそうしていない	20.7
(4)そうしていない	5.4



②6)数学の時間に、新しい内容や考え方などを勉強したら、自分の身の周りの場面などにあてはめてみたり、使ってみたりしていますか。

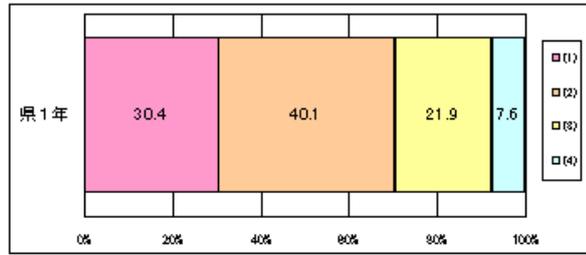
	県1年
(1)そうしている	19.8
(2)どちらかといえばそうしている	39.4
(3)どちらかといえばそうしていない	29.5
(4)そうしていない	11.3



理科

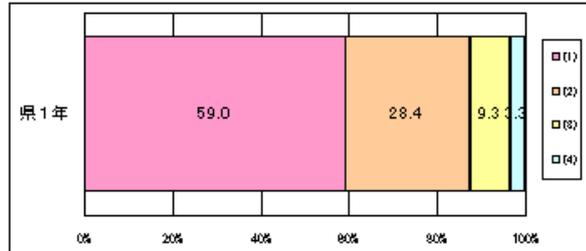
⑳理科の時間に、いろいろな考え方を発表し合うのは楽しいですか。

	県1年
(1)楽しい	30.4
(2)どちらかといえば楽しい	40.1
(3)どちらかといえば楽しくない	21.9
(4)楽しくない	7.6



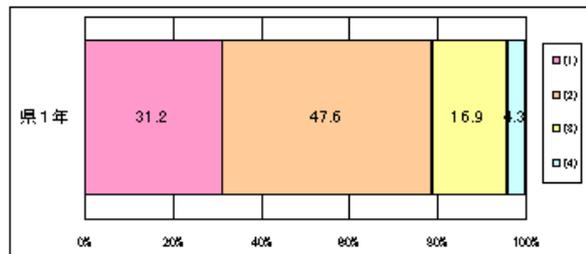
㉑理科の時間に、問題を解決するために、観察や実験を計画し、実施することは好きですか。

	県1年
(1)好き	59.0
(2)どちらかといえば好き	28.4
(3)どちらかといえば好きではない	9.3
(4)好きではない	3.3



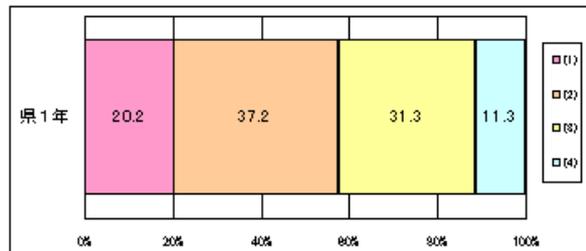
㉒理科の時間に、観察や実験を行ったあと、考察やまとめを行うようにしていますか。

	県1年
(1)そうしている	31.2
(2)どちらかといえばそうしている	47.6
(3)どちらかといえばそうしていない	16.9
(4)そうしていない	4.3



㉓理科の勉強に関する事で、疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べていますか。

	県1年
(1)そうしている	20.2
(2)どちらかといえばそうしている	37.2
(3)どちらかといえばそうしていない	31.3
(4)そうしていない	11.3



最終更新日： 2009-07-17

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

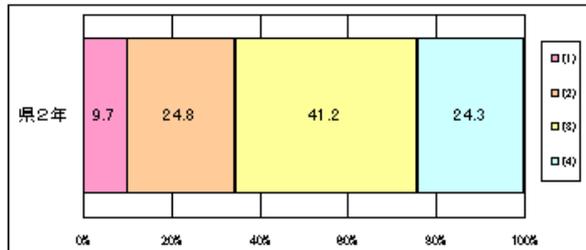
Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(中学校第2学年)

国語

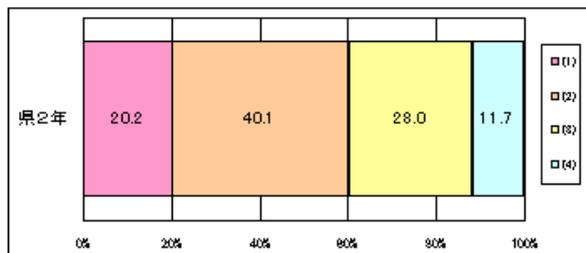
(14)国語の時間に、自分が考えたことや調べたことを積極的に発表していますか。

	県2年
(1)そうしている	9.7
(2)どちらかといえばそうしている	24.8
(3)どちらかといえばそうしていない	41.2
(4)そうしていない	24.3



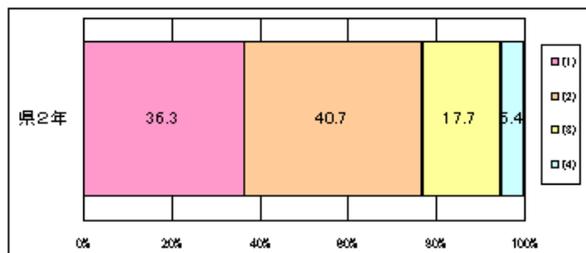
(15)自分の思いや考えを文章に書こうと努力していますか。

	県2年
(1)そうしている	20.2
(2)どちらかといえばそうしている	40.1
(3)どちらかといえばそうしていない	28.0
(4)そうしていない	11.7



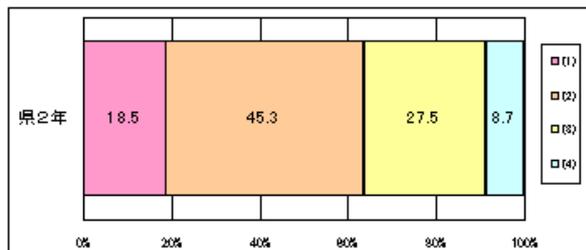
(16)新しい漢字の読み方や書き方を身につけるように努力していますか。

	県2年
(1)そうしている	36.3
(2)どちらかといえばそうしている	40.7
(3)どちらかといえばそうしていない	17.7
(4)そうしていない	5.4



(17)ことばのきまりを意識して、ふだんから生活していますか。

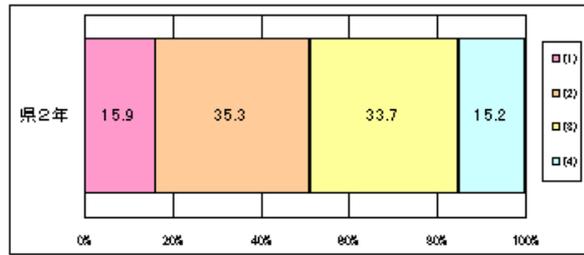
	県2年
(1)そうしている	18.5
(2)どちらかといえばそうしている	45.3
(3)どちらかといえばそうしていない	27.5
(4)そうしていない	8.7



社会

(18)社会の時間に、自分が考えたことや調べたことをまとめて発表することは楽しいですか。

	県2年
(1)楽しい	15.9
(2)どちらかといえば楽しい	35.3
(3)どちらかといえば楽しくない	33.7
(4)楽しくない	15.2



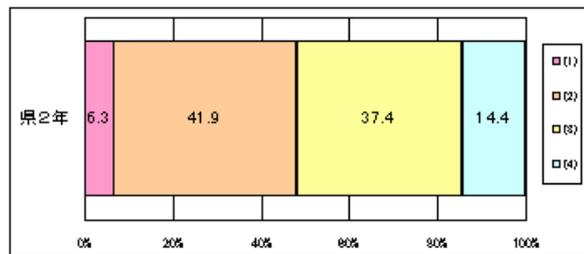
(19)社会の時間に、調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しいですか。

	県2年
(1)楽しい	22.0
(2)どちらかといえば楽しい	38.1
(3)どちらかといえば楽しくない	28.5
(4)楽しくない	11.5



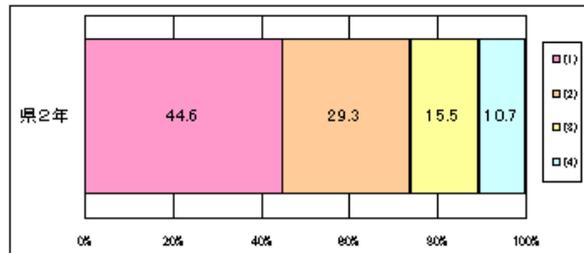
(20)新聞やテレビのニュースなどに出てくる国内外のできごとや事件などに興味・関心がありますか。

	県2年
(1)ある	6.3
(2)どちらかといえばある	41.9
(3)どちらかといえばない	37.4
(4)ない	14.4



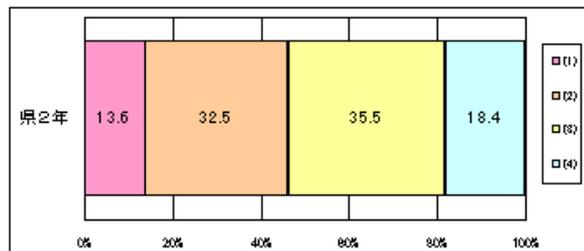
(21)博物館や図書館、郷土資料館など学校の外に出て勉強することは好きですか。

	県2年
(1)好き	44.6
(2)どちらかといえば好き	29.3
(3)どちらかといえば好きではない	15.5
(4)好きではない	10.7



(22)社会の勉強に関することで、疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べていますか。

	県2年
(1)そうしている	13.6
(2)どちらかといえばそうしている	32.5
(3)どちらかといえばそうしていない	35.5
(4)そうしていない	18.4



数学

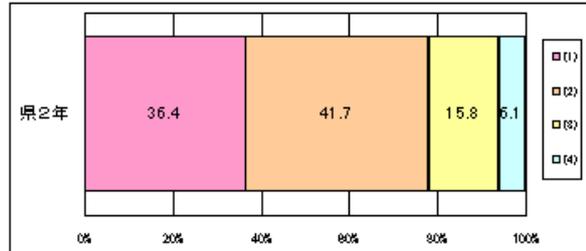
②3)数学の時間に、いろいろな考え方を発表し合うのは楽しいですか。

	県2年
(1)楽しい	22.0
(2)どちらかといえば楽しい	38.1
(3)どちらかといえば楽しくない	27.9
(4)楽しくない	12.0



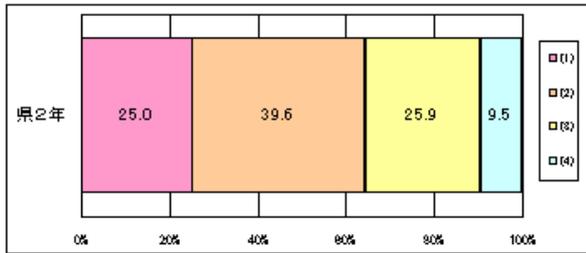
②4)数学の時間に、問題の解き方が分からないときは、あきらめずいろいろな方法を考えていますか。

	県2年
(1)そうしている	36.4
(2)どちらかといえばそうしている	41.7
(3)どちらかといえばそうしていない	15.8
(4)そうしていない	6.1



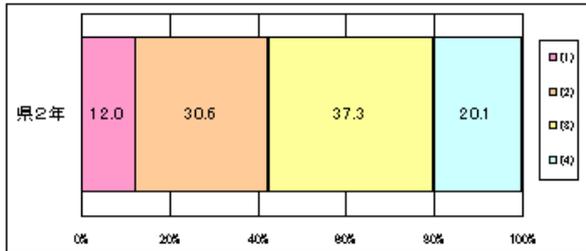
②5)数学の時間に、問題を解くとき、ノートやプリントに図や表を書いたり、模型などの具体物を使ったりして調べていますか。

	県2年
(1)そうしている	25.0
(2)どちらかといえばそうしている	39.6
(3)どちらかといえばそうしていない	25.9
(4)そうしていない	9.5



②6)数学の時間に、新しい内容や考え方などを勉強したら、自分の身の周りの場面などにあてはめてみたり、使ってみたりしていますか。

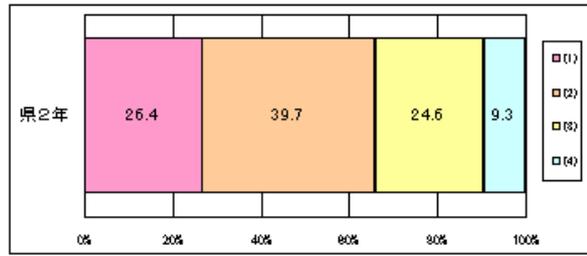
	県2年
(1)そうしている	12.0
(2)どちらかといえばそうしている	30.6
(3)どちらかといえばそうしていない	37.3
(4)そうしていない	20.1



理科

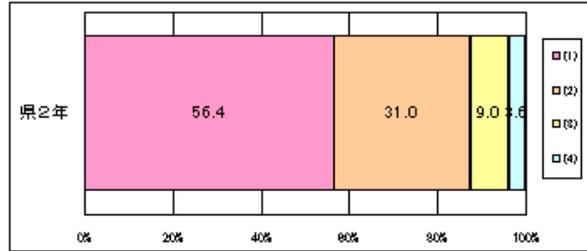
(27)理科の時間に、いろいろな考え方を発表し合うのは楽しいですか。

	県2年
(1)楽しい	26.4
(2)どちらかといえば楽しい	39.7
(3)どちらかといえば楽しくない	24.6
(4)楽しくない	9.3



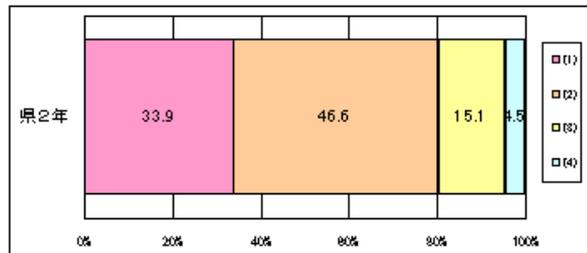
(28)理科の時間に、問題を解決するために、観察や実験を計画し、実施することは好きですか。

	県2年
(1)好き	56.4
(2)どちらかといえば好き	31.0
(3)どちらかといえば好きではない	9.0
(4)好きではない	3.6



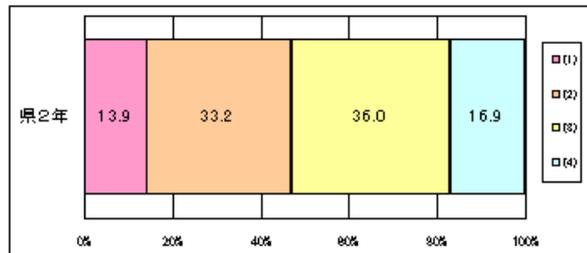
(29)理科の時間に、観察や実験を行ったあと、考察やまとめを行うようにしていますか。

	県2年
(1)そうしている	33.9
(2)どちらかといえばそうしている	46.6
(3)どちらかといえばそうしてない	15.1
(4)そうしてない	4.5



(30)理科の勉強に関することで、疑問に思ったことや興味・関心をもったことについては、自分で調べていますか。

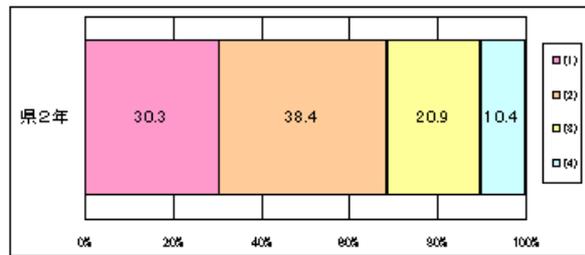
	県2年
(1)そうしている	13.9
(2)どちらかといえばそうしている	33.2
(3)どちらかといえばそうしてない	36.0
(4)そうしてない	16.9



英語

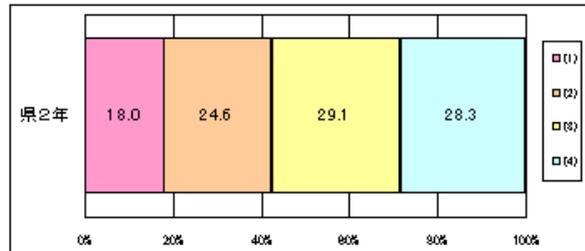
③1)[2年生のみ]英語の時間に、英語を聞いたり、話したりするのは楽しいですか。

	県2年
(1)楽しい	30.3
(2)どちらかといえば楽しい	38.4
(3)どちらかといえば楽しくない	20.9
(4)楽しくない	10.4



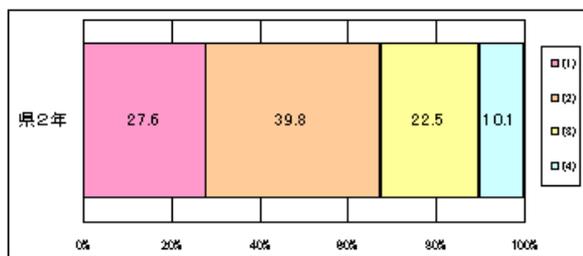
③2)[2年生のみ]英語を使って、手紙や日記、e-mailなどを書くことに興味がありますか。

	県2年
(1)ある	18.0
(2)どちらかといえばある	24.6
(3)どちらかといえばない	29.1
(4)ない	28.3



③3)[2年生のみ]ALTの先生とコミュニケーションをとることは好きですか。

	県2年
(1)好き	27.6
(2)どちらかといえば好き	39.8
(3)どちらかといえばきらい	22.5
(4)きらい	10.1



最終更新日： 2009-07-17

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

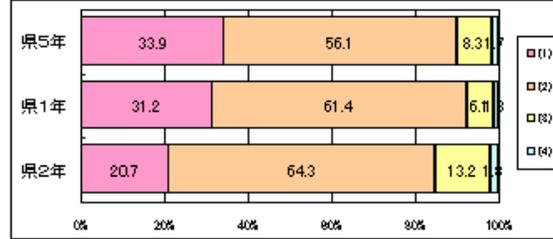
Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(小学校第5学年・中学校第1学年・第2学年)

各教科の理解度についての自己評価

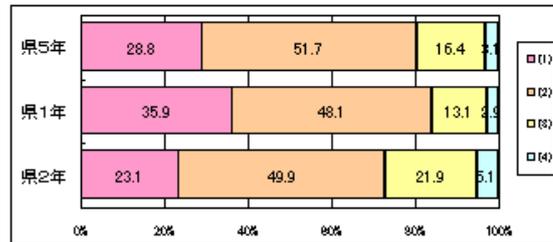
(12)ア各教科の授業はどの程度分かりますか。 ア 国語

	県5年	県1年	県2年
(1)よく分かる	33.9	31.2	20.7
(2)たいたい分かる	56.1	61.4	64.3
(3)あまり分からない	8.3	6.1	13.2
(4)ほとんど分からない	1.7	1.3	1.8



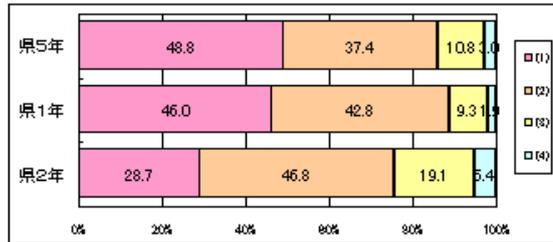
(12)イ各教科の授業はどの程度分かりますか。 イ 社会

	県5年	県1年	県2年
(1)よく分かる	28.8	35.9	23.1
(2)たいたい分かる	51.7	48.1	49.9
(3)あまり分からない	16.4	13.1	21.9
(4)ほとんど分からない	3.1	2.9	5.1



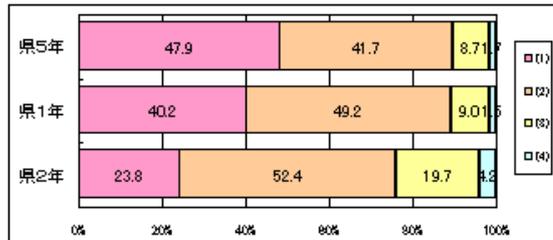
(12)ウ各教科の授業はどの程度分かりますか。 ウ 数学

	県5年	県1年	県2年
(1)よく分かる	48.8	46.0	28.7
(2)たいたい分かる	37.4	42.8	46.8
(3)あまり分からない	10.8	9.3	19.1
(4)ほとんど分からない	3.0	1.9	5.4



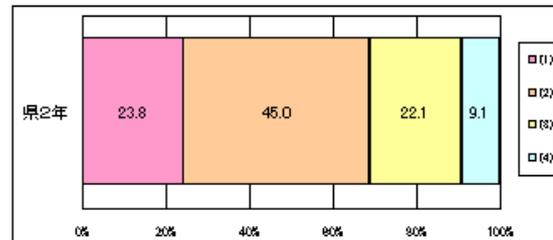
(12)エ各教科の授業はどの程度分かりますか。 エ 理科

	県5年	県1年	県2年
(1)よく分かる	47.9	40.2	23.8
(2)たいたい分かる	41.7	49.2	52.4
(3)あまり分からない	8.7	9.0	19.7
(4)ほとんど分からない	1.7	1.6	4.2



(12)オ[2年生のみ]各教科の授業はどの程度分かりますか。 オ 英語

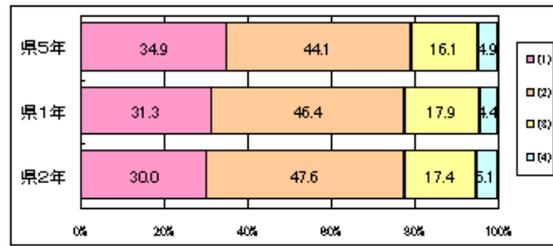
	県5年	県1年	県2年
(1)よく分かる			23.8
(2)たいたい分かる			45.0
(3)あまり分からない			22.1
(4)ほとんど分からない			9.1



各教科に対する楽しみについての自己評価

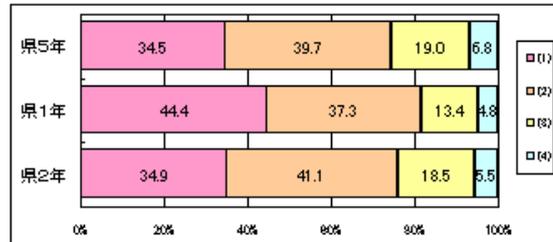
(13)ア各教科の授業は楽しいですか。 ア 国語

	県5年	県1年	県2年
(1)楽しい	34.9	31.3	30.0
(2)どちらかといえば楽しい	44.1	46.4	47.6
(3)どちらかといえば楽しくない	16.1	17.9	17.4
(4)楽しくない	4.9	4.4	5.1



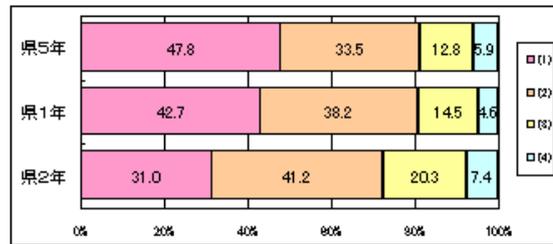
(13)イ各教科の授業は楽しいですか。 イ 社会

	県5年	県1年	県2年
(1)楽しい	34.5	44.4	34.9
(2)どちらかといえば楽しい	39.7	37.3	41.1
(3)どちらかといえば楽しくない	19.0	13.4	18.5
(4)楽しくない	6.8	4.8	5.5



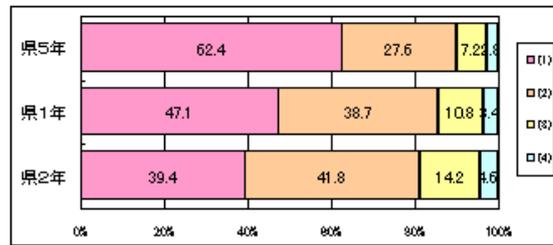
(13)ウ各教科の授業は楽しいですか。 ウ 数学

	県5年	県1年	県2年
(1)楽しい	47.8	42.7	31.0
(2)どちらかといえば楽しい	33.5	38.2	41.2
(3)どちらかといえば楽しくない	12.8	14.5	20.3
(4)楽しくない	5.9	4.6	7.4



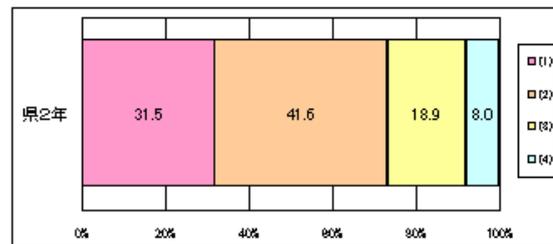
(13)エ各教科の授業は楽しいですか。 エ 理科

	県5年	県1年	県2年
(1)楽しい	62.4	47.1	39.4
(2)どちらかといえば楽しい	27.6	38.7	41.8
(3)どちらかといえば楽しくない	7.2	10.8	14.2
(4)楽しくない	2.8	3.4	4.6



(13)オ[2年生のみ]各教科の授業は楽しいですか。 オ 英語

	県5年	県1年	県2年
(1)楽しい			31.5
(2)どちらかといえば楽しい			41.6
(3)どちらかといえば楽しくない			18.9
(4)楽しくない			8.0



平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

教師意識調査から見た佐賀県の教師像(小学校第5学年)

小学校実施回答数 367人

※数値は小数第一位で四捨五入している。

教師意識調査から見た佐賀県の教師像(小学校第5学年)

教科全般における指導法の工夫

- 発展的課題を取り入れた授業**
多くの単元で行っている……7%
半分程度の単元で行っている……18%
- 理解が十分でない児童への補充的指導**
多くの単元で行っている……37%
半分程度の単元で行っている……21%
- レポートや作文など、表現する活動を取り入れた授業**
多くの単元で行っている……17%
半分程度の単元で行っている……23%
- 表現し、考えをあげたり深めたりする活動を取り入れた授業**
多くの単元で行っている……43%
半分程度の単元で行っている……31%
- 身に付けさせたい力を意識した総合的な学習における指導**
行っている……31%
どちらかといえば行っている……44%
- 学習目標や評価規準を明確化した指導**
行っている……31%
どちらかといえば行っている……65%
- 学習内容や学習方法についてのきめ細やかな指導**
行っている……23%
どちらかといえば行っている……61%
- 学習形態を工夫しためりはりのある授業**
多くの単元で行っている……34%
半分程度の単元で行っている……33%

教科の特性に応じた指導法の工夫

国語

- 書く活動を取り入れた指導**
多くの単元……56% 半分程度の単元……27%
- 図書の多読につながるような授業**
多くの単元……16% 半分程度の単元……28%

社会

- 資料などから読み取ったことをまとめて発表するような授業**
多くの単元……15% 半分程度の単元……29%
- 資料などから読み取ったことをまとめて討論するような授業**
多くの単元……3% 半分程度の単元……7%

算数

- 算数的活動を通して課題を解決する授業**
多くの単元……53% 半分程度の単元……26%
- 問題解決的な学習を取り入れた授業**
多くの単元……58% 半分程度の単元……25%

理科

- 児童が見通しをもち、観察や実験をするような授業**
多くの単元……67% 半分程度の単元……24%
- 実験結果やまとめにおいていろいろな考えを出し合う授業**
多くの単元……30% 半分程度の単元……36%

学習環境の活用

■コンピュータを活用した授業

年20回以上……15%
年10～19回程度……35%

[活用内容]

インターネットを用いた調べ学習……60%
児童が他のソフトを用いて、基礎の定着を図る学習……13%

■学校図書館を活用した授業

年20回以上……44%
年10～19回程度……20%

[活用内容]

読書指導・読書活動の場……53%
調べ学習の場……33%

教師の指導観

- 児童が勉強するよう日ごろから指導する**
そう思う……79%
どちらかといえばそう思う……21%
- 児童が規則を守るよう細かく指導する**
そう思う……77%
どちらかといえばそう思う……22%
- 児童が気軽に話しかけられるようにする**
そう思う……93%
どちらかといえばそう思う……7%
- 問題が起こった時、常に児童に意見を求める**
そう思う……34%
どちらかといえばそう思う……59%

家庭学習への関与状況

多くの時間で宿題を出している……62%
どちらかといえば出している方が多い……25%
多くの時間でどちらかといえば出しているを合わせた割合
予習的な内容の宿題を出している……9%
復習的な内容の宿題を出している……89%

学校組織マネジメントに対する意識

- 学力向上や生徒指導など学校の方針を理解している**
理解している……57%
どちらかといえば理解している……41%
- 方針や教育内容についての共通理解が図られている**
そう思う……46%
どちらかといえばそう思う……51%
- 学校内に気軽に話し合える雰囲気がある**
そう思う……62%
どちらかといえばそう思う……34%

TT・少人数指導の成果と課題

■実施状況(算数)

チームティーチング……48% 少人数指導……5%
指導内容に応じて両方……36% 実施していない……11%

■チームティーチングにおける役割分担

状況に応じて役割を交代……25% 小グループに分かれて別々に……7%
T1が一斉指導、T2が机間指導……69%

■少人数指導における習熟度別指導の頻度

多くの単元で……9% 半分程度の単元で……6%
1/3程度の単元で……18%

■チームティーチングや少人数指導における打ち合わせや見直しの頻度

必要に応じてときどき……59% 毎回ではないが定期的……26%
授業前後に毎回……14%

[効果的だと思う点]
学習状況が十分でない子どもへの対応ができる
子どもへの声かけが増え、個別指導が十分にできる
子どもの学習内容がよく定着する

[課題だと思う点]
教師間の打ち合わせの時間が十分でない
学習状況が十分な子どもをさらにのばす手だてが難しい
子どものグループ編成が難しい

最終更新日: 2009-07-17

85

平成21年度 佐賀県小・中学校学習状況調査報告書

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

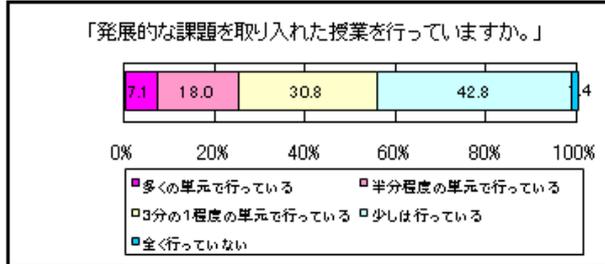
教師意識調査から見た佐賀県の教師像(小学校4年生時の担当)

小学校実施回答数 367人

教科全般における指導法の工夫

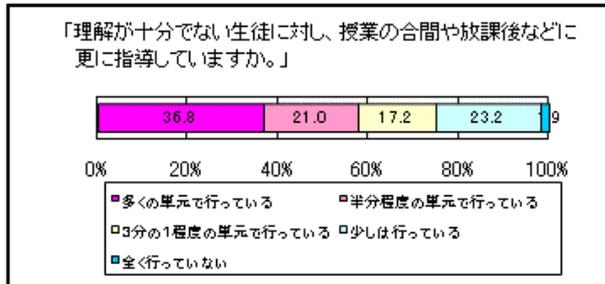
(9) 発展的な課題を取り入れた授業を行っていますか。

多くの単元で行っている	7.1
半分程度の単元で行っている	18.0
3分の1程度の単元で行っている	30.8
少しは行っている	42.8
全く行っていない	1.4



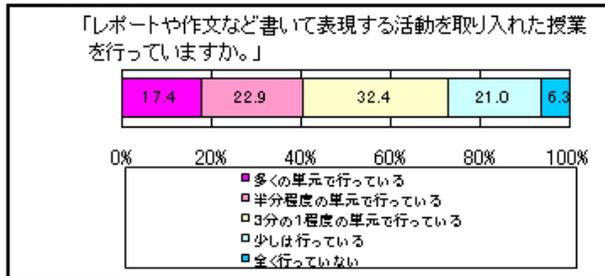
(10) 理解が十分でない生徒に対し、授業の合間や放課後などに更に指導していますか。

多くの単元で行っている	36.8
半分程度の単元で行っている	21.0
3分の1程度の単元で行っている	17.2
少しは行っている	23.2
全く行っていない	1.9



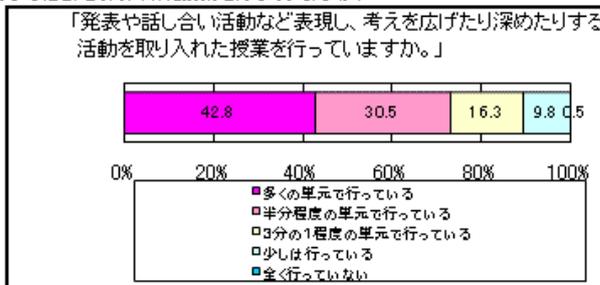
(11) レポートや作文など書いて表現する活動を取り入れた授業を行っていますか。

多くの単元で行っている	17.4
半分程度の単元で行っている	22.9
3分の1程度の単元で行っている	32.4
少しは行っている	21.0
全く行っていない	6.3



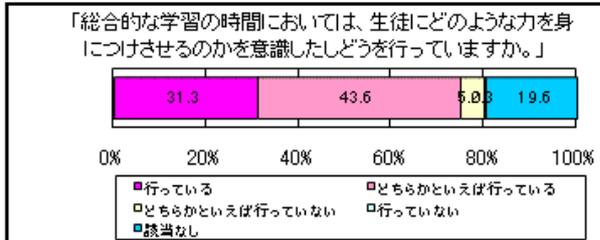
(12)発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか。

多くの単元で行っている	42.8
半分程度の単元で行っている	30.5
3分の1程度の単元で行っている	16.3
少しは行っている	9.8
全く行っていない	0.5



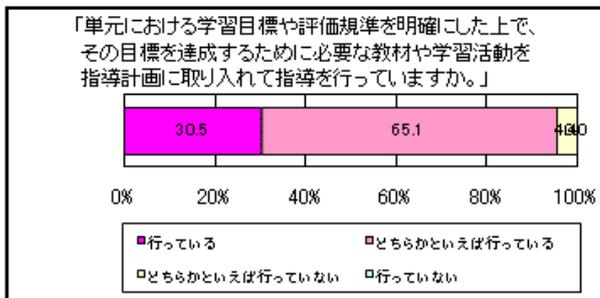
(13)総合的な学習の時間においては、生徒にどのような力を身につけさせるのかを意識したしどうを行っていますか。

行っている	31.3
どちらかといえば行っている	43.6
どちらかといえば行っていない	5.2
行っていない	0.3
該当なし	19.6



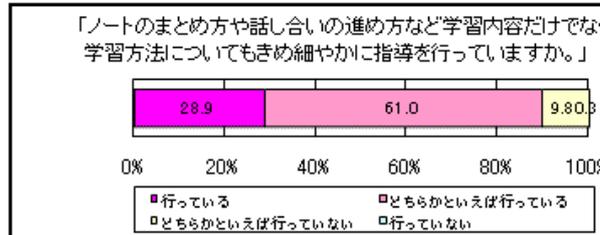
(14)単元における学習目標や評価規準を明確にした上で、その目標を達成するために必要な教材や学習活動を指導計画に取り入れて指導を行っていますか。

行っている	30.5
どちらかといえば行っている	65.1
どちらかといえば行っていない	4.4
行っていない	0.0



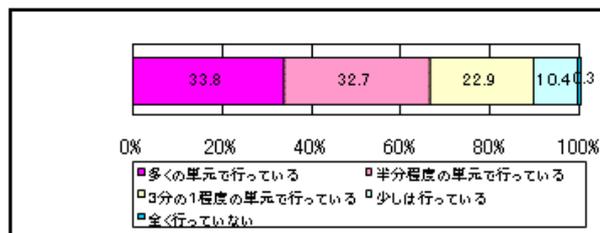
(15)ノートまとめ方や話し合いの進め方など学習内容だけでなく学習方法についてもきめ細やかに指導を行っていますか。

行っている	28.9
どちらかといえば行っている	61.0
どちらかといえば行っていない	9.8
行っていない	0.3



(16)教師による指導を通して確実に学習内容を身につけさせる場面とグループ活動やペア活動の形態を取り入れ、生徒の学び合い活動を通して学習内容を身につけさせる場面を意識したメリハリのある授業を行っていますか。

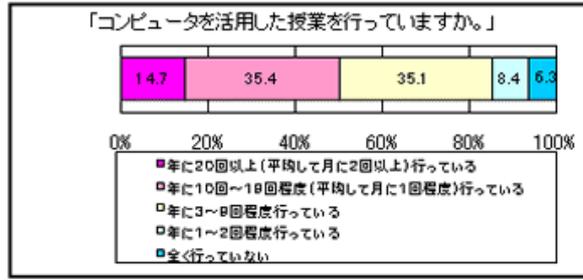
多くの単元で行っている	33.8
半分程度の単元で行っている	32.7
3分の1程度の単元で行っている	22.9
少しは行っている	10.4
全く行っていない	0.3



学習環境の活用

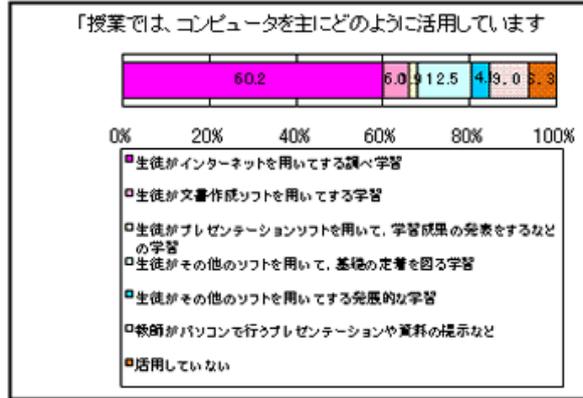
(5) コンピュータを活用した授業を行っていますか。

年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている	14.7
年に10回～19回程度(平均して月に1回程度)行っている	35.4
年に3～9回程度行っている	35.1
年に1～2回程度行っている	8.4
全く行っていない	6.3



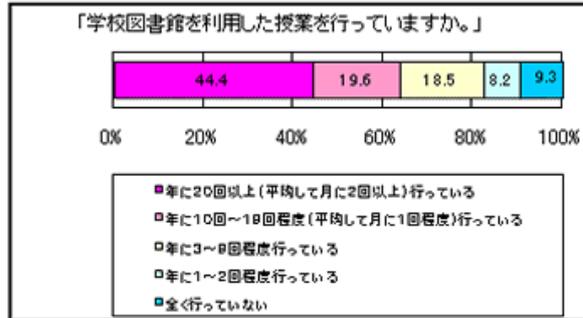
(6) 授業では、コンピュータを主にどのように活用していますか。

生徒がインターネットを用いてする調べ学習	60.2
生徒が文書作成ソフトを用いてする学習	6.0
生徒がプレゼンテーションソフトを用いて、学習成果の発表をするなどの学習	1.9
生徒がその他のソフトを用いて、基礎の定着を図る学習	12.5
生徒がその他のソフトを用いてする発展的な学習	4.1
教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など	9.0
活用していない	6.3



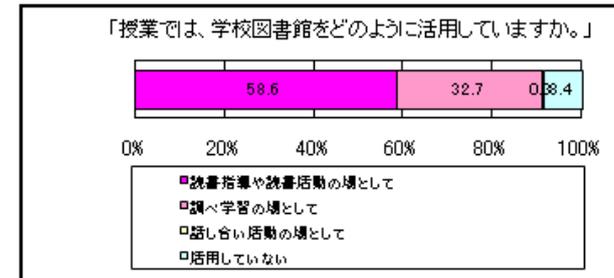
(7) 学校図書館を活用した授業を行っていますか。

年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている	44.4
年に10回～19回程度(平均して月に1回程度)行っている	19.6
年に3～9回程度行っている	18.5
年に1～2回程度行っている	8.2
全く行っていない	9.3



(8) 授業では、学校図書館を主にどのように活用していますか。

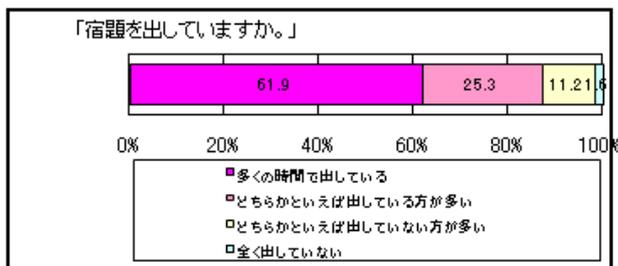
読書指導や読書活動の場として	58.6
調べ学習の場として	32.7
話し合い活動の場として	0.3
活用していない	8.4



家庭学習への関与状況

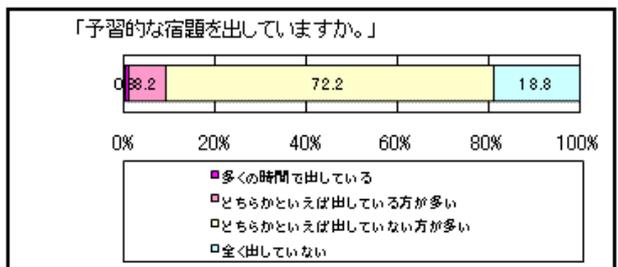
(2) 宿題を出していますか。

多くの時間で出している	61.9
どちらかといえば出している方が多い	25.3
どちらかといえば出していない方が多い	11.2
全く出していない	1.6



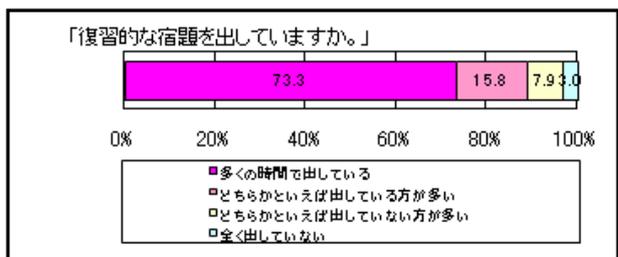
(3) 予習的な宿題を出していますか。

多くの時間で出している	0.8
どちらかといえば出している方が多い	8.2
どちらかといえば出していない方が多い	72.2
全く出していない	18.8



(4) 復習的な宿題を出していますか。

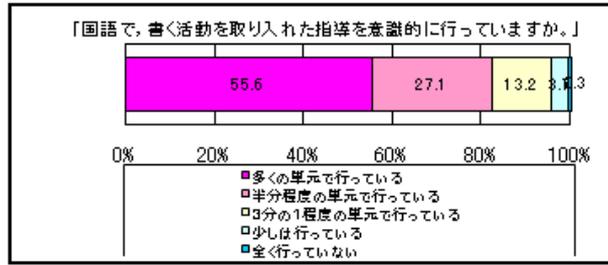
多くの時間で出している	73.3
どちらかといえば出している方が多い	15.8
どちらかといえば出していない方が多い	7.9
全く出していない	3.0



教科の特性に応じた指導法の工夫

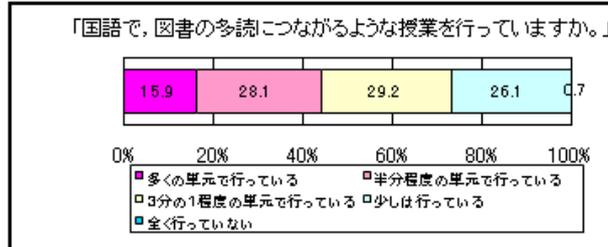
(17) 国語で、書く活動を取り入れた指導を意識的に行っていますか。

多くの単元で行っている	55.6
半分程度の単元で行っている	27.1
3分の1程度の単元で行っている	13.2
少しは行っている	3.7
全く行っていない	0.3



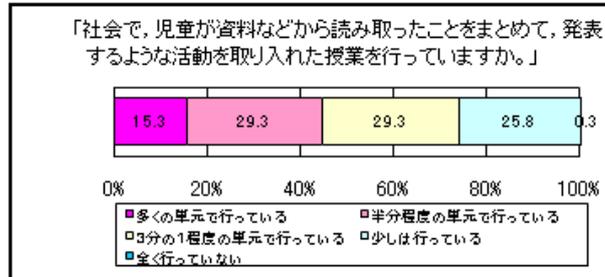
(18) 国語で、図書の多読につながるような授業を行っていますか。

多くの単元で行っている	15.9
半分程度の単元で行っている	28.1
3分の1程度の単元で行っている	29.2
少しは行っている	26.1
全く行っていない	0.7



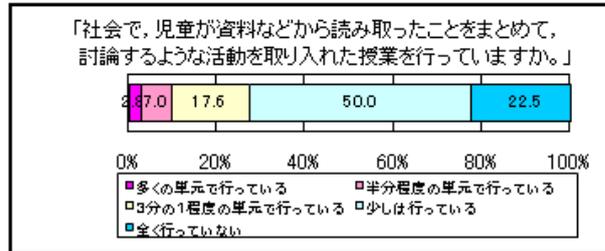
(19) 社会で、児童が資料などから読み取ったことをまとめて、発表するような活動を取り入れた授業を行っていますか。

多くの単元で行っている	15.3
半分程度の単元で行っている	29.3
3分の1程度の単元で行っている	29.3
少しは行っている	25.8
全く行っていない	0.3



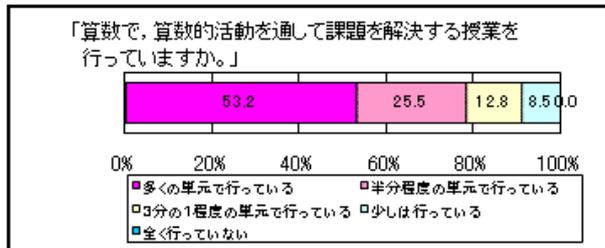
(20) 社会で、児童が資料などから読み取ったことをまとめて、討論するような活動を取り入れた授業を行っていますか。

多くの単元で行っている	2.8
半分程度の単元で行っている	7.0
3分の1程度の単元で行っている	17.6
少しは行っている	50.0
全く行っていない	22.5



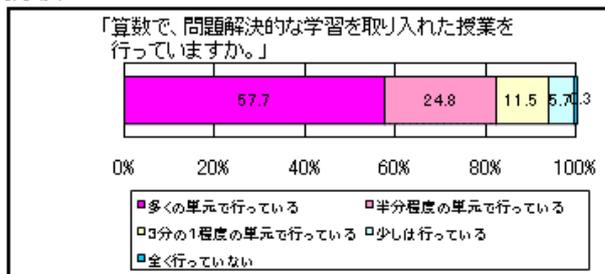
(21) 算数で、算数的活動を通して課題を解決する授業を行っていますか。

多くの単元で行っている	53.2
半分程度の単元で行っている	25.5
3分の1程度の単元で行っている	12.8
少しは行っている	8.5
全く行っていない	0.0



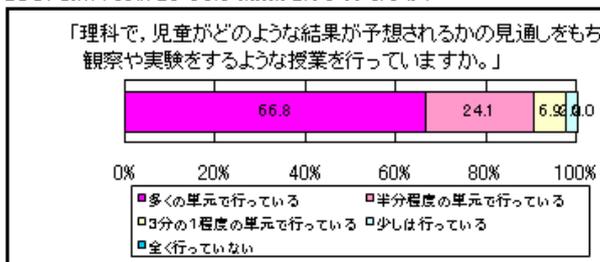
(22) 算数で、問題解決的な学習を取り入れた授業を行っていますか。

多くの単元で行っている	57.7
半分程度の単元で行っている	24.8
3分の1程度の単元で行っている	11.5
少しは行っている	5.7
全く行っていない	0.3



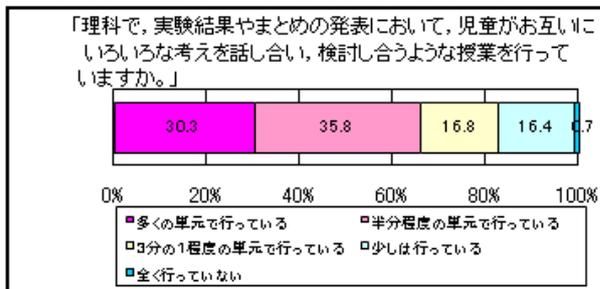
(23)理科で、児童がどのような結果が予想されるかの見通しをもち、観察や実験をするような授業を行っていますか。

多くの単元で行っている	66.8
半分程度の単元で行っている	24.1
3分の1程度の単元で行っている	6.9
少しは行っている	2.2
全く行っていない	0.0



(24)理科で、実験結果やまとめの発表において、児童がお互いにいろいろな考えを話し合い、検討し合うような授業を行っていますか。

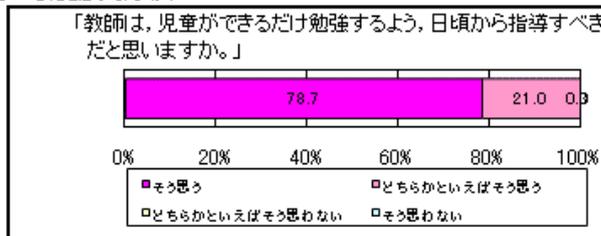
多くの単元で行っている	30.3
半分程度の単元で行っている	35.8
3分の1程度の単元で行っている	16.8
少しは行っている	16.4
全く行っていない	0.7



教師の指導観

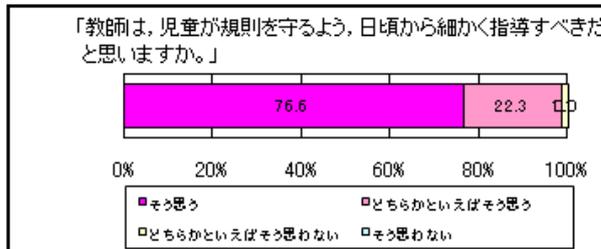
(25) 教師は、児童ができるだけ勉強するよう、日頃から指導すべきだと思いますか。

そう思う	78.7
どちらかといえばそう思う	21.0
どちらかといえばそう思わない	0.0
そう思わない	0.3



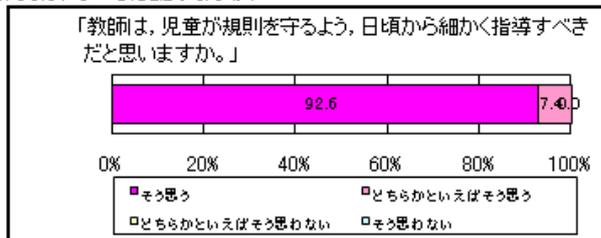
(26) 教師は、児童が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思いますか。

そう思う	76.6
どちらかといえばそう思う	22.3
どちらかといえばそう思わない	1.1
そう思わない	0.0



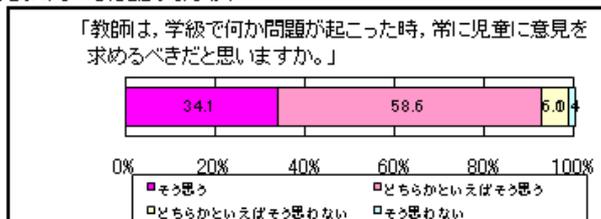
(27) 教師は、勉強のことで児童がいつでも気軽に話しかけられるようにすべきだと思いますか。

そう思う	92.6
どちらかといえばそう思う	7.4
どちらかといえばそう思わない	0.0
そう思わない	0.0



(28) 教師は、学級で何か問題が起こった時、常に児童に意見を求めるべきだと思いますか。

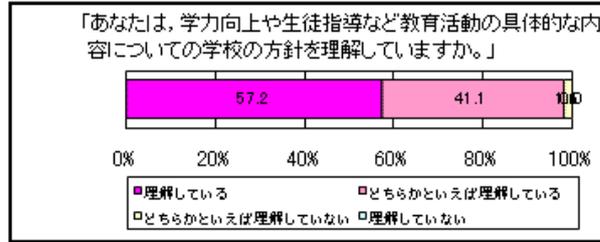
そう思う	34.1
どちらかといえばそう思う	58.6
どちらかといえばそう思わない	6.0
そう思わない	1.4



学校組織マネジメントに対する意識

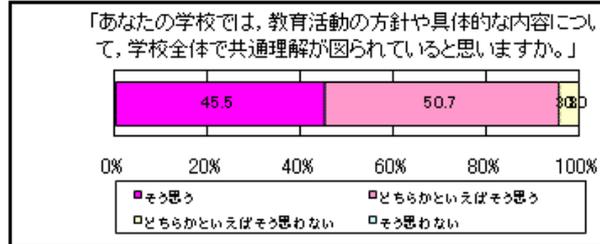
(29)あなたは、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していますか。

理解している	57.2
どちらかといえば理解している	41.1
どちらかといえば理解していない	1.6
理解していない	0.0



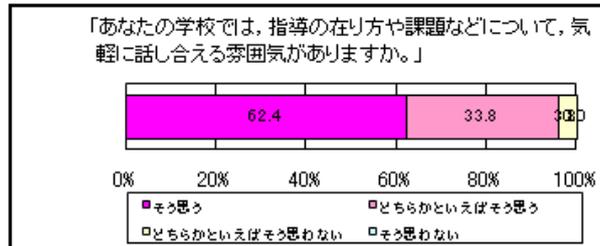
(30)あなたの学校では、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思いますか。

そう思う	45.5
どちらかといえばそう思う	50.7
どちらかといえばそう思わない	3.8
そう思わない	0.0



(31)あなたの学校では、指導の在り方や課題などについて、気軽に話し合える雰囲気がありますか。

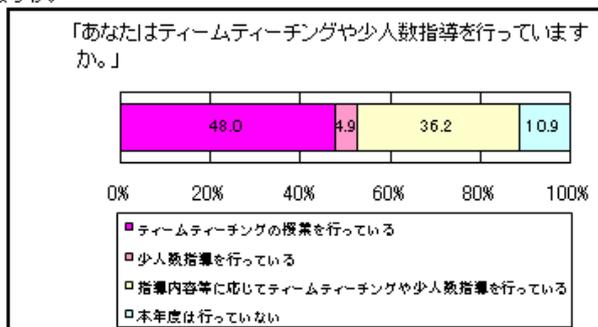
そう思う	62.4
どちらかといえばそう思う	33.8
どちらかといえばそう思わない	3.8
そう思わない	0.0



TT・少人数指導の成果と課題

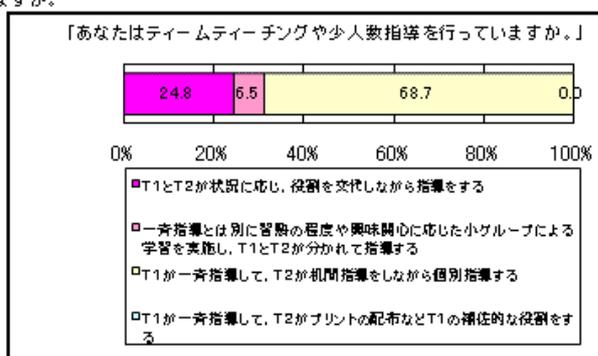
(32)あなたはチームティーチングや少人数指導を行っていますか。

チームティーチングの授業を行っている	48.0
少人数指導を行っている	4.9
指導内容等に応じてチームティーチングや少人数指導を行っている	36.2
本年度は行っていない	10.9



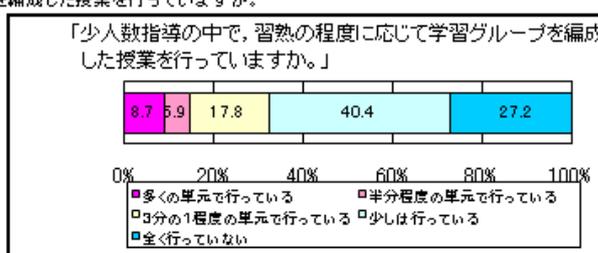
(33)あなたはチームティーチングや少人数指導を行っていますか。

T1とT2が状況に応じ、役割を交代しながら指導をする	24.8
一斉指導とは別に習熟の程度や興味関心に応じた小グループによる学習を実施し、T1とT2が分かれて指導する	6.5
T1が一斉指導して、T2が机間指導をしながら個別指導する	68.7
T1が一斉指導して、T2がプリントの配布などT1の補佐的な役割をする	0.0



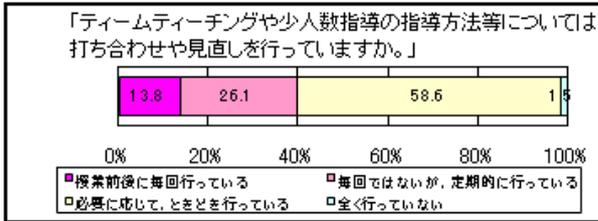
(34)少人数指導の中で、習熟の程度に応じて学習グループを編成した授業を行っていますか。

多くの単元で行っている	8.7
半分程度の単元で行っている	5.9
3分の1程度の単元で行っている	17.8
少しは行っている	40.4
全く行っていない	27.2



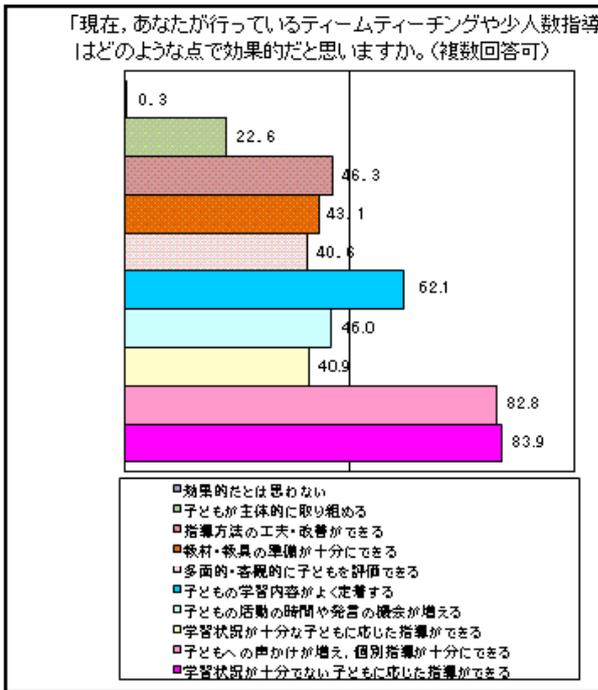
(35) ティームティーチングや少人数指導の指導方法等については、打ち合わせや見直しを行っていますか。

授業前後に毎回行っている	13.8
毎回ではないが、定期的に行っている	26.1
必要に応じて、ときどき行っている	58.6
全く行っていない	1.5



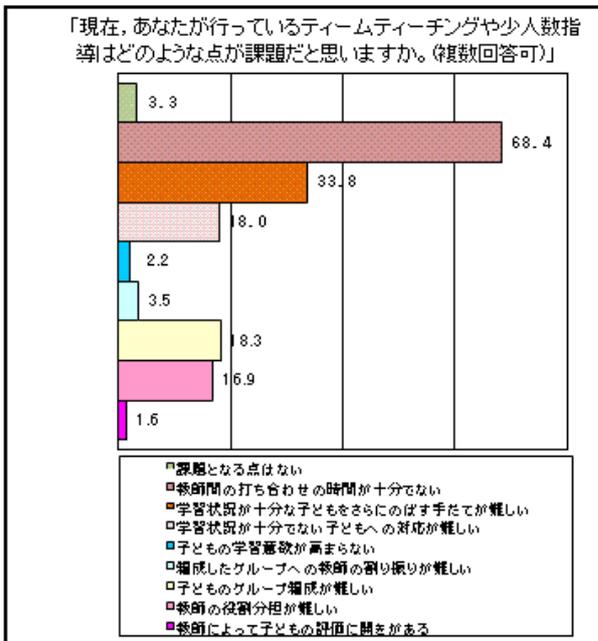
(36) 現在、あなたが行っているティームティーチングや少人数指導はどのような点で効果的だと思いますか。(複数回答可)

学習状況が十分でない子どもに応じた指導ができる	83.9
子どもへの声かけが増え、個別指導が十分にできる	82.8
学習状況が十分な子どもに応じた指導ができる	40.9
子どもの活動の時間や発言の機会が増える	46.0
子どもの学習内容がよく定着する	62.1
多面的・客観的に子どもを評価できる	40.6
教材・教具の準備が十分にできる	43.1
指導方法の工夫・改善ができる	46.3
子どもが主体的に取り組める	22.6
効果的だとは思わない	0.3



(37) 現在、あなたが行っているティームティーチングや少人数指導はどのような点が課題だと思いますか。(複数回答可)

教師によって子どもの評価に開きがある	1.6
教師の役割分担が難しい	16.9
子どものグループ編成が難しい	18.3
編成したグループへの教師の割り振りが難しい	3.5
子どもの学習意欲が高まらない	2.2
学習状況が十分でない子どもへの対応が難しい	18.0
学習状況が十分な子どもをさらにのばす手だてが難しい	33.8
教師間の打ち合わせの時間が十分でない	68.4
課題となる点はない	3.3



平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅲ 各教科等の調査結果の分析 > 小学校国語

小学校国語

中学1年生、小学5年生の全体的な傾向として基礎的・基本的な力は身に付けているものの、発展的な課題になるとその力が十分活用されていないといえる。「読むこと」領域の力についても同じような傾向にあり、「読み取ったことを生かして書く」ような力が十分とはいえない。原因の一つとして、「読むこと」「書くこと」「話すこと・聞くこと」の各領域での学習は充実してきている反面、それぞれの領域で身に付けた力を他の領域に生かすことができているためと考えられる。授業の中で、確実に知識・技能を身に付ける習得の場とそれらの力を活用する場を設定し、ねらいや表現様式を明らかにした言語活動を通して知識・技能の定着と思考力・判断力・表現力等の育成を図りたい。学んだ力を活用することが、子どもたちの国語の力を伸ばし広げることにつながっていくと考える。

ア 結果の概要

(ア) 評価観点別正答率

①小学5年生

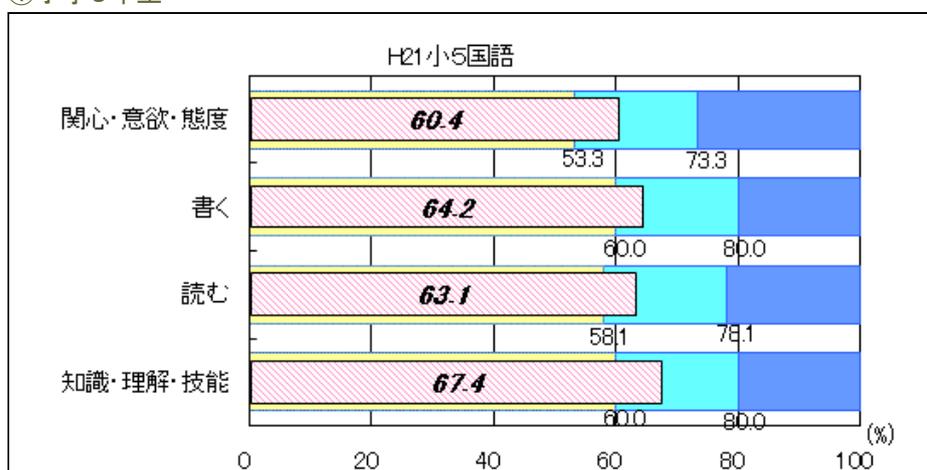


図1 H21年度 小5国語 評価の観点別正答率

4観点すべてで「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

②中学1年生

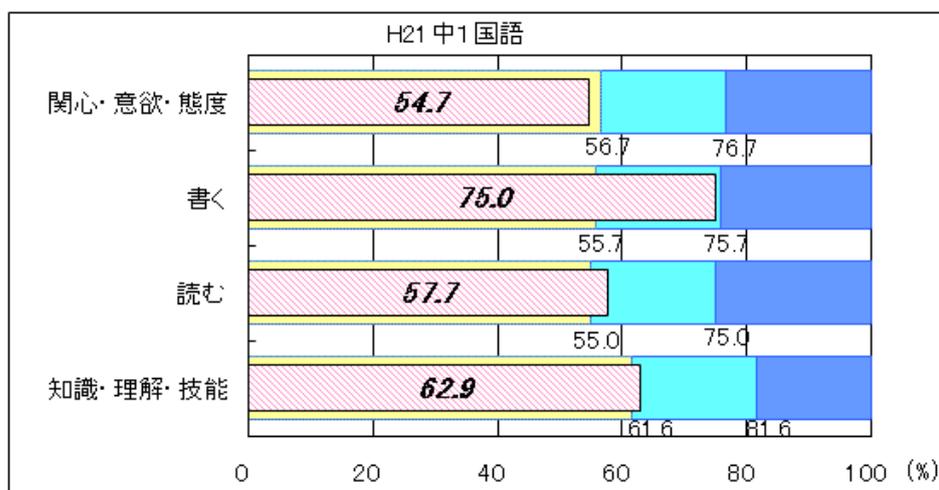


図2 H21年度 中1国語 評価の観点別正答率

「書くこと」については、「おおむね達成」の基準を大きく上回っており、良好な結果であった。「読むこと」「言語に関する知識・理解・技能」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

「関心・意欲・態度」については、「おおむね達成」の基準を下回っており、課題である。

(イ) 内容・領域別

①小学5年生

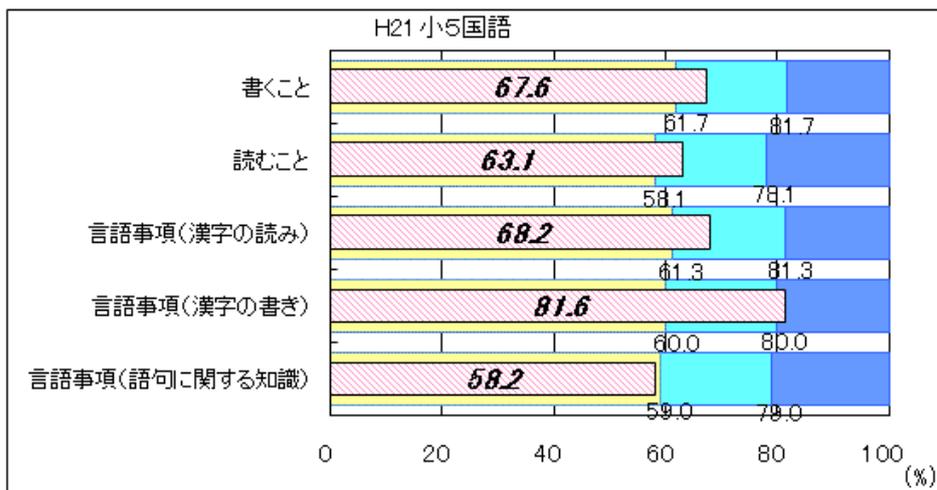


図3 H21年度 小5国語 内容・領域別正答率

「書くこと」「読むこと」「漢字の読み」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

「漢字の書き」については、「十分達成」の基準を上回っており、良好な結果であった。

「言語事項(語句に関する知識)」については、「おおむね達成」の基準を下回っており、課題である。

②中学1年生

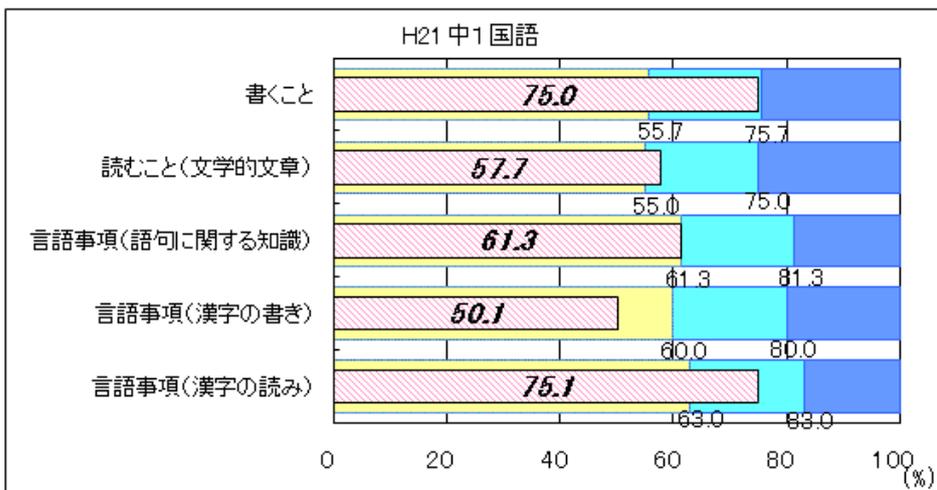


図4 H21年度 中1国語 内容・領域別正答率

「書くこと」については、「おおむね達成」の大きく上回っており、良好な結果であった。

「読むこと」「漢字の読み」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

「語句に関する知識」「漢字の書き」については、「おおむね達成」の基準と同等もしくは下回っており、課題である。

(ウ) 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題

①基礎的・基本的問題

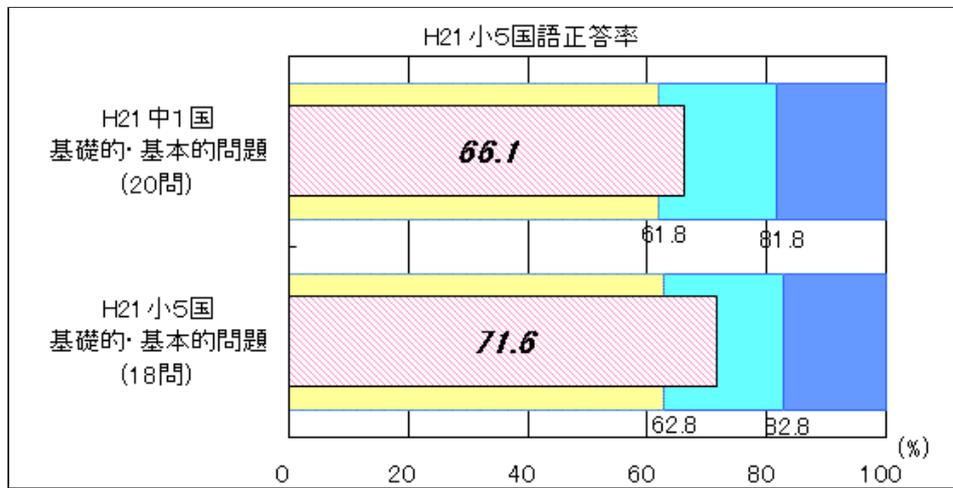


図5 H21年度 小5・中1国語 基礎的・基本的問題正答率

<中学1年生>

「おおむね達成」の基準に対し同等であり、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

<小学5年生>

「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

②発展的・応用的問題

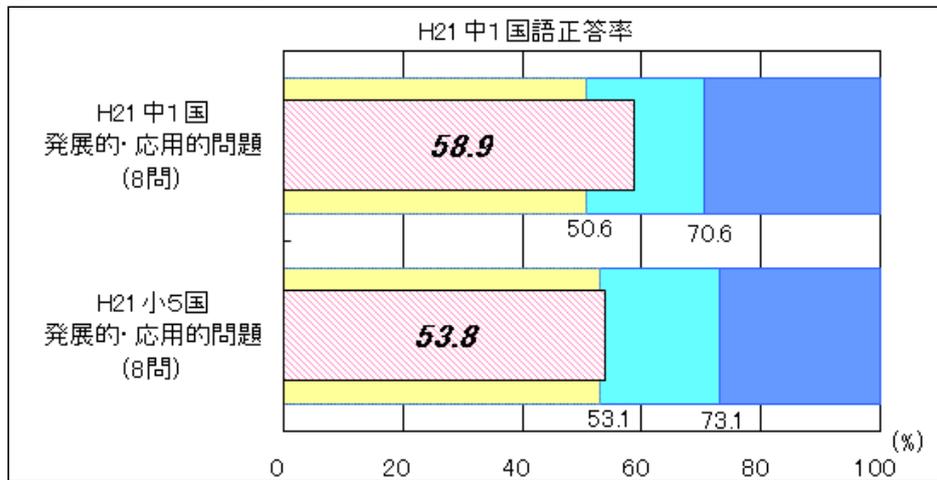


図6 H21年度 小5・中1国語 発展的・応用的問題正答率

<中学1年生>

「おおむね達成」の基準に対し同等であり、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

<小学5年生>

「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(エ)

(エ) 「活用する力」を問う問題

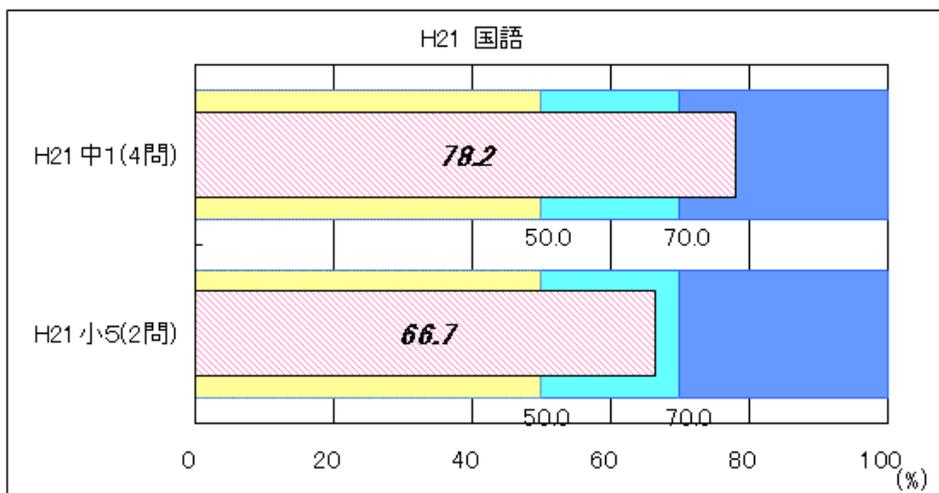


図7 H21年度 小5・中1国語 「活用する力」を問う問題正答率

<中学1年生>

「十分達成」の基準を上回っており、良好な結果であった。

<小学5年生>

「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

イ 評価の観点別、内容・領域別に見た経年比較

(ア) 「書くこと」領域<中学1年生>の経年比較

図8は、「書くこと」領域について中学1年生における定着状況を平成20年度の同一児童と比較したグラフである。

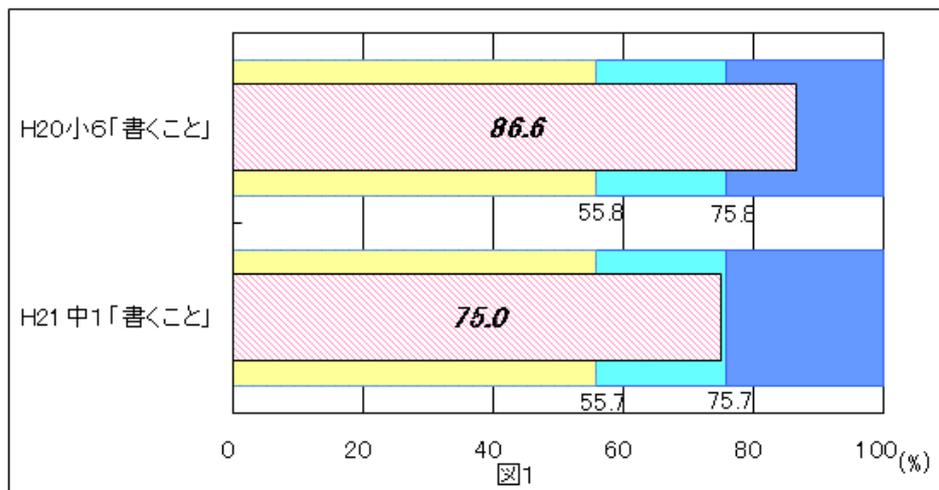


図8 H20・21年度 「書くこと」領域の経年比較

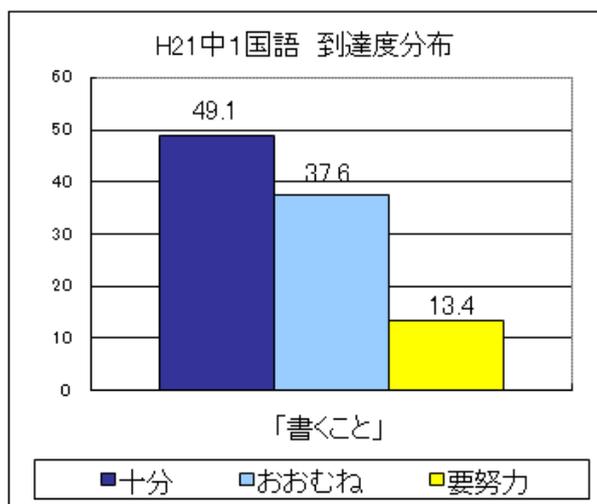


図9 H20・21年度 「書くこと」領域の到達度分布

「書くこと」領域については前年との比較では正答率は 11.6ポイント下がっているものの、書くことの力を十分に身に付けていると考えられる。到達度分布でも「十分達成」の層が50%近くおり、満足いく結果となっている。レポートや作文などを書いて表現する活動を取り入れた授業の取り組みが充実してきていることが起因していると考えられる。

(イ) 「読むこと」領域＜中学1年生＞の経年比較

図10は、「読むこと」領域について中学1年生における定着状況を平成20年度の同一児童と比較したグラフである。

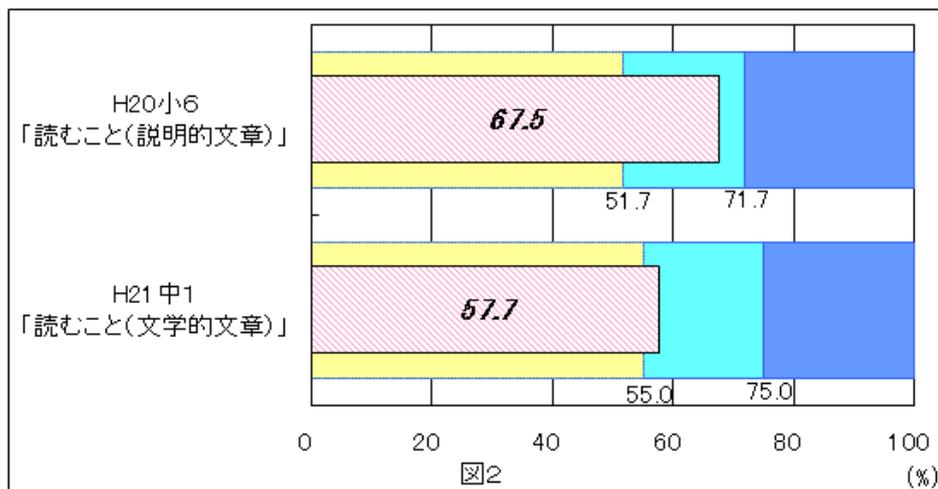


図10 H20・21年度 「読むこと」領域の経年比較

「読むこと」領域については平成20年度と比べると9.8ポイント下がっている。前回は説明的文章で今回は文学的文章が課題文となっており正確な比較はできないが、文学的文章特有の情景描写や心情の変化をとらえる力に課題があるといえる。

(ウ) 「言語事項」領域＜中学1年生＞の経年比較

図11は、「言語事項」領域について中学1年生における定着状況を平成20年度の同一児童と比較したグラフである。

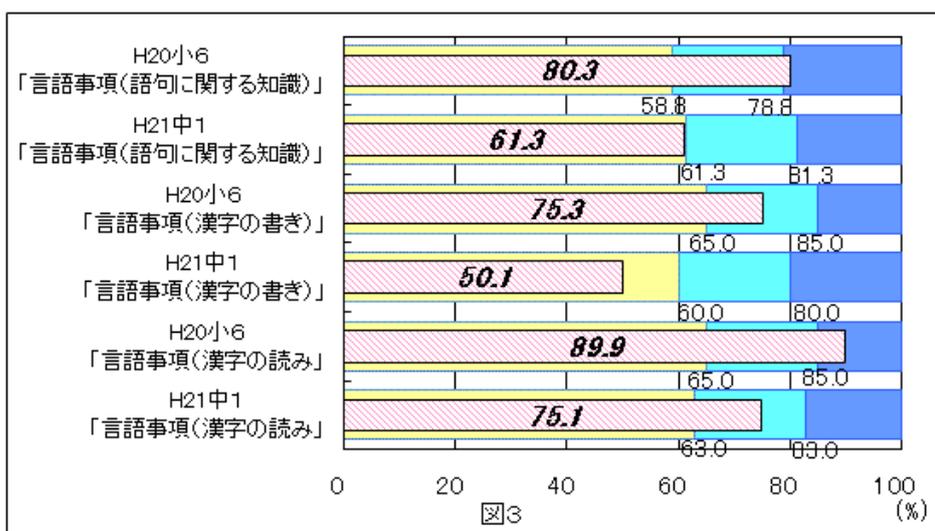


図11 H20・21年度 「言語事項」領域の経年比較

「語句に関する知識」については、平成20年度は「おおむね達成」の基準58.8に対して21.5ポイント上回っていた。平成21年度は「おおむね達成」の基準61.3に対して同等であり、前年度と比べ19ポイント下がった。今年度は辞典の使い方や敬語にかかわる問題が出題され、各学校での取り組みや授業での取り扱いによって定着度に差があるといえる。

「漢字の書き」については、平成20年度は「おおむね達成」の基準65.0に対して10.3ポイント上回っていた。

平成21年度は「おおむね達成」の基準を9.9ポイント下回り、前年度と比べ25.5ポイント下がった。今年度は同音異義語の漢字が出題され、漢字の知識やその使い分けに課題が残った。

「漢字の読み」については、平成20年度は「十分達成」の基準85.0に対して4.9ポイント上回っていた。平成21年度は「おおむね達成」の基準63.0に対して12.1ポイント上回り、前年度に比べて14.8ポイント下がった。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の視点 小5設問毎正答率 中1設問毎正答率

平成20年度の課題を受け、「読むこと」「書くこと」の領域における「読み取ったことを基に条件に即して書くこと」について検証する。さらに、今年度、正答率が高くなかった問題から「国語の基礎的・基本的な知識・技能の習得」についても検証を行うことにした。

視点1

読み取ったことを根拠にして自分の考えを条件に即してまとめることができるか。

[中学1年生 大問3の五] PDF

登場人物の気持ちが変わった理由を次の条件に合わせて書く問題

条件

- ◇気持ちが変わった理由の中に「ぼく」の気持ちを本文中から想像して書き入れること
- ◇「きつね」「窓」の二つの言葉を入れて書くこと
- ◇80字以上、120字以内にまとめ、「～から。」という文末で終わること

○ 出題のねらい

自分の立場からそれらの意見をどのように考えるか意識しながら読むこと
読み取った内容について自分なりに感想や意見などをまとめること

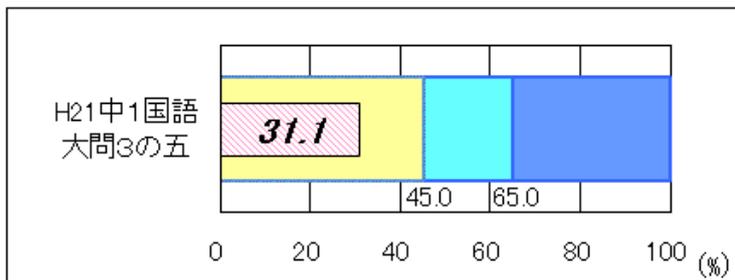


図12 H21年度 中1国語「大問3の五」正答率

○ 傾向

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対し正答率は31.3で13.9ポイント下回っている。無回答率は11.4ポイントで、高い数値を示している。本設問は記述式で条件が多く、誤答率、無回答率ともに高かった。無回答の傾向としては、記述する量が長くなることで考える意欲をなくしているということが考えられる。誤答の傾向としては、自分の想像したことの根拠となる出来事・言動などが明確でなかったり、条件に即した書き方でなかったりということが挙げられる。

○ 指導法改善の視点

読み取ったことを根拠として自分の考えや感想、意見をまとめるためには、自分の考えとその根拠となった出来事・言動をテキストの中から示す必要がある。文学的文章の読み取りにおいても、心情を考える際に気持ちだけを想像的に述べるのではなく、その根拠となるテキストの部分を取り上げさせ、その考えに至った過程を説明させるような発問の工夫が必要である。低学年では根拠となる部分を明確にするように、そして中学年では根拠から自分なりの考えが生まれた過程を説明できるようにしたいところである。条件に即した書き方については日ごろから字数制限や書く必要のある事柄を意識させるような取り組みが必要である。例えば、「読むこと」の学習では感想を書くことが多く取り上げられるが、この際に字数の制限やキーワード等を使うなどの条件を意識させたい。特に字数については、100字の感想と400字の感想では書き方に違いが出てくる。具体的なことが省かれたり、逆に詳しく書いたりといった違いも字数との関係が大きい。自分の考えや感想を書くときには字数の制限を加えることをワークシートやノート指導に取り入れたい。

[小学5年生 大問2の六] PDF

「ひるがおがちよつとかわいそうです。」と「ぼく」が考えた理由を想像し、本文中の言葉を使って、40字以上80字以内でまとめて書く問題

○ 出題のねらい

読み取った内容について自分なりに感想や意見などをまとめること

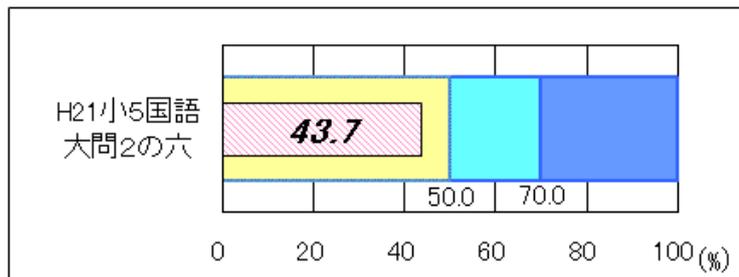


図13 H21年度 小5国語 「大問2の六」正答率

○ 傾向

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対し正答率は43.7で6.3ポイント下回っている。無回答率は14.3ポイントである。中学1年生の同じように記述の量が多いと無回答率が増える傾向にある。誤答の傾向として、「かわいそう」ということを文章全体を十分に理解できずに意味を取り違えていたり、字数が制限まで届かなかったりということがあげられる。

○ 指導法改善の視点

この問題は、まず、文章全体を読んで内容を確かにとらえる必要がある。登場人物の言動を確実にとらえるために主語を補足しながら読んだり、あらすじをつかんで読んだり、主題は何かを考えて読んだりすることは物語文を読む上で非常に重要なことである。特にあらすじについては、大きな物語文の流れをとらえるために大切な力である。1文から3文程度で「～が～して～によって～し、～するお話」のようにまとめたり、登場人物の行動、場面ごとに短くまとめることが考えられる。低学年から中学年でしっかり定着させたい力である。主題については作者の意図を読み取る必要があり、根拠を示しながら考えていくことが大切であり、高学年において進めていきたい学習である。

物語は最初に登場人物の人物像や場の設定を行ってから話が展開していく構造がほとんどである。物語を読み進めていくに当たっては、最初の人物像や場の設定との変化を確認しながら読むことも必要である。例えば、「ごんぎつね(新美南吉)」において、最初の「ごんの人物像」や「ごんに対する兵十の見方」を確認した後に、その変化を探っていくことが考えられる。どう変わったのか、きっかけは何か、どんな言動でその変化が分かるかなどといった発問をしていきながら、表現の工夫や物語特有の構成などに触れさせていき、内容を確かにとらえさせていきたい。

字数の制限については上の中学1年生と同様に機会を多く持たせる必要がある。また、すぐ書き出すのではなく、書く必要のあることをメモ程度に書いてから、字数に合わせた量にまとめることが大切である。字数が増えればより具体的に書き表す必要が出てくる。逆に字数の制限があるからこそ、簡単に書いたり(抽象)、詳しく書いたり(具体)を意識することができると思う。

視点2 **必要な情報をテキストから取り出し、様式に即して文章を書き換えることができるか。**

[中学1年生 大問2] PDF

竹パン作りの感想文から作り方の情報を取り出し、説明書の様式に合わせて書き換える問題

○ 出題のねらい

全体を通して書く必要のある事柄を整理すること

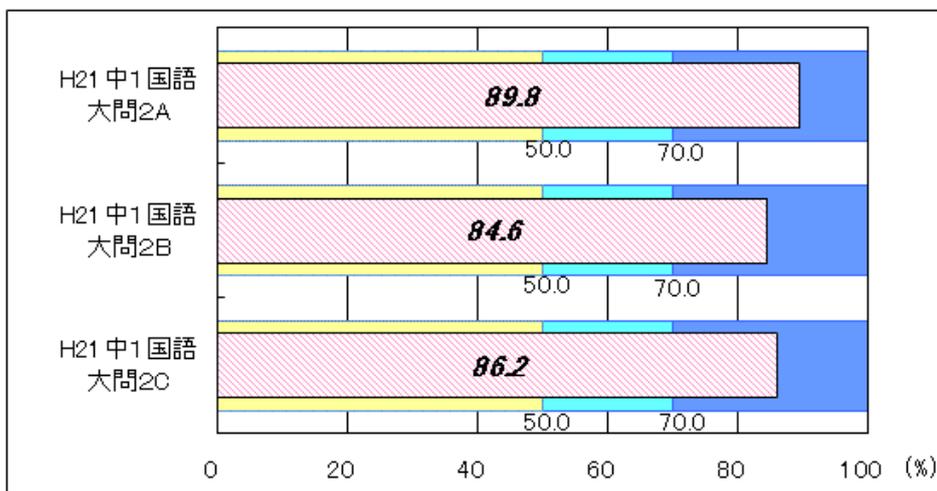


図14 H21年度 中1国語「大問2のABC」正答率

○ 傾向

「十分達成」の期待正答率70.0に対し正答率は3問ともに10ポイント以上上回っている。十分満足な結果となっている。誤答の傾向としては、情報を取り出す時点で作業工程ごとに分けることができなかつたり、説明書の様式に合わせて1文の常体の形で書くことができなかつたりしたというものが多かった。

○ 指導法改善の視点

様式に即して書き換えるという課題の場合、相手や目的、意図といった意識を明確にする必要がある。この設問の場合は、作り方の説明であるという目的が明確である。さらに、説明書という様式を意識する必要がある。「3 作り方」の様式を見てみると、作業が大きく3つに分かれ、それぞれに詳しい作業行程が1行程ずつ常体の形で書かれていることが分かる。それを基に情報(感想)を読む必要が出てくると考える。また、この「感想」から情報を収集するに当たって、文章を順序を意識して読む力や事実と感想・意見を分けて読む力が必要となってくる。また、長い文を短い文に分ける力も必要である。これらの学習活動を行う上では言語活動を有効に使うことが重要であり、相手・目的、意図などの意識、書く対象の様式、それに伴って必要となってくる読み取りの知識・技能を明らかにする必要がある。

[小学5年生 大問1の二] PDF

メモを基にして、新聞記事の様式に合わせて文章を書き換える問題

○ 出題のねらい

必要な情報を適切に収集したり選択したりして、目的に合わせて順序を考えて書くこと

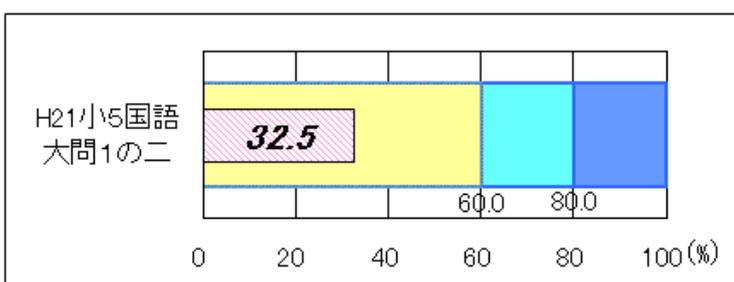


図15 H21年度 小5国語「大問1の二」正答率

○ 傾向

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対し正答率は32.5であり、27.5ポイント下回っている。無回答率は1.3ポイントと低く、多くの児童が記述したものの正答の条件に合わなかったという結果となった。誤答の傾向としてメモの文をそのまま使って書いているものや、メモの文から必要な文を取り出したものの、この記事の文末表現である敬体の形で書き換えられていないものが多く挙げられた。

○ 指導法改善の視点

メモについては、「話すこと・聞くこと」「書くこと」領域では必要な知識・技能として教科書でも数多く取り上げられている。このメモをいかに生かしていくようにするかを、授業の中で適宜指導する必要がある。メモはあくまで収集された情報であり、その中から必要なものを目的や意図に沿って取り出すことが必要である。このような活動は国語科以外の教科・領域の中でも頻繁に行われるものである。メモの書き方やメモ

の生かし方は実際の活動を通して指導をしていくことが大切である。

また、取り出した情報を記事の内容や文末表現等の様式に合わせて書き換えることがここでは必要である。新聞の記事として5W1Hのリード文や順序を表す言葉、文末の表現など、文章を書くときには、目的に即してどのような書き方をすべきかを意識させて指導を行うことが大切である。

視点3 **国語科学習に必要な用語の知識・理解やその使い方・見付け方などを正しく身に付けているか。**

[中学1年生 大問3の四] [PDF](#)

「ぼく」が、とても明るく幸せな気持ちになっていることを情景で表している1文があり、その文の最初の4文字を書き抜く問題

○ 出題のねらい

情景などの表現に着目すること

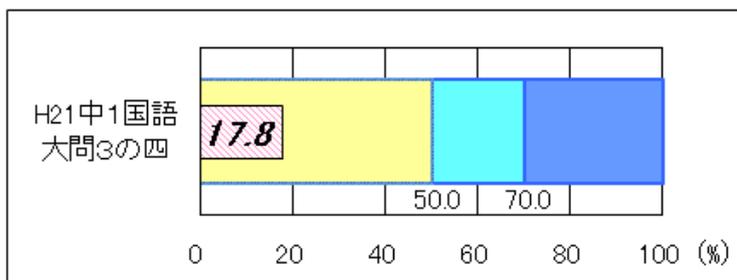


図16 H21年度 中1国語 「大問3の四」正答率

○ 傾向

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対し正答率は17.8で32.2ポイント下回っている。無回答率は14.4ポイントで、高い数値を示している。「情景」という国語科文学的文章の授業で頻繁に出てくる用語であるが、その意味を十分に理解していないことも考えられる。

○ 指導法改善の視点

まず、国語科で使用頻度の高い用語を正しく指導する必要がある。文学的文章の学習においては「心情」「主題」「あらすじ」に加え、それらを読む解くのに必要な「キーワード」「比喩」「慣用句」「擬態語・擬声語」などの用語とその意味、使い方・見付け方など丁寧に指導しておく必要がある。指導する場合には新出時の丁寧な指導と、繰り返しの適宜指導が大切である。

特に「情景」については1つの作品で気付くのは難しい。複数の作品を読み比べながら、文学的文章教材の構造の特徴や描写の比較・対照を行うことで、情景描写についても理解を深めさせたい。

[小学5年生 大問1の五] [PDF](#)

太郎さんが書いた記事の内容を考えて、一年生を歓迎している気持ちを表すような見出しを書く問題

○ 出題のねらい

どのような目的でどのような事柄を書くのかについて自分の考えをもつ

目的に照らして書く必要のある事柄を整理する

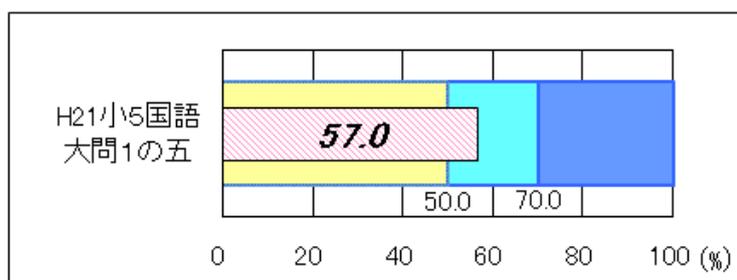


図17 H21年度 小5国語 「大問1の五」正答率

○ 傾向

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対し正答率は57.0で7.0ポイント上回っている。無回答率は8.0ポイントである。ある程度の正答率は示しているが、間違えた児童の多くに「見出し」という言葉自体を理解していないために解答することができなかったという採点者のコメントが数多く寄せられた。見出しという用語を理解していないために、内容とは関係のない言葉をあてたり、長文で書きこんでいる解答があった。

○ 指導法改善の視点

前出の情景と同様に用語の正しい指導が必要である。特に「見出し」については文章を書く際に頻繁に使う知識・技能である。「読むこと」の学習において、小見出しをつける学習が説明的文章を中心に行われるが、段落の要点をまとめる方法を丁寧に指導していく必要がある。また、新聞作り等の学習で見出しの役割を理解させることも大切である。このような知識・技能の習得を行いながら、実際に見出しを付ける活動を仕組み、定着を図りたい。また、見出し、要点、要約、要旨などの学習は相手・目的・意図などの意識をもたせることが重要である。そのような意識があつてこそ、文字数や表現の工夫、使う言葉の吟味などが必要になってくると考える。

エ これからの指導に向けて

今回の調査によって明らかになった課題は「読み取ったことを基にして自分の考えを表現したり、条件や様式に即して書き換える」といったものである。今回と前回の調査における「読むこと」領域の状況を見てみると、情報の取り出しといわれる表層的な読みは着実に身に付いているといえる。しかし、ただ単に文章を読むのではなく、様々な読みの力を駆使して読み深めていく必要が「読みの力」を高める上では必要不可欠である。また、読む対象は物語のようなものから説明文や報告文、図や表などを含むものなど多岐にわたり、内容を的確に読むため知識・技能とその読み取ったことを基に自分の考えをもつことが求められる。さらに、読み取ったこと、考えたことを条件や書式に即して書き換えることは日常に使う言語の力として必要であり、「読むこと」と「書くこと」や「話すこと・聞くこと」と関連を図りながら指導を進めていく必要があると考える。

また、学んだ知識・技能は繰り返し使っていくことで定着していくことがいえる。自然発生的に使う機会が現れると考えるのではなく、意図的に知識・技能を活用する機会を設定する必要があるだろう。国語科においては言語活動がその機会を担っていると考えてよい。そのため、言語活動を設定するに当たって、活用させる知識・技能を意識することはもちろんのこと、今学ばせている知識・技能をこれからの言語活動のどんな場面で繰り返し使わせるか、この言語活動を行うためにはそれまでにどの単元で必要な知識・技能を習得させておくかを考えていく必要がある。

そこで、以下のような点に留意して授業を構築していく必要がある。

ア 読むための読み方、考えるための考え方を丁寧に教える。

文章を読み取り、自分の考えをもたせるためには、

①何を、②どう読めば、③どんなことが分かる、④何に使える、
ということをきちんと指導しておく必要がある。

例えば、あらすじを書くという課題において児童は上の①～④のことが分かっているだろうか。そのために
も以下のようなことを教える必要がある。

○あらすじとはどんなものなのかを知ること。(言葉の意味)

○あらすじは文章のどのような言葉や文に目を向ければよいか知ること。(見付け方)

○見付けた言葉や文をどのようにつなげればよいのか知ること。(作り方)

○あらすじが本の紹介や推薦などに使えること。(使い方)

○書く条件・様式に応じてくわしく書いたり、簡単に書いたりする方法があること。(工夫)

発達段階によって見付け方や作り方、工夫の仕方などは変化してくるが、基礎的・基本的な知識・技能をしっかりと教えることは非常に大切なことである。そして、「この学年でこの力をしっかりと習得させ、定着させる。」という系統的・段階的な指導をしていくことが学校全体の意識として必要である。

イ 根拠を明確にさせて自分の考えをもたせる。

文学的文章を読んで感想をもったり、心情を想像したりする活動は必ず行われる学習活動である。

ここで必要なのは自分なりの感想や考えが必ず文章中の言葉や文に起因するものでなければならないということである。

また、起因する言葉や文だけを取り上げるのではなく、そこから自分の考えにどうつながるのかも考えさせる必要がある。

発達段階によってその要求は変わってくるが、教師が発問によって深めたり、ワークシートでその考えの過程を書かせるような工夫をすることが大切である。

ウ 条件や様式に即して書かせる。

今回の調査における採点コメントには、字数などの条件を意識した書く活動を継続的に行う必要があると答えたものが数多く寄せられた。調査の性質上、記述でしか考えを表現できないからである。国語の授業やそのほかの機会のちょっとした書く活動の中に条件を意識させることは可能である。

- ・字数の制限をする
- ・文の数を制限する
- ・体言止めで書かせる
- ・キーワードを必ず入れさせる等

工夫次第で条件を意識させた書く活動は仕組める。ただし、継続的に長期間行うことが重要である。また、様式については言語活動を有効に利用したい。新学習指導要領で示された言語活動例はそれぞれの様式について学ぶことも目的の一つである。

例えば新聞作りを言語活動に取り上げた場合、新聞として必要なものがいくつかある。新聞名、見出し、リード文などの項目、記事の文字数、文末表現など意識することがたくさんある。新聞を完成させるには、これらの様式に合わせて、短くまとめたり、具体的な詳しい説明をしたり、5W1Hを明確にしたりという知識・技能が必要となってくる。このような条件や様式を意識させることは、自分自身の評価材料にもなる。特に言語活動については、知識・技能を活用させることとその活動がもつ様式を学ぶこととして指導につなげたい。

エ 知識・技能を何度も繰り返し活用させる。

教科書教材を使って指導する一番の目的は、身に付ける知識・技能を効率よく理解することにある。しかし、1度教わったからといってすぐ使えるものではない。何度も繰り返してその知識・技能を使いこなしていくことで定着を図り、思考力・判断力・表現力等を育てていくことになる。

言語活動は知識・技能を活用させることを目的の1つとしており、有効に設定したい。そのためにも、言語活動を行うには次の3点を確認していく必要がある。

- 本単元の教材で学んだ知識・技能の活用が期待できるか。
- 本単元以前で学んだ知識・技能で活用できるものにはどんなものがあるか。
- 本単元で活用した知識・技能を今後活用できる機会はどの単元か。

以上のようなことを確認することは、効果的な言語活動を行う上で非常に重要である。

オ 授業実践に参考となるリンク



授業に役立つ実践研究



授業・自己研修・校内研修のための資料集

最終2009-07-2217

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅲ 各教科等の調査結果の分析 > 小学校社会

小学校社会

すべての評価の観点、内容・領域において、「おおむね達成」の基準を上回った。特に、第5学年においては、「安全を守る」の領域が3ポイント下回った以外は「十分達成」の基準を上回った。中学校第1学年の「社会的な思考・判断」については、平成20年度の同一児童との比較において改善の傾向が見られる。しかし、「社会的な事象についての知識・理解」の正答率は「おおむね達成」の基準を上回っているとはいえ高くはなく、ほとんど変容が見られなかった。思考力、判断力を更に高めていくためにも知識・技能の定着を図る指導の工夫に継続して取り組んでいくことが必要と思われる。

ア 結果の概要

- (ア) 評価の観点別
 - ①小学校5年生

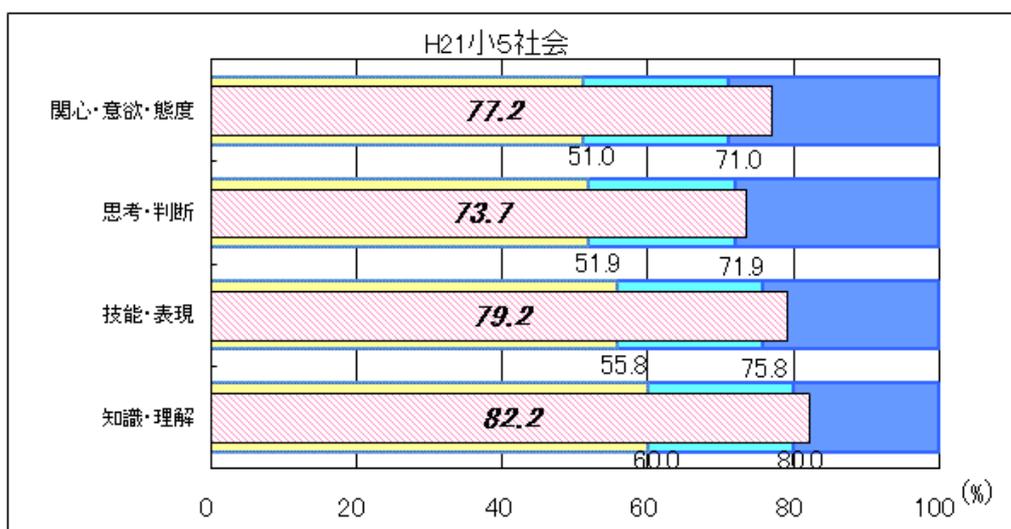


図1 H21年度 小5社会 評価の観点別正答率

すべての観点において「十分達成」の基準を上回っており、良好な結果であった。

- ②中学校1年生

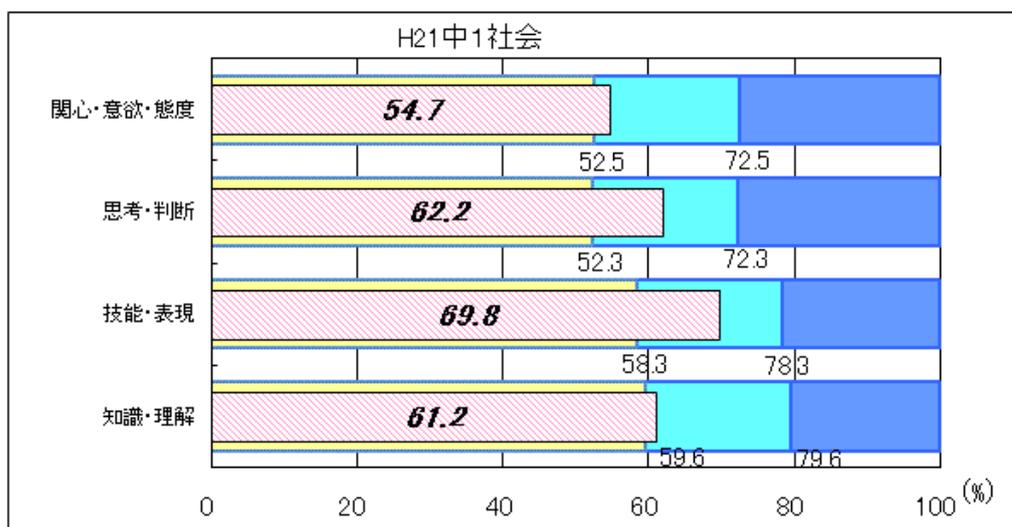


図2 H21年度 中1社会 評価の観点別正答率

すべての観点において「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、特に「社会的な事象についての関心・意

欲・態度」と「社会的事象についての知識・理解」については、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(イ) 内容・領域別

①小学校5年生

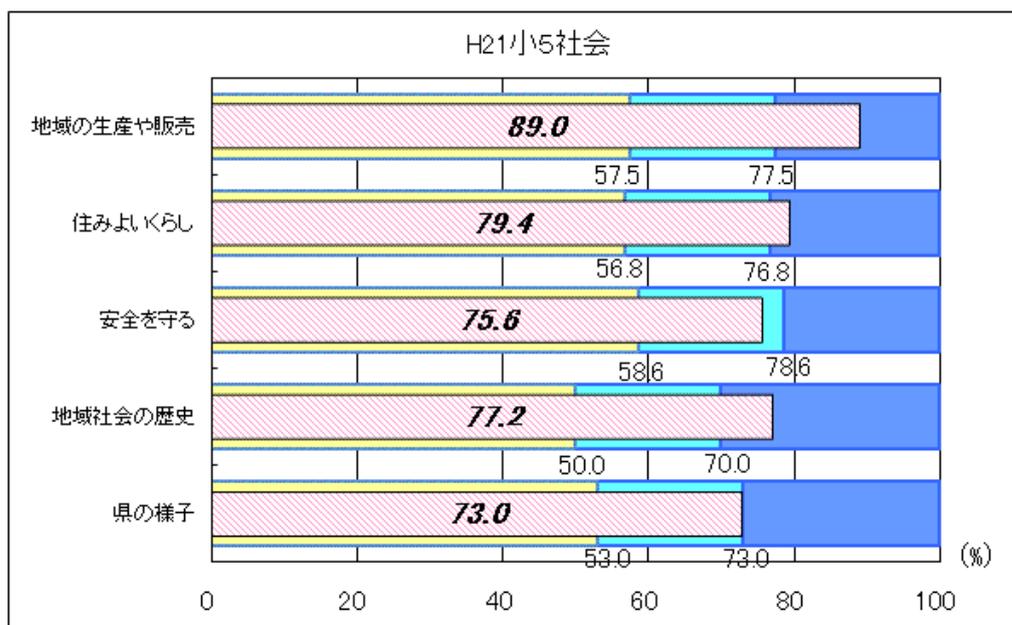


図3 H21年度 小5社会 内容・領域別正答率

すべての内容・領域において「十分達成」の基準を上回るかそれに近い正答率であった。しかし、特に「安全を守る」の内容・領域については、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

②中学1年生

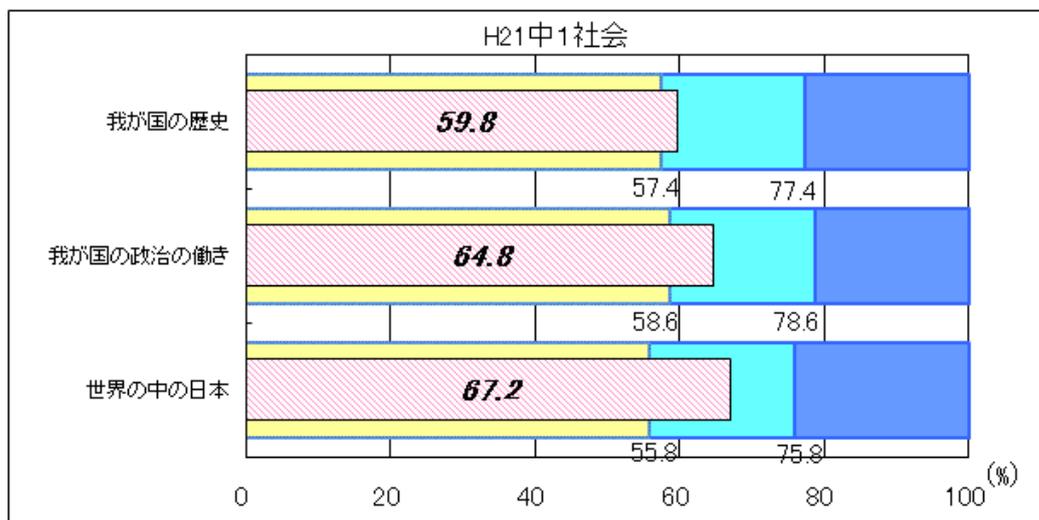


図4 H21年度 中1社会 内容・領域別正答率

すべての内容・領域において「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、特に「我が国の歴史」については、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(ウ) 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題

①小学5年生

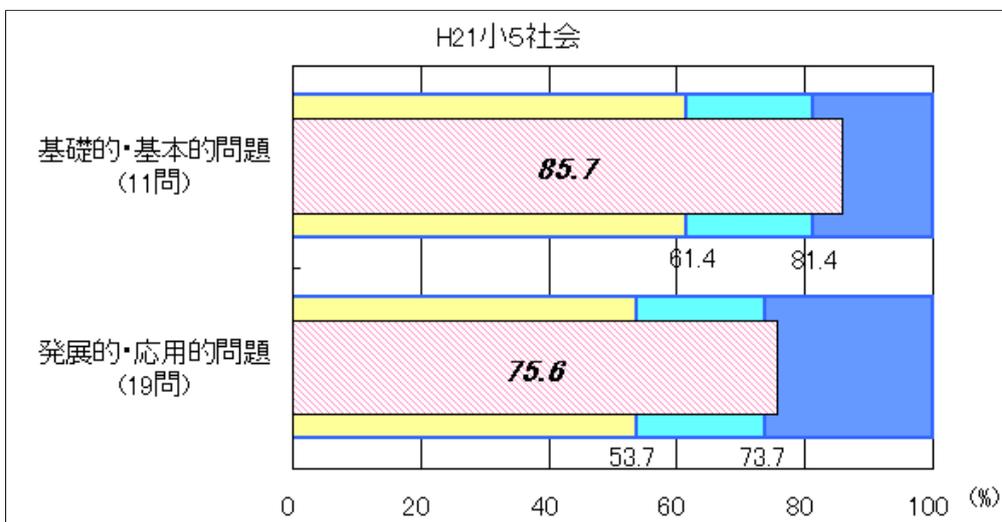


図5 H21年度 小5社会 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題正答率

「基礎的・基本的問題」と「発展的・応用的問題」については、「十分達成」の基準を上回っており、良好な結果であった。

②中学1年生

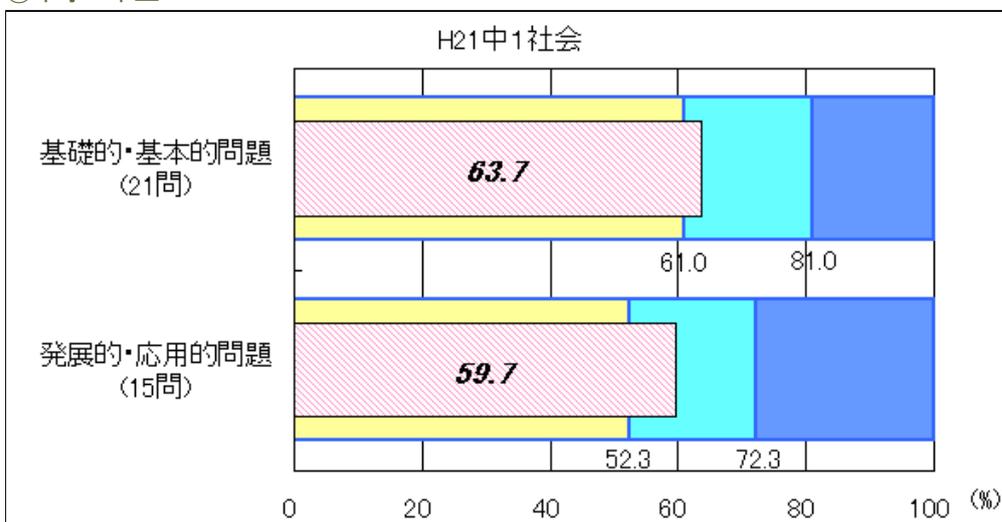


図6 H21年度 中1社会 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題正答率

「基礎的・基本的問題」と「発展的・応用的問題」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、特に「基礎的・基本的問題」については、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(エ) 「活用する力」を問う問題

①小学5年生

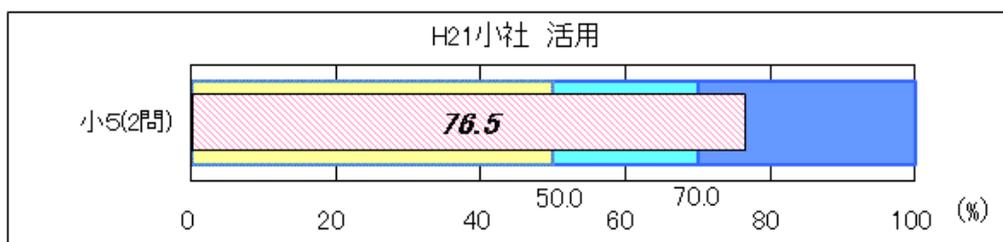


図7 H21年度 小5社会 「活用する力」を問う問題正答率

「活用する力」を問う問題については、「十分達成」の基準を上回っており、良好な結果であった。

②中学1年生

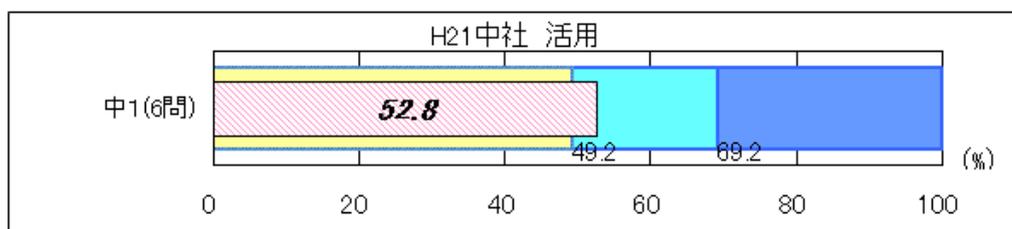


図8 H21年度 中1社会「活用する力」を問う問題正答率

「活用する力」を問う問題については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

イ 経年比較

平成20年度調査において、第6学年の「社会的思考・判断」及び「社会的事象についての知識・理解」が「十分達成」している児童の割合は少なく、「おおむね達成」の基準を下回っている児童の割合が多いことが課題となっていた。その観点について、平成20年度の小学校第6学年と平成21年度の中学校第1学年の同一児童の比較をすることとする。

[平成20年度 小学校第6学年]

評価観点別到達度分布

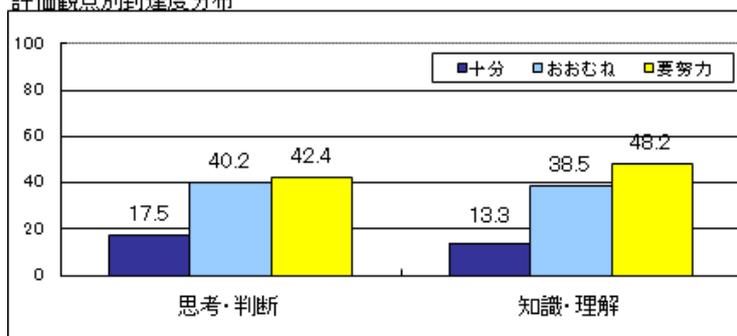


図9 H20年度 小6社会「思考・判断」と「知識・理解」の到達度分布

[平成21年度 中学校第1学年]

評価観点別到達度分布

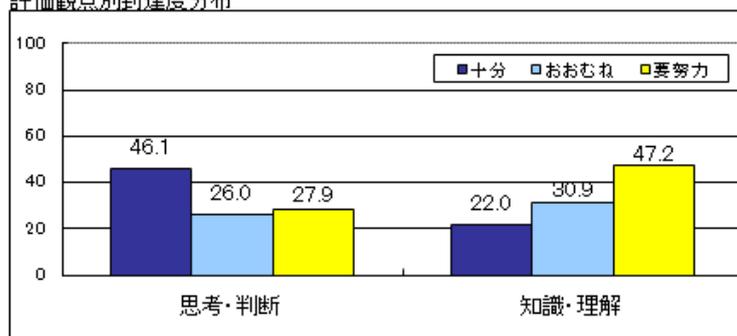


図10 H21年度 中1社会「思考・判断」と「知識・理解」の到達度分布

(ア) 「社会的な思考・判断」の経年比較

平成21年度の「十分達成」の児童の割合は46.1%であり、平成20年度と比べると28.6ポイント上昇し、「おおむね達成」「要努力」の割合がともに減少した。

「社会的な思考・判断」の正答率と無解答率について、記述式と記述式以外(選択式・短答式)に分けて見ることとする。

H20 思考・判断

問題形式	正答率	無解答率
記述式	63.7	7.6
選択式・短答式	45.8	1.5
計	53.9	4.3

H21 思考・判断

問題形式	正答率	無解答率
記述式	52.8	13.9
選択式・短答式	73.2	2.8
計	62.2	8.8

記述式の問題は、正答率が10.9ポイント低下し、無解答率はポイント6.3上昇している。それに対して、記述式以外の問題は、正答率が27.6ポイント、無解答率が1.3ポイント上昇している。このことから、「社会的な思考・判断」については、社会的事象の特色や事象同士の関連などを考える力が高まってきているのうかがえるが、それらを説明したり、自分の考えを記述したりする力の育成が課題として挙げられる。

○採点コメントより

記述式の結果についての中学校の先生のコメントである。

「日常的に文章で書き表す指導が必要である」

「内容については理解できているが、自分の言葉として表現することができないので、今後表現活動を授業の中で取り組んでいきたい」

「目的意識をもって資料を見て、気付きを出し合い、練り合う必要がある。最後に、自分の言葉でしっかり記述、または、話せるよう指導する必要がある」

記述式の問題の結果と採点コメントからも明らかのように、今後も社会的事象について自分の言葉で説明したり自分の考えを論述したりするような言語活動を積極的に取り組んでいく必要がある。

(イ) 「社会的事象についての知識・理解」の経年比較

平成21年度の「十分達成」の児童の割合は22.0であり、平成20年度と比べると8.7ポイント上昇した。しかし、「要努力」の割合は、ほとんど変容が見られなかった。

平成20年度は12月の調査実施だったため、領域としては「1. 我が国の歴史」だけであった。しかし、平成21年度調査においては、「2. 我が国の政治の働き」「3. 世界の中の日本」が加わっている。そこで、「社会的事象の知識・理解」については、領域別に見ることにする。

H20 知識・理解

領域	正答率	無解答率
我が国の歴史	59.2	1.6

H21 知識・理解

領域	正答率	無解答率
我が国の歴史	59.4	7.5
我が国の政治の働き	65.6	2.6
世界の中の日本	62.0	3.6
計	61.2	6.0

「1. 我が国の歴史」だけで比較すると正答率は0.2ポイント上昇しているが、領域2と3に比べると高くはなく、領域1にやや課題が見られる。さらに、「おおむね達成」の割合が低下しているのに対して、「要努力」の割合に変容がないところから、「十分達成」と「要努力」の児童に2極化する傾向が見られる。特に、「参勤交代」や「伊能忠敬」、「大日本帝国憲法」などを短答で答える問題は、正答率も低く、無解答率も15%を超えるという結果だった。

○採点コメントより

「年表等を使って、大きな流れをつかませる指導が必要である」

「時代の流れの中で基礎・基本をしっかり理解させる必要がある」

「資料を読み比べさせるような指導に取り組みたい」

「基本事項の定着のための反復学習や課題の設定に取り組んでいきたい」

「我が国の歴史」の結果についての中学校の先生のコメントである。発達の段階は考慮しなければならないが、小学校での歴史学習を行う上でのヒントになると考える。今後、基礎的・基本的な知識、技能の習得はもちろんのこと、それらを活用させる授業の在り方について工夫をし、更に定着を図っていく必要がある。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の視点 **小5設問毎正答率** **中1設問毎正答率**

平成21年度の課題を受け、「社会的事象についての知識の定着」と「知識や資料を基に自分の考えを説明すること」について検証する。さらに、今年度、正答率が高くなかった問題から「資料と習得した知識を結び付けて考えること」についても検証をすることにした。

視点1 **社会的事象についての知識が定着しているか**

[第5学年大問4の(2)] **PDF**

○ **ねらい**

地域社会における事故から人々の安全を守るための関係機関の働きとそこに従事している人々の工夫や

努力を理解している。

○ 傾向

事件や事故が起きたときの連絡体制について理解しているかを見る選択式の問題である。「おおむね達成」の期待正答率55.0に対し、正答率は55.5であり、0.5ポイント上回っているものの全体的には正答率が高くはなかった。誤答としては、「ア 110番の電話をかけたら、市や町の警察署につながる」を選択する児童が多かった。

○ 指導法改善の視点

「110番に電話をすると通信司令室につながる」という断片的な知識になってしまっていると考えられる。中学年の学習としては、警察署などの施設を見学したり学校にきてもらうなど体験的な学習を大切にしていきたい。また、体験して終わりとならないように、体験後に調べたことを基に話し合うなどの学習を充実させる必要がある。体験ができない場合でも、シミュレーションをしながら児童一人一人が連絡の流れを実際に図にすることで、全体像をつかませるような活動が有効である。その際、「なぜ、市や町の警察署につながらないのか」ということについて考えさせることで、「通信司令室」が警察本部にある意味が理解できるようになると考える。

[第1学年大問1の(1)] PDF

○ ねらい

聖徳太子の政治によって、政治の仕組みが整えられたことを理解している。

○ 傾向

「冠位十二階の制度」のねらいを理解しているかを見る短答式の問題である。「おおむね達成」の期待正答率60.0に対し、正答率は42.1であり、17.9ポイント下回っている。聖徳太子の行った政策としての具体的な内容(役人を家柄ではなく能力に応じて取り立てること)までは十分に理解できていないためと考えられる。

○ 指導法改善の視点

それぞれの時代を代表する歴史上の人物の業績やかかわる出来事について学習する際には、言葉だけの暗記とならないように、内容やねらいに至るまでを理解させなければならない。具体的には、「なぜ、どうして?」という発問を行うことで、時代背景を基に、人物や当時の人々の願いや意図に迫らせることが必要である。それを考えさせたり意見の交流を行ったりすることで、内容やねらいが理解できるだけでなく、その時代の特徴も明確になってくると考える。その際、歴史と児童を近付け、意欲を高めるためにも「もし、自分がこの時代にいたら」「もし、自分が〇〇だったら」という場面設定をし、歴史の中に児童をシフトさせるような手立ても有効である。

[第1学年大問9の(1)] PDF

○ ねらい

公共施設について理解している。

○ 傾向

私たちの地域にある公共施設を8つの選択肢から3つ選ぶことができるかを見る選択式の問題である。「おおむね達成」の期待正答率60に対し、正答率は22.4であり、37.6ポイント下回っていた。完全正答の問題であったことが正答率が低かった理由とも考えられるが、「公共施設」の意味や役割が十分に理解できていないためと考えられる。

○ 指導法改善の視点

この問題に対して、大問9の(2)の公共施設をつくるのに必要な費用としての「税金」を短答式で答える問題の正答率は高かった。つまり、「税金」という用語を知っているだけで、「公共施設」とを関連付けて理解できていないことがうかがえる。そこで、導入の段階で中学年で身の周りの地域の学習を想起させ、「公共施設」の共通点を考えさせることで理解が深まると考えられる。また、教科書や資料集はもちろん、税務署から配布される「私たちのくらしと税」のパンフレットなどの絵やグラフを学習の中で活用していくと効果があると考える。政治の学習は、ややもすると大人の話と感じてしまい、学ぶ意味を見いだしにくい難しさがある。そこで、大問9の(3)にあるように「私たちの町に公共施設をつくるなら」といったテーマで話し合いをさせることで、当事者意識をもって取り組めるような指導の工夫をしていくことが有効である。

視点2 **資料と習得した知識を結び付けて考えることができているか**[第5学年大問2の(2)] **PDF**○ **ねらい**

水資源を確保するための森林の役割について資料を活用しながら考えることができる。

○ **傾向**

森林が「緑のダム」といわれる理由と森林の働きを結び付けて説明することができるかを見る短答式の問題である。「おおむね達成」の期待正答率55.0に対し、正答率は49.7であり、5.3ポイント下回っている。第5学年の正答率の中で唯一「おおむね達成」を下回った問題である。「土の中に」「川に」など文章としては成り立っても、資料2の挿絵と「スポンジのような働き」という言葉を基に「たくわえて(同意可)」という内容に触れていない誤答が見られた。

○ **指導法改善の視点**

まずは、「ダム」の役割を理解させることが大切である。その上で、飲料水を確保し、安定供給を図るためにダムや浄水場の建設だけでなく、雨水を蓄える働きがある森林の保全も計画的に行われていることと関連付ける必要がある。また、この問題のように、「～のように」など中学年の児童が理解しやすいものに置き換えて説明したり児童自身に表現させたりするような言語力を大切にしたい指導も思考力を高めるためには有効であるとする。

[第1学年大問6の(3)] **PDF**○ **ねらい**

立憲政治の確立について考えることができる。

○ **傾向**

自由民権運動に対する政府の対応を説明することができるかを見る記述式の問題である。「おおむね達成」の期待正答率50.0に対し、正答率は20.4であり、29.6ポイント下回っている。さらに、無解答率は28.2と最も高かった。挿絵に「演説会を中止させる警察官」というタイトルを使ったものがあり、それと政府の対応を結び付けられなかったことが考えられる。

○ **指導法改善の視点**

ここで、問われているのは自由民権運動に対する明治政府の対応である。小学校の歴史学習は、人物を中心とした学習であるため、天皇や貴族、武士、政府などの側から見た一面的な理解となる場合がある。そこで、自由民権運動が起こった時代背景やねらいを広い視野から考えさせ、理解させていくことが大切である。また、演説会を中止させる警察官の挿絵についても「なぜ中止させたのか」「だれが中止させたのか」などを問い、政府とのかかわりまで読み取らせていく必要がある。その上で、それを推し進めた板垣退助らの立場からだけでなく政府や人々などかかわる人々の思いを想像させ、吹き出しに書かせるなどのワークシートの工夫が考えられる。

視点3 **知識や資料を基に自分の考えを説明する力が身についているか**[第5学年大問6] **PDF**○ **ねらい**

昔と今の道具の変化から、くらしの変化を説明することができる。

○ **傾向**

洗濯の場面を取り上げ、どのように便利になったのかを「昔」と「今」という言葉を使って説明できるかを見る記述式の問題である。「十分達成」の期待正答率70に対し、正答率は77.2であり、7.2ポイント上回っている。実生活に結び付いた問題であり、2枚の挿絵を見ながら自分の考えを書くことができたので、正答率が高かったものと考えられる。誤答としては、「昔は手作業で、今は機械」という事実のみを記述し、時間や労力などの観点を基に説明できていないものが多かった。

○ **指導法改善の視点**

この学習では、道具そのものの変遷を学習することで終わるのではなく、それに伴って人々の生活がどのように変化してきたかを考えることができるようにすることが大切である。そこで、見学や体験だけで終わるの

ではなく、体験したことやインタビューしたことをまとめたり表現したりする場の設定が必要である。また、昔と今のくらしのそれぞれのよさや大変さを整理していくことで、くらしの変化だけでなく昔の人々の知恵にも気付けさせることができると考える。

○ 採点コメントに見る学校の取り組み状況

「資料を調べたり、家族の話を実際に聞いたりして学習しているので、よく定着しているようだった。」

「社会科資料室に地域から集められた昔の道具が多くあり、実際に見たり使ったりする学習により、体験を通して今の道具の便利さを実感的に理解することができている。」

[第1学年大問12の(3)] PDF

○ ねらい

国際社会の平和や発展のために取り組まなければならないことを考えることができる。

○ 傾向

世界が抱える問題に対して、日本が問題解決のために力を発揮できそうなものを1つ取り上げ、その理由を説明する記述式の問題である。「おおむね達成」の期待正答率45.0に対し、正答率は40.3であり、4.7ポイント下回っている。問題の意味が十分に理解できずに、「自分ができること」という視点から説明したり抱える問題の理由を説明したりする誤答が見られた。

○ 指導法改善の視点

この学習では、国際連合の組織や活動内容を知ることで終わるのではなく、内容に示されている「我が国が世界において重要な役割を果たしていることを考える」ということを意識した指導をすることが大切である。そこで、日本という国の特徴を国際連合や国際交流、歴史といった視点から見つめさせ、日本としてできること、していかなければいけないことについて話し合うような場を持つことが必要である。このような学習を積み重ねることが社会に参画する資質や能力を培うことにもつながると考える。

エ これからの指導に向けて

新学習指導要領においては、社会的な見方や考え方を養い、そこで身に付けた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力につないでいくことが求められている。そのためにも、今回の結果をふまえ、思考力・判断力・表現力の基盤となる知識の定着と、言語活動の充実を図ることが大切だと考える。

ア 当事者意識を持たせる授業づくり

今回の調査の「社会的事象への関心・意欲・態度」を見ると、小学校第5学年は77.2、中学校第1学年は54.7であった。この結果からも明らかなように学年が上がるにしたがって低下する傾向が見られる。これは、学習の対象の広がりや1つの要因として考えられる。つまり、身近な地域や県などについて学ぶ中学年と比べて、高学年は日本の国土や産業、歴史、世界とのつながりなどについて学ぶために、自分の生活との結び付きを感じずらく、切実感をもちにくいということである。そこで、学年を問わず、児童がどうしても考え、判断し、表現したくなるような学習問題をともに作り上げる必要がある。例えば、社会的事象を結び付けていくために地域教材を用いた単元開発をすること、児童の生活と密着した資料や知的好奇心を喚起するような資料を提示していくなど導入の工夫を図ることが考えられる。

イ 知識を定着させるための指導の工夫

知識は、繰り返し使われることで確実なものとなって定着していくものとする。そこで、まずは、問題解決的な学習の中で、見学や観察などの体験活動を充実させたり効果的な資料の提示をしたりすることで、これまでの経験や既習事項と結び付けながら知識を習得させるような手立てが必要である。さらに、社会的事象の特色や関連、意味などについて考えたり話し合ったりする学習の場を設定することによって、知識の定着を図ることにもつながると考える。

また、都道府県名や歴史上の人物名といった知識習得の内容であっても、単に暗記をさせるのではなく学習の流れの中から子どもに必然性をもって取り組ませたりクイズ形式を取り入れるなど楽しみながら定着させていくことも必要である。

ウ 単元の中で意思決定場面を取り入れる

今回の調査においても、自分の考えを文章で記述する設問の無解答率が高かった。今後も社会的な問題を取り上げ、「どうすべきか」「どの解決策が望ましいのか」「どうすべきだったのか」ということについて自分の考えをまとめ、話し合うことにより、お互いの考えを深めていくような学習に積極的に取り組む必要がある。このような意思決定場面を取り入れた学習を設定することで、児童は身に付けた知識や技能を活用したり必然性をもって習得し直したりすることとなる。ただし、自分の考えをまとめさせる際には、「判断と根拠」「原因と結果」「目的と手段」「比較」などを意識させることで、思考力や判断力も高められていくと考える。また、社会的事象と児童の生活を結び付けていく上でも、学習の中で「社会的な価値」を意識させ、社会的な見方や考え方を深めさせていくことも大切である。

エ 日常生活の中での取り組み

社会科の学力は学習の中だけで図られるものではないと考える。日常生活の中で、社会に目を向けるきっかけをつくっていききたいものである。例えば、1分間スピーチで新聞記事やテレビニュースを題材にすること、地図や方位、学習の足跡を掲示、社会科関連の図書コーナーを設置するなど教室環境を整えること、朝の会や帰りの会で教師が意図的に社会的事象に関する話をしたり疑問を投げ掛けたりすることが考えられる。こういった日常の積み重ねが児童の社会への興味や関心を高め、問題を発見していく能力につながっていくと考える。

オ 授業実践に参考となるリンク



最終更新日： 2009-07-22

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > III 各教科等の調査結果の分析 > 小学校算数

小学校算数

ほとんどの評価観点、領域において、「おおむね達成」の基準を上回った。特に、中学校第1学年の基礎的・基本的問題は「おおむね達成」の基準を大きく上回り、平成20年度の同一児童との比較においても伸びが見られ、基礎的・基本的な力が更に定着していることが分かる。しかし、活用を問う問題や発展的・応用的問題の正答率は、小学校5年生、中学校1年生ともに「おおむね達成」の基準は上回っているものの基礎的・基本的問題に比べると高くない。授業に算数的活動を取り入れ、数量や図形について豊かな感覚を育てながら、基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させるとともに、思考力・判断力・表現力を高めることが必要だと思われる。

ア 結果の概要

(ア) 評価の観点別

①小学校5年生

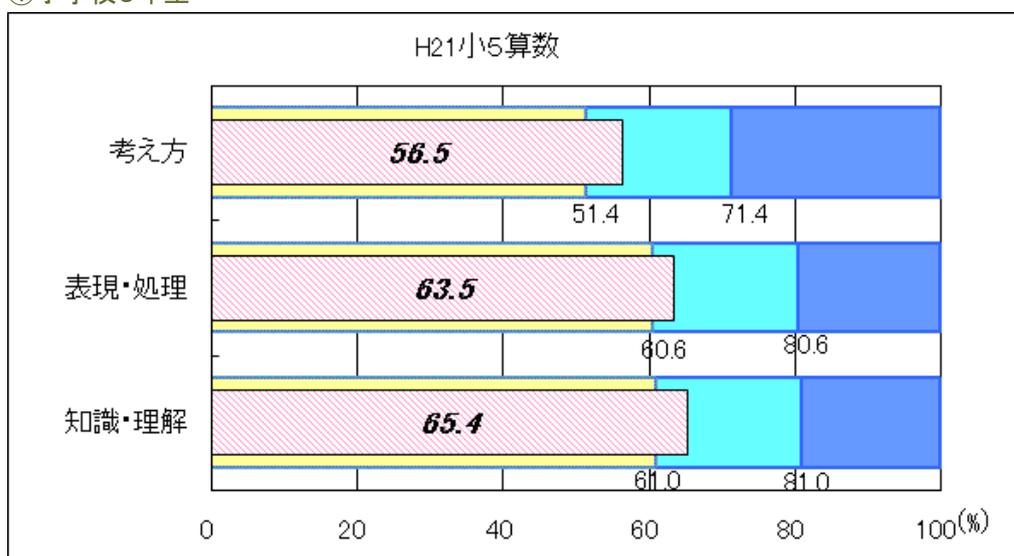


図1 H21年度 小5算数 評価の観点別正答率

すべての観点において「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

②中学校1年生

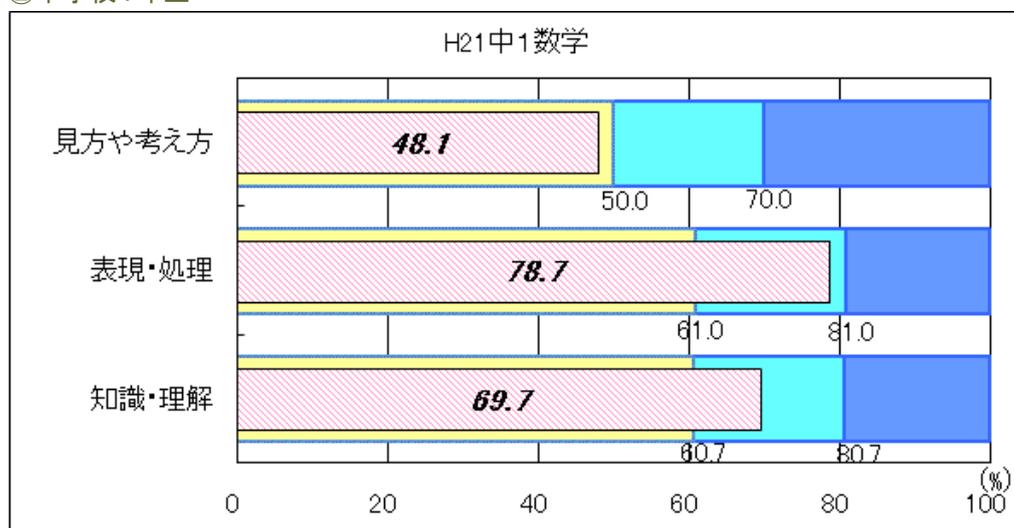


図2 H21年度 中1数学 評価の観点別正答率

「表現・処理」と「知識・理解」は、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「数学的な考え方」は、「おおむ

ね達成」の基準を下回っており、今後の課題である。

(イ) 内容・領域別
①小学校5年生

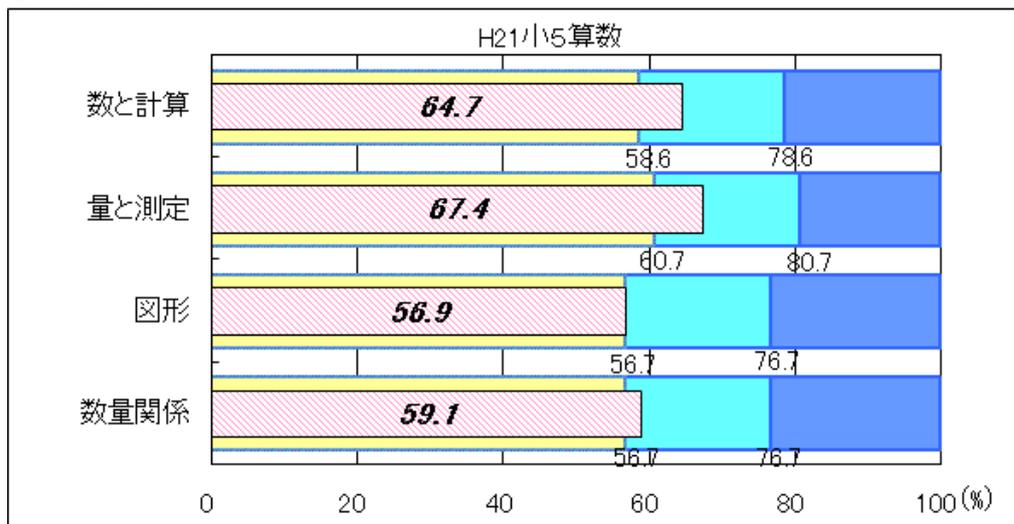


図3 H21年度 小5算数 内容・領域別正答率

すべての内容・領域において「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、特に「図形」については、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

②中学校1年生

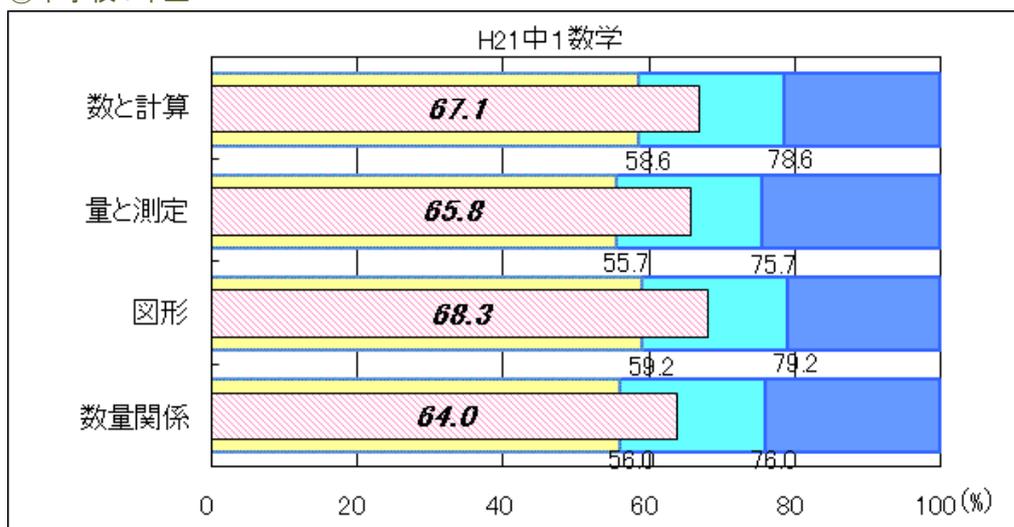


図4 H21年度 中1数学 内容・領域別正答率

すべての内容・領域において「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、特に「数量関係」については、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(ウ) 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題

①小学校5年生

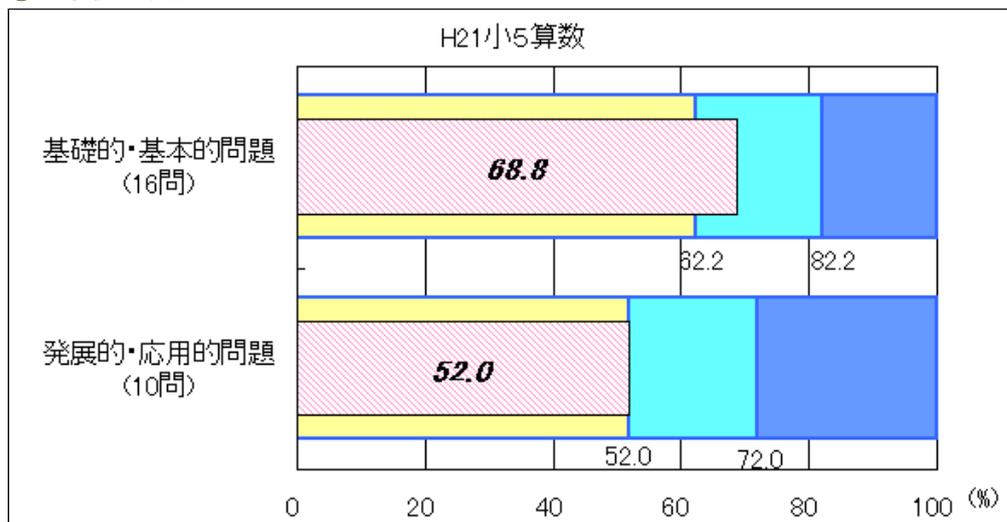


図5 H21年度 小5算数 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題正答率

「基礎的・基本的問題」は、「おおむね達成」の基準を僅かに上回っていて、「発展的・応用的問題」は、「おおむね達成」の基準と同等である。どちらも「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

②中学校1年生

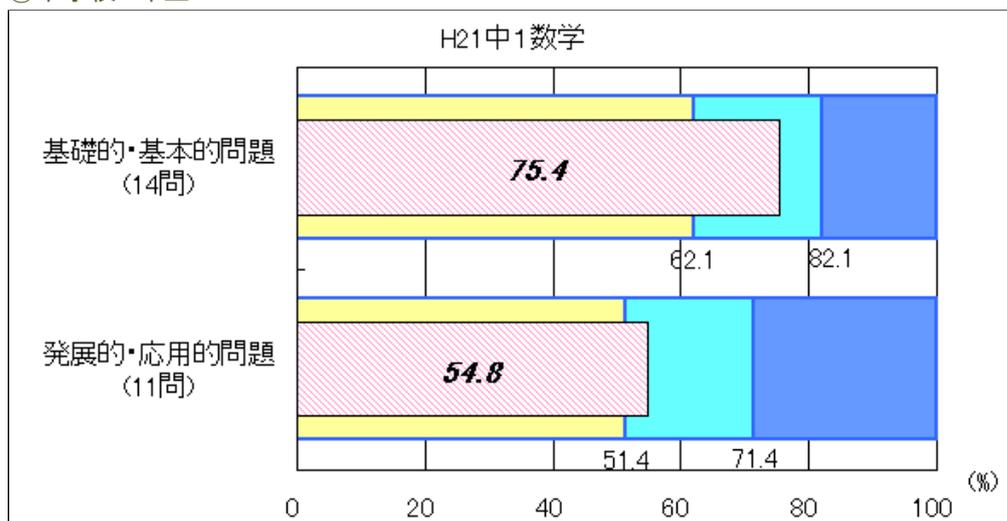


図6 H21年度 中1数学 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題正答率

「発展的・応用的問題」・「基礎的・基本的問題」ともに「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、特に「発展的・応用的問題」については、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(エ) 「活用する力」を問う問題

①小学校5年生

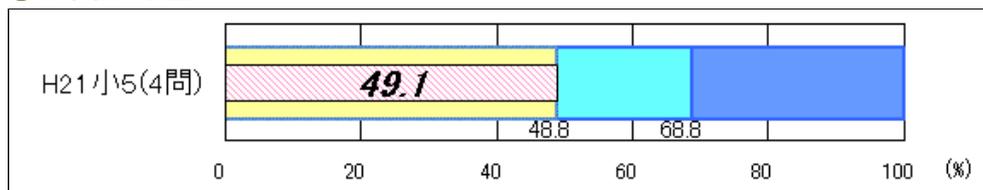


図7 H21年度 小5算数 「活用する力」を問う問題正答率

「活用する力」を問う問題については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

②中学校1年生

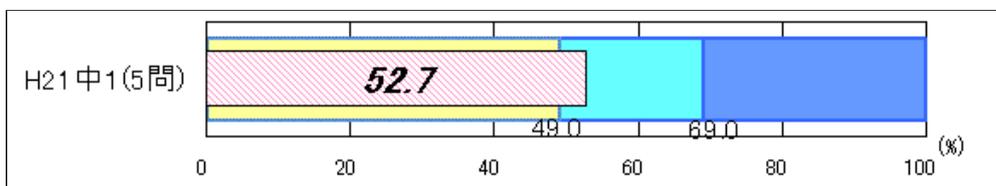


図8 H21年度 中1数学 「活用する力」を問う問題正答率

「活用する力」を問う問題については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

イ 経年比較

(ア) 「基礎的・基本的問題」の経年比較

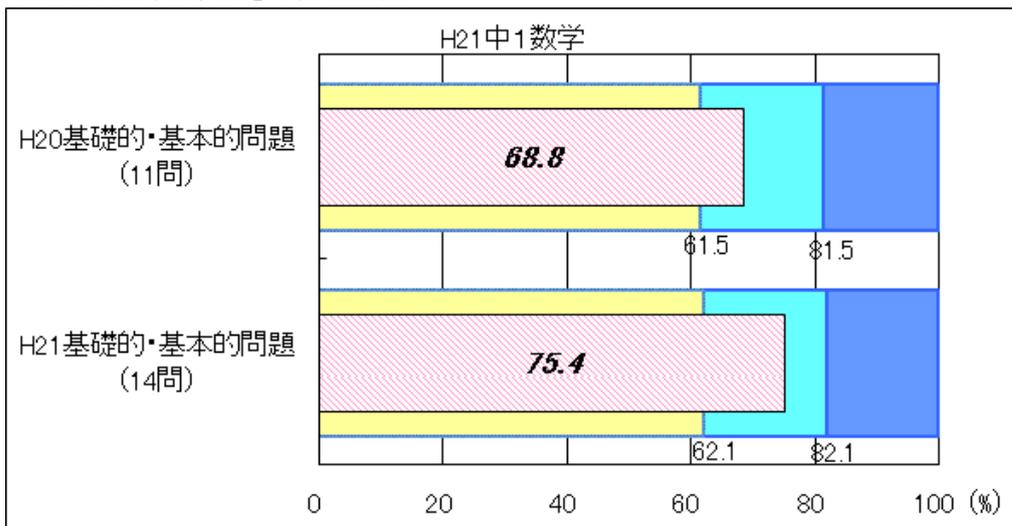


図9 H20・21年度 「基礎的・基本的問題」の経年比較

「基礎的・基本的問題」は、平成20年度は、「おおむね達成」の基準61.5に対して68.8であり7.3ポイント上回っていた。今年度の定着状況を見ると、「おおむね達成」の基準62.1に対して75.4であり、13.3ポイント上回った。経年的な定着状況は、良好で昨年よりも向上傾向にあるといえる。

(イ) 「活用する力」を問う問題」の経年比較

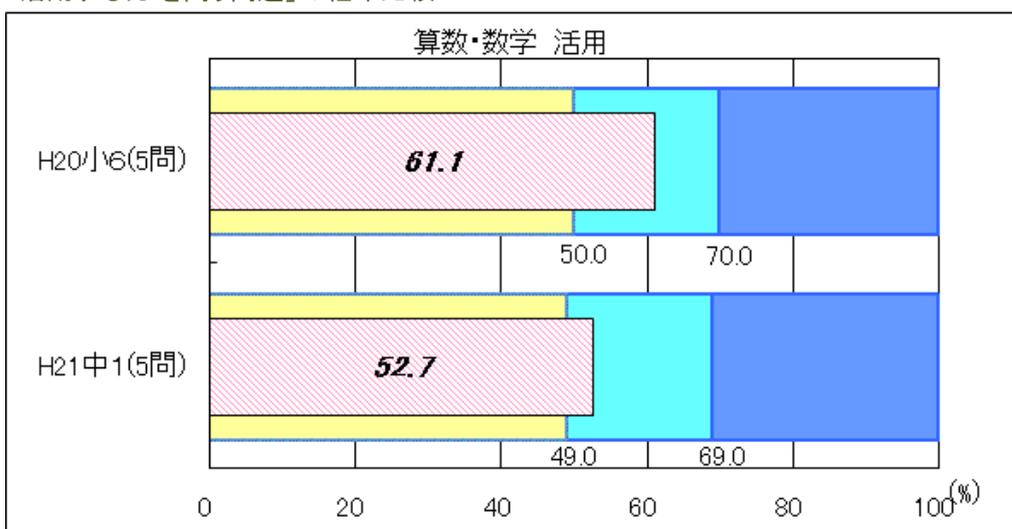


図10 H20・21年度 「活用する力」を問う問題」の経年比較

「活用する力」を問う問題は、平成21年度は「おおむね達成」の基準49.0に対して、52.7であり3.7ポイント上回った。しかし、平成20年度に比べると「おおむね達成」の基準を上回っているポイント数が下がっていて今後の課題である。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の視点 **小5設問毎正答率** **中1設問毎正答率**

今年度正答率が低かった問題と無回答率が高かった問題について「基礎・基本の定着」と「数学的な思考力・判断力・表現力」の2つの視点で検証することとした。

視点1 **図形や数量などについての基礎的・基本的な知識・技能が身に付いているか**

[第5学年大問9の(1)] **PDF**

○ 出題のねらい

分数の表し方を理解している。

○ 傾向

1mの長さが示してある6等分されたテープの色を塗った部分(4/3m)の長さを求める問題で、正答率は、35.6と「おおむね達成」の期待正答率60.0を大きく下回っている。誤答としては、「ウ 4/6」を選択する児童が多かった。これは、「基準(1)」や「単位分数がいくらを表しているか」など分数の意味を十分に理解できていないためだと考えられる。

○ 指導法改善の視点

児童は、「分数は、いくつかに分けたうちのいくつ分」というイメージはもっている。しかし、本問題の誤答傾向から分かるように、「何をいくつに分けたうちのいくつ分」の「何を」に当たる「基準」に目がいかない場合がある。分数の大きさを求める場合、「単位分数」のもととなる「基準」をいつも意識させるような指導をする必要がある。例えば、下図のような同じように6等分したテープ図でも「基準」によって「単位分数」が変わってくるというような問題を経験をさせることで分数のしくみや意味を理解させ、「基準」の大切さに気付かせるような活動を多く取り入れることが大切である。



[第1学年大問1の(3)] **PDF**

○ 出題のねらい

公約数の意味を理解することができ、最大公約数を求めることができる。

○ 傾向

最大公約数を使って、長方形をできるだけ大きい正方形に分けるという問題で、正答率は49.9と「おおむね達成」の期待正答率55.0を下回っている。無回答率も5.6である。最大公約数を生活場面に活用することに課題がある。

○ 指導法改善の視点

示された2つの数から最大公約数、最小公倍数を見付ける問題は児童にとってそれほど難しい問題ではない。しかし、本問題のように、生活場面に最大公約数を活用する問題になるとどう考えていいのかが分からなくなる児童が多くなる。2つの数から最大公約数や最小公倍数を見付ける問題に取り組ませ習熟させるとともに、生活場面に活用するような問題にもたくさん取り組ませ、場合によっては具体物の操作活動を取り入れながら最大公約数、最小公倍数の意味や活用方法を理解させる必要がある。

視点2 **数学的な思考力・判断力・表現力が高まっているか**

[第5学年大問6(1)] **PDF**

○ 出題のねらい

円の半径の大きさを、条件から考えることができる。

○ 傾向

正答率は40.0と「おおむね達成」の期待正答率50.0を下回っている。問題を解決するために与えられた条件を適切に活用することに課題がある。

○ 指導法改善の視点

問題を解決するために必要な条件を考えるような場面を設定することが大切である。条件過多や条件不足の問題、オープンエンドの問題に数多く取り組ませることで、問題解決に直接かかわるような条件が与えられていなくても必要な条件を見付け出そうとする姿勢や演繹的に考える力を培うことができると考える。

[第5学年大問13の(2)] PDF

○ 出題のねらい

二等辺三角形について説明することができる。

○ 傾向

同じ大きさの円の半径を辺にもつ三角形が二等辺三角形になる理由を答える問題で、正答率は29.9と「おおむね達成」の期待正答率50.0を下回っている。無回答率も18.4と高い。小問①の正答率は87.7と高く、2辺が等しいことは理解している児童が多い。しかし、本問題では、「辺アイ辺アウが等しいから」というように、半径が等しいからという理由を述べていない児童が多く、論理的に根拠を述べる力に課題が見られる。

○ 指導法改善の視点

説明が苦手な児童は「何を」「どのようにして」説明したらよいか分かっていない場合が多い。論理的な説明ができるようにするためには、普段から「問い」を大切にしたい授業づくりを心掛けることが大切である。児童の考えに対して、「どうして、そう考えたのか。」と最初は教師が児童に尋ねることから始め、「どのように何を尋ねればいいのか」「どのように答えればいいのか」を学ばせる。そうすることで、次第に児童同士で、「問い」を大切にしたい話し合いができるようになり、論理的に考えを説明することができるようになると思う。

[第1学年大問6] PDF

○ 出題のねらい

単位量あたりの考えを用いて、取れ高を求めることができる。

○ 傾向

サツマイモの取れ高を比べるために、1kgあたりの面積で考えようとしている太郎と1㎡あたりの重さで考えようとしている花子のどちらかを一方を選択し、説明の続きを記述する問題で、正答率は43.5と「おおむね達成」の期待正答率45.0とほぼ同じであるが、無回答率は16.3と高い。筋道を立てて論理的に説明することに課題がある。

○ 指導法改善の視点

本問題では、太郎と花子が出している数値が何を表しているのかを記述することが必要である。自分で理解していることでも、それを相手に伝えるためには「何を」「どのように」記述すればよいかを考え、論理的に表現する力が必要である。授業中に児童が考えを述べる時、問われていることに対して適切に答えられているかということを常に意識させることが大切だと考える。また、発表する前に自分の考えをノートに記述する活動を取り入れることも効果的である。

エ これからの指導に向けて

新学習指導要領においては、算数的活動を一層充実させ、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付け、数学的な思考力・判断力・表現力を育て、学ぶ意欲を高めていくことが求められている。そのためには、算数の知識を基に発展的・応用的に考えたりする活動や、考えたことを表現したり、説明したりする算数的活動を授業に数多く取り入れることが大切だと考える。

ア 活用できる形で知識・技能の定着を

答えは分かっているにもかかわらずどうしてそうなるのか理由や考え方を説明できない場合は、本当に理解しているとは言えない。また、単に知識として覚えているだけでは、新しい学習や生活場面に活用することができない。授業に算数的活動を取り入れ、基礎的・基本的な知識・技能を活用できるレベルにまで高めることが必要である。指導に当たっては、「見つける活動」、「表現したり、説明したりする活動」、「発展的に考えたり、活用したりする活動」、「調べる活動」、「書いたり作ったりする活動」、「比べる活動」などの算数的活動を課題や指導のねらいに応じて適宜授業に取り入れていくことが大切である。

イ 考えを表現し、説明する活動を通して思考力・判断力・表現力を育てる

考えを表現したり、説明したりする力は、1時間の授業や1つの単元で育つものではない。年間を通して、または学年間の系統性を考え学校全体で計画的に指導をして育てていく必要がある。指導に当たっては、言葉、数、式、図、などを用いて自分の考えを表現する方法や話し合いの仕方を段階的に指導する。最初は教師主導でやり方から教え、次第に児童が自分たちで説明・表現、話し合いができるようにし、児童の発達段階に応じた論理的な説明ができるようにすることが大切である。

ウ 学ぶ意欲を高める指導法の工夫

H21年度の児童・生徒の意識調査では、算数・数学に関して①楽しい②どちらかといえば楽しい③どちらかといえば楽しくない④楽しくない の4段階評価で、①②を合わせた割合が、小学校5年生、中学校1年生ともに80パーセントを上回る高い数値を示している。今後この結果を継続させ、更に算数・数学を学ぶ意欲を高めるためにも次のような指導方法の工夫や改善をすることが大切である。

- 学習のめあてや意義を明確にし、児童・生徒に算数・数学のもつ価値やよさ、有用性を味わわせるような授業づくりを心掛ける。
- 児童・生徒を引き付ける発問の仕方や多様な考えや発展的な考えを引き出すような助言を行う。
- 導入時の問題の提示の仕方、教材や教具の使い方を工夫する。

オ 授業実践に参考となるリンク

最終更新日： 2009-07-22

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅲ 各教科等の調査結果の分析 > 小学校理科

小学校理科

すべての評価観点、領域において、「おおむね達成」の基準を上回った。特に小学校第5学年では、「自然事象についての知識・理解」については、「おおむね達成」の基準58.3に対して78.2と大きく上回った。中学校第1学年では、「科学的な思考」については、「十分達成」の基準77.1に到達しており小学校第5学年中学校第1学年ともに良好な定着状況が見られた。

しかし、中学校第1学年の「観察・実験の技能・表現」については、平成20年度は「十分達成」の基準を上回っていたのに対して、平成21年度の同一児童では、「十分達成」の基準を下回った。「自然事象についての知識・理解」についても、平成20年度は「十分達成」の基準を上回っていたのに対して、平成21年度の同一児童では、「十分達成」の基準を下回った。採点コメントの分析から、特に、「観察・実験の技能・表現」については、中学校では厳密に評価する傾向がうかがえる。新学習指導要領では、小学校と中学校との系統性を重視した内容の構成になっているので、今後は、指導内容の系統性を意識しながら「観察・実験の技能・表現」を高めたり、新学習指導要領で求められる活用する力を育成していくためにも、「自然の事象についての知識・理解」の一層の定着を図ったりする指導の工夫改善に継続して取り組んでいくことが必要だと思われる。

ア 結果の概要

(ア) 評価の観点別

①小学校5年生

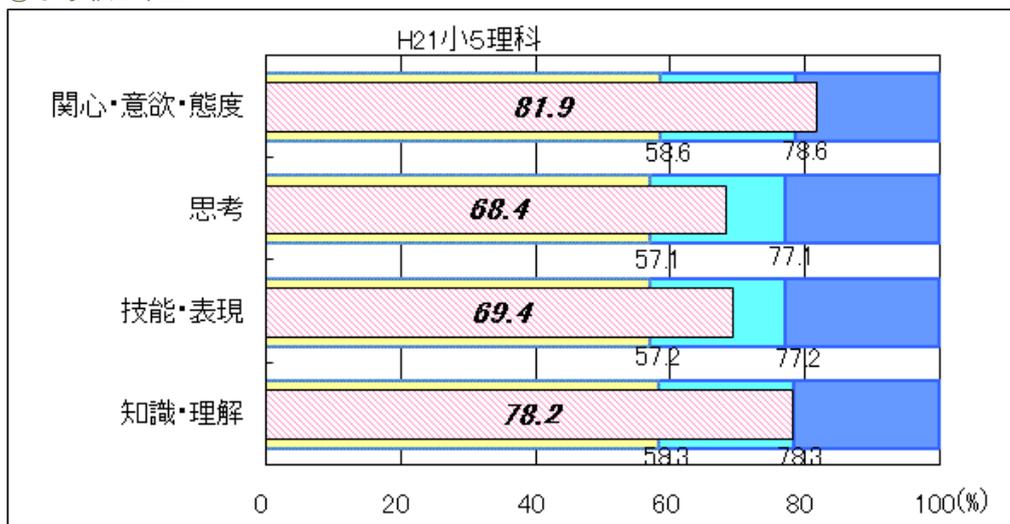


図1 H21年度 小5理科 評価の観点別正答率

「自然事象への関心・意欲・態度」については、「十分達成」の基準の基準を上回っており、良好な結果であった。

「科学的な思考」と「観察・実験の技能・表現」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

「自然事象についての知識・理解」については、「おおむね達成」の基準を大きく上回っており、良好な結果であった。

②中学校1年生

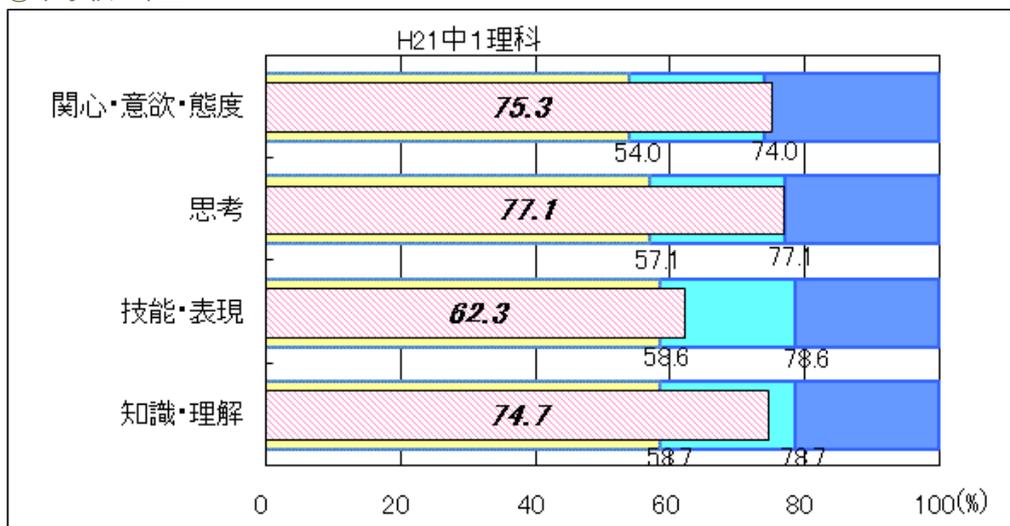


図2 H21年度 中1理科 評価の観点別正答率

「自然事象への関心・意欲・態度」と「科学的な思考」については、「十分達成」の基準を上回っており、良好な結果であった。

「観察・実験の技能・表現」と「自然事象についての知識・理解」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(イ) 内容・領域別

①小学校5年生

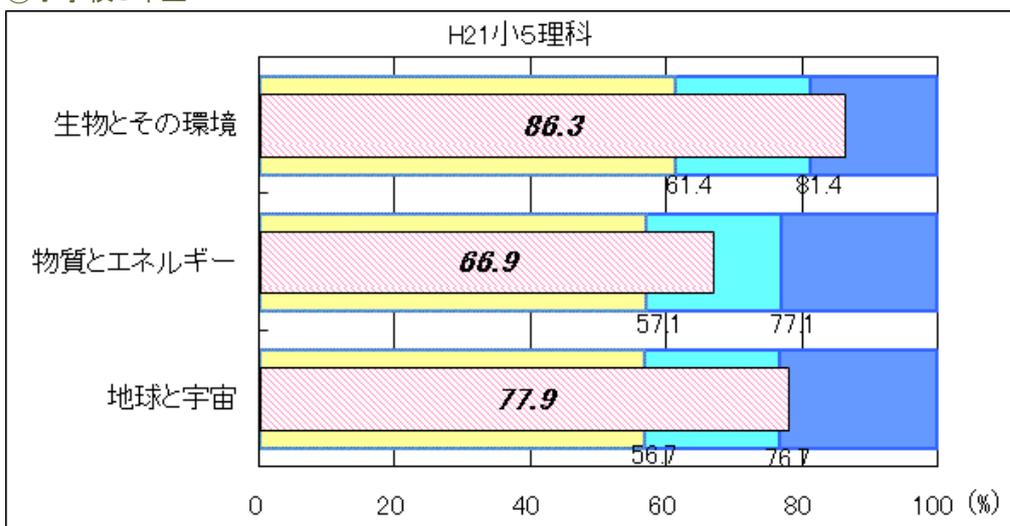


図3 H21年度 小5理科 内容・領域別正答率

「生物とその環境」と「地球と宇宙」については、「十分達成」の基準を上回っており良好な結果であった。

「物質とエネルギー」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

②中学校1年生

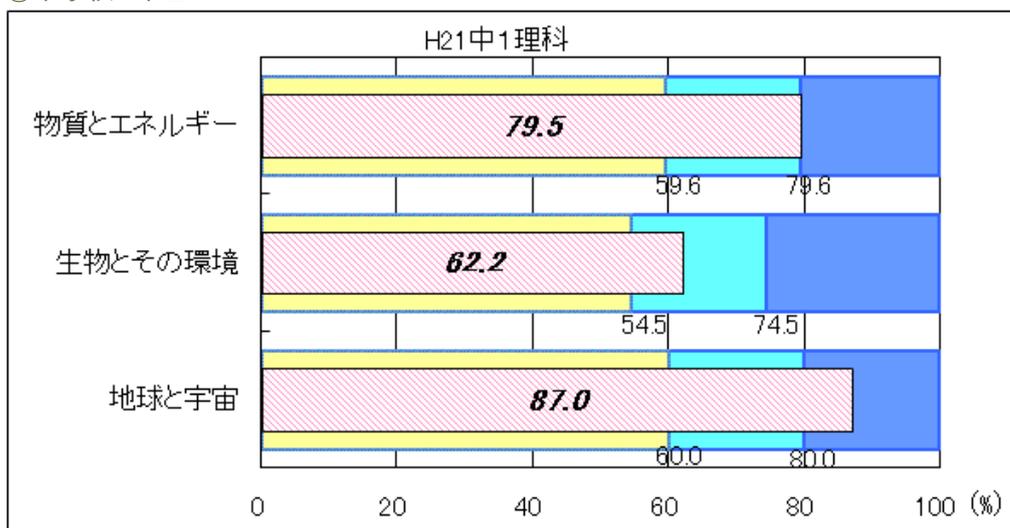


図4 H21年度 中1理科 内容・領域別正答率

「物質とエネルギー」については、「おおむね達成」の基準を大きく上回った。また、「地球と宇宙」については、「十分達成」の基準を上回っており、良好な結果であった。

「生物とその環境」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(ウ) 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題

①小学校5年生

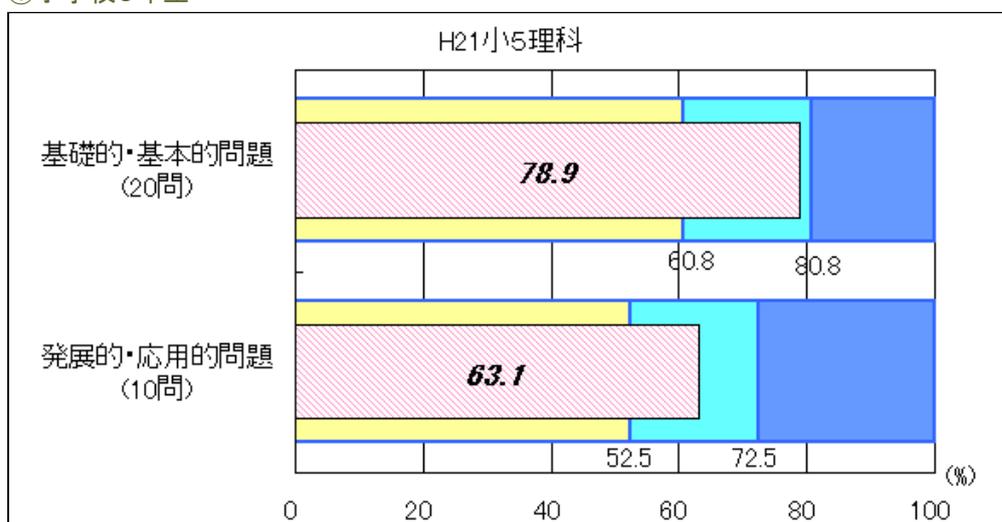


図5 H21年度 小5理科 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題正答率

「基礎的・基本的問題」については、「おおむね達成」の基準を大きく上回っており、良好な結果であった。

「発展的・応用的問題」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

②中学校1年生

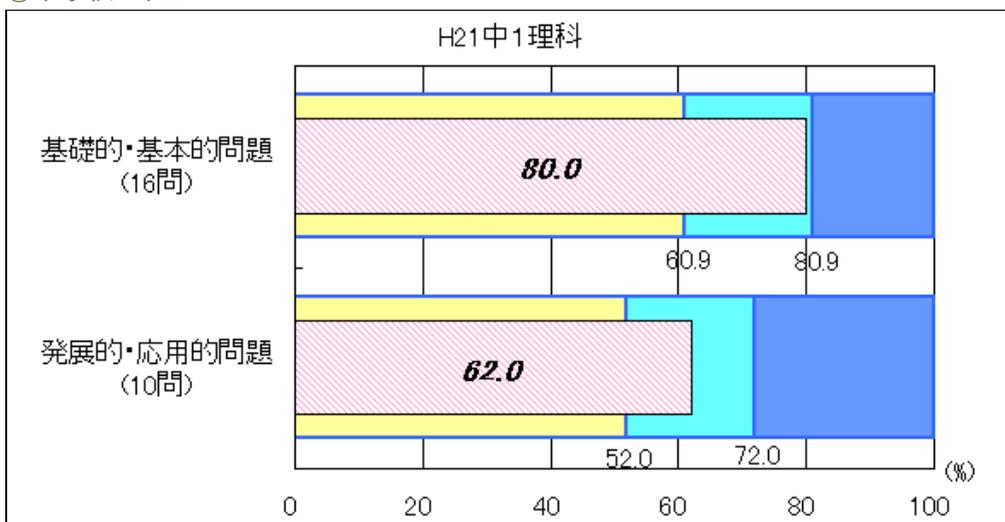


図6 H21年度 中1理科 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題正答率

「基礎的・基本的問題」については、「おおむね達成」の基準を大きく上回っており、良好な結果であった。「発展的・応用的問題」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(エ) 「活用する力」を問う問題

①小学校5年生

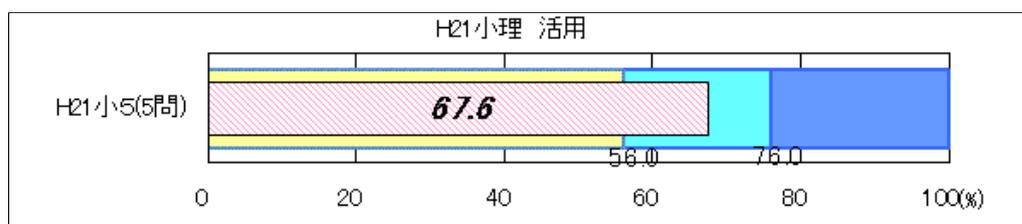


図7 H21年度 小5理科 「活用する力」を問う問題正答率

小学校5年生については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

②中学校1年生

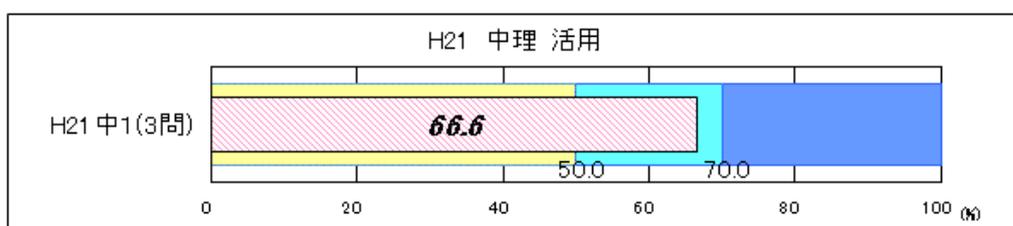


図8 H21年度 中1理科 「活用する力」を問う問題正答率

中学校1年生については、「おおむね達成」の基準を上回っており、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

イ 経年比較

(ア) 「基礎的・基本的問題」の経年比較

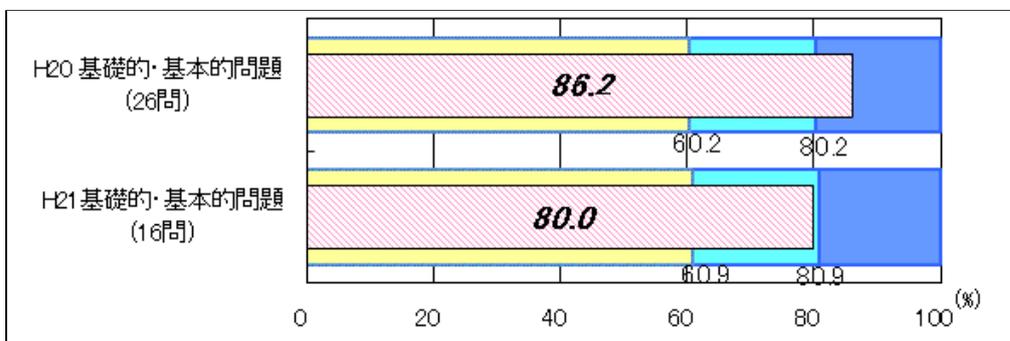


図9 H20・21年度「基礎的・基本的問題」の経年比較

平成21年度は「十分達成」の基準80.9に対して、80.0であり、0.9ポイント下回ってはいるが、平成20年度と比べると、経年的な定着状況は良好であるということがいえる。

(イ) 「内容区分」の経年比較

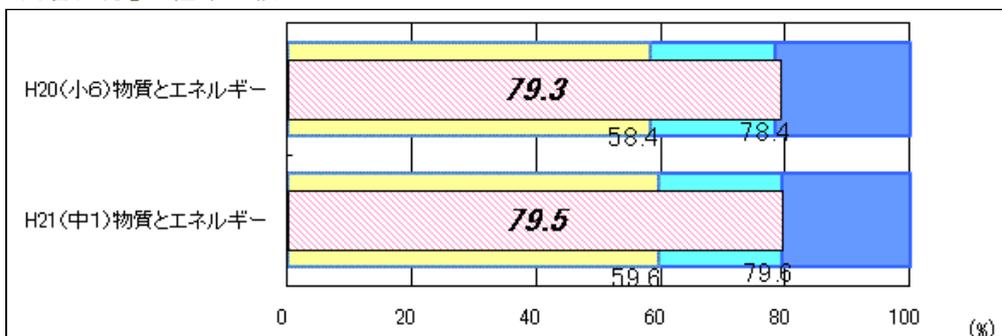


図10 H20・21年度「物質とエネルギー」の経年比較

「物質とエネルギー」については、平成21年度の「十分達成」の基準79.6に対して、79.5であり、0.1ポイント下回っているが、平成20年度と比べると、経年的な定着状況は良好であるということがいえる。

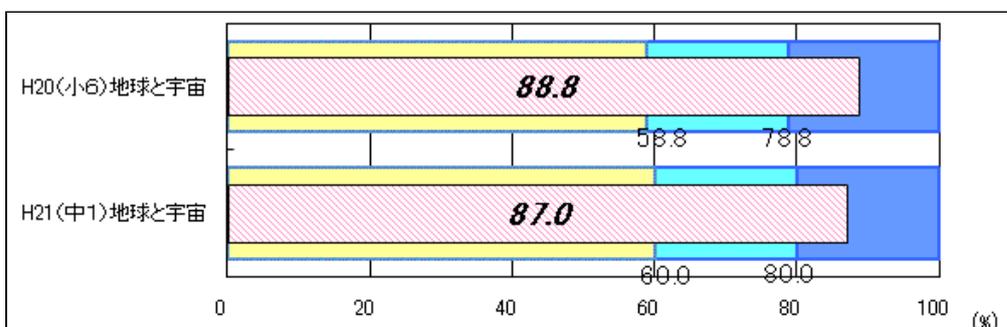


図11 H20・21年度「地球と宇宙」の経年比較

「地球と宇宙」については、平成21年度の「十分達成」の基準80.0に対して、87.0であり、7.0ポイント上回っており、平成20年度と比べても、経年的な定着状況は良好であるということがいえる。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の視点 **小5設問毎正答率** **中1設問毎正答率**

平成21年度の課題を受け、「自然事象についての知識・理解」と「観察・実験の技能・表現」について検証する。さらに、新学習指導要領で重視されている「知識や技能」の活用状況についても検証することとした。

視点1 「自然事象についての知識・理解」の習得ができているか

[小学校第5学年大問3の(3)] [PDF](#)

○ ねらい

閉じ込めた空気は圧し縮められるが、水は圧し縮められないことを理解している。

○ 傾向

「十分達成」の期待正答率75.0に対して正答率が81.3であった。

○ 指導法改善の視点

空気を固い筒の中に閉じ込めて力を加える実験や、水を固い筒の中に閉じ込めて力を加える実験を繰り返し行い、その実験の結果、空気と水のかさの変化の違いがはっきりと理解できていたために高い正答率であったと考えられる。実験を通して空気や水の性質について実感を伴った理解ができていると考えられる。

[小学校第5学年大問3の(2)] [PDF](#)

○ ねらい

閉じ込めた空気は、圧されるとかさ小さくなり、元に戻ろうとする性質があることを理解している。

○ 傾向

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して正答率が46.4であった。

○ 指導法改善の視点

実験によって、空気を固い筒の中に閉じ込めて力を加えることで、「手応えの変化」を十分に感じ取ることができていると考えられる。手応えを調べる活動に終始するのではなく、その実験が、「空気のかさの変化」を調べていることを意識させる発問の工夫がひうようである。また、実験の結果、手を離してももとの位置まで戻らないことを詳しく観察させるなど観察の視点を「手応えの変化」から「空気のかさの変化」に変える工夫が必要であるとする。

[中学校第1学年大問6の(3)－①] [PDF](#)

○ ねらい

血管の中を血液が流れていることを理解している。

○ 傾向

「十分達成」の期待正答率80.0に対して正答率が87.7であった。無回答数168(2.0%)。

○ 指導法改善の視点

小動物の観察によって、人の体のつくりと似て血管には血液が流れていることの理解ができていたことが、記述式の問題形式ながら無回答率2.0%と低いことから推察される。そのために高い正答率であったと考えられる。

[中学校第1学年大問6の(3)－②] [PDF](#)

○ ねらい

血液の循環によって酸素、二酸化炭素、養分、水分、不要物などが運ばれることを理解している。

○ 傾向

「おおむね達成」の基準が50.0に対して正答率が49.4であった。無回答数405(4.8%)。

○ 指導法改善の視点

記述式の問題形式ながら無回答率は低い。血液が酸素や養分を運んでいることの理解はできていることが、採点コメントに寄せられているが、3つ目の解答が思い浮かばなかったようである。現行の学習指導要領では、多面的に追究する活動を通して問題解決の能力を育成することを、新しい学習指導要領では、要因や規則性、関係を推論しながら調べることで問題解決の能力を育成することが示されている。どのようときに心臓の動きが活発になるのかについてを考えたことを基に、血液が全身をめぐることでどのような働きを行っているのかについて思考する学習場面を意図的に設定し、知識の定着を図るような指導の工夫が必要であるとする。

視点2 「観察・実験の技能・表現」の習得状況について

[小学校第5学年大問4の(1)ア] [PDF](#)

○ **ねらい**

空気を冷やしたり温めたりして、かさの変化を調べ、記録することができる。

○ **傾向**

「十分達成」の期待正答率80.0に対して正答率が92.0であった。

○ **指導法改善の視点**

空気を熱する実験を行い、その結果を明確に理解していたために高い正答率であったと考えられる。実験を通して温度変化による空気の変化について実感を伴った理解ができていると考えられる。

[小学校第5学年大問4の(1)イ] **PDF**

○ **ねらい**

空気を冷やしたり温めたりして、かさの変化を調べ記録することができる。

○ **傾向**

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して正答率が42.5であった。

○ **指導法改善の視点**

空気を冷やす実験を行い、シャボン液の動きから空気のかさが小さくなっていることについての理解はできていると考えられるが、シャボン液がどのように変化するのかを細かく観察できていなかったことが、採点コメントとして寄せられていた。観察した記録について発表させたり話し合わせたりするとき、いくつかの記録を比較させて相違点を見付けさせる場面を取り入れながら「観察・実験の技能・表現」を高めていくような指導の工夫が必要であると考えられる。

[中学校第1学年大問5の(1)] **PDF**

○ **ねらい**

酸性の水溶液によってとけたものを取り出すための実験方法を考えることができる。

○ **傾向**

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して正答率が58.7であった。

○ **指導法改善の視点**

理科でも、これまでの学習で学んできたこと(既習事項)を基に実験方法を考えさせ、結果についての見通しをもたせることができる。実験方法を考えさせたときに、児童なりの根拠を基にしながら結果の見通しを時間を掛けて話し合わせながら、実証性や再現性などについて話し合ったり検討したりすることを意識させる指導へと転換していく工夫が必要であると考えられる。

視点3

「知識や技能」の活用状況について

[小学校第5学年大問3の(4)] **PDF**

○ **ねらい**

空気の性質を利用したもののしくみを考えることができる。

○ **傾向**

「十分達成」の期待正答率70.0に対して正答率が73.0であった。無回答数46(0.6%)。

[小学校第5学年大問4の(2)の③] **PDF**

○ **ねらい**

学習した空気の性質をつかって温度計のしくみについて考えることができる。

○ **傾向**

「おおむね達成」の期待正答率55.0に対して正答率が28.9であった。無回答数844(9.9%)。

○ **指導法改善の視点**

新学習指導要領には、第4学年では自然の事物・現象を働きや時間などと関係付けながら調べる問題解決

の能力を育てることが示されている。大問3の(4)では、空気に外から力が加わったこと、空気のかさの変化が起きていることが示されていて、関係付けやすくなっているために高い正答率となっていると考えられる。それに対して大問4の(2)の③では、「温度が上がったから」「温度が下がったから」という解答が多かったことがコメントとして寄せられている。また、無回答率も9.9パーセントと高くなっている。このことから、「温度変化」と「赤い液のかさの変化」を関係付けながら解答することができなかつたために低い正答率となっていることが考えられる。

学んだことをキーワードとして示し、関係付けを意識させながら仕組みを考えさせる指導の工夫が必要であると考える。

エ これからの指導に向けて

児童が、知的好奇心や探究心をもって、自然に親しみながら目的意識をもった観察・実験を行うことができるようにすることで、科学的に調べる能力や態度を育てることを目指していきたい。

そのためにも、基礎的・基本的な知識・技能の定着、科学的に考えることや表現することができる力の育成、観察・実験の一層の充実、理科を学ぶことの有用性を実感することなどを意図的に仕組み、科学への関心を高めることが大切である。

ア 知識や技能を習得させること

新しい学習指導要領は中学校との内容の系統性を意識して単元の構成となっている。小学校の学習が中学校の学習の基礎となることを意識しながら、中学校の学習のために必要な知識や技能についての確実な定着を図る指導の工夫が必要であると考える。目的を明確にしたり、関係付けたりするための「キーワード」を必要に応じて示しながら、話し合わせたり検討し合わせたりしながら、自然事象に対しての知識や理解、観察・実験の技能・表現を確実に習得させる指導を行うことが必要である。

イ 知識や技能を活用を意識すること

新しい学習指導要領には、学習内容の系統性が示されている。そこで、これまで以上に既習事項を振り返らせて、既習事項を活用させる指導の工夫が必要であると考える。既習事項を振り返り活用させることで思考力を育成したり、一層の知識の定着を図ることができると思う。

また、理科の学習内容と実社会・実生活との関連を重視しながら、理科の学習での知識や技能を実社会・実生活へ活用させる学習活動を意図的に仕組むことでも、一層の知識の定着を図ることができると思う。このように理科の学習が次の学習や実社会・実生活の中で活用できることを児童に味わわせることによって、理科を学ぶことの意義や有用性を実感させるような指導を行うことが必要であると考える。

ウ 問題解決の能力を育てること

新しい小学校学習指導要領解説理科編には、それぞれの学年を通して育成する問題解決の能力が示されている。各学年の問題解決の能力を常に意識しながら指導を行うことが必要である。各学年の問題解決の能力は上の学年の問題解決の能力の基盤になるものであることに留意するとともに、中学校における学習につながっていることも意識して指導を行う必要がある。

オ 授業実践に参考となるリンク



2009-07-23

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅲ 各教科等の調査結果の分析 > 中学校国語

中学校国語

基礎的・基本的問題において、「おおむね達成」の基準53.4に対して、72.6であり、19.2ポイント上回っており良好な定着状況が見られた。しかし、発展的・応用的問題では、「おおむね達成」の基準43.0に対して42.6であり、0.4ポイント下回っている。特に、「活用する力」を問う問題では「メモの中から必要な内容を選び、伝えたい事柄が明確に伝わるように書く」は「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して28.8であり、「目的に応じて論の展開をおさえ、正確に理解する」は「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して37.2であり、課題が見られた。「活用する力」をはぐくむためには、指導内容と言語活動の密接な関連を図ることが大切である。ねらいの明確な言語活動を通して思考や言語操作から体得させる授業を設定する必要があると考えられる。

ア 結果の概要

(ア) 評価の観点別

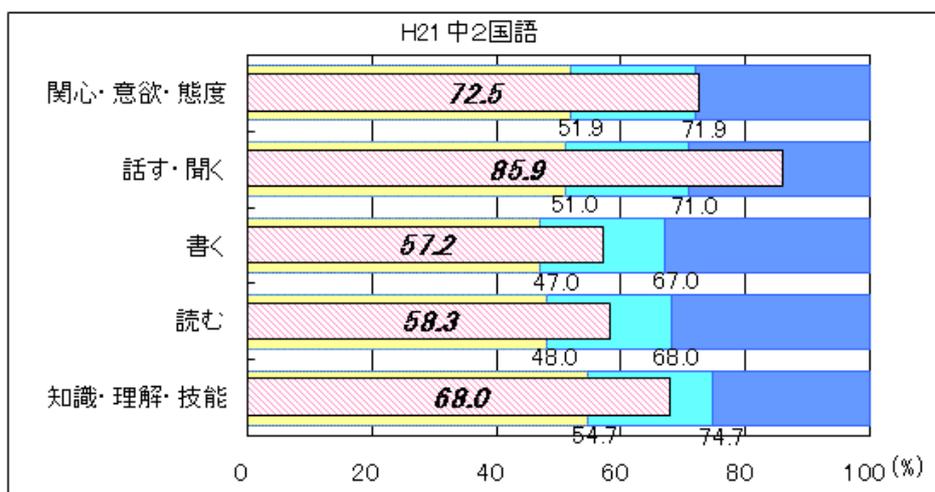


図1 H21年度 中2国語 評価の観点別正答率

「関心・意欲・態度」と「話す・聞く」については、「十分達成」の基準を上回っており、良好な結果であった。「書く」と「読む」と「知識・理解・技能」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(イ) 内容・領域別

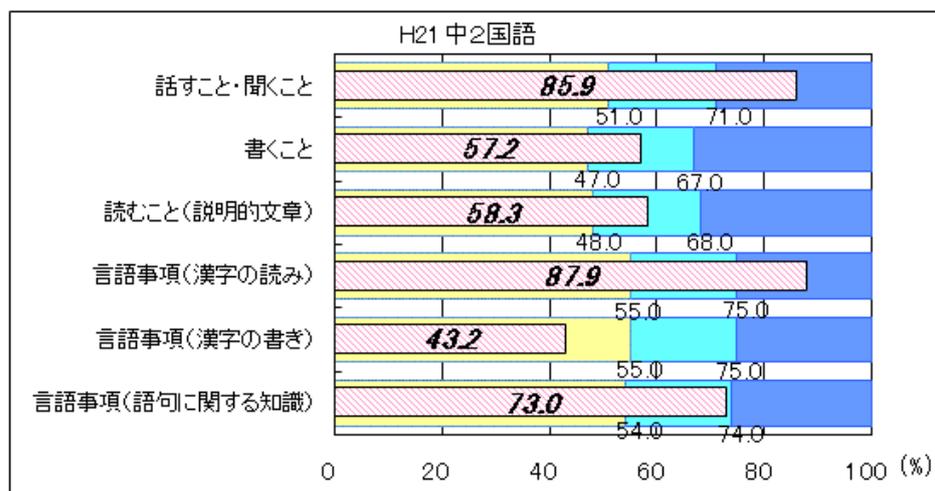


図2 H21年度 中2国語 内容・領域別正答率

「話すこと・聞くこと」と「言語事項(漢字の読み)」については、「十分達成」の基準を上回っており、良好な結果であった。「言語事項(語句に関する知識)」についても「十分達成」に近い正答率であった。しかし、「書くこと」と「読むこと(説明的文章)」については、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要

である。特に、「言語事項」(漢字の書き)については、「おおむね達成」の基準を下回っており、課題である。

(ウ) 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題

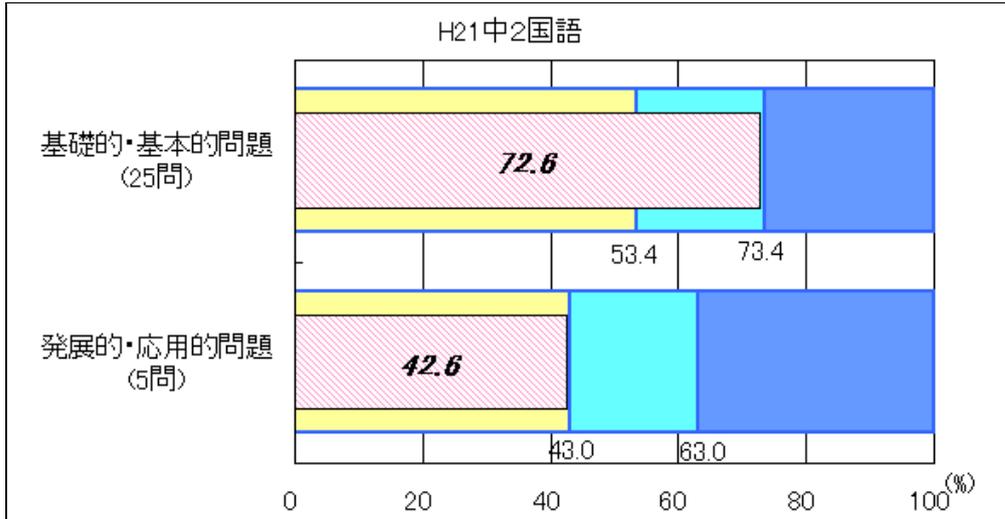


図3 H21年度 中2国語 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題正答率

「基礎的・基本的問題」については、「十分達成」の基準に近い正答率であった。しかし、「発展的・応用的問題」については、「おおむね達成」の基準を下回っており、課題である。

(エ) 「活用する力」を問う問題

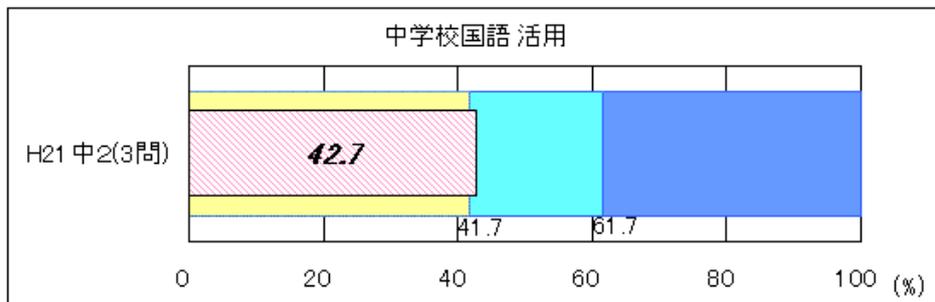


図4 H21年度 中2国語 「活用する力」を問う問題正答率

「活用する力」を問う問題については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

イ 経年比較

平成20年度中学校第1学年と平成21年度中学校第2学年の同一生徒の比較を行う。

(ア)

国語科全体での経年比較

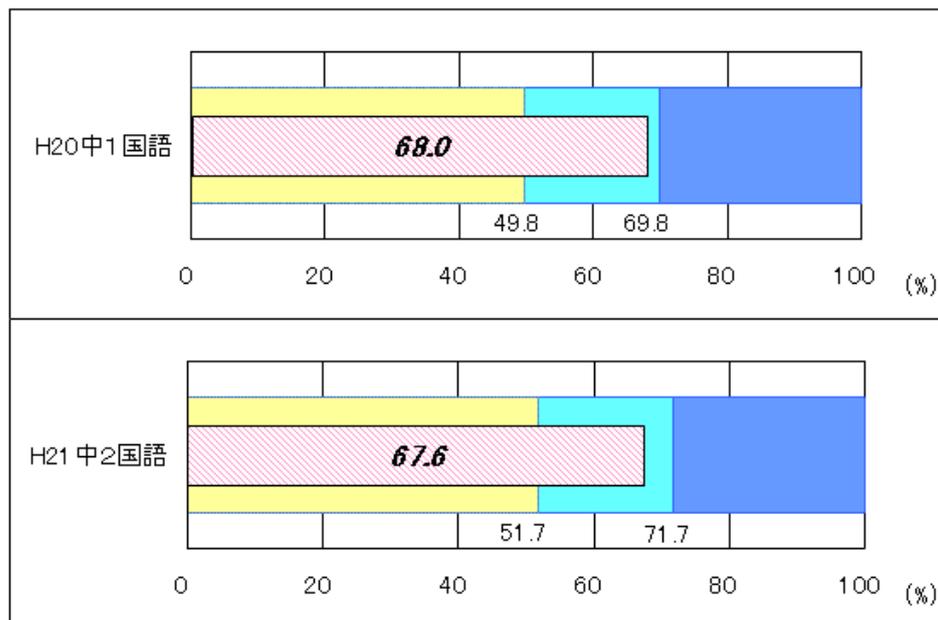


図5 H20・21年度 国語科全体での経年比較

平成20年度と平成21年度の正答率を比較すると、どちらも「おおむね達成」の基準を超えているが、平成21年度の方が難易度が下がっているにもかかわらず正答率が下がり下向き傾向である。

(イ)

基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題での経年比較

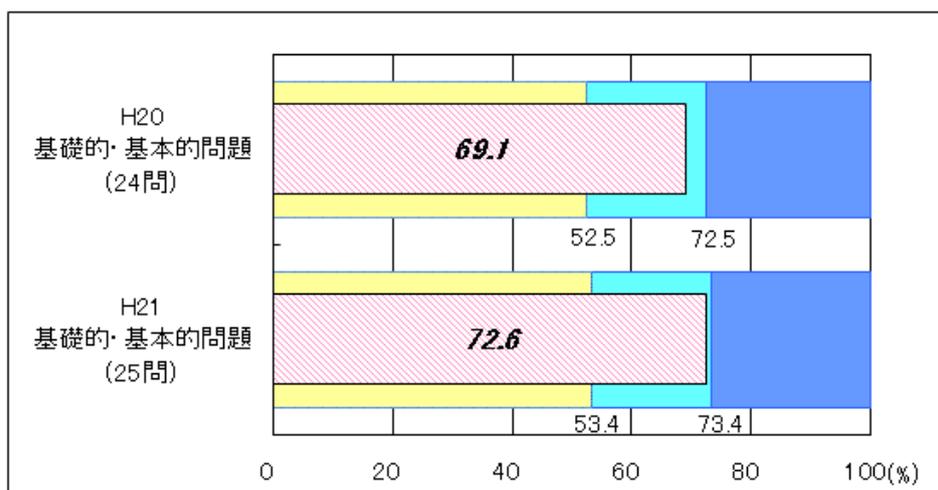


図6 H20・21年度 「基礎的・基本的問題」の経年比較

「基礎的・基本的問題」については、平成20年度は「おおむね達成」の基準52.5に対して69.1ポイントであり、16.6ポイント上回るものの、「十分達成」の域に及んでおらず、課題が見られた。しかし、平成21年度は「おおむね達成」の基準53.4に対して72.6であり、19.2ポイント上回り、「十分達成」域まであと0.8ポイントと迫っている。「基礎的・基本的問題」についての定着状況は上向き傾向で良好であるといえる。

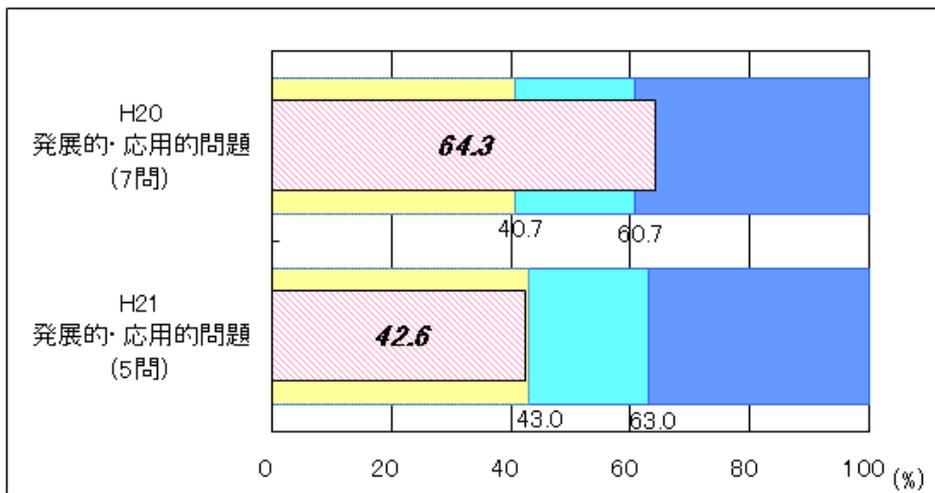


図7 H20・21年度「発展的・応用的問題」の経年比較

「発展的・応用的問題」については、平成20年度が「十分達成」の基準40.7に対して64.3で13.6ポイント上回っており、「十分達成」域であった。これに対して平成21年度は「おおむね達成」の基準43.0に対して42.6であり、0.4ポイント下回っている。大きく後退しており、課題である。

(ウ) 「活用する力」を問う問題

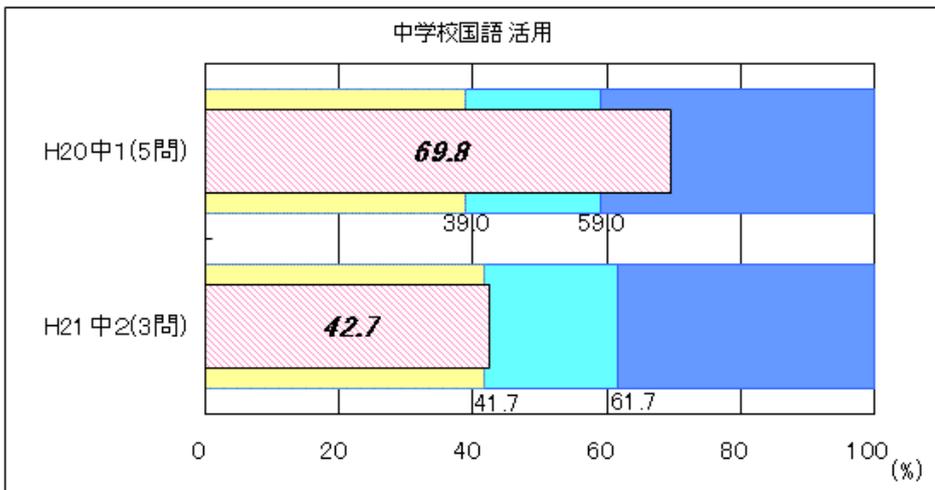


図8 H20・21年度「活用する力」を問う問題の経年比較

「活用する力」を問う問題についても平成20年度が「十分達成」の基準59.0に対して、69.8と10.8ポイントも上回っていたが、平成21年度は「おおむね達成」の基準41.7に対して42.7と、わずか1ポイント上回るのみであり課題が見られる。

(エ) 内容・領域別の経年比較

①「話すこと・聞くこと」

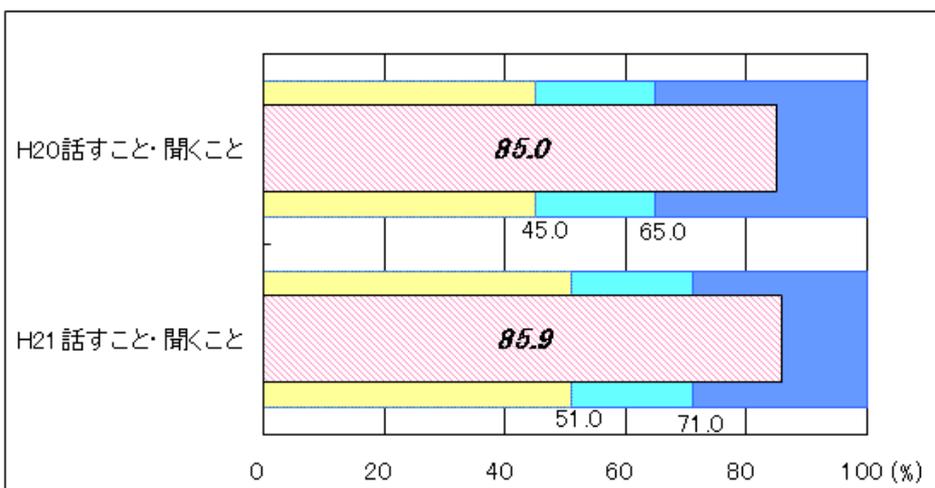


図9 H20・21年度「話すこと・聞くこと」領域の経年比較

「話すこと・聞くこと」については、昨年に続き良好な定着状況であるといえる。今後も引き続き、目的や話し

合いの方向に沿って効果的に話したり、相手の意図を考えながら聞いたりする能力の育成を重視し、意図的・計画的に指導する機会を設けていくことが大切である。

②「書くこと」

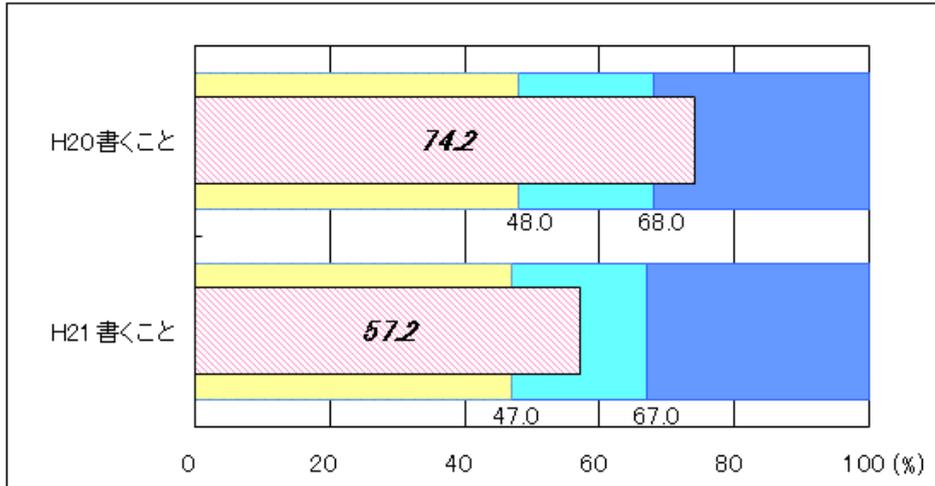


図10 H20・21年度 「書くこと」領域の経年比較

「書くこと」については、前年度の定着状況が「十分達成」の68.0に対して74.2であり、6.2ポイント上回っており「十分達成」の域であった。しかし、本年度は「おおむね達成」の47.0に対して57.2であり、10.2ポイント上回っているものの、「十分達成」の域には及ばない結果となった。前年度2年生も経年的な定着状況は低くなる傾向であったが、本年度はその傾向が顕著となっている。生徒が、目的や条件に合わせて、情報を取り出し、情報を基に表現したりすることに不慣れであることがうかがえる。中には、条件の理解ができない、あるいは答え方が分からないという生徒も少なからずいるのではないかとと思われる。

③「読むこと」

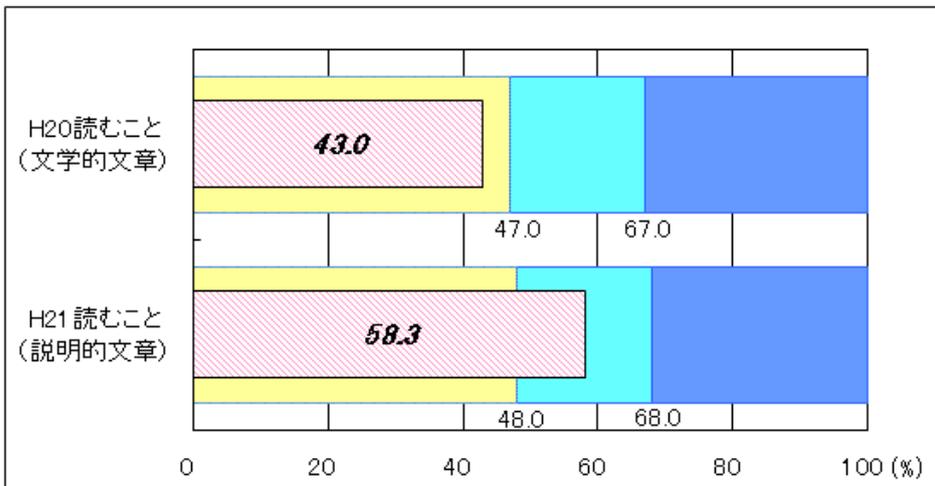


図11 H20・21年度 「読むこと」領域の経年比較

「読むこと」については、前年度が文学的文章、本年度が説明的文章と、文種の違いはあるが、前年度の定着状況が「おおむね達成」の基準47.0に対して43.0であったのに対し、本年度は「おおむね達成」の基準47.0に対して58.3と11.3ポイント上回っており、上向き傾向である。

④「言語事項(漢字の書き)」

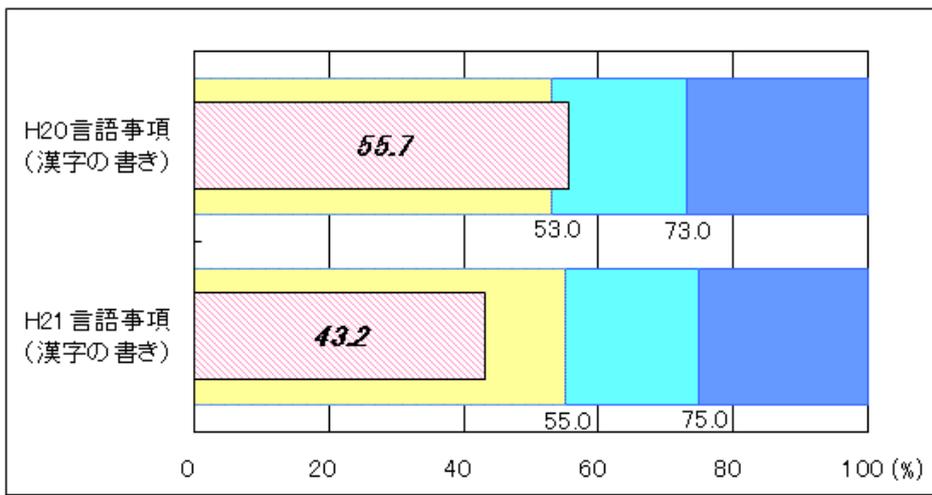
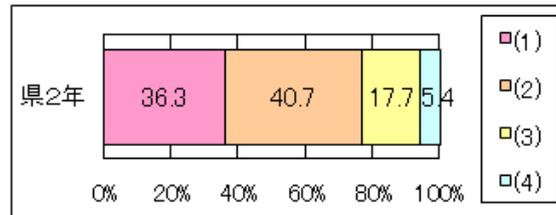


図12 H20・21年度「言語事項」領域の経年比較

(16)新しい漢字の読み方や書き方を身につけるように努力していますか。

	県2年
(1)そうしている	36.3
(2)どちらかといえばそうしている	40.7
(3)どちらかといえばそうしていない	17.7
(4)そうしていない	5.4

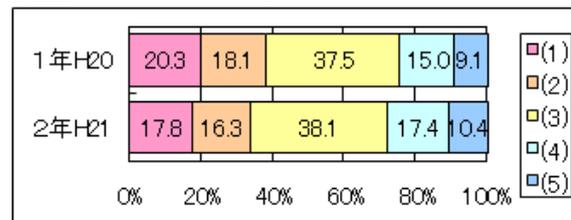


「言語事項(漢字の書き)」について比較すると、前年度は55.7でかろうじて「おおむね達成」の53.0を超えていたが、本年度は、43.2と「おおむね達成」の基準55.0を11.8ポイント下回っている。これは、前年度の(漢字の書き)の問題の中で正答率が極端に低かった問題が「努める」(20.5)1問だったのに対し、今年度は、「臨む」(17.6)、「拝む」(32.3)、「発揮」(40.3)と3問もあることによると考えられる。生徒が同訓異字の書き分けや、意味とつながりにくい漢語の書きが苦手であることが分かる。生徒の意識調査では、「新しい漢字の読み方や書き方を身につけるように努力している」について、「そうしている」「どちらかといえばそうしている」を合わせると77ポイントである。しかし、定着していない結果を見ると、生徒は教師が思うよりも、漢字の学習に困難を抱えていると考えた方がよいようである。

(オ) 「読書(生徒の意識調査)」の経年比較

(36)学校の授業以外に読書をする時間は、まんがや雑誌をのぞくと、1日にどのくらいになりますか。朝読書や昼休みの読書など学校内での読書もふくみます。土曜日、日曜日はそのぞいでください。

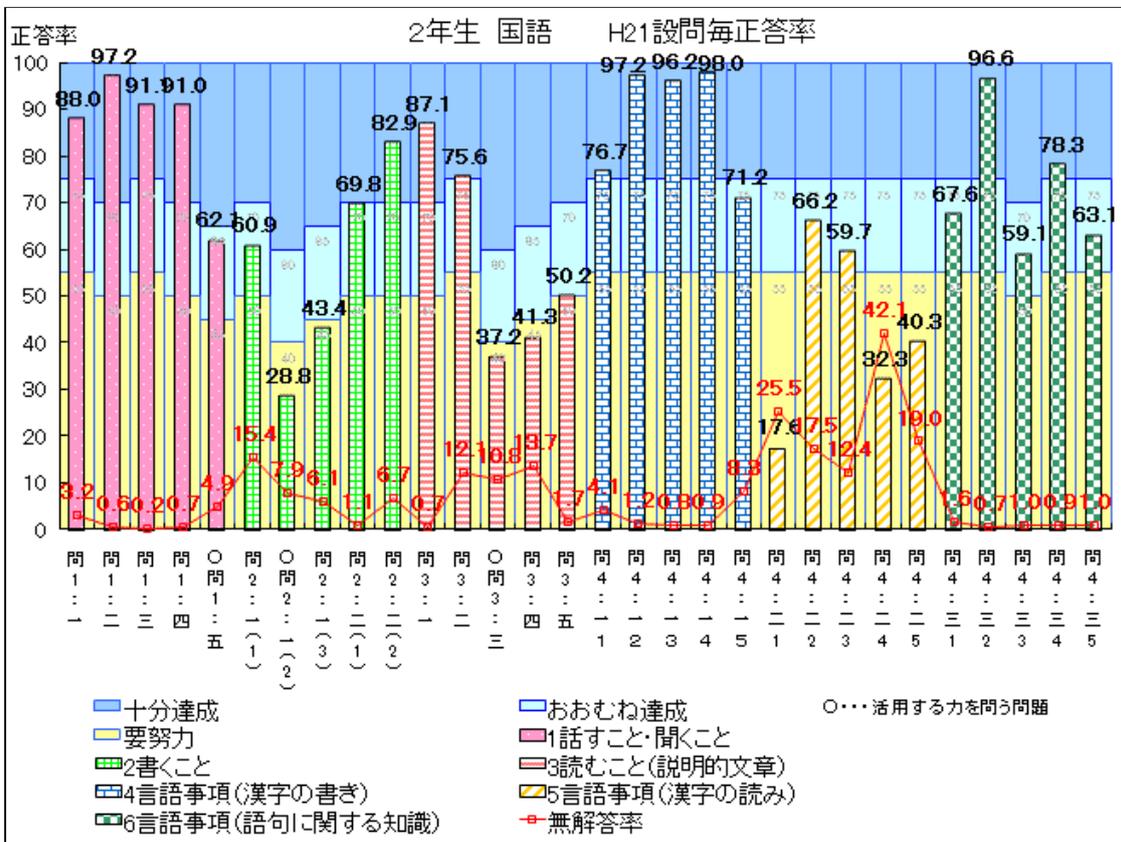
	1年H20	2年H21
(1)まったく読まない	20.3	17.8
(2)10分より少ない	18.1	16.3
(3)10分以上、30分より少ない	37.5	38.1
(4)30分以上、1時間より少ない	15.0	17.4
(5)1時間以上	9.1	10.4



昨年と同じ調査と比較すると、1日の読書時間について、「全く読まない」及び「10分より少ない」と答えている生徒の割合が減少し、「30分以上、1時間より少ない」「1時間以上」の生徒の割合が増加している。若干ではあるが、よい傾向にあるといえる。引き続き読書指導に力を入れたいものである。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の視点 中2設問毎正答率

下のグラフに見られる今年度正答率が低かった問題、または無解答率が高かった問題について、問題ごとの各視点で検証することとした。



視点1 目的や条件に応じて書くことができるか。

[第2学年大問二の小問一(2)] PDF

○ねらい

必要な情報を選んで、「一文目に続くように、残りの内容を接続詞を用いて二文にまとめて」書くことができる。

○ 傾向

接続詞を用いなくて答える、一文目に続かない、二文にまとまっていないなど、提示された条件を満たしていない答えが多く、正答率は大問2の中で最も(全体でも2番目に)低い、28.8ポイントであった。無解答率も7.9ポイントと比較的高い。

○ 指導法改善の視点

問われたことに対して正確に答えるという習慣付けを日ごろの授業の中で行うことが必要である。問われていることは何なのか、どういった条件で答えるのかを確認する一手間を掛けるよう指導し、問題と向き合わせるようにするとよいだろう。その際、条件が複数あることに注意させることも大切である。また、文法的な知識や用語は、日ごろから使い慣れていることが好ましい。中学2年生という発達段階を考えて、既習の文法用語や知識を活用した授業展開を工夫したり、学習活動を取り入れたりすることが必要であろう。

視点2 具体的な事例から抽象的・一般的原理を読み取ることができるか。

[第2学年大問三の小問三(3)] PDF

○ねらい

実験結果を考察し、考察を基に結論を導き出すことができる。

○ 傾向

実験の目的や条件を読み落としているものが多く、実験結果を把握し切れていない答えが目立った。また、本文の要旨にひかれて、出題の意図からずれた解答を書くものもあった。正答率は37.2ポイントと大問3で最も低く、無解答率も10.8ポイントと高い。

○ 指導法改善の視点

読む学習活動において、具体的な事例が何を説明するものであるのかを意識させるようにする。また、論理的展開を読み取らせるために、語句がどのような意味関係でとらえられているのか、文章の語彙構造を明ら

かにして読む習慣を身に付けさせる必要がある。その際には類義的な表現をとらえる活動を取り入れたりすると効果的であると思われる。

視点3 **文章の構成や展開をとらえ、内容を理解することができるか。**

[第2学年大問三の小問四] **PDF**

○ **ねらい**

目的に応じて論の展開をおさえ、正確に理解する。

○ **傾向**

「シリンダー」や「活性炭」等の具体的な記述がない解答や、実験の意味自体が理解できていない解答、実験の結果を踏まえて事実を書けていない漠然とした解答が多かった。正答率は41.3ポイントと低く、無解答率も13.7ポイントと高い。

○ **指導法改善の視点**

文章の構成(問題提起→実験→考察→結論)をとらえ、論理的思考をきたえる学習を組み立てていく。例えば、理科分野の説明文を読む機会をもち、実験結果から何が分かるかなど具体的に分かることを的確に読み取る学習を行うことが考えられる。

視点4 **漢字の意味を理解し、使いこなす力が身に付いているか。**

[第2学年大問4の二] **PDF**

○ **ねらい**

漢字の意味を理解し、文脈に即して表記することができる。

○ **傾向**

同訓異字の書き分けができない。

意味と結び付きにくい漢語の表記ができない。

使用頻度の高い漢語は書くことができる。「著者」(国語の授業で常用)、「訪問」(家庭訪問や職場訪問)

○ **指導法改善の視点**

辞書を用いた漢字の成り立ちや意味を考える学習を授業に取り入れる。例えば、漢字の構成要素である「へん」や「つくり」などに着目してそれらが表すものと漢字例をひとまとまりとして指導することも大切である。また、漢字や漢語の意味と表記を意識して、書いたり読んだりする学習活動を随時組み入れることが有効だと思われる。漢字を書く力を養うためには、実際に書く活動を通して、漢字を正しく用いる態度と習慣とを養うとともに、小テストによる習得状況の確認とフィードバックもこれまで同様に適宜取り入れ、継続的な指導が必要である。

エ これからの指導に向けて

今年度の学習状況調査の結果について、領域全体で見るとおおむね良好であるが、「資料から必要な情報を取り出し、伝えたいことを明確にして書く」こと、「展開をおさえ正確に理解し、ものの見方をとらえる」こと、「漢字(特に訓読みで用いられる漢字)を書く」ことなどに課題が見られた。これらの課題克服、つまり言語に関する能力の育成を図るためには、主体的な学習者を育てることが必要である。指導者は、身に付けさせる基礎的・基本的な力(学習指導要領から)を視点として、生徒の実態をとらえ、何の力を付けるのか(ねらい)を明確にして単元及び授業を構想する。学習者は、自分の身に付いている力・付けたい力を自覚し、学習の見通し→習得⇔活用⇔定着→振り返りのサイクルで確実に力を付け、付けた力を活かしていくことが大切となる。その際、以下の点を意識することが向上の一助となるのではないだろうか。

ア 言語環境を整えること

学習者は、日常、授業の場以上に多くの言葉を目にし、耳にし、話している。この現実を踏まえて、例えば四字熟語や故事成語等の日めくりカレンダーを掲示することで語彙・用法の知識を増やしたり、日常会話の中で、場や相手に応じた言葉遣い(敬語)を定着させたりするなど一つの方法である。

イ 問いと答えに関すること

(1)質問文・条件文を正確にとらえさせる。

聞かれているところに印を入れさせ、各自で確認・意識させる。

(2)答え方の指導をする。

「書きなさい」と「書き抜きなさい」「抜き出しなさい」の違いや、「なぜ？」に対して「～だから」、「どんなとき？」に対して「～のとき」と答えるなどの答え方の指導も必要である。

ウ 用語を授業の中できちんと押さえること

文法用語、表現技法にかかわる語、仮説・実験・観察・分析・考察などの教科を横断して用いる語等、用語そのものの意味を理解させておくことも大切である。

エ 「話すこと・聞くこと」

自分の経験に照らし合わせて、内容を整理して聞き取る指導は充実してきたので、これに加えて、話し手の意図を考えながら聞くことにも配慮して指導する。さらに授業では、聞き取ったことを基に自分の考えをもち、根拠を明らかにして話す活動に取り組むと話す力の向上にもつなげることができるだろう。

オ 「書くこと」

目的・相手・内容・分量などの条件を踏まえて書くように日ごろの授業の中でも指導する。ポイント(条件)をしぼって書かせると、書く方も評価をする方も抵抗感が少ないのではないか。その際の条件は、一つから徐々に増やしていくことが望ましい。

カ 「読むこと」(様式と内容)

小説の読み方、説明的文章の読み方など、作品(教材)が変わっても変わらない一般的な読み方と、その作品(教材)に何が書かれているかという作品の内容価値の双方を意識して指導する。内容や書き方について自分の意見をもつ読みなど、主体的な読みの指導の工夫が必要と思われる。

キ 言語活動の位置付けについて

生徒の実態に応じて、ねらいの明確な言語活動を授業の中に位置付ける。例えば、意見文を書くときの構成を学ぶための文章(モデル)として読むという書くために読む活動や、作品(教材)を正確に読むために情報を取り出してまとめて書くという読むために書くという活動も考えられる。

ク 読書について

読書量の減少は学習活動だけでは伸ばしきれない主体的に「読む力」の育成と関係が深いので、読書へ導く指導は大切である。例えば、「私の1冊」として各自が本の紹介を行ったり、クラスでテーマ読書を行ったりすることも一方法である。

ケ 交流

生徒の実態(意識調査)として「自分の考えを人前で発表すること」が「どちらかといえばない」「ない」を合わせると過半数を超えている。自分の意見をもつ、意見を交流させる、再び自分に返るという学習活動を設定することによって、考えの広がり・深化・統合・整理となり、学習者自身の力が付くだけでなく、学びの集団としての力の向上にもなるのではないかと考える。

オ 授業実践に参考となるリンク



授業に役立つ実践研究



授業・自己研修・校内研修のための資料集

最終更新日： 2009-07-28

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅲ 各教科等の調査結果の分析 > 中学校社会

中学校社会

すべての評価観点において、「おおむね達成」の基準を上回った。特に「社会的な思考・判断」については、「おおむね達成」の基準を14.7ポイント上回る高い正答率が得られた。また、「知識・理解」の観点も「おおむね達成」の基準を10.7ポイント上回ることができた。これは、資料を基に考えさせ、説明させる授業展開に取り組んだことで、基礎的・基本的な知識の確実な習得につながったためと思われる。

ア 結果の概要

(ア) 評価の観点別
中学校2年生

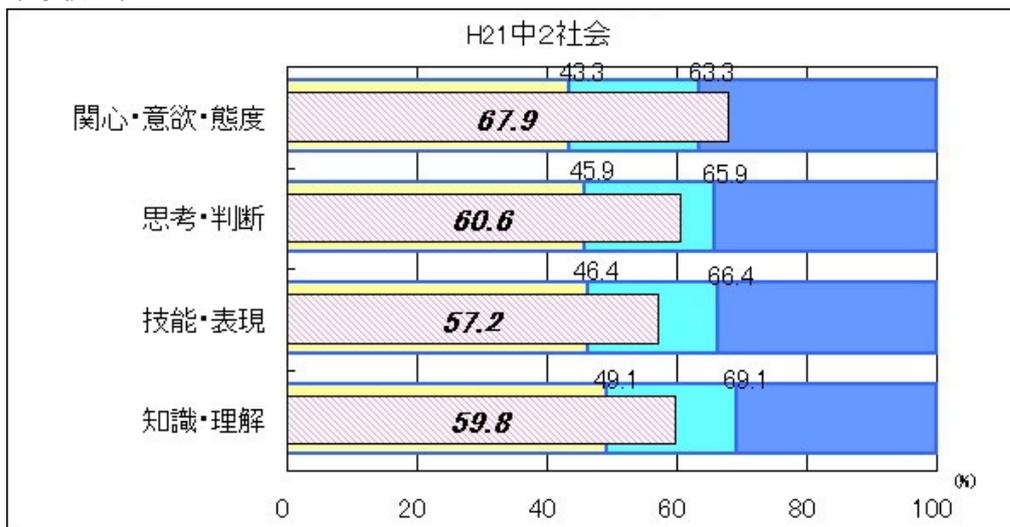


図1 H21年度 中2社会 評価の観点別正答率

「社会的な事象への関心・意欲・態度」については、「十分達成」の基準を上回った。また、「社会的な思考・判断」と「資料活用の技能、表現」、「社会的な事象についての理解」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(イ) 内容・領域別
中学校2年生

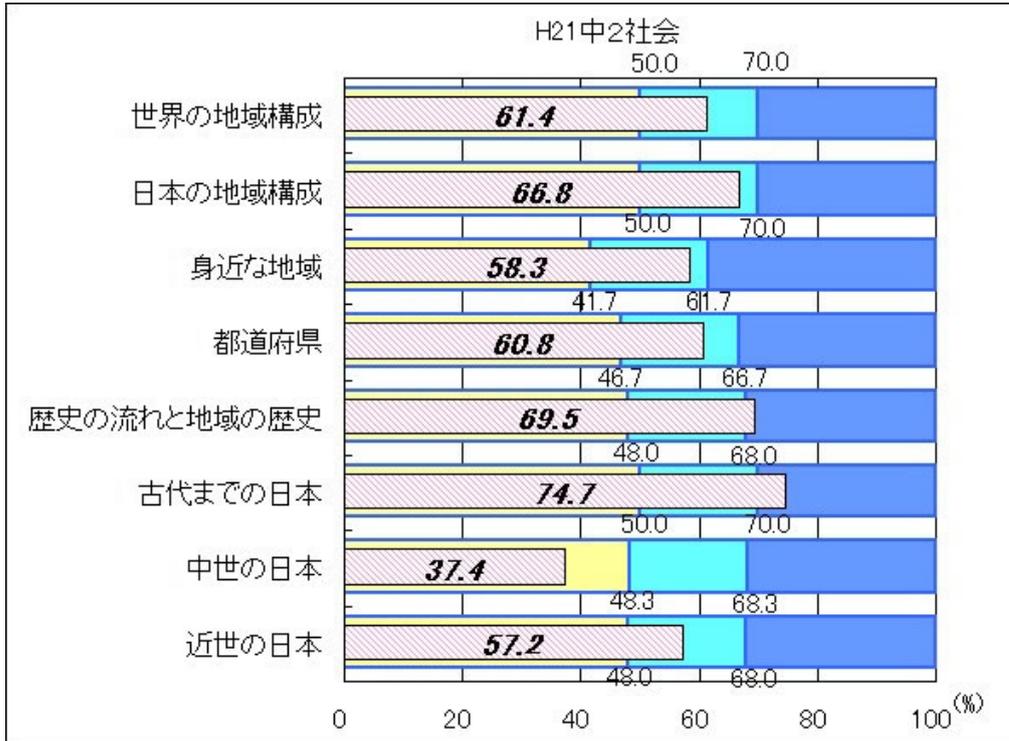


図2 H21年度 中2社会 内容・領域別正答率

地理的分野については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。また、歴史的分野については、「歴史的な流れと地域の歴史」「古代までの日本」について「十分達成」の基準を上回ったが、「中世の日本」については、「おおむね達成」の基準を下回っており、今後の課題である。

(ウ) 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題
中学校2年生

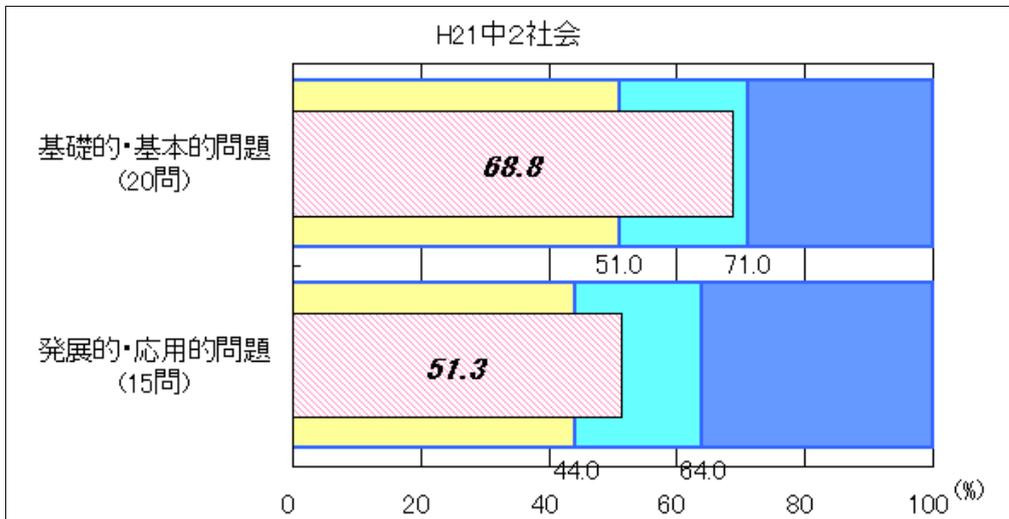


図3 H21年度 中2社会 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題正答率

「基礎的・基本的問題」と「発展的・応用的問題」について、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、特に、「発展的・応用的問題」については、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(エ) 「活用する力」を問う問題

中学校2年生

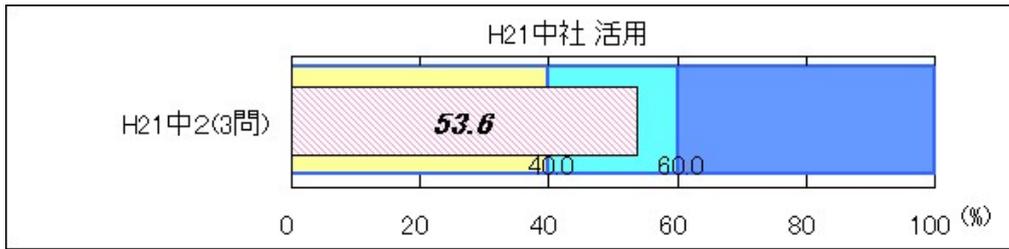


図4 H21年度 中2社会 「活用する力」を問う問題正答率

「活用する力」を問う問題では、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

イ 経年比較

(ア) 「社会的な思考・判断」の経年比較

「社会的な思考・判断」について、第2学年における定着状況を平成20年度の同一生徒と比較したグラフである。

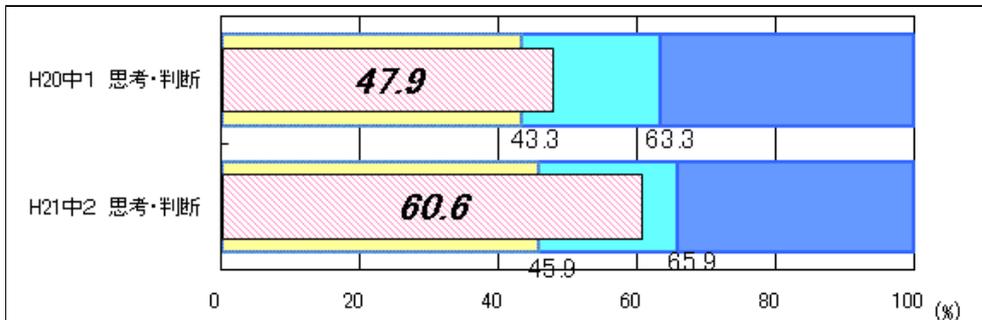


図5 H20・21年度 「思考・判断」の経年比較

「社会的な思考・判断」については、平成20年度は、「おおむね達成」の基準43.3に対して47.9であり、4.6ポイント上回っていた。今年度の定着状況を見ると、「おおむね達成」の基準45.9に対して60.6であり、14.7ポイント上回っている。経年的な定着状況は、良好で昨年よりも向上傾向にあるといえる。

(イ) 「資料活用の技能・表現」の経年比較

「資料活用の技能・表現」について、第2学年における定着状況を平成20年度の同一生徒と比較したグラフである。

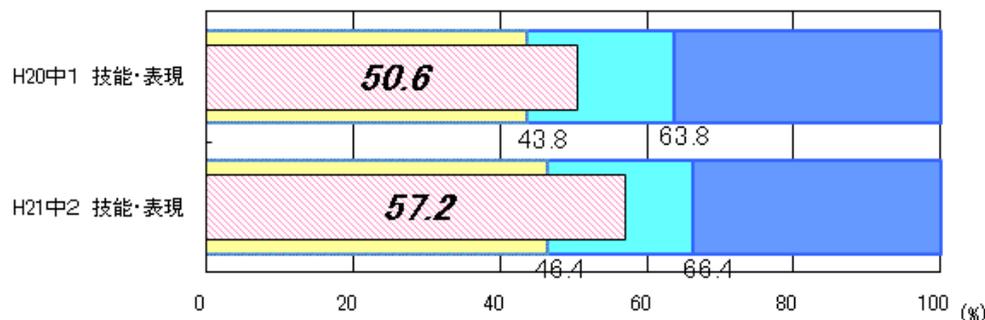


図6 H20・21年度 「技能・表現」の経年比較

「資料活用の技能・表現」については、平成20年度は、「おおむね達成」の基準43.3に対して50.6であり、7.3ポイント上回っていた。今年度の定着状況をみると、「おおむね達成」の基準46.4に対して、57.2であり、10.8ポイント上回っている。経年的な定着状況は、良好で昨年よりも向上傾向にあるといえる。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の視点 **中2設問毎正答率**

個々の知識の暗記だけではなく、それを資料を基に関連させて説明することができるかということを検証したいと考える。

視点1 **複数の資料を読み取り、関連させて説明することができるか**

[第2学年大問3の(3)] **PDF**

○ **ねらい**

地図情報を読み取り活用できる。

○ **傾向**

洪水時のハザードマップを見ながら、安全な避難場所を選択する問題である。「十分達成」の期待正答率55.0に対し、正答率は64.1であり、大きく上回ることができた。誤答としては、水深のことを考えずに距離の近い場所を選んだ解答が見られた。

○ **指導法改善の視点**

普段の地理の授業において、地図や資料から、複数の情報を正確に読み取り、生活体験と結び付けて考えるような場面を設定することが求められる。生徒も含めて、現実社会の中で生きていく中では、選択する場面があり、自分の優先する価値を基に進むべき方向や取るべき方法を決定している。その時に生きる力を養うことを意識しながら、普段の授業を展開できたらと考える。

[第2学年大問8の(5)] **PDF**

○ **ねらい**

鎖国下の対外関係について理解し、資料を使って説明することができる。

○ **傾向**

佐賀藩精錬方絵図の蒸気機関車ひな形の試運転の様子を見て、鎖国下において佐賀藩が、海外の技術を取り入れていたことを自分の言葉で説明する問題である。「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して、正答率は27.2であり、12.8ポイント下回っている。誤答としては、資料からそのまま読み取れることを書いている解答が見られた。

○ **指導法改善の視点**

生徒に求めているのは、佐賀藩についての詳しい知識ではなく、根拠を基に自分の意見をつくることである。会話文には、佐賀藩の対応については答えがあるので、生徒は、この会話の流れと資料を根拠として解答することとなる。普段の授業の中で、意見交換などの場面を設定し、根拠を基に自分の意見を述べさせる経験をさせておくべきであると考え。

視点2 **知識を基に、資料を関連付けて時代背景を踏まえた説明することができるか**

[第2学年大問7の(3)] **PDF**

○ **ねらい**

分国法の目的について、説明することができる。

○ **傾向**

分国法についての資料を見て、それが出された時代背景を考えながら、その目的を自分の言葉で説明する問題である。「おおむね達成」の期待正答率45.0に対し、正答率は25.1と19.9ポイントと大きく下回っている。正答の条件として、資料そのままの記述を誤答としたために、正答率が低くなったと考えられる。

○ **指導法改善の視点**

新学習指導要領にも、個々の細やかな歴史事象・出来事に関する知識を学ぶのではなく、学習内容の構造化と焦点化を図ることで、時代の流れをとらえることが書いてある。歴史的分野の学習の中で、何を生徒に理解させるのかを考えて授業に取り組むべきであると考え。

エ これからの指導に向けて

変化が激しい現代社会において求められているのは、必要な知識を収集し、関連付けていくために必要な見方や考え方、それに基づいて考えて判断する力である。また、そのようにしてまとめた自分の意見を分かりやすく伝える力、考えや態度を行動に移し、他者に働き掛け社会に参画していこうとする力である。このような力を養う上で、社会科の担う役割は大きいものである。

ア 小学校3年生から中学校3年生までの7年間を見通した社会科学習づくり

義務教育の9年間の中で7年間社会科の学習が行われる。その中で、小学校と中学校の連携した社会科の授業というものを考える必要がある。また、中学校の社会科の教師が、小学校の学習内容をもっと知り、中学1年生に入学した生徒が小学校の社会科で何を勉強してきているのか、どれくらい学習したことが身に付いているのかを把握した上で、中学校の社会科と出会わせたい。そのためには、中学校区内において、小中合同の教科部会を開き、連携をする必要があると考える。

イ 学習した知識を確実に定着させるための工夫

新学習指導要領には、「基礎的知識・技能」の確実な習得とある。基礎的知識とは、これだけを見ると個々の知識をとして「教え込む」という学習をさせるように勘違いをしてしまいがちである。そうではなく、個々の知識を相互に関連付けるために必要な知識であり、基礎的技能とはそのような学習の際に資料を読み取ったり、集めた情報を整理したりする技能である。学習した知識の定着は、その知識を学習の中で使うことによってより確かなものになると思われる。この知識を使わせる学習の展開の工夫が必要である。

ウ 何を学ぶのかをしっかりと生徒に伝える。

網羅的に個々の社会事象を教えることをしないようにするためには、これから何を学習し、最終的に何を身に付けるのかを分かりやすく生徒に伝えるべきである。特に、各分野において特色をつかむ学習においては、「なぜ」そうなのか(そうなるのか)ということ意識して学習を進める必要がある。そういう意味では、教師側が生徒に付けさせたい学習内容を、しっかりもっておく必要もあると考える。

オ 授業実践に参考となるリンク



2009-07-15

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅲ 各教科等の調査結果の分析 > 中学校数学

中学校数学

基礎的・基本的問題において、「おおむね達成」の基準50.7に対して、69.7であり、19.0ポイント上回っており、昨年度に引き続き良好な定着状況が見られた。しかし、発展的・応用的問題では、「おおむね達成」の基準40.0に対して、35.2であり、4.8ポイント下回った。

特に、「数学的な見方や考え方」の観点や「活用する力」を問う記述式の問題では、正答率が低く、無解答率が高いという傾向が見られた。今後、「活用する力」をはぐくむために、数学的な表現を用いて、思考の過程や判断の根拠などを数学的に説明するような数学的活動を、授業に数多く取り入れる必要があると考えられる。

ア 結果の概要

(ア) 評価の観点別

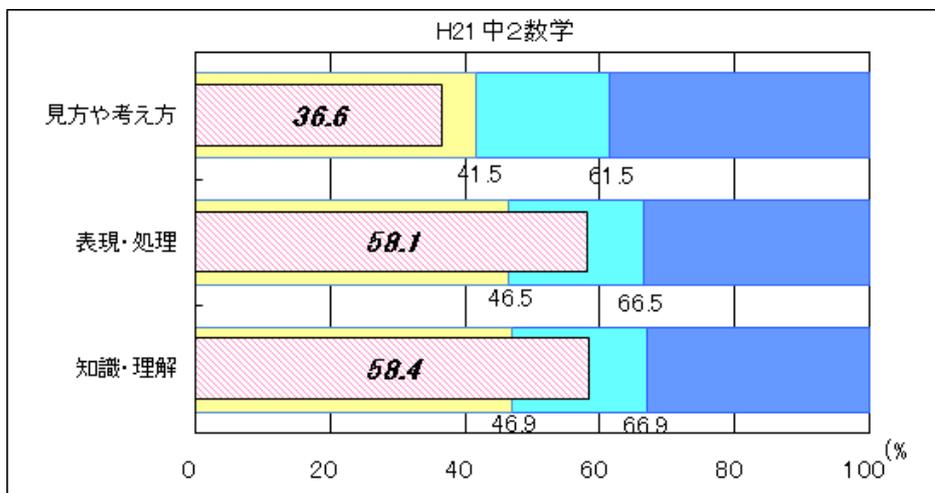


図1 H21年度 中2数学 評価の観点別正答率

「表現・処理」と「知識・理解」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「見方や考え方」については、「おおむね達成」を下回っており、今後の課題である。

(イ) 内容・領域別

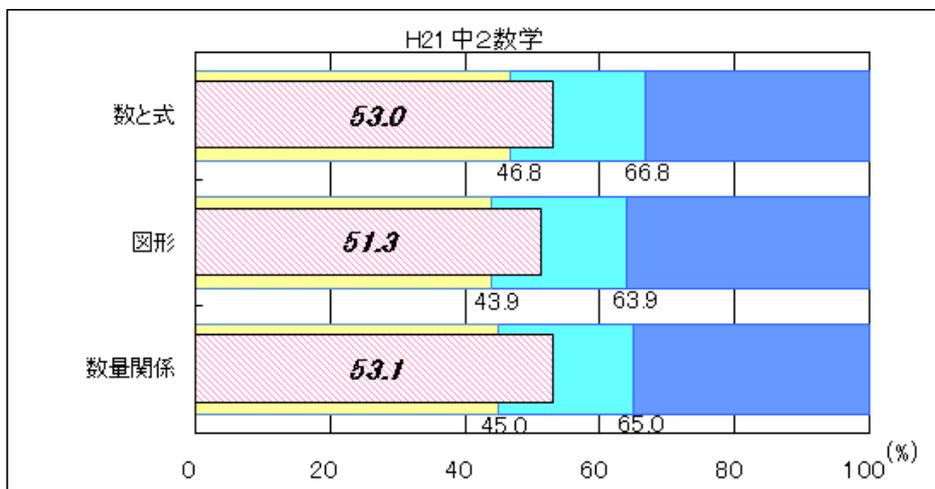


図2 H21年度 中2数学 内容・領域別正答率

すべての内容・領域において「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(ウ) 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題

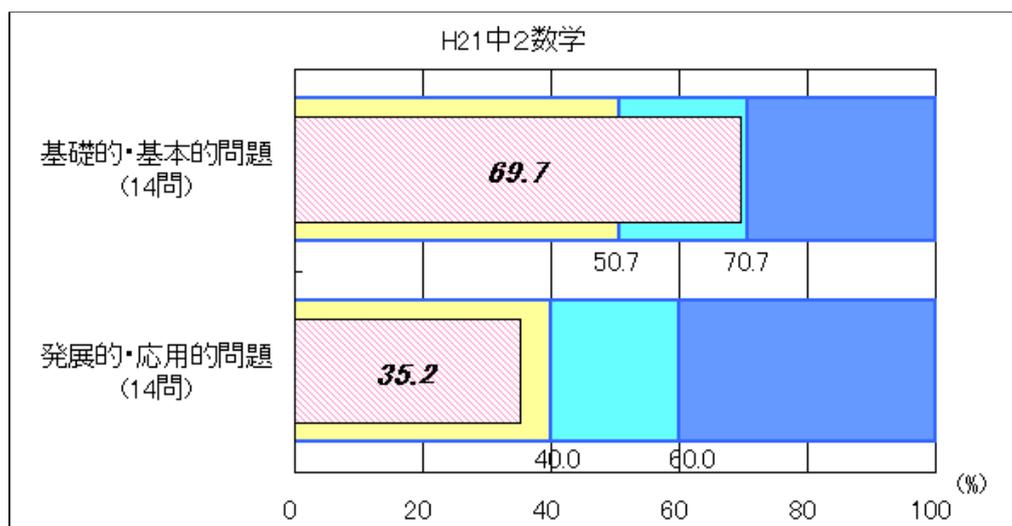


図3 H21年度 中2数学 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題正答率

「基礎的・基本的問題」については、「おおむね達成」の基準を大きく上回った。しかし、「発展的・応用的問題」については、「おおむね達成」を下回っており、今後の課題である。

(エ) 「活用する力」を問う問題

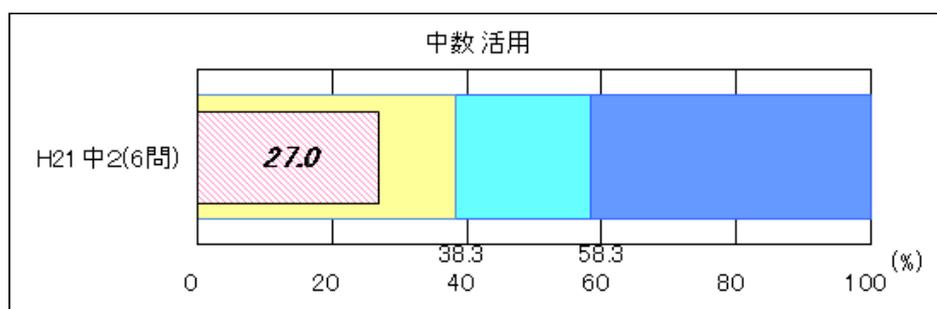


図4 H21年度 中2数学 「活用する力」を問う問題正答率

「活用する力」を問う問題については、「おおむね達成」の基準を下回っており、今後の課題である。

イ 経年比較

(ア) 「基礎的・基本的問題」の経年比較

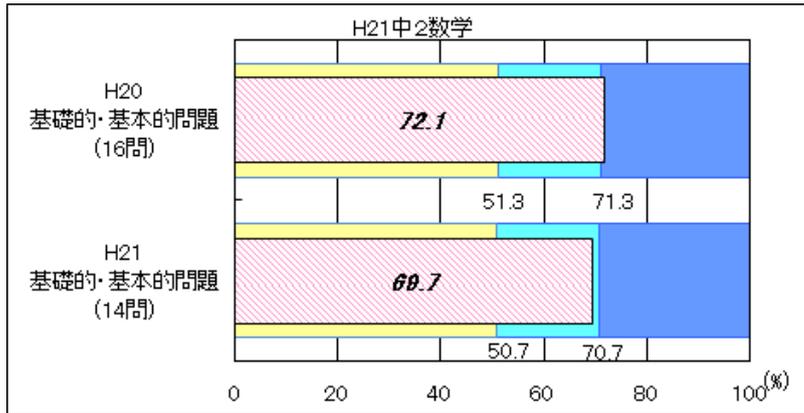


図5 H20・H21年度 「基礎的・基本的問題」の経年比較

「基礎的・基本的問題」については、平成21年度、平成20年度ともに、十分達成のライン付近で推移しており、経年的な定着状況は良好であるということがいえる。

(イ) 「活用する力」を問う問題の経年比較

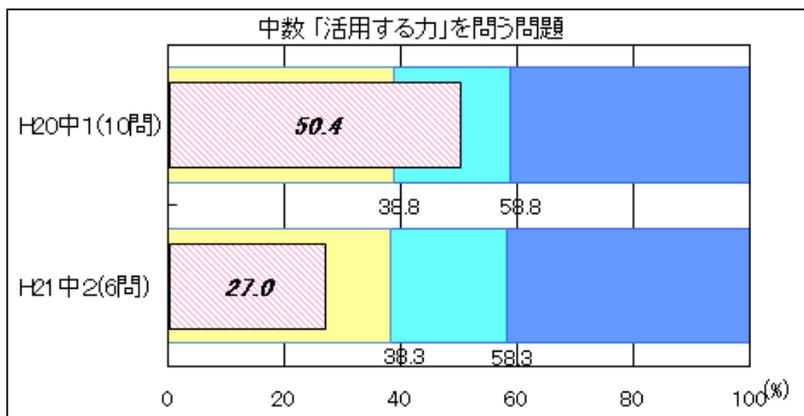


図6 H20・H21年度 「活用する力」を問う問題の経年比較

「活用する力」を問う問題については、平成21年度は、「おおむね達成」の基準38.8に対して27.0であり、11.8ポイント下回った。平成20年度と比べると23.4ポイント減少し、今後の課題である。特に、図7から、昨年度1題、今年度5題、出題された記述式の問題においては、正答率が低く、また、そのすべての問題で無解答率が30%以上を示した。昨年度に引き続き、数量関係の特徴を説明することや事象の変化を数学的な表現を用いて説明することなどに課題が見られる。また、「活用する力」を問う問題に対する採点コメントから、「数学的な表現を用いて、思考の過程や判断の根拠などを数学的に説明する力」をはぐくんでいくことが、これからの課題になると実感されている先生方が多いことが分かる。

	大問:小問	正答率	無解答率
H20	問2:(2)②	45.2	36.8
H21	問2:(3)	18.9	30.2
	問4:(2)	15.1	45.2
	問8:(2)	26.3	32.1
	問13:(2)	20.2	37.4
	問14:(3)	40.3	33.9

図7 H20・H21年度 「活用する力」(記述式)を問う問題の正答率と無解答率

○「活用する力」を問う問題に対する採点コメント

- ・ 式や言葉を使って説明することに抵抗を感じている生徒が多いことが分かった。
- ・ 授業中に、生徒が理由や考え方を級友に分かりやすく説明するような機会を多く取り入れた授業展開が必要だろう。
- ・ 説明する力を高めるためには、「どのように表現しなければならないか」を継続的に指導していく必要がある。
- ・ 内容では扱っていたが、どうしてそのようになるのかを自分の言葉で説明させることを十分にやっていたいなかった。
- ・ 自分の言葉で理由や考えを述べさせるような機会を多く取り入れていく。
- ・ 論理的に説明していく力が不十分である。今度、課題に対して論理立てて解答を導くような指導を行いたい。
- ・ 考えをうまく文章に表せていなかったり、説明が不十分だったりすることで不正解になっているので、今後は、自分の考えを表現する力や問題を読み取る力を指導していく必要がある。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の視点 中2設問毎正答率

今年度正答率が低かった問題、または、無解答率が高かった問題について、「基礎的・基本的な知識・技能が身に付いているか」と「基礎的・基本的な知識・技能を活用することができるか」の2つの視点で検証することとした。

視点1 数量や図形などについての基礎的・基本的な知識・技能が身に付いているか

[第2学年大問3(2)] PDF

○ 出題のねらい

分数の一元一次方程式の解法を理解し、解を求めることができる。

○ 傾向

正答率は、30.1と「おおむね達成」期待正答率35.0を下回っており、分数の一元一次方程式の解法を理解し、解を求めることに課題があると考えられる。また、無解答率は、23.1と高い数値を示している。

○ 指導法改善の視点

式変形の根拠となる等式の性質を意識して、方程式を解いたり、解いた過程を振り返ったりすることが大切である。例えば、「移行する項はどれか。」、「それを移行すると式がどう変わるか」、「どの等式の性質を使ったか」、などと質問し、解く過程を等式の性質を根拠にして、言葉で説明する活動を取り入れることが考えられる。

[第2学年大問7(1)(2)(3)] PDF

○ ねらい

空間図形を平面図形の運動によって構成されているものととらえることができる。

円錐の見取り図をかくことができる。

円錐の体積を求めることができる。

○ 傾向

(1)の正答率は、51.8と「おおむね達成」の期待正答率50.0を上回っている。また、(2)の正答率も、72.4と「十分達成」の期待正答率60.0を上回っている。しかし、(3)の正答率は、17.6と「おおむね達成」の期待正答率45.0を下回っており、更に、無解答率は、21.1と高い数値を示している。回転体の体積を求めることに課題がある。

○ 指導法改善の視点

回転体の特徴についての理解を深めることが大切である。例えば、実際に図形を回転させて、回転体のイメージをもたせ、上から見ると円が現れることや、正面から見ると線対称な図形が現れることなど、回転体の特徴を明確にすることが考えられる。

錐体と柱体の体積の関係について、実験や実測を通して、実感を伴って理解できるようにすることが大切である。例えば、水を円錐から円柱に移す場面について予想を立て、実験や実測を通して確かめる活動を取り入れることが考えられる。また、水を円柱から円錐に移すという逆の場面についても取り上げ、双方向から理解を深めるようにすることも考えられる。

○ 採点コメントにみる学校の取組状況

(1)は全員正解だった。実際にいろいろなものを回転させ、見取り図をかかせたのでこのような結果になったのではないかと思う。

[第2学年大問12] PDF

○ ねらい

身の回りの事象から反比例を見いだすことができる。

○ 傾向

正答率は、33.3と「おおむね達成」の期待正答率45.0を下回っている。身の回りの事象から反比例を見いだすことに課題があると考えられる。4つの選択肢から反比例になるものをすべてを選ぶ問題になっているが、正答を2つ選択できずに、一方のみを選択するという誤答が多い。

○ 指導法改善の視点

反比例の学習では、表、式、グラフを関連付けて、伴って変わる2つの数量の変化や対応を観察し、その特徴を見いだしたり確認したりすることが大切である。例えば、「 x の値を2倍、3倍、……にすると、それに対応する値は $1/2$ 倍、 $1/3$ 倍、……となる。」といった反比例の意味が、表や式、グラフにおいてどのような特徴として表されるかを言葉で説明する活動を取り入れることが考えられる。また、比例と反比例の式の形や表の特徴を対比しながら考察することにより、比例と反比例についての理解を深めることも大切である。

視点2 数量や図形などについての基礎的・基本的な知識・技能を活用することができるか

[第2学年大問2(3)] PDF

○ ねらい

値が最も小さくなる理由を筋道立てて、数学的な表現を用いて説明することができる。

○ 傾向

正答率は、18.9と「おおむね達成」の期待正答率45.0を大きく下回っており、理由を筋道立てて数学的な表現を用いて説明することに課題がある。また、無解答率は、30.2と高い数値を示している。

○ 指導法改善の視点

数に関する性質を考察する場面において、成り立つ事柄を予想できるようにすることが大切である。具体的には、数の性質を実際に調べることを通して、生徒が自由に予想し、その予想を表現する活動を取り入れることが考えられる。また、説明が不十分である生徒に対しては、なぜ不十分であるのかを、根拠の示し方や筋道の立て方等の観点から分析した上で、根拠を補ったり、改めたり、説明の道筋を整えたりして、説明を手直しする活動を取り入れることが大切である。

【第2年大問6】PDF○ **ねらい**

角の二等分線の作図方法を図形の対称性に着目して見直すことができる。

○ **傾向**

正答率は、40.9と「おおむね達成」の期待正答率を上回っているが、出題のねらいが同じ問題であるH20全国学力・学習状況調査の3年生正答率52.1を下回っており、作図方法を図形の性質に着目して見直すことに課題があると考えられる。

○ **指導法改善の視点**

見直しをもって作図をするには、作図の方法を図形の対称性に着目して見直すことができるようにすることが大切である。また、平面図形についての見方や考え方を深めることは、平面図形のいろいろな性質を見いだしたり証明を考えたりする際に必要である。本問題を使って授業を行う場合、垂直二等分線の作図と対比しながら、対称の軸で折り返したとき何と何が重なるのかを探し、線対称の意味を確認する活動を取り入れることが考えられる。

[第2学年大問13](2) PDF○ **ねらい**

事象の変化を数学的な表現を用いて説明することができる。

○ **傾向**

正答率は、20.2を「おおむね達成」の期待正答率35.0を下回っており、事象の変化を数学的な表現を用いて説明することに課題があると考えられる。また、無解答率は、37.4と高い数値を示している。

○ **指導法改善の視点**

数学的な表現を的確に用いることができるようにするためには、数学的に表現することが問題場面を的確に把握したり、学習内容をより深くとらえ直したりすることに役立つという実体験が必要である。また、数学を学習する様々な場面において多様な表現を活用し、それらをよりよいものに洗練しながら、理解を深めたり広げたりする経験が大切である。

エ これからの指導に向けて

今回の調査によって明らかになった課題は、「数量関係の特徴を説明することや事象の変化を数学的な表現を用いて説明すること」といった「活用する力」を問う問題にある。数学を活用して考えたり判断したりしようとする態度を育てるために、数学のよさを実感できるような数学的活動に、主体的に取り組むことが必要である。特に、数学的な表現を用いて、思考の過程や判断の根拠などを数学的に説明するような数学的活動を授業に数多く取り入れる必要がある。

ア 数学的活動を内容として位置付け、数学のよさを実感できるような数学的活動に取り組む

数学的活動は、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けるとともに、数学的な思考力・判断力・表現力を高めたり、数学を学ぶことの楽しさや意義を実感させたりするために重要な役割を果たすものである。

その活動の中で、「数学的な表現や処理のよさ」、「基礎的な概念や原理・法則のよさ」、「数学的な見方考え方のよさ」、「生活に役立つことのよさ」などの数学のよさを実感させる授業を実践していく必要がある。

イ 言語活動を通して、思考力・判断力・表現力の育成に取り組む

習得した知識・技能を活用して課題を解決するために、①概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする活動、②情報を分析・評価し論述する活動、③互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる活動などを取り入れた数学的活動を通じた授業を実践していく必要がある。

ウ ストーリー性のある授業を意識する

通常の授業で取り上げる課題は、領域の内容を中心としたものが多い。このため、生徒は各領域の内容

を関連性のないものにとらえる傾向がある。獲得した知識を活用する力を身に付けるには、各領域の学習やそれらを相互に関連付けたストーリー性のある授業を意識する必要がある。

才 授業実践に参考となるリンク



授業に役立つ実践研究



授業・自己研修・校内研修のための資料集

最終更新日： 2009-07-28

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > III 各教科等の調査結果の分析 > 中学校理科

中学校理科

「科学的な思考」と「観察・実験の技能・表現」と「活用を問う問題」の正答率は、平成20年度を上回っていたが、「科学的事象についての関心・意欲・態度」と「科学的事象についての知識・理解」の正答率は、平成20年度を下回っていた。観察・実験やものづくりなど自然の事物・現象に直接触れる機会をふやしたり、学習した内容を振り返る時間を授業中に確保したりすることが必要であると考えます。

「科学的思考」の正答率は、平成20年度より高くなっていましたが、「十分達成」の基準を下回っていた。科学的な思考力・表現力の育成を図るには、科学的に探究する能力を育成するとともに、「言語活動の充実」にも努めなければならないと考えます。観察・実験の結果に基づいて、表やグラフの作成や読み取りを行ったり、文章や図を使って表現したりするなどの学習活動を、より一層充実させることが必要であると考えます。

ア 結果の概要

(ア) 評価の観点別

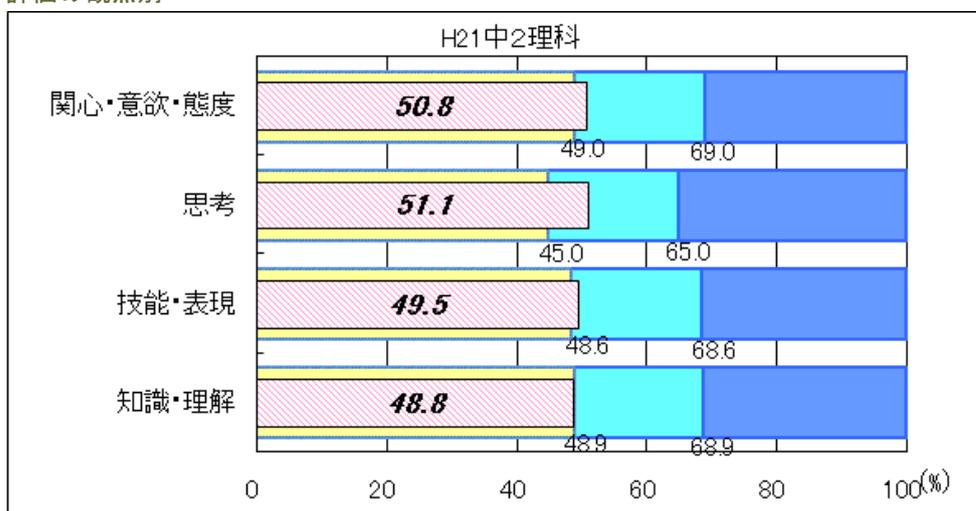


図1 H21年度 中2理科 評価の観点別正答率

「科学的事象についての関心・意欲・態度」と「科学的な思考」、「観察・実験の技能・表現」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「科学的事象についての知識・理解」については、「おおむね達成」の基準を下回っており、今後の課題である。

(イ) 内容・領域別

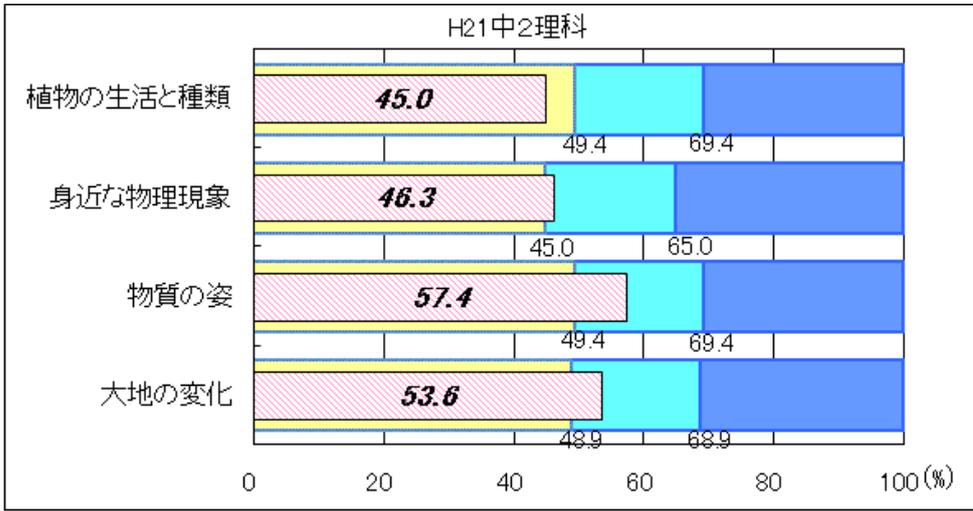


図2 H21年度 中2理科 内容・領域別正答率

「身近な物理現象」と「物質の姿」、「大地の変化」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。しかし、「植物の生活と種類」については、「おおむね達成」の基準を下回っており、今後の課題である。

(ウ) 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題

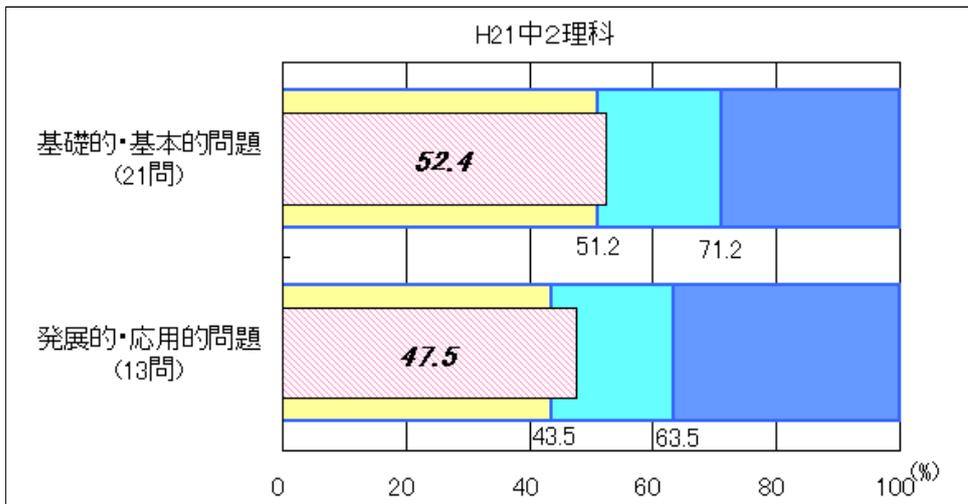


図3 H21年度 中2理科 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題正答率

「基礎的・基本的問題」と「発展的・応用的問題」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(エ) 「活用する力」を問う問題

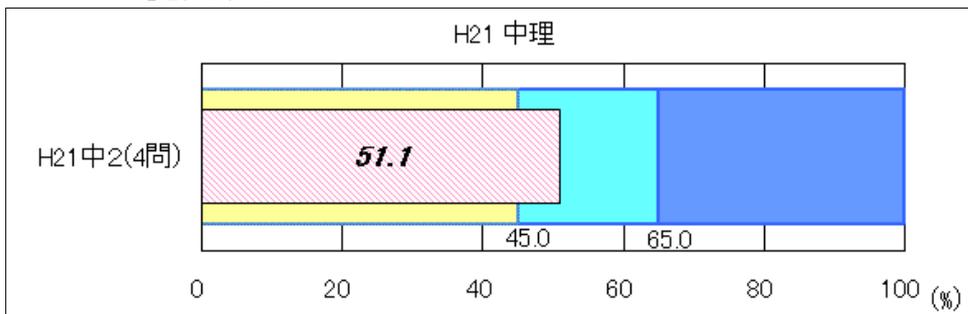


図4 H21年度 中2理科 「活用する力」を問う問題正答率

「活用する力」を問う問題については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

イ 経年比較

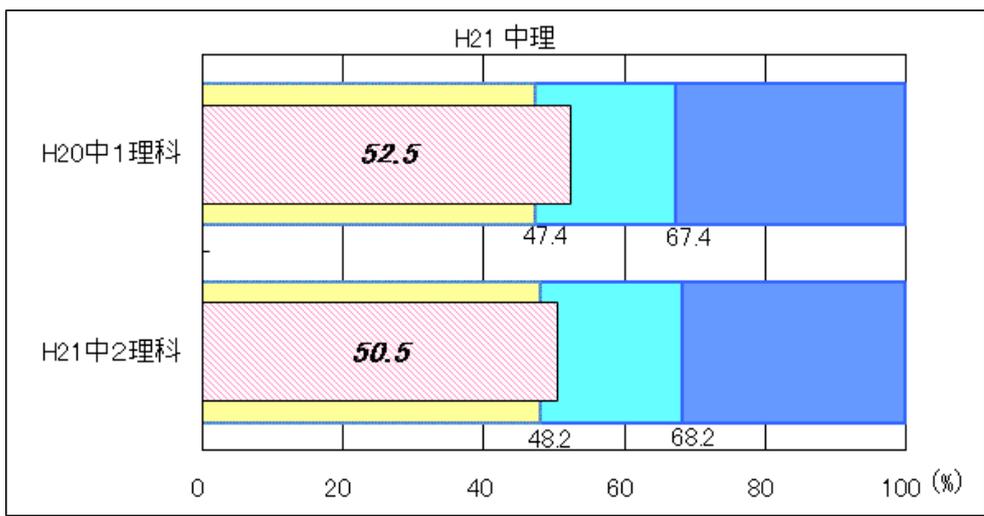


図5 H20・21年度 中1・2理科正答率の経年比較

平成20年度と平成21年度の正答率を比較すると、どちらも「おおむね達成」の基準を上回っているものの、平成21年度では正答率が2.0ポイント低くなっていた。

そこで、平成20年度と平成21年度について、「科学的事象についての関心・意欲・態度」「科学的事象についての知識・理解」と「科学的な思考」「観察・実験の技能・表現」と「活用を問う問題」の経年比較をそれぞれ行った。

(ア) 「科学的事象についての関心・意欲・態度」「科学的事象についての知識・理解」の経年比較

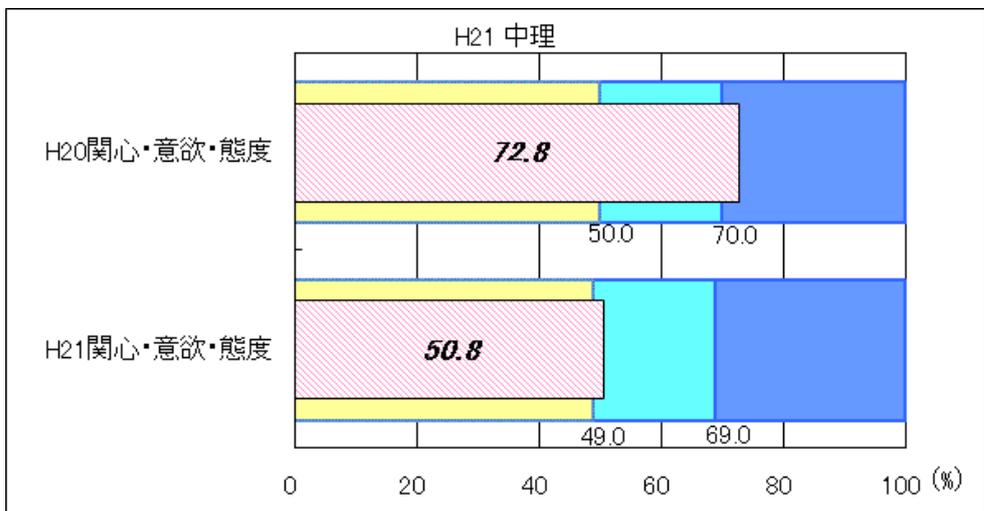


図6 H20・21年度 「関心・意欲・態度」の経年比較

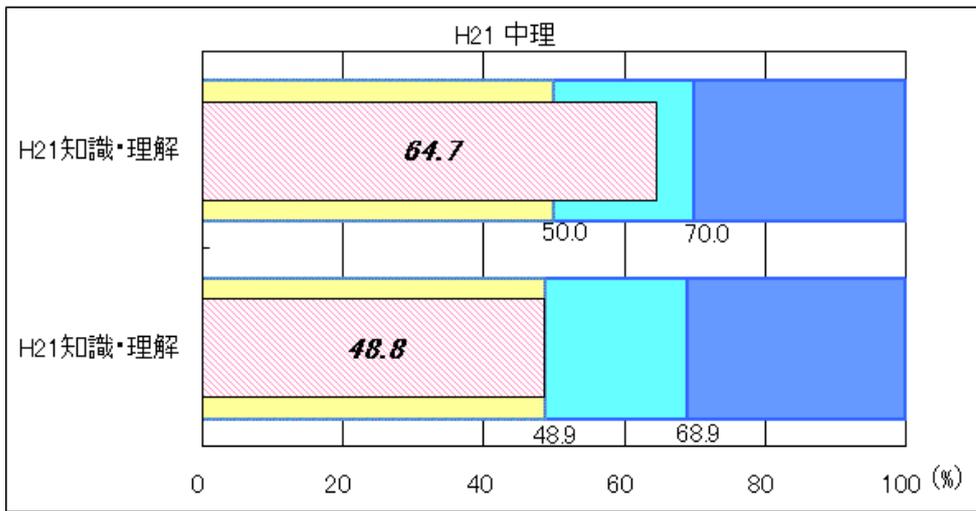


図7 H20・21年度「知識・理解」の経年比較

「科学的事象についての関心・意欲・態度」については、平成20年度は「おおむね達成」の基準を上回っていたが、平成21年度では「おおむね達成」の基準をわずかしか上回っていなかった。
 また、「科学的事象についての知識・理解」についても、平成20年度は「おおむね達成」の基準を上回っていたが、平成21年度では「おおむね達成」の基準を下回っていた。
 そこで、観察・実験やものづくりなど自然の事物・現象に直接触れる機会をふやしたり、授業中に学習内容を振り返る時間を確保したり、家庭学習の充実を図ったりするなど、生徒の実態に応じたきめ細かな手立てをとる必要があると考える。

(イ) 「科学的な思考」「観察・実験の技能・表現」「活用を問う問題」の経年比較

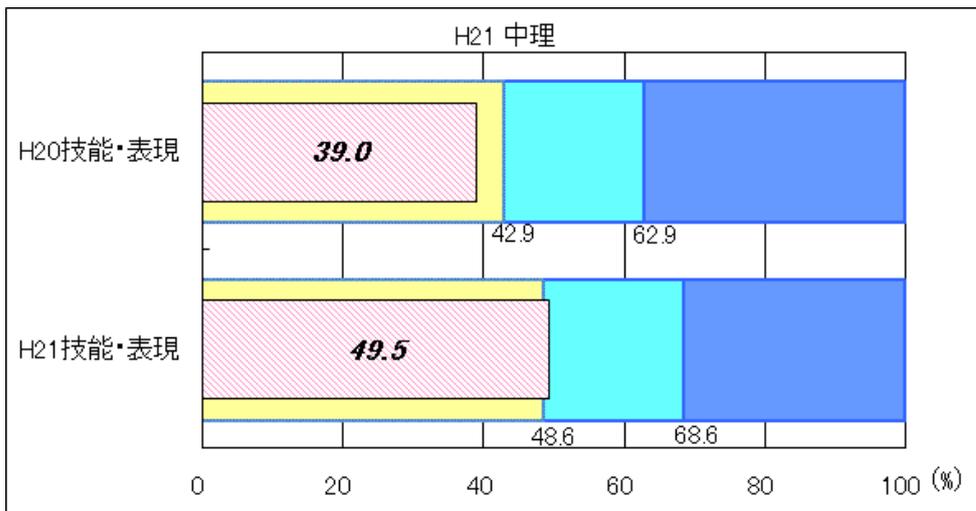


図8 H20・21年度「技能・表現」の経年比較

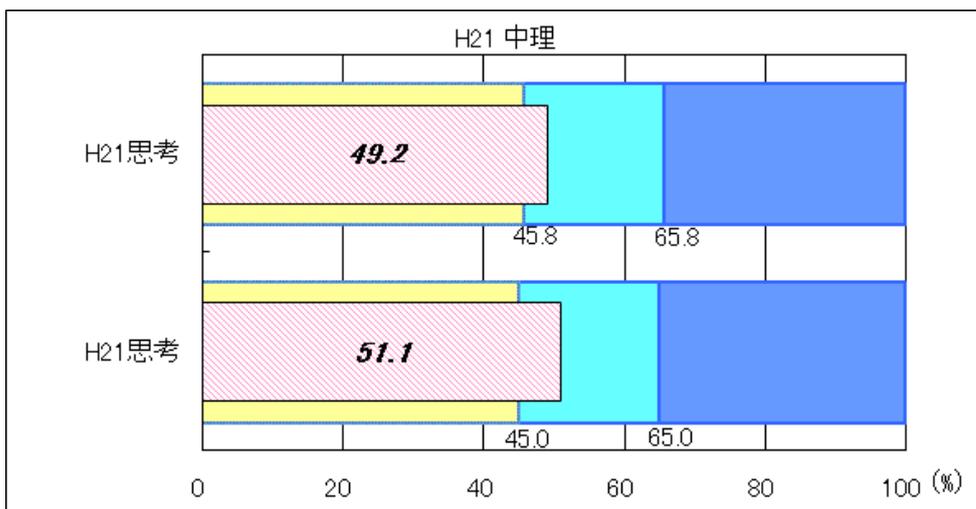


図9 H20・21年度「科学的思考」の経年比較

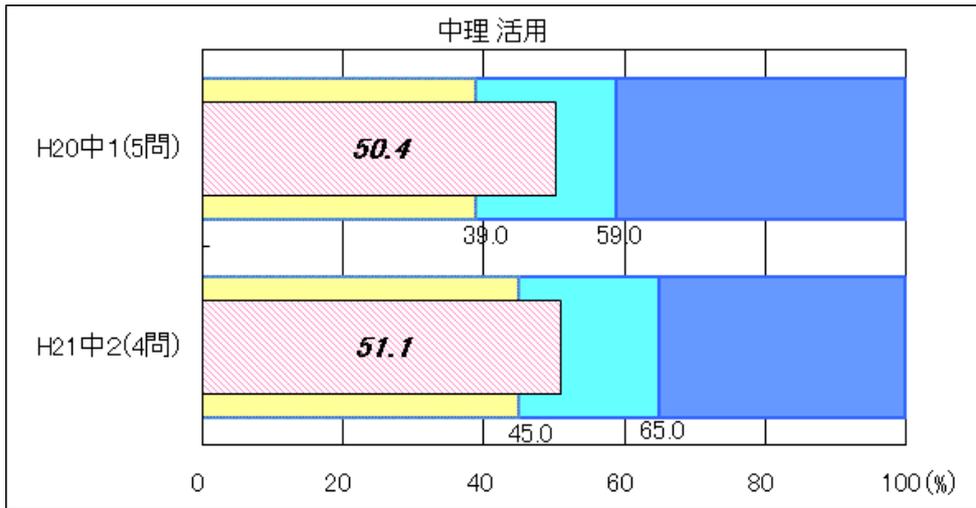


図10 H20・21年度「活用する力」を問う問題の経年比較

「観察・実験の技能・表現」については、平成20年度は「おおむね達成」の基準を下回っていたが、平成21年度では「おおむね達成」の基準を上回っていた。

「活用する力」を問う問題については、平成20年度は「おおむね達成」の基準を上回っており、平成21年度でも「おおむね達成」の基準を上回っていた。

「科学的な思考」については、平成20年度は「おおむね達成」の基準を上回っており、平成21年度でも「おおむね達成」の基準を上回っていた。

そこで、実験や観察で得られたデータや事実を客観的にとらえ生徒自身が考察しまとめるような授業、科学的な知識や概念を用いて合理的に判断し日常生活や社会で活用する授業を通して、科学的な思考力つまり科学的な見方・考え方の育成に、より一層努めていかなければならないと考える。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の視点 中2設問毎正答率

平成21年度の課題を受け、「基礎的・基本的な知識・技能の定着が図られているか」と「観察・実験の結果を分析して解釈することができているか」と「日常生活と社会との関連を図ることができているか」について検証する。

視点1 基礎的・基本的な知識・技能の定着が図られているか

[第2学年大問1の(1)] [PDF](#)

○ ねらい

双眼実体顕微鏡の操作手順を身に付けている。

○ 傾向

双眼実体顕微鏡の使い方について、正しい操作の順に並べる選択式の問題である。「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して14.7であり、35.3ポイント下回っていた。無解答率は0.9とほとんどの生徒が解答していた。

○ 指導法改善の視点

平成19年度の第1学年で、顕微鏡の操作手順を問う問題を出しているが、このときの正答率は、今回の双眼実体顕微鏡の正答率よりも高かった。その理由として、顕微鏡は、水中の微生物の観察や植物の維管束や気孔の観察など、授業で使用する事が多く、正しい操作手順を習得する機会が多いためであると考えられる。これに対して、双眼実体顕微鏡は、身近な生物の観察として、タンポポや昆虫の観察で使用する以外は授業で使用する機会が少なく、操作手順に不慣れな生徒が多いためと考えられる。このことが正答率が極めて低くなっている理由のひとつであると考えられる。

そこで、双眼実体顕微鏡やルーペを使って観察対象の特徴を立体的にとらえた後に、顕微鏡を使って微小な構造をとらえさせるなど、観察方法を工夫することが必要であると考えられる。このことは、中学校理科の目標にも述べられているように、「何を観察するのか、なぜ観察するのか。」という目的意識をもった観察・実験を行う上でも意義あることであると考えられる。

[第2学年大問3の(3)] [PDF](#)

○ ねらい

単子葉類と双子葉類の共通点と相違点を理解しそれらの知識を身に付けている。

○ 傾向

種子が発芽したときの芽生えの様子から、双子葉類の特徴について記述する問題である。「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して44.3であり、5.7ポイント下回っていた。無解答率は19.7と高かったのは、問題文を読んで何を問われているのかを読み取ることができない生徒がいたためとも考えられる。

○ 指導法改善の視点

維管束や主根・側根の違いについて記述した誤答が多く、問題文の「土の中から芽を出した芽ばえの様子から・・・」を正しく読み取れていない生徒が多いためと考えられる。問題の文章表現から、何を答えればよいのかを考える力つまり読解力が十分に身に付いていないためであると考えられる。

そこで、科学に関する新聞記事等を読み感想を発表したり、実験や観察で分かったことや気付いたことを文章で表現したりすることを通して、読解力の育成を図らなければならない。このことは新しい学習指導要領でも「言語活動の充実」として示されており、指導者としてとくに意識しなければならない課題であると考えられる。

視点2 **観察・実験の結果を分析して解釈することができるか**

[第2学年大問2の(2)] [PDF](#)

○ ねらい

実験を通して、光合成は二酸化炭素を原料としていることを考えることができる。

○ 傾向

実験結果から、光合成のはたらきについて理解できたかを見る選択式の問題である。「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して19.9であり、30.1ポイント下回っていた。実験から分かる光合成のはたらきだけを記述したものを選択しなければならないが、光合成のはたらきすべてを記述したものを選択した間違いが多かった。

○ 指導法改善の視点

この問題の正答率が低い原因の一つに、実験には参加しているが、何を調べているのかという実験の目的を正しく理解していない生徒が多いことが考えられる。

そこで、理科の目標にあるように、「目的意識をもった観察、実験」を徹底するとともに、必要な情報を収集し、活用して問題を解決し、結果を表現するという「PISA型読解力の育成」を図ることも必要であると考えられる。そのために、グループで計画を立てて実験し、結果を考察してまとめるという一連の学習を年間指導計画に位置付け計画的に行うなどの取り組みを行うことが必要であると考えられる。

[第2学年大問6の(3)] [PDF](#)

○ ねらい

融点は、物質の種類によって決まっており、質量によって変化しないことを知っている。

○ 傾向

パルミチン酸の量を2倍にしたときの温度変化のグラフから適切なグラフを見付ける選択式の問題である。正答率は54.4であり、「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して14.4ポイント上回っており、「十分達成」の期待正答率60.0に対して5.6ポイント下回っていた。

○ 指導法改善の視点

パルミチン酸の量を変えたときのデータを使ってグラフを作成させたり、縦軸と横軸の目盛りの取り方を生徒自身に考えさせたりして、グラフを読み取る能力の育成を図ることが必要であると考えられる。その際、少人数授業やTTで行ったり、グループで協力して取り組ませるなど、生徒の理解の程度に応じたきめ細かな指導を行うことが大切であると考えられる。

視点3 **日常生活や社会との関連を図ることができるか**

[第2学年大問4の(4)] [PDF](#)

○ ねらい

凸レンズのはたらきに関心をもち、日常生活で利用しているものや身近な現象を見付けることができる。

○ 傾向

凸レンズによる像と同じでき方をしている例を日常生活の中から見付ける選択式の問題である。「おおむね達成」の期待正答率45.0に対して41.5であり、3.5ポイント下回っていた。ア「鏡にうつった像」やイ「望遠鏡による像」の誤答が多かった。

○ 指導法改善の視点

鏡や望遠鏡、双眼鏡、虫眼鏡、カメラなど、身のまわりにある光に関係のある品物を生徒に家庭から持参させ

たり、教師が準備するなどして、実物に触れさせる機会を増やしていくことが重要であるとする。実物を生徒に触れさせ試させる中で、生徒は様々なことに気付き、それが知識・理解の定着や科学的思考力へつながっていくものとする。

【第2学年大問9の(5)】 PDF

○ ねらい

地震によって起こる現象を理解し、生活とのかかわりについて考えることができる。

○ 傾向

地震によって起きる災害について、社会とのかかわりの中から具体的な例を見付ける記述式の問題である。「十分達成」の期待正答率75.0に対して79.5であり、4.5ポイント上回っていた。

○ 指導法改善の視点

地震の多い日本では、地震による災害を正しく理解し、適切に対応する態度を身に付けておくことは重要なことであるとする。また、ニュースや新聞記事を使って日本付近で起きた地震とその災害について、理科の授業で扱うことは、理科を学習する意義や有用性を実感させ、自然事象に対する関心を高めるのに有効な取り組みであるとする。

エ これからの指導に向けて

理科は、自然の事物・現象を学習の対象とする教科である。自然の事物・現象に興味・関心を持ち、自ら学ぶ意欲をもつことが、理科の学習の出発点である。「観察・実験やものづくりなどの直接体験の充実を図る」ことは、これからの指導において必要なことであるとする。

新しい学習指導要領では、各教科で「言語活動の充実を図る」ことが求められており、理科においても積極的に取り組んでいかなければならない課題である。また、習得と探究のバランスを重視するという点から、「補足的な指導を計画的に行うこと」も必要なことであるとする。

ア 観察・実験やものづくりなど、直接体験の充実を図る。

生徒の科学的な体験や自然体験の不足が指摘されており、理科学習を進める上で大きなマイナスの要因となっていると考えられる。科学的な原理や法則を、生徒に実感的に理解させていくには、観察・実験やものづくりを取り入れることは有効なことであるとする。特に、ものづくりは、学習内容と日常生活との関連を図る上でも有効な学習活動の一つであるとする。

そこで、ものづくりを授業に取り入れるに当たっては、単元の導入、展開、まとめのどの部分に取り入れるのが最も効果的か、単元の学習内容の特質に応じて計画的に判断し行うことが重要であるとする。あくまでも原理・法則の理解を深めることが目的である。高度なものや複雑なものではなく、生徒が創意・工夫する余地のあるもの、安価ですべての生徒に材料が行き渡るものが、ものづくりの教材として望ましいとする。なお、安全には十分配慮して行わなければならない。

イ 言語活動の充実を図る。

新しい学習指導要領では、「問題を見だし観察・実験を計画する学習活動、観察・実験の結果を分析し解釈する学習活動、科学的な概念を使用して考えたり説明したりする学習活動の充実」について示されている。これは、探究的な学習や言語活動の一層の充実を通して、科学的な思考力・表現力を育成しようとするものである。生徒の意識調査の結果では、「観察や実験を計画し、実施することが好き」と答えた生徒は56.4%いることが明らかとなった。しかし、「観察や実験の後に考察やまとめを行う」と答えた生徒は33.9%、「いろんな考え方を発表し合うのは楽しい」と答えた生徒は26.4%、「興味や関心をもったことを自分で調べる」と答えた生徒は13.9%しかないことが明らかとなった。

そこで、①観察や実験の計画や検証方法を発表したり議論したりして自分の考えを深める。②観察や実験の結果を図、表、グラフに表して考察し、レポートにまとめたり、発表したりする。③学習内容と関連する身近な事象について、科学的な知識や技能を活用して説明したり表現したりする。このような観察、実験の時間や探究する時間の充実を図るため、2単位時間を連続して指導する単元を、年間指導計画に位置付けるなどの工夫が必要であるとする。

ウ 補足的な指導を計画的に行う

「科学的事象についての知識・理解」が平成20年度より低くなっていたこと、生徒の意識調査の結果より「理科の授業がよく分かる」と答えた生徒は23.8%しかないなど、基本的・基礎的な知識や技能の定着が十分に図られていないことが明らかとなった。そこで、習得させるべき学習内容が確実に定着しているかを確かめる形成

的評価を計画的に行い、達成できていない場合は補充的な指導を確実に行うことが重要であるとする。つまり、「指導と評価の一体化」を、今一度、徹底する必要があるとする。その際、授業中の観察やノートの点検、小テストの実施などの「短いフィードバック・サイクル」によるものと、単元末直前の確認テストや定期テスト・実力テストのやり直しなどの「長いフィードバック・サイクル」によるものを組み合わせて行うことが重要であるとする。また、ワークシートや問題集等を利用した家庭学習の習慣化を図るなど、個に応じたきめ細かな取り組みも必要であるとする。

オ 授業実践に参考となるリンク

 [授業に役立つ実践研究](#)

 [授業・自己研修・校内研修のための資料集](#)

最終更新日：2009-07-28

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > III 各教科等の調査結果の分析 > 中学校英語

中学校英語

すべての評価観点、内容・領域において、「おおむね達成」を上回る成果が見られた。特に評価観点別の「理解」については「おおむね達成」の基準を19.2ポイント上回り、内容・領域の「聞くこと」については「十分達成」の基準を12.2ポイント上回った。また、内容・領域の「書くこと」については、「おおむね達成」の基準を15.9ポイント上回り、平成20年度との比較において、改善の傾向が見られた。しかし、「要努力」の割合が「書くこと」及び「言語や文化についての知識・理解」において増えており、今後の指導改善が必要である。

※「理解」・・・「理解の能力」のことであり、英語を聞いたり読んだりして、言語技能として理解する能力である。

※「知識・理解」・・・「言語や文化についての知識・理解」のことであり、言語自体についての知識や理解、また、言葉の背景にある文化を理解する能力である。例えば、「関係代名詞の文の形・意味・用法を理解できる。」が知識・理解にあたる。

ア 結果の概要

(ア) 評価の観点別

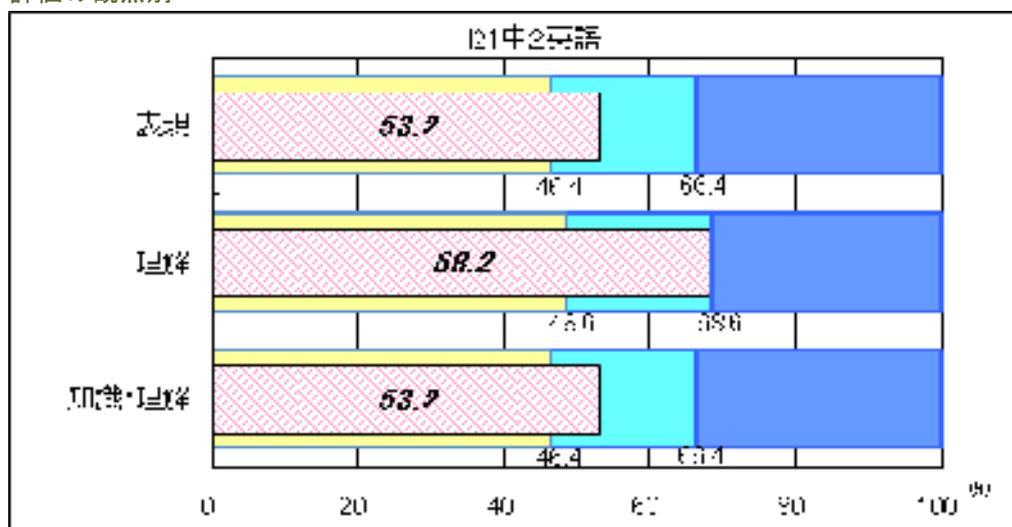


図1 H21年度 中2英語 評価の観点別正答率

「表現」、「理解」、「知識・理解」のいずれの観点も、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、特に「表現」と「知識・理解」については、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(イ) 評価の領域別

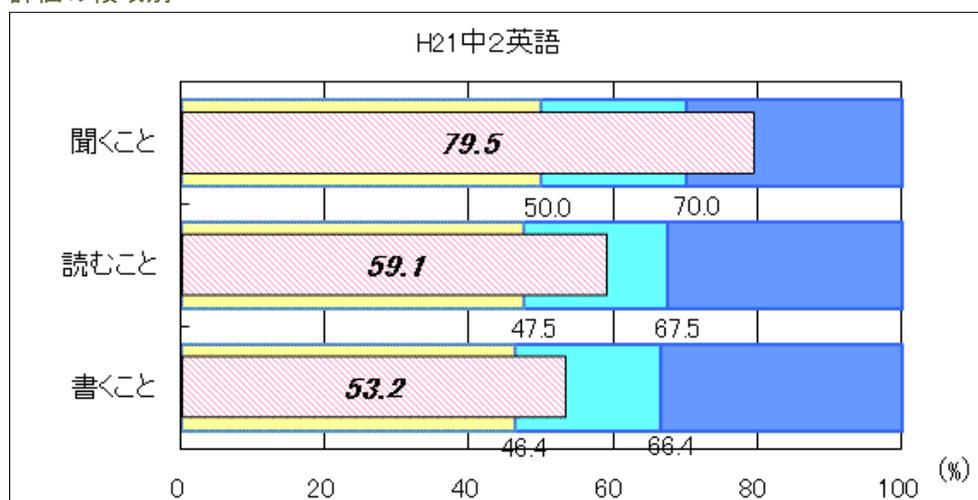


図2 H21年度 中2英語 内容・領域別正答率

「聞くこと」については、「十分達成」の基準を上回り良好であった。

「読むこと」、「書くこと」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

(ウ) 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題

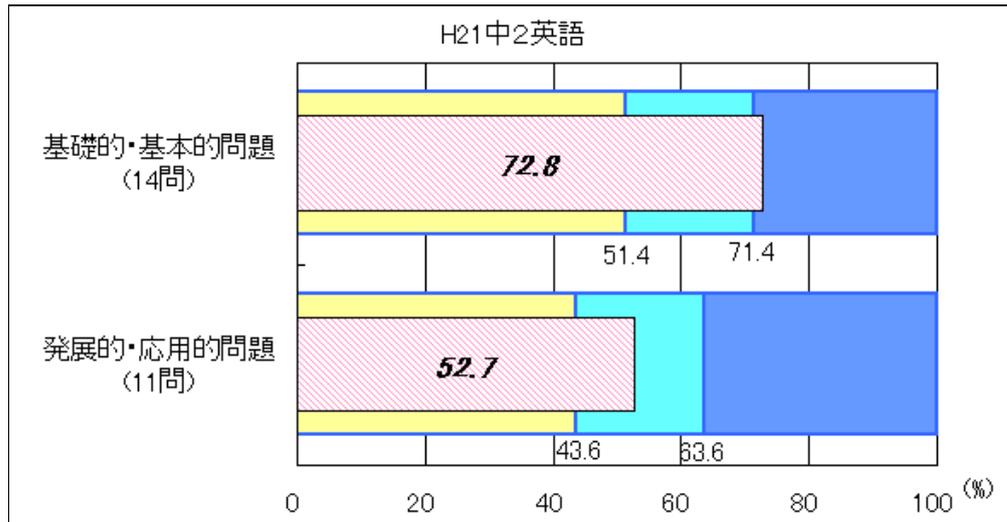


図3 H21年度 中2英語 基礎的・基本的問題と発展的・応用的問題正答率

「発展的・応用的問題」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、今後も「十分達成」に向けた継続的な指導が必要である。

「基礎的・基本的問題」については、「十分達成」の基準を上回っており、良好であった。

(エ) 「活用する力」を問う問題

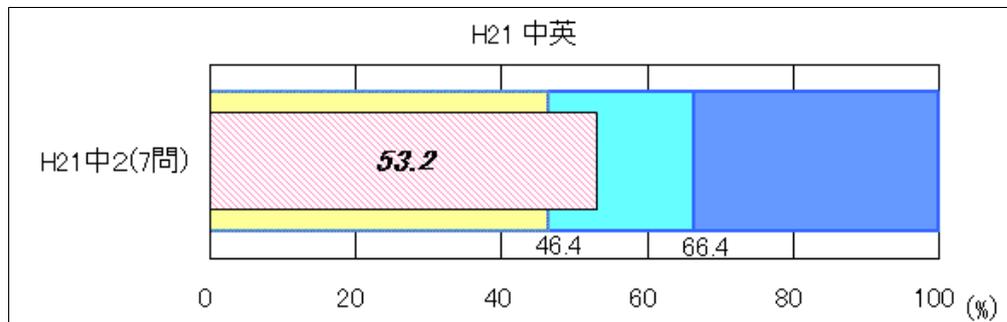


図4 H21年度 中2英語 「活用する力」を問う問題正答率

「活用する力」を問う問題については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「十分達成」の基準には開きがあり、継続的な指導が必要である。

イ 経年比較

(ア) 「活用する力」を問う問題の経年比較

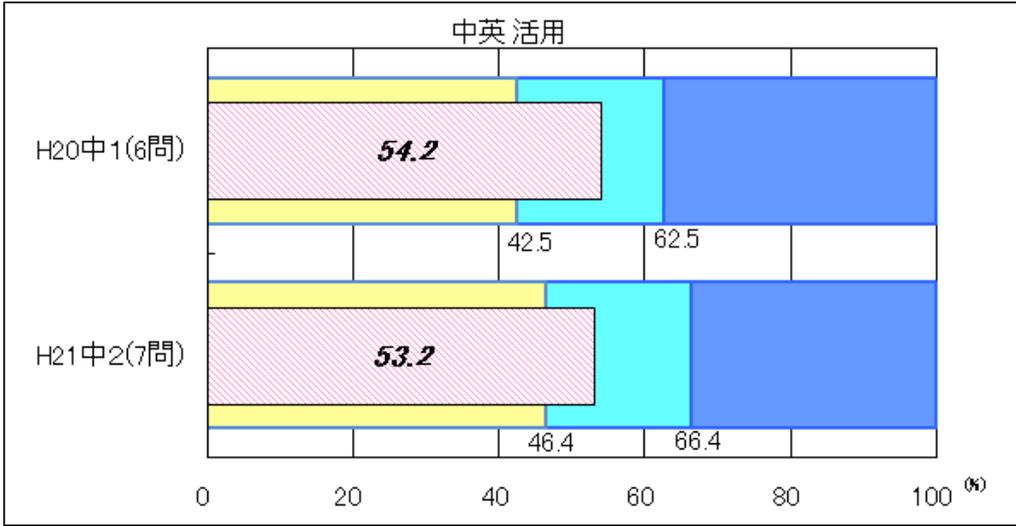


図5 H20・21年度 「活用する力」を問う問題の経年比較

平成21年度は「おおむね達成」の基準を6.8ポイント上回っていた。平成20年度は「おおむね達成」の基準を11.7ポイント上回っていたことから、「活用する力」はやや低下していると考えられる。

(イ) 「書くこと」の経年比較

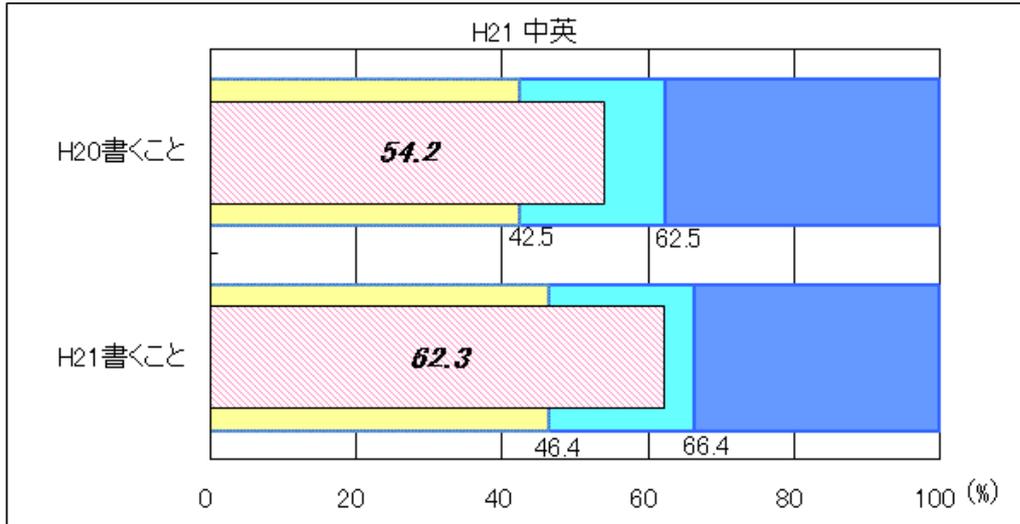


図6 H20・21年度 「書くこと」領域の経年比較

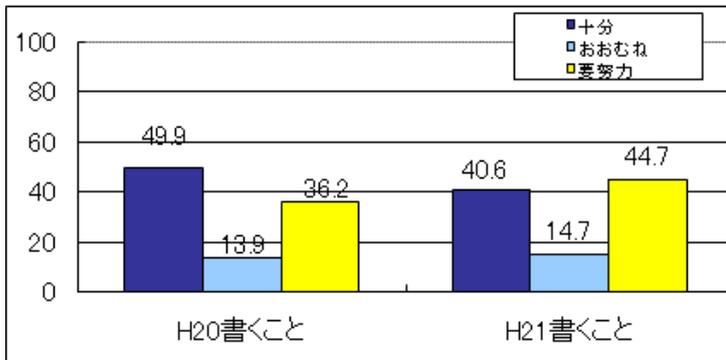


図7 H20・21年度 「書くこと」領域の到達度分布

図6において、平成21年度は「おおむね達成」の基準を15.9ポイント上回っていた。平成20年度は「おおむね達成」の基準を11.7ポイント上回っていたことから、全体としては改善傾向である。しかし、図7が示すように、平成20年度は「要努力」が36.2に対し、平成21年度の「要努力」の生徒の割合が44.7%であり、平成20年度と比べると8.5ポイント上昇しており、継続的な指導が必要である。

(ウ) 「言語や文化についての知識・理解」の経年比較

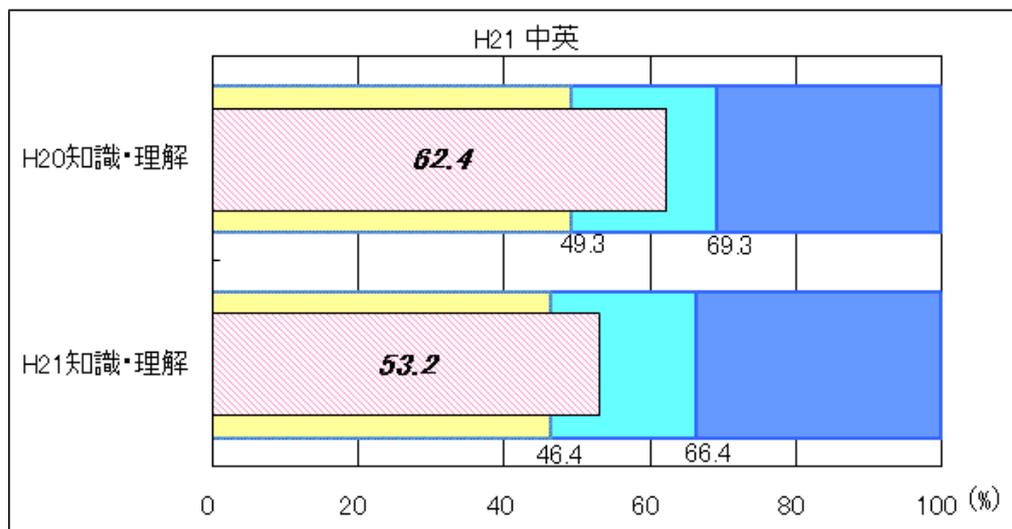


図8 H20・21年度「知識・理解」の経年比較

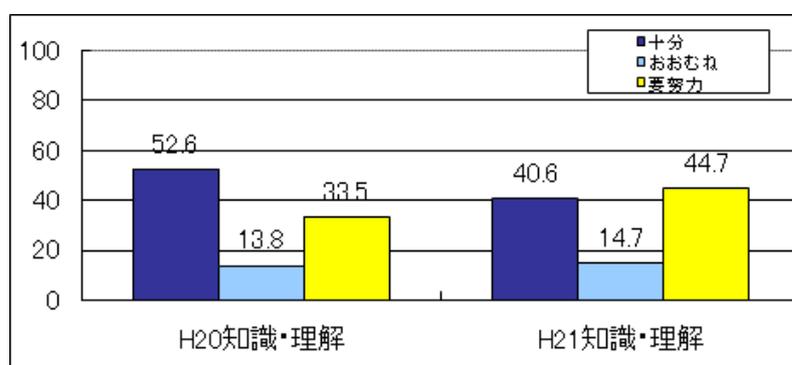


図9 H20・21年度「知識・理解」の到達度分布

図8において、平成21年度は「おおむね達成」の基準を7.0ポイント上回っていた。平成20年度は「おおむね達成」の基準を13.1ポイント上回っていたことから、言語や文化についての知識・理解の能力が低下傾向にあると考えられる。さらに図9が示すように、平成21年度の「要努力」の生徒の割合が44.7%であり、11.2%増加している。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の視点 **中2設問毎正答率**

1年生の3学期から2年生にかけて、生徒たちで学力差が出やすい「文法事項」と「英作文」について設問ごとに検証した。

視点1 **まとまった英文のあらすじや大切な部分をとらえて的確に読み取る力が付いているか。**

[第2学年大問6の小問(1)②] [PDF](#)

○ **ねらい**

あらすじや大切な部分を読み取ることができる。

○ **傾向**

家族の紹介をしている英文を読んだ後に、“Where is Ms. Green’s dog?” という疑問詞を含む英語での問いに、日本語で「車のそば(近く)」と答える問題である。「おおむね達成」の期待正答率45.0に対して正答率は20.2で24.8ポイント下回っていた。無解答率は17.1であった。誤答傾向としては、by the car の前置詞 by の意味が定着しておらず、「車の上に」、「車の中に」という誤答が多かった。また「日本語で答えなさい。」という指示を「日本語にしなさい。」と読み違えて「グリーン先生の犬はどこにいますか。」と日本語訳した誤答や“By the car.”と英語で答える誤答が多かった。

○ **指導法改善の視点**

疑問詞と前置詞の正しい使い方の定着を図る必要がある。疑問詞の where は1年生の2学期ごろに学習

する。この問題の無解答率が高かった原因として、where が「場所を問う疑問詞であることが理解できていない」、「他の what, when, whose, which と区別が付いていない。」ことが考えられる。教科書には疑問詞をまとめて復習するページがあるが、whose や where は教科書で、あまり取り扱われない。したがって生徒の理解の定着を図るには、授業中に意図的に使用する場面を仕組む必要がある。例えば、現在進行形の“Yoko is playing the guitar.”を学習する際に、“Yoko is playing the guitar by the tree.”など場所を表す前置詞句を加えたり、教科書本文の内容理解を確認する際のQAで、where で始まる質問を口頭で、ときには文字で答えたりする方法が有効だと考えられる。

[第2学年大問7の小問(1)] [PDF](#)

○ ねらい

対話の大切な部分をとらえて、的確に読み取ることができる。

○ 傾向

対話文中に登場する we という代名詞がだれを指すのか日本語で答える問題である。「おおむね達成」の期待正答率45.0に対して正答率は62.0で17.0ポイント上回っていた。無解答率は3.5であった。誤答傾向としては、「マイクとメアリー」のように we が話し手本人(ケンジ)を含むことを理解していない誤答や、「ケンジとメアリー」のように会話をしている2人を書いた誤答が多かった。we が「わたしたち」という複数形の代名詞であることは理解できているが、2人以上の名前が登場する会話の中からだれがだれのことを話しているかを場面をイメージしながら読むことが難しかったと考えられる。

○ 指導法改善の視点

リスニング指導では、まとまった英文を聞き取るときに、「メモを取っても構いません。」という説明があるので、生徒はメモを取り、教師はその取り方を指導している。英文を的確に読み取るためにも、構造化や図式化は内容の正確な理解に役立つだろう。

視点2 **自分の考えや気持ちを簡単な英語で書く力が付いているか。**

[第2学年大問8の小問(3)] [PDF](#)

○ ねらい

英語の質問を読んで、自分の伝えたいことを簡単な表現を用いて書くことができる。

○ 傾向

“What do you do after dinner?”に対して、英語で3語以上で答える自由英作文の問題である。「おおむね達成」の期待正答率45.0に対して29.0で16.0ポイント下回っていた。無解答率は23.9であった。疑問詞から始まる英文に対して誤答傾向としては、動詞の時制の誤答が最も多かった。次に“Yes, I do.”のように疑問詞に対する答え方そのものの誤答も多かった。進行形を使ったり、過去形を使う誤答も見られた。after dinner の意味が分からず“What do you have for dinner?”と読み違えて“I had rice.”と食べたものを答える誤答もあった。

○ 指導法改善の視点

疑問詞で始まる疑問文の応答は定着に時間が掛かる。したがって、“I get up at seven..”などの表現を学習する単元では、自分のスケジュールを英語を発表したり、書いたりすることだけでなく、友達に“What time do you get up?”と尋ねたり、尋ねた内容を“He gets up at seven.”と紹介する活動へと広げていく必要がある。さらに、この活動は疑問詞の定着に時間が掛かることを考慮し、単元終了後でも時間をとって定着を図る必要がある。

視点3 **あるテーマについて、まとまった内容の英語を書いて表現する力が身に付いているか。**

[第2学年大問10] PDF

○ ねらい

テーマについて、内容を整理し、適切な表現を用いて書くことができる。

○ 傾向

友達や家族を1人選んで、4文以上の英文で紹介する問題である。「おおむね達成」の期待正答率35.0に対して正答率は47.9で12.9ポイント上回っていた。無解答率は12.5であった。平成20年12月に調査した類似問題「自己紹介」と経年比較すると、正答率は20ポイント下がっていた。無解答率に大きな変化はなく、依然として文章を書くことに対する苦手意識をもつ生徒は多いと考えられる。誤答傾向としては多い順に、(e)sの脱落“He don't play soccer.”、一般動詞とbe動詞の混在“He is live in Saga.”、内容の羅列、代名詞・冠詞のミス“ He favorite food is Sushi.”などであった。

○ 指導法改善の視点

まず「書く」という行為に慣れさせるために、授業改善が必要である。あるテーマに基づいて2～3文の英文を書かせる活動を授業の中で定期的実施したい。また、友達や家族を紹介する単元では、既習の自己紹介を活用すると効果的である。例えば、“I don't play the piano, but she plays it very well.”とすれば、(e)sをどこに付ければ良いかが明らかになる。このように文法指導は既習事項の復習を入れながら継続的な指導を通して定着を図りたい。

○ 採点コメントに見る学校の取組状況

「教科書のスピーチ活動をする単元を利用して、作文を書く場面を日常的に設定したい。」や「英文を書こうとする生徒が前回に比べて増えた。」が多かった。羅列的な文“This is Yumi.She can play the guitar. She likes apples. She studies English every day.”に対する指導法改善のコメントも多かった。

エ これからの指導に向けて

今回の調査から、「聞くこと」については指導の成果が出ていることがうかがえるが、「書くこと」については改善が必要である。書く活動は時間が掛かる活動だが、平成19・20年度の教師・生徒意識調査から「書くこと」の活動を多く取り入れている学校は成果が出ていることから、計画的に授業の中に組み入れる必要がある。新学習指導要領でも書く活動は重視されており、「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識を、自分の体験や考えと結び付けて、「話すこと」や「書くこと」を通して発信することができるように、これからの指導を改善していきたい。

ア 単元の中に書く活動を位置付ける。

平成20年度の教師意識調査から、「音声面のコミュニケーション活動を半分以上の単元で取り入れている。」と答えた学校は76%に対して、「書く活動を半分以上の単元で取り入れている。」と答えた学校は37%であった。自由英作文の無解答率は、昨年と今年の比較では、大きな変化がないことを踏まえ、書く能力を高めるには、書く活動の機会を増やすことが先決である。学校の状況に応じて、帯学習として毎時間取ったり、単元の中に書く活動を必ず1つ位置付けたり、宿題で家庭学習用ノート等を利用して少しずつ書くことに慣れさせたりするなどの工夫が必要である。

イ 4技能を総合的に育成する単元計画を立てる。

前述のように、「聞くこと」「話すこと」を取り入れた言語活動は多くの単元で実施されている。例えば、“I like Doraemon. Do you like Doraemon, too?”のように同じ班の友達と尋ね合う言語活動は、「聞くこと」と「話すこと」が関連した言語活動である。大切なことは、ここで活動を終わらないことである。この後に「書く」「読む」活動を取り入れることで、「聞く」「話す」の更なる定着を図りたい。例えば、友達と尋ね合った後に、聞いたことをワークシートにメモすれば、「書くこと」の要素が加わる。そのメモを基にALTIに「友だち紹介クイズ」と題して答えてもらえば、再び「聞くこと」と「話すこと」の活動へと展開するであろう。他にも、そのメモを基に友達紹介文を書き、廊下に掲示すれば、そこに「読むこと」の要素が加わる。このように4つの領域を総合的に育成することが必要と考えられる。

ウ 文法指導は継続して行う。

自由英作文では、(e)sの脱落、一般動詞とbe動詞の混在など文構造にかかわる誤答が多い。「動詞に(e)sを忘れないように付けましょう。」と言っても定着には時間が掛かる。他人を紹介する言語活動が終わっても、動詞に(e)sが付く言語活動を仕組み、定着を図る必要がある。

オ 授業実践に参考となるリンク

最終更新日： 2009-07-28

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>Ⅳ 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

児童生徒意識調査の分析に当たっては、第Ⅰ章の調査内容の中で述べたように「学校生活」「学習動機」「学習活動(教科全般)」「生活習慣」「家族関係」「地域における生活」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られるおおまかな傾向
- ② 前年度調査との比較(同一学年において昨年度12月調査との比較を行っている)
- ③ 同一児童生徒を対象とした経年比較(同一児童生徒において昨年度12月調査との比較を行っている)
- ④ 回答状況と正答率との関連

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、「回答状況と正答率との関連」を見る関係上、各学年において全教科(小学校は4教科、中学校は5教科)のペーパーテストを受検した児童生徒のデータを、有効回答としている。各学年の有効回答者数と有効回答者率等は、下記のとおりである。

	有効回答者数	全回答者数	有効回答者率
小学校第5学年	8,383人	8,607人	97.4%
中学校第1学年	8,216人	8,394人	97.9%
中学校第2学年	7,877人	8,301人	94.9%

- (2) 本章で記述する「正答率」については、有効回答者の全教科(小学校は4教科、中学校は5教科)の平均正答率を用いた。
- (3) 「回答状況と正答率との関連」について記述するに当たっては、それぞれの回答選択肢を選択した児童生徒全員の正答率の平均を求めて比較した。選択肢の回答状況によりそれぞれの回答選択肢を選択した児童生徒数は異なるため、児童生徒数が極めて少ない回答選択肢については、その正答率を比較することが適切でない場合も考えられる。このような場合については、その旨を文中に記した。

教師意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

教師意識調査の分析に当たっては、第Ⅰ章の調査内容の中で述べたように「教科全般における指導法の工夫」「学習環境の活用」「家庭学習への関与状況」「教師の指導観」「学校組織マネジメントに対する意識」「T・T・少人数指導の成果と課題」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られるおおまかな傾向
- ② 学校スコアによるグループ比較

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、昨年度、中学校第1学年を担当した教師の12月調査での回答と小学校第4学年を担当した教師の3月調査での回答を用いている。回答者数は、下記のとおりである。

	回答者数
小学校	367人
中学校	707人

- (2) 教師意識調査の回答選択肢を指導の頻度や内容に応じて点数化し、各学校の有効回答者の平均を求めたものを学校スコアとしている。詳細は第I章の[註](#)を参照していただきたい。
- (3) 指導状況の違いを明らかにするために、学校スコアの県平均値を求めた上で、その平均値を10ポイント以上上回る学校群をAグループ、10ポイント以下下回る学校群をBグループとしてグループ間の平均正答率や児童生徒意識調査の状況を比較した。基本的にAグループがその指導が多く行われている(又は、意識が高い)学校群、Bグループがその指導があまり行われていない(又は、意識があまり高くない)学校群となっている。

最終更新日: 2009-07-17

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

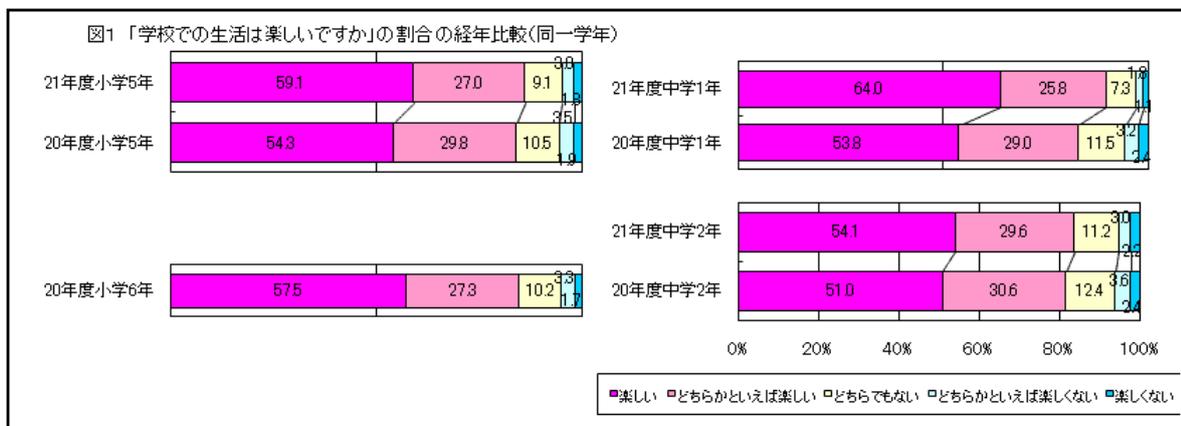
学校生活

- 学校での生活は楽しいと感じている児童生徒の割合は、小学校・中学校とも8割を上回っている。【図1】
- 「落ち着いて勉強することができている」と回答している児童生徒ほど、正答率が高くなる傾向が見られる。【図6】
- 学年が上がるにつれて、「困ったことがあったとき、先生に相談しない」「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合は高くなる傾向が見られる。【図7】

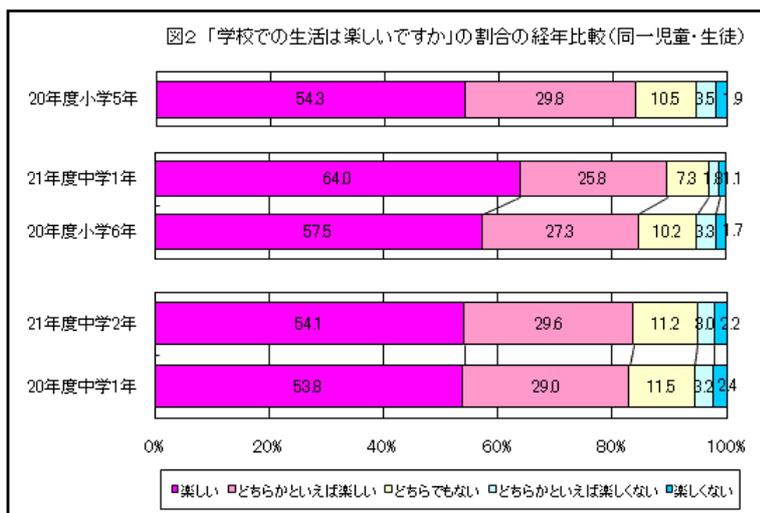
この節では、[学校適応]と[友達関係への志向性]の2つのカテゴリからなる設問を通して、児童生徒の学校生活についての調査結果を述べる。具体的には、学校生活の楽しさ、勉強に対する興味、学習状況や教師との関係、友達をつくることについての考えなどの質問からなる。

「学校での生活は楽しいですか」という設問については、「楽しい」と回答した児童生徒の割合は、小学5年59.1%、中学1年64.0%、中学2年54.1%になっている。「どちらかといえば楽しい」と回答した児童生徒の割合を合わせると各学年とも8割を上回っている。

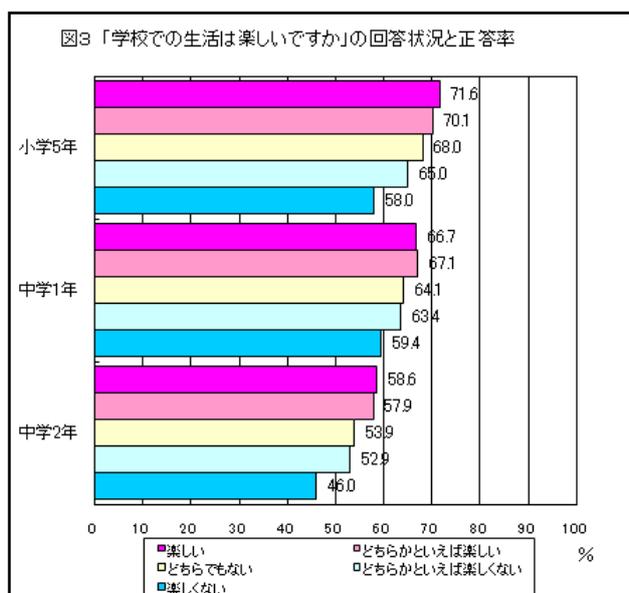
この設問を前年度調査と比較すると、「楽しい」と回答した児童生徒の割合は、小学5年と中学2年でやや高く、中学1年では10.2ポイント高くなっている。また、「どちらかといえば楽しい」と回答した生徒児童の割合を合わせても、前年度調査よりも高くなっている。【図1】



同一児童生徒の経年比較で見ると、「楽しい」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけては、6.5ポイント増加しているが、中学1年から中学2年にかけては、大きな変化は見られない。【図2】

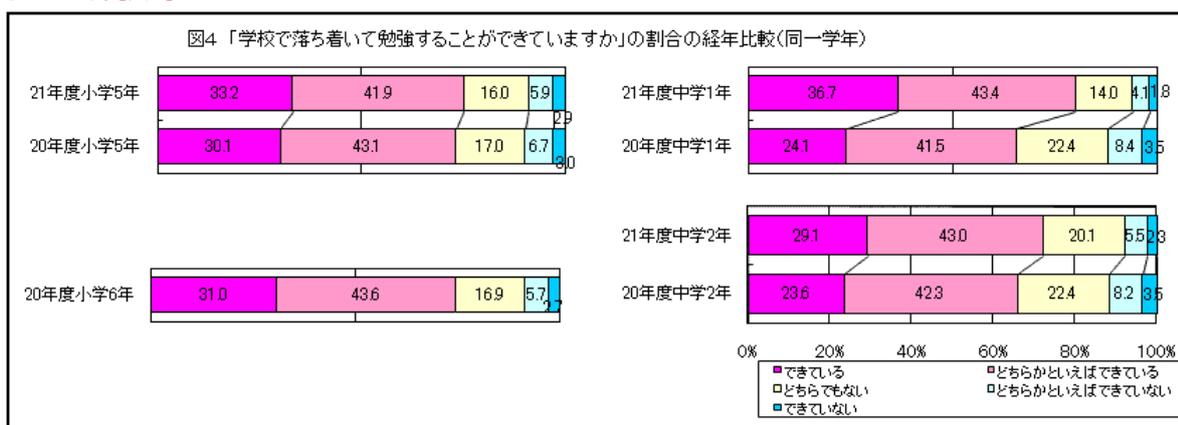


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「楽しい」又は、「どちらかといえば楽しい」と回答した児童生徒の正答率が高くなっている。以下、だんだんと正答率は低くなる傾向が見られる。[図3]

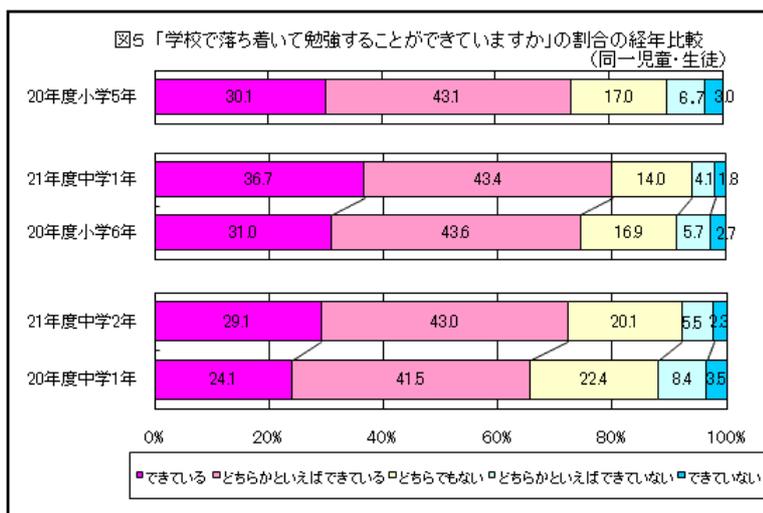


「あなたは学校で落ち着いて勉強することができますか」という設問については、「できている」と回答した児童生徒の割合は、小学5年33.2%、中学1年36.7%、中学2年29.1%になっている。「どちらかといえばできている」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも7割を上回っている。

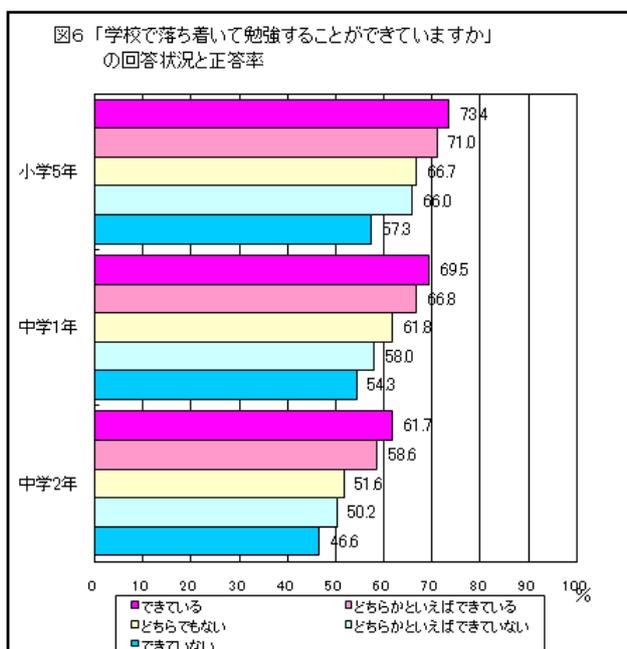
この設問を前年度調査と比較すると、「できている」と回答した児童生徒の割合は、各学年で高くなっている。特に中学1年で12.6ポイント高くなっている。[図4]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「できている」と回答した児童生徒が小学6年から中学1年にかけては5.7ポイント、中学1年から2年にかけては5.0ポイント増加している。【図5】



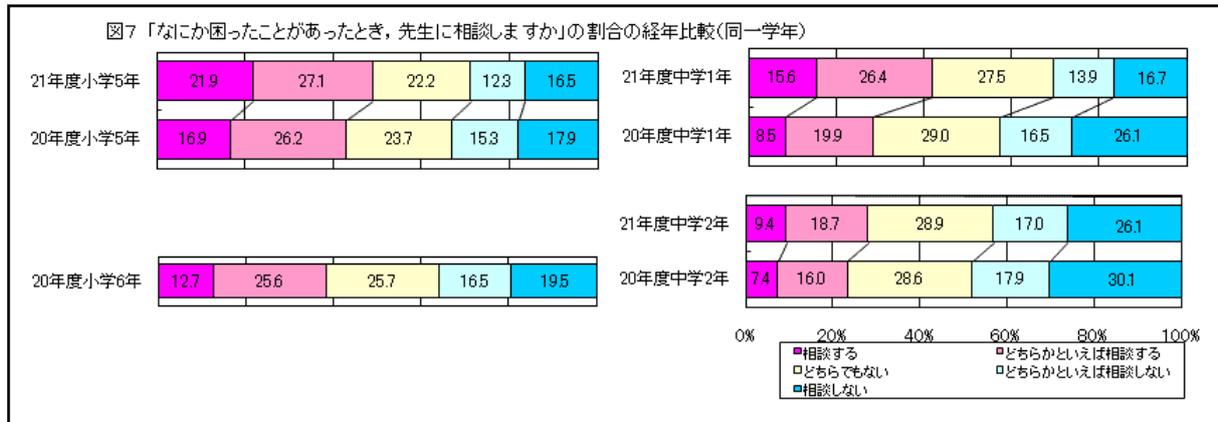
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「できている」と回答した児童生徒の正答率が最も高くなっている。以下、だんだんと正答率は低くなる傾向が見られる。【図6】



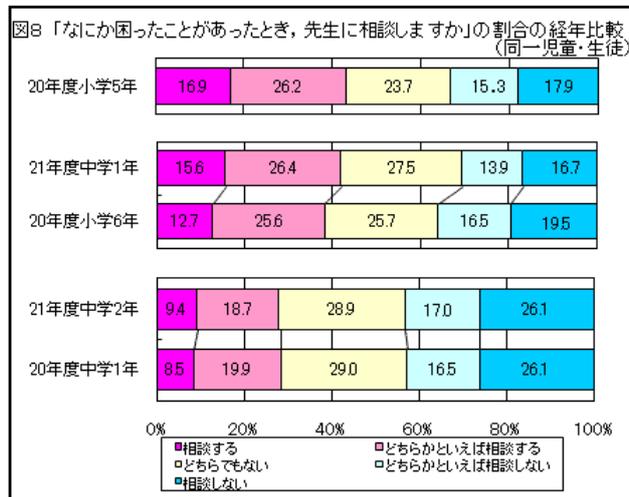
この調査から、「学校生活の楽しさ」と同様に「落ち着いた学習への取り組み」と学習到達には関係があるといえる。小学校から中学校にかけて「できている」と回答した児童生徒が減少することについては、発達の段階や学習内容など様々な原因が考えられるが、課題である。小学校と中学校の接続については、学校区単位での授業交流など小中連携の取り組みをなお一層進めていくことが考えられる。落ち着いて学習に取り組むことができる環境を整えることや、そのための指導体制をつくることに学校全体で取り組むことが、学力向上に向けての足掛かりとなるであろう。

「なにか困ったことがあったとき、先生に相談しますか」という設問については、「相談する」と回答した児童生徒の割合は、小学5年21.9%、中学1年15.6%、中学2年9.4%になっている。「どちらかといえば相談する」と回答した児童生徒の割合を合わせても5割に満たない。「相談しない」「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合は、小学5年28.8%、中学1年30.6%、中学2年43.1%になり、学年が上がるにつれて、高くなる傾向が見られる。

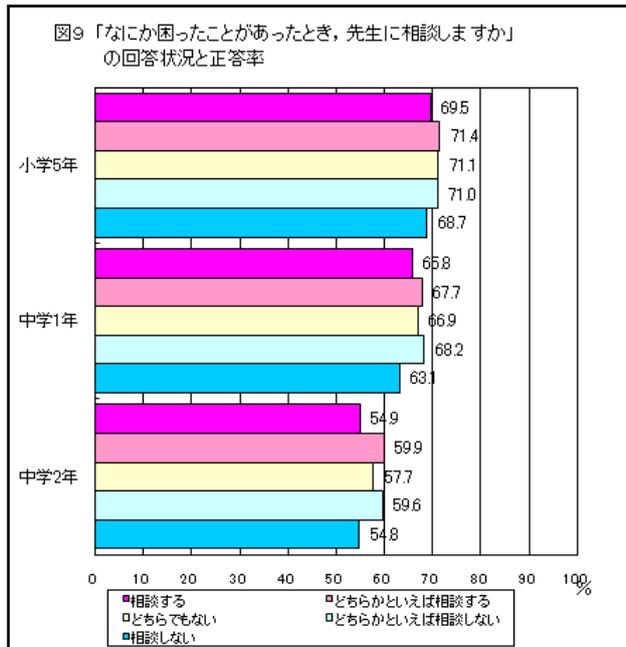
この設問を前年度調査と比較すると、「相談する」と回答した児童生徒の割合は、小学5年と中学1年で高くなっており、特に中学1年で顕著である。「どちらかといえば相談する」と回答した児童生徒の割合を合わせると各学年ともやや高くなっている。[図7]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「相談する」「どちらかといえば相談する」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて3.6ポイント増加し、「相談しない」「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合は、5.5ポイント減少している。中学1年から中学2年にかけては、全体的な傾向として大きな変化は見られない。[図8]



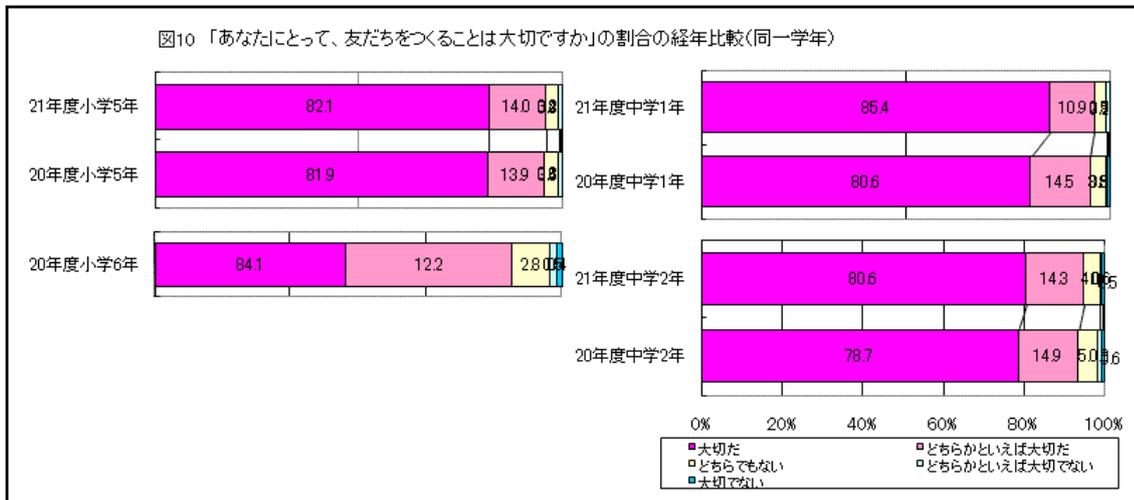
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな傾向は見られない。[図9]



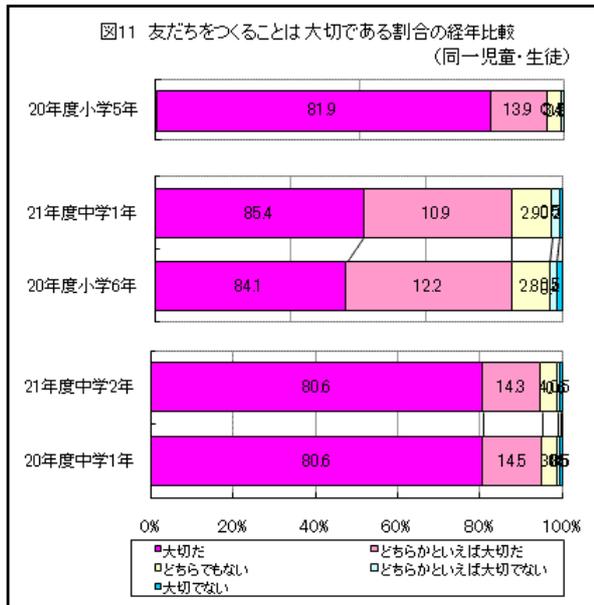
児童生徒の発達の段階に応じて児童生徒と教師の良好な関係を保つことは大切なことである。教科担任制となる中学校においても、学級担任のみならず、教師が個々の生徒とのよりよい関係を構築する工夫が必要であろう。

「あなたにとって、友だちをつくることは大切ですか」という設問については、「大切だ」と回答した児童生徒の割合は、小学5年82.1%、中学2年85.4%、中学2年80.6%になっている。「どちらかといえば大切だ」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも9割を上回っている。

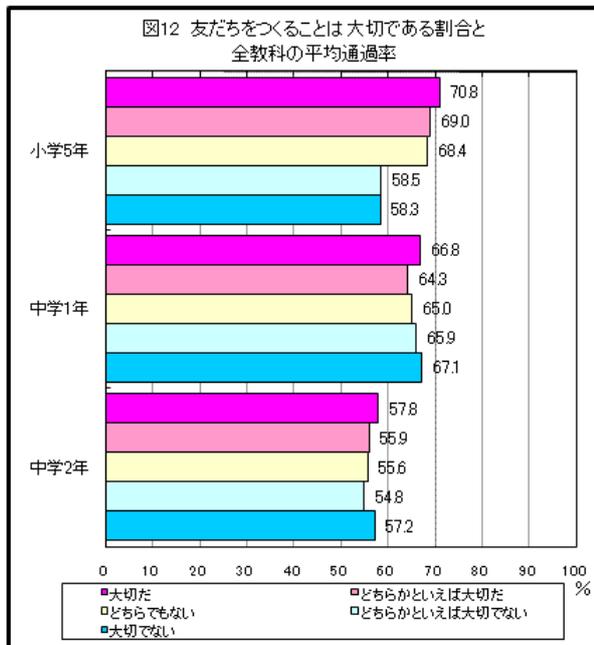
この設問を前年度調査と比較すると、「大切だ」と回答した児童生徒の割合は、小学5年と中学2年では大きな変化は見られないが、中学1年でやや高くなっている。[図10]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「大切だ」と回答した児童生徒の割合に大きな変化は見られない。[図11]

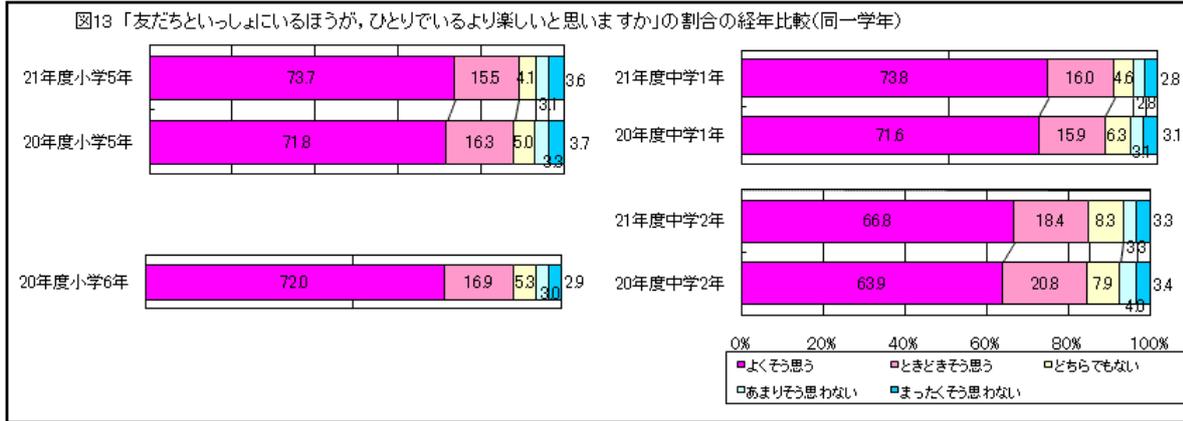


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学校において「大切だ」と回答した児童生徒の正答率が最も高くなっており、以下だんだんと正答率は低くなる。中学校においては、明らかな傾向は見られない。[図12]

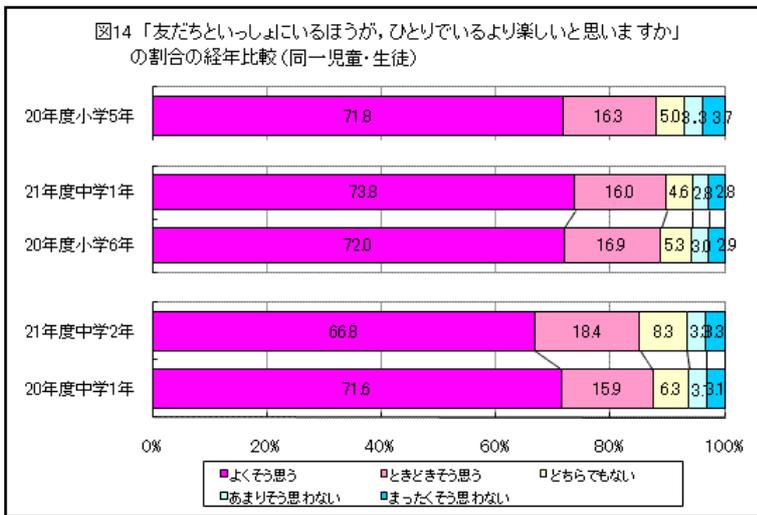


「友だちといっしょにいるほうが、ひとりでいるより楽しいと思いますか」という設問については、「よくそう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年73.7%、中学1年73.8%、中学2年66.8%となっており、中学2年が他学年に比べて低くなっている。しかし、「ときどきそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも8割を上回っている。

この設問を前年度調査と比較すると、全体的な傾向に大きな変化は見られない。[図13]

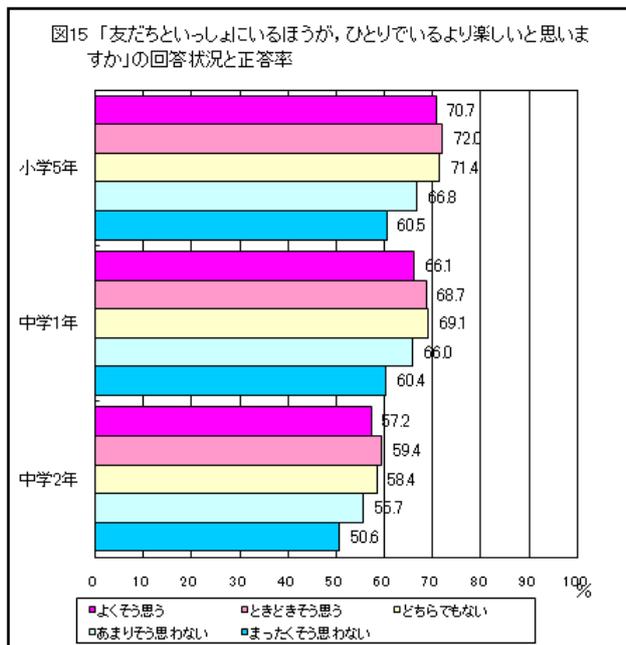


同一児童生徒の経年比較で見ると、「よくそう思う」と回答した児童生徒は中学1年から中学2年にかけて4.8ポイント減少している。[図14]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったくそう思わない」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。[図15]

ただし、図14を見たら分かるように「まったくそう思わない」と回答した児童生徒の人数の割合は、いずれの学年においても3%前後と小さいため、比較する際は注意が必要である。



平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > IV 児童生徒意識調査の結果の分析

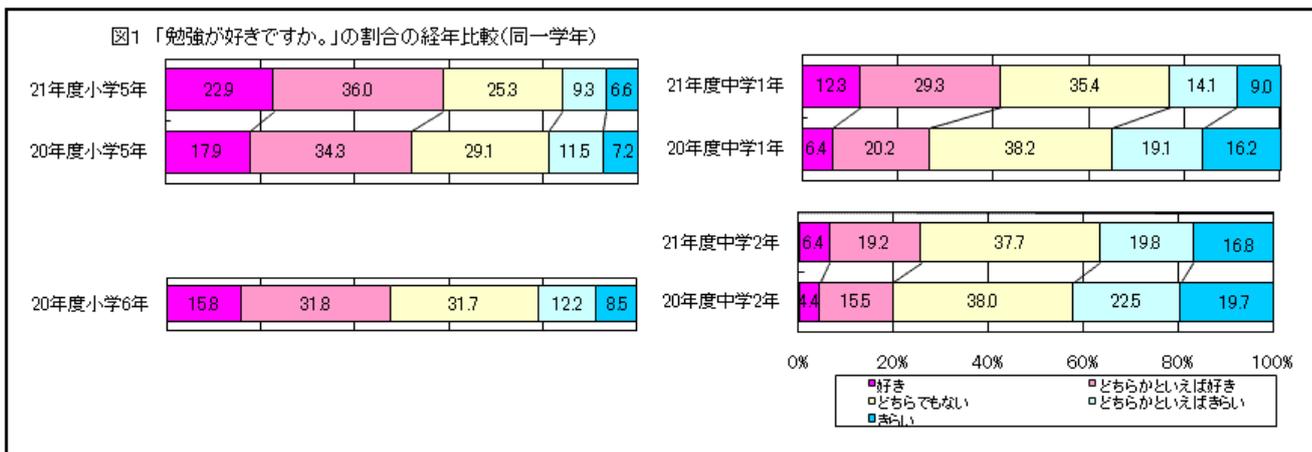
学習動機

- 「勉強が好き」と回答している児童生徒ほど、正答率は高い傾向が見られる。[図3]
- 学校での勉強は、大人になって役に立つと思っている児童生徒の割合は、小学校は9割、中学校は7割を上回っている。[図4]
- 「大人になっても、仕事はしたくない」「仕事のことを考えたことがない」と回答した児童生徒ほど、正答率が低くなる傾向が見られる。[図9]

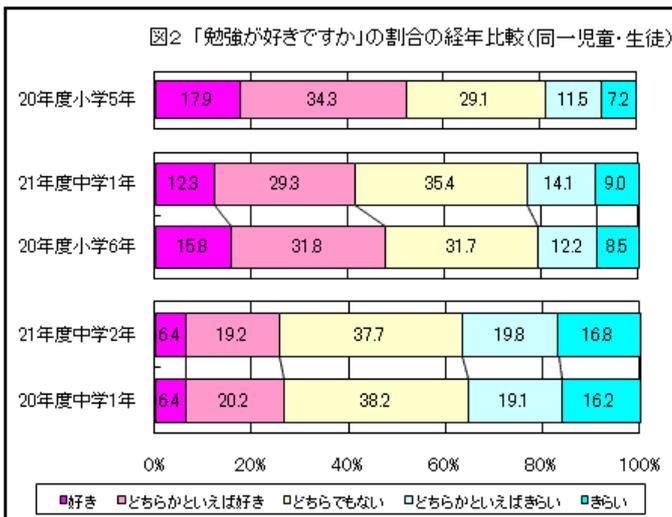
この節では、勉強に対する興味・関心やその有用性、大人になってからかなえてみたい仕事(小学校ではゆめ)の有無などについての質問から児童生徒の学習動機についての調査結果を述べる。

「勉強が好きですか」という設問については、「好き」と回答した児童生徒の割合が小学5年22.9%、中学1年12.3%、中学2年6.4%になっている。「どちらかといえば好き」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学校では5割を上回っているが、学年が上がるにつれて低くなる傾向が見られる。

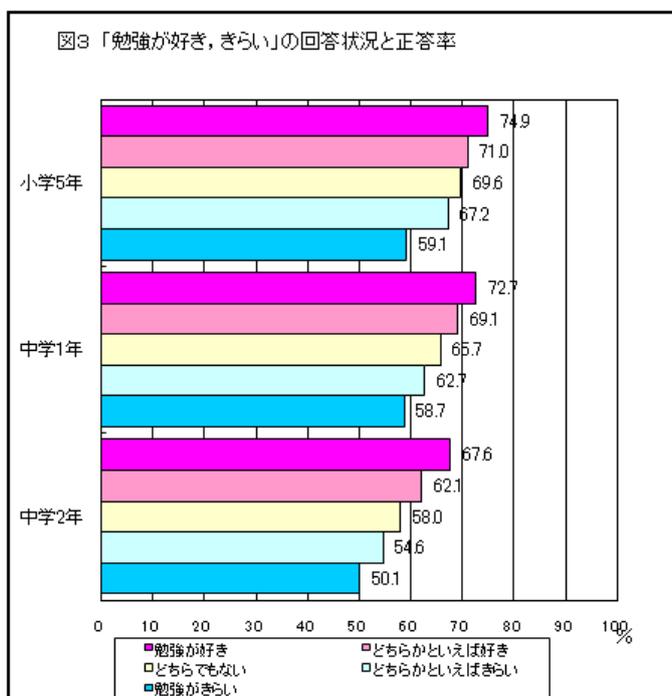
この設問を前年度調査と比較すると、「好き」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっている。特に中学1年で5.9ポイント高くなっている。[図1]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「好き」「どちらかといえば好き」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて6.0ポイント減少している。中学1年から中学2年にかけては大きな変化は見られない。〔図2〕



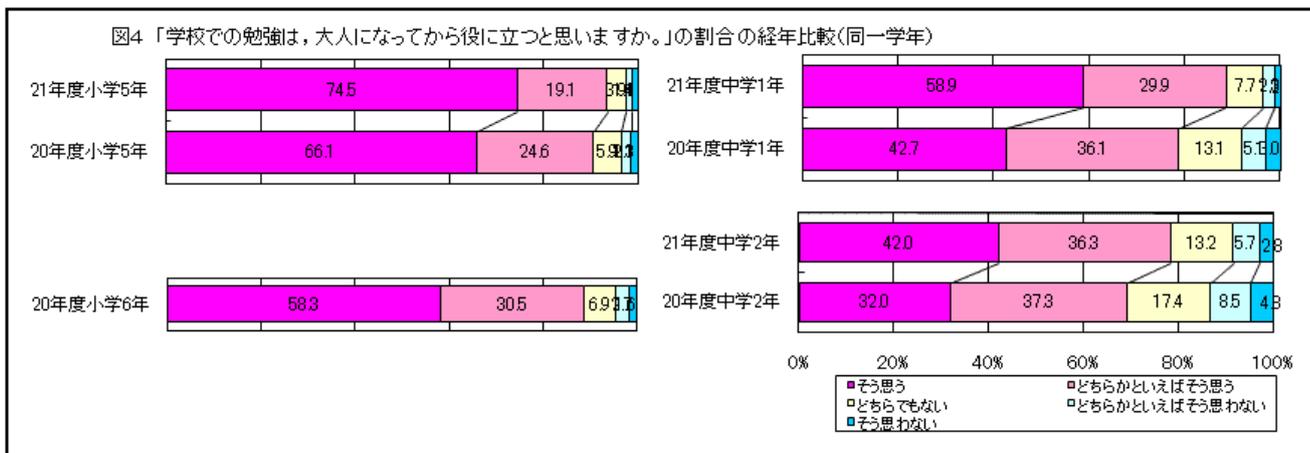
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「勉強が好き」と回答した児童生徒の正答率ももっとも高くなっている。以下、だんだんと正答率は低くなる傾向が見られる。〔図3〕



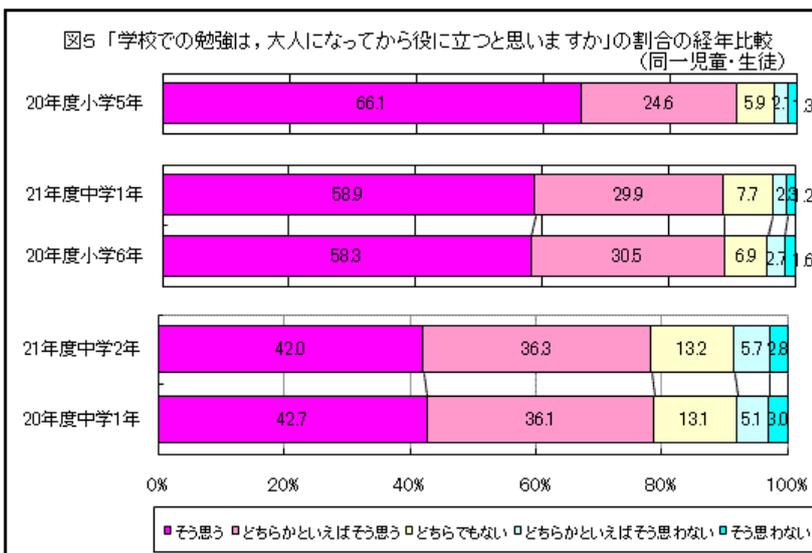
この調査から、勉強が好きということと学習到達には深い関係があるといえる。小学校から中学校にかけて多くの児童生徒が勉強を好きでなくなることについては、発達の段階や学習内容に起因することも考えられるが、大きな課題である。小学校と中学校のスムーズな接続や中学校における指導法改善等を図っていくことが大切である。

「学校での勉強は、大人になってから役に立つと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した児童生徒の割合が小学5年74.5%、中学1年58.9%、中学2年42.2%になっている。「どちらかといえばそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学校は9割、中学校は7割を上回っている。

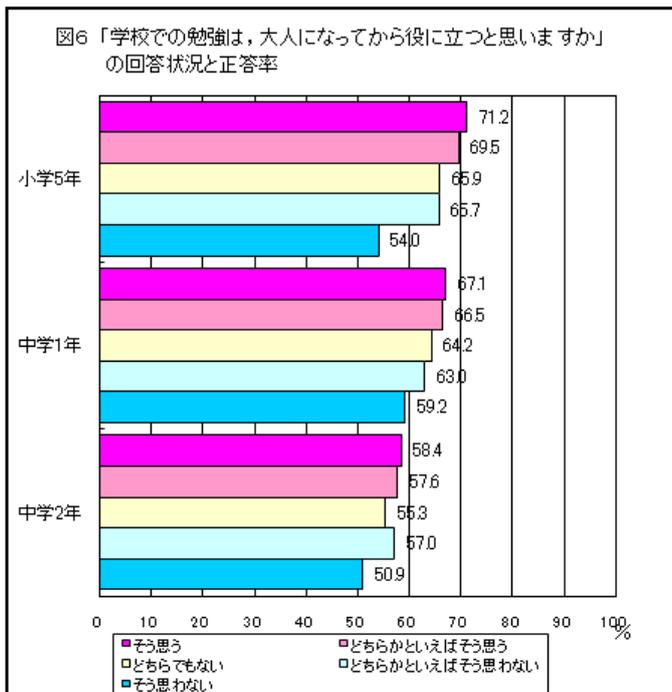
この設問を前年度調査と比較すると、「そう思う」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっており、特に中学1年で大きな変化が見られる。一方、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と回答した児童生徒の割合も、中学1年と中学2年でやや高くなっている。[図4]



同一児童生徒の経年比較で見ると、全体的な傾向として大きな変化は見られない。[図5]



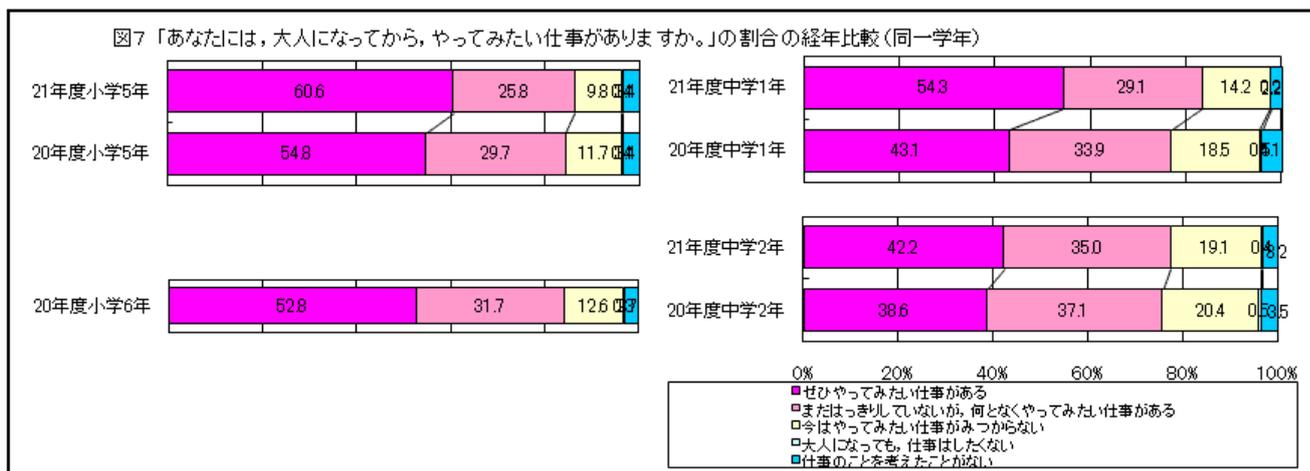
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学校5年と中学校1年では、「そう思う」と回答した児童生徒の正答率が最も高くなっている。以下だんだんと正答率は低くなる傾向が見られる。中学校2年においては、明らかな傾向は見られない。[図6]



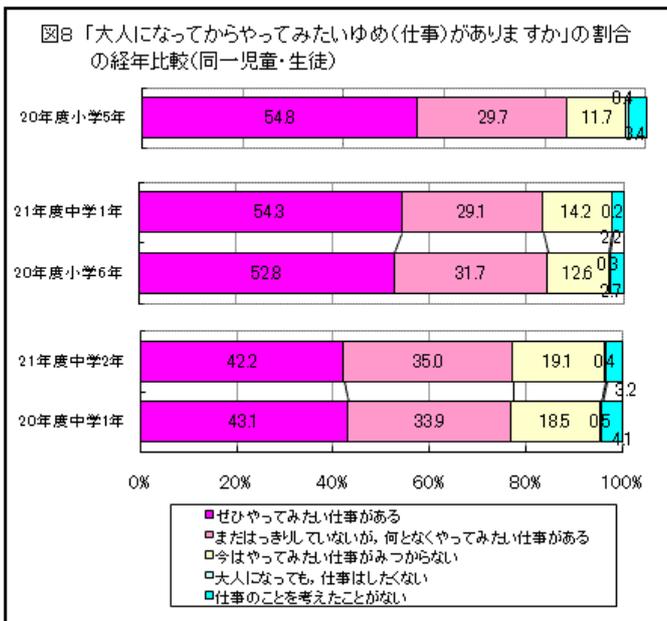
教科の学習が知識の習得だけで終わることなく、日常生活との関連や将来における社会とのつながりなどを意識した指導の工夫が求められている。学習指導要領改訂のキーワードの一つである「活用」ということについても、今後十分な研究がなされる必要がある。

「あなたは大人になってからやってみたいゆめ(仕事)がありますか」という設問については、「ぜひやってみたい仕事がある」と回答した児童生徒の割合が小学5年60.6%、中学1年54.3%、中学2年42.2%になっている。「何となくやってみたい仕事がある」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学5年と中学1年は8割、中学2年は7割を上回っている。

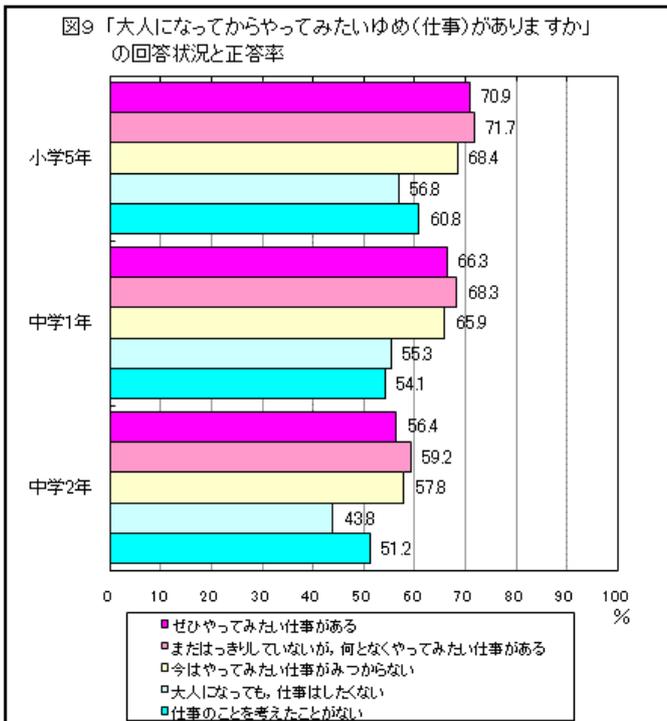
この設問を前年度調査と比較すると、「ぜひやってみたいと仕事がある」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっており、特に中学1年で11.2ポイント高くなっている。[図7]



同一児童生徒の経年比較で見ると、全体的な傾向として大きな変化は見られない。【図8】



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「ぜひやってみたい仕事がある」「何となくやってみたい仕事がある」と回答した児童生徒の正答率が高くなっており、「大人になっても、仕事はしたくない」「仕事のことを考えたことがない」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。【図9】



中・高生について「将来の職業に興味をもったとき」や「将来行きたい学校がはっきり決まったとき」に学習意欲が高まるとの調査結果が出されており、夢や目標をもたせることは大切である。従来の特別活動における進路指導に加えて、キャリア教育の視点などを加味した継続的・系統的な指導により、夢やあこがれの職業、就きたい仕事、なりたい人物像、夢や目標を達成するためにどうすればよいのか等、児童生徒がより具体化できるように支援することが望まれる。

最終更新日： 2009-07-17

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査の結果の分析

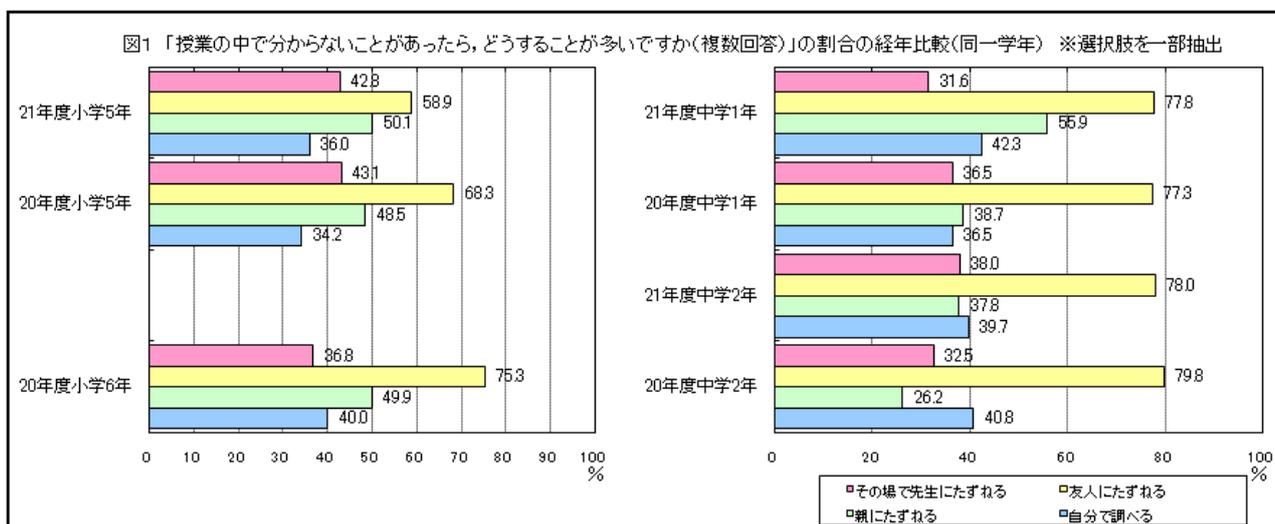
学習活動(教科全般)

- 授業中で分からないときは、「友人にたずねる」と回答した児童生徒の割合がすべての学年で最も高く、小学校では約6割、中学校で約8割である。[図1]
- 家庭学習の時間は、学年が上がるにつれて、1時間以上は勉強している児童生徒の割合は高くなる傾向が見られる。[図4]

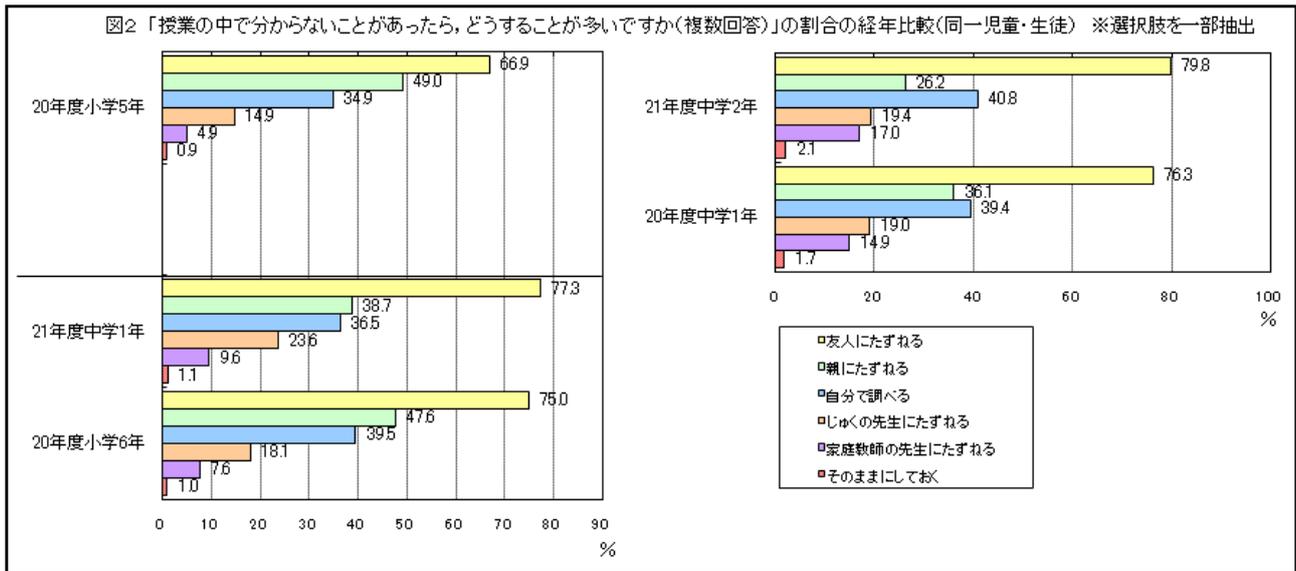
この節では、授業で分からないときの対応、授業以外の勉強時間や勉強の方法、塾や家庭教師の有無など児童生徒の学校内外における学習活動についての質問から児童生徒の教科全般における学習活動についての調査結果を述べる。

「授業の中で分からないことがあったらどうすることが多いですか(複数回答)」という設問については、中学1年と2年を境に「親にたずねる」児童生徒の割合が低くなる傾向が見られる。すべての学年において「友人にたずねる」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学5年58.9%、中学1年77.8%、中学2年78.0%になっている。以下、小学5年では「親にたずねる」「その場で先生にたずねる」、中学1年では「親にたずねる」「自分で調べる」、中学2年では「自分で調べる」「その場で先生にたずねる」の順になっている。

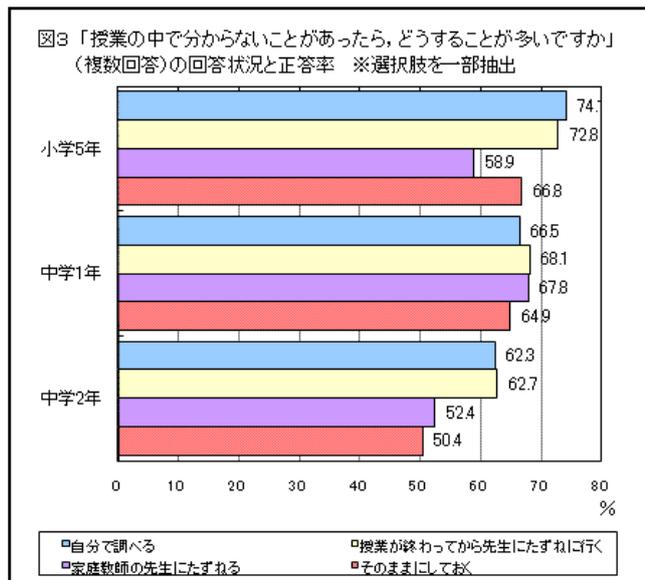
この設問を前年度調査と比較すると、小学5年では「友人にたずねる」と回答した児童の割合が低くなっている。中学1年では「親にたずねる」「自分で調べる」と回答した生徒の割合は高くなり、中学2年では「その場で先生にたずねる」「親にたずねる」と回答した生徒の割合は高くなっている。[図1]



同一児童生徒の経年比較で見ると、各項目に回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけては、「友人にたずねる」と「じゅく先生の先生にたずねる」、「家庭教師の先生にたずねる」が増加し、「親にたずねる」が減少している。これは、中学1年から2年にかけても似た傾向が見られる。[図2]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学校5年と中学校2年では、「自分で調べる」「授業が終わってから先生にたずねに行く」と回答した児童生徒の正答率が高くなっている。中学校1年においては、明らかな傾向は見られない。また、中学校においては、「そのままにしておく」と回答した児童生徒の正答率が最も低くなっている。[図3]



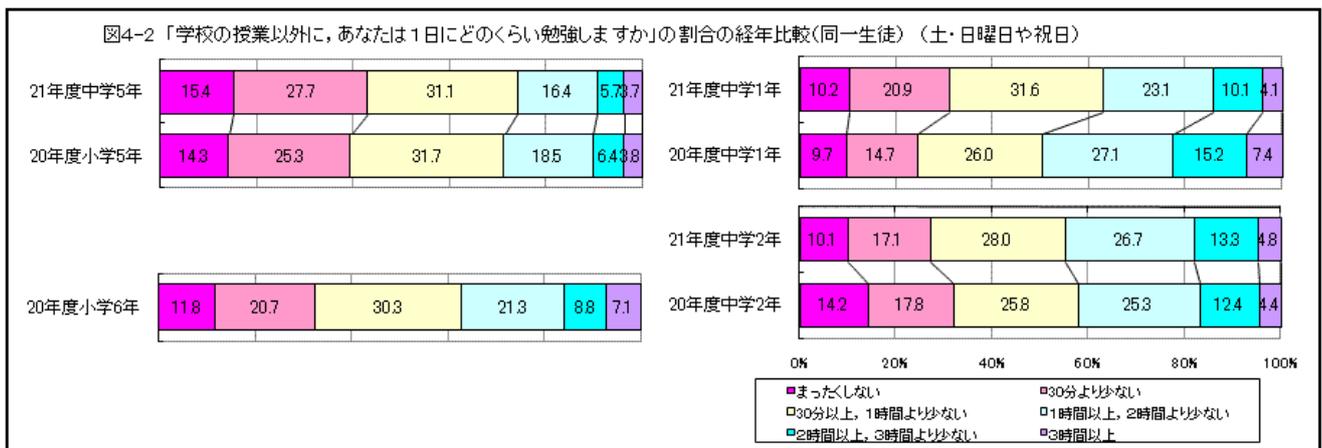
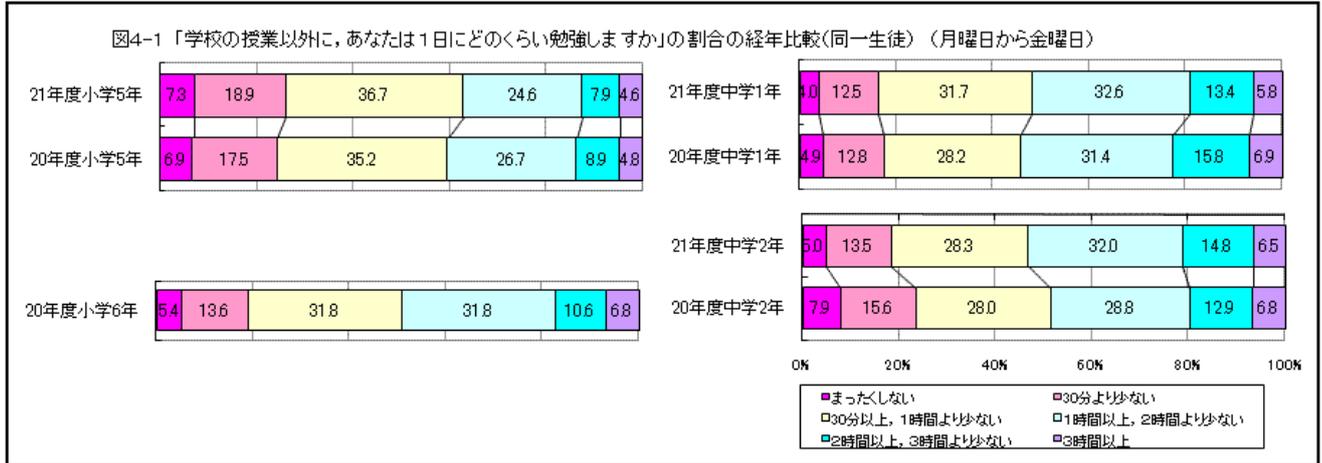
自分で調べようとする意欲や授業後に先生に尋ねて解決しようという態度が学習にもよい影響を与えている。分からないことをそのままにしている児童生徒はますます分からなくなり、意欲も更にながるといふ悪循環が生まれている可能性もある。まずは「そのままにしておく」と回答した児童生徒に対する個別の対応が望まれる。個々の児童生徒の状況に応じて、わずかでも得意と思われる教科や興味を示す教科から意欲向上につながるような指導が考えられる。

「学校の授業以外に、あなたは1日にどのくらい勉強しますか」(月曜日から金曜日)という設問については、学年が上がるごとに2時間以上勉強している児童生徒の割合は高くなる傾向が見られる。このことは土・日曜日や休日についても同様にいえる。「30分以上1時間より少ない」又は「1時間以上2時間より少ない」と回答した児童生徒の割合が小学5年61.3%、中学1年64.3%、中学2年60.3%になっており、すべての学年において6割を上回っている。

(土・日曜日や休日)については、平日よりも勉強時間が少なくなる傾向が見られる。すべての学年において「30分以上1時間より少ない」又は「1時間以上2時間より少ない」と回答した児童生徒の割合が小学5年は47.5%、中学1年と2年は54.7%になっており、6割を下回っている。

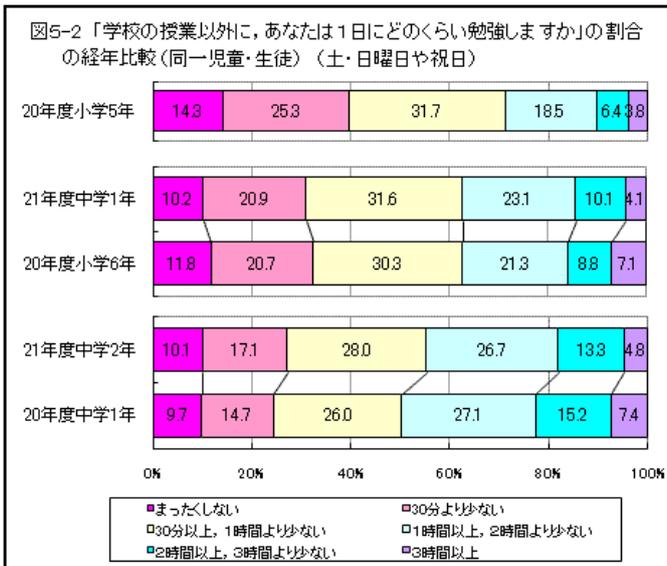
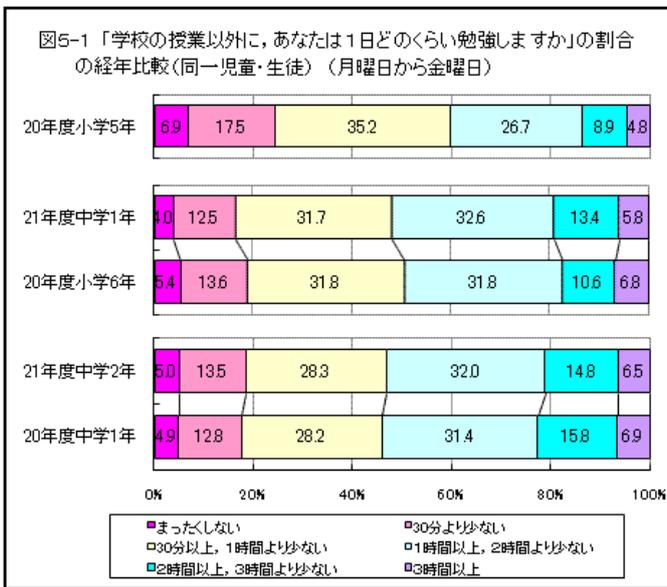
この設問(月曜日から金曜日)を前年度調査と比較すると、小学5年と中学1年では勉強時間が減少しており、1時間以上勉強していると回答した児童の割合がやや低くなっている。中学2年では勉強時間が増加しており、1時間以上勉強していると回答した生徒の割合がやや高くなり、逆に30分より少ないと回答した生徒の割合はやや低くなっている。

(土・日曜日や休日)を前年度調査と比較すると、平日と同様に、小学5年と中学1年では勉強時間が減少しており、中学2年では増加している。[図4]

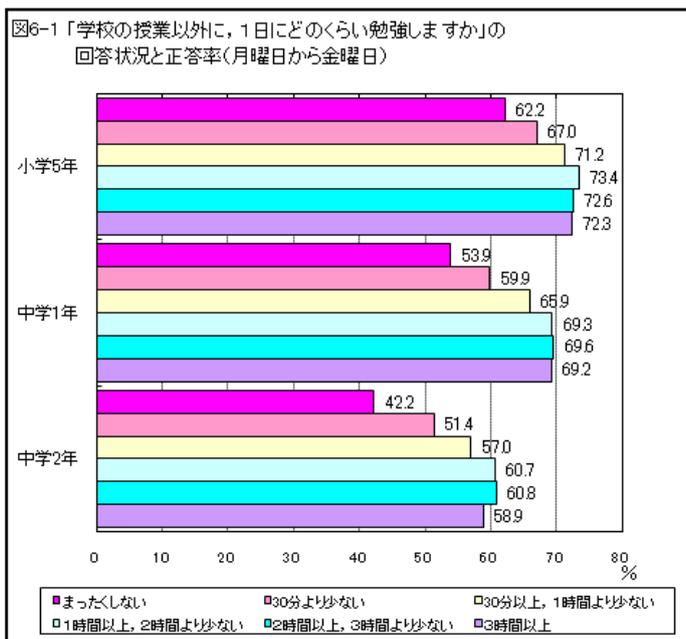


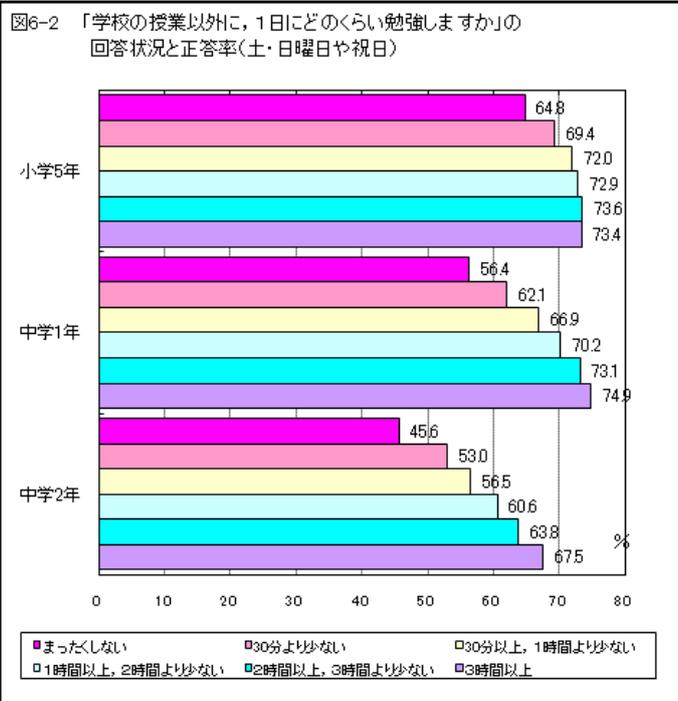
同一児童生徒の経年比較で見ると、(月曜日から金曜日)について、全体的な傾向として大きな変化は見られない。

(土・日曜日や休日)については、中学1年から中学2年にかけて、2時間以上勉強していると回答した生徒の割合が4.6ポイント減少し、1時間より少ないと回答した生徒の割合が4.8ポイント増加している。[図5]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、(月曜日から金曜日)(土・日曜日や休日)ともに、すべての学年において勉強時間が長い方が正答率が高くなる傾向が見られる。また、「まったくしない」と回答した児童生徒の正答率が最も低くなっている。[図6]

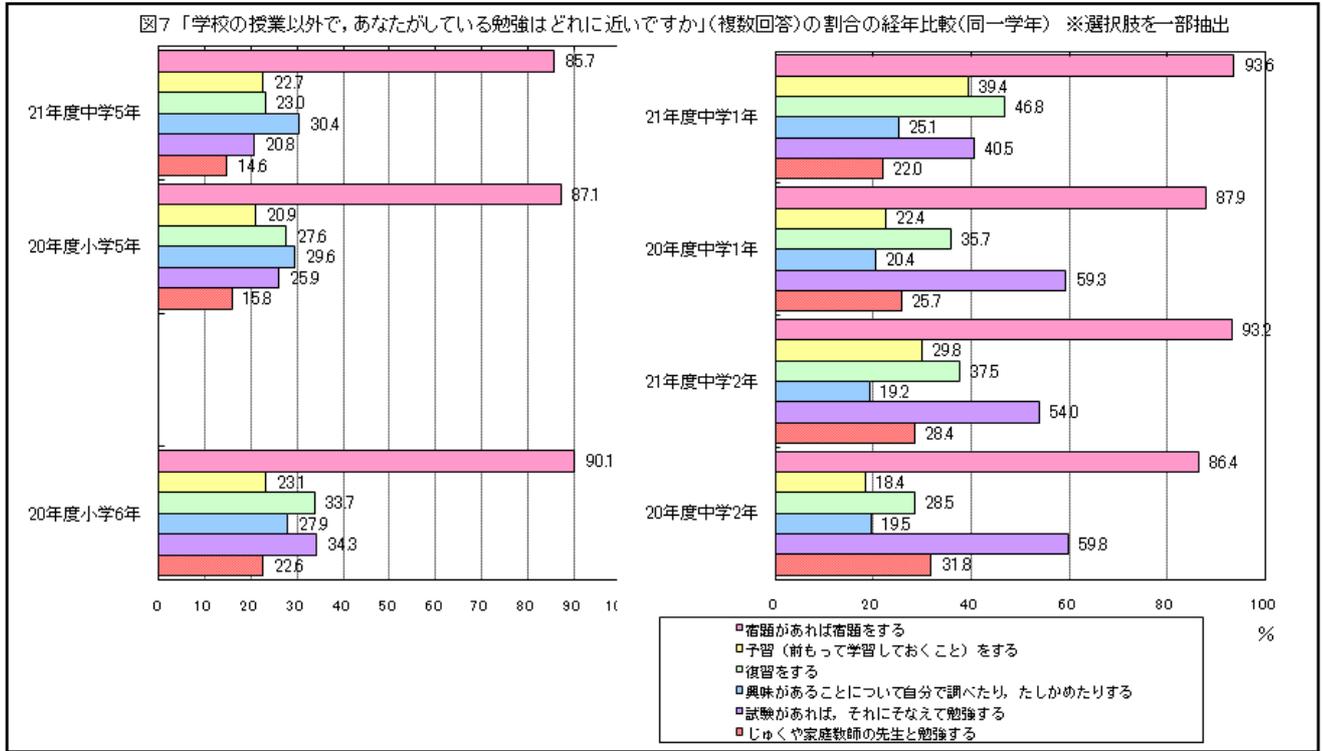




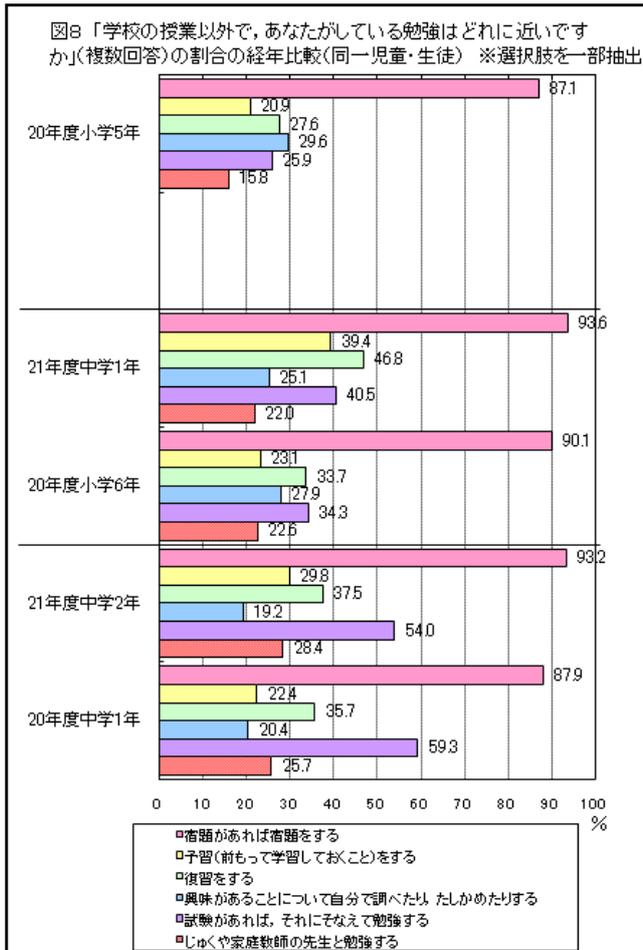
家庭学習をはじめとする授業以外の学習の重要性について指導するとともに、オリエンテーションの場を設けるなどして、予習・復習の仕方等について具体的に繰り返し指導することが必要であろう。また、学習内容が更に高度化する中学生では、1日の生活時間を見直させて、学習時間を確保することが望まれる。

「ふだん学校の授業以外で、あなたがしている勉強は次のうちどれに近いですか」(複数回答)という設問については、中学生は小学生に比べて試験に向けた勉強をする割合が高くなる傾向が見られる。すべての学年において「宿題があれば宿題をする」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学5年85.7%、中学1年93.6%、中学2年93.2%になっている。以下、小学5年では「興味があることについて自分で調べたり、確かめたりする」「復習する」、中学1年では「復習する」「試験があれば、それにそなえて勉強する」、中学2年では「試験があれば、それにそなえて勉強する」「復習する」の順になっている。

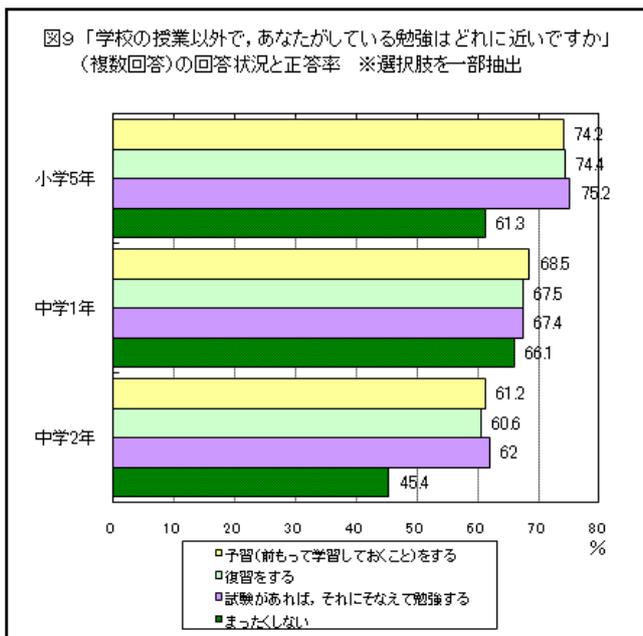
この設問を前年度調査と比較すると、小学5年では「復習をする」「試験があれば、それにそなえて勉強する」と回答した児童の割合は低くなっている。中学1年、中学2年とも、「予習する」「復習する」「宿題があれば宿題をする」と回答した生徒の割合は高くなり、「試験があれば、それにそなえて勉強する」と回答した生徒の割合は低くなっている。[図7]



同一児童生徒の経年比較で見ると、児童生徒の割合が5.0ポイント以上増加したものは、小学6年から中学1年にかけては、「予習する」16.3ポイント、「復習する」13.0ポイント、「試験があれば、それにそなえて勉強する」6.2ポイントとなっている。また、中学1年から中学2年にかけては、「予習する」7.4ポイント、「宿題があれば宿題をする」5.3ポイントとなっているが、「試験があれば、それにそなえて勉強する」については5.3ポイント減少している。[図8]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな傾向は見られないが、「まったくしない」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。[図9]

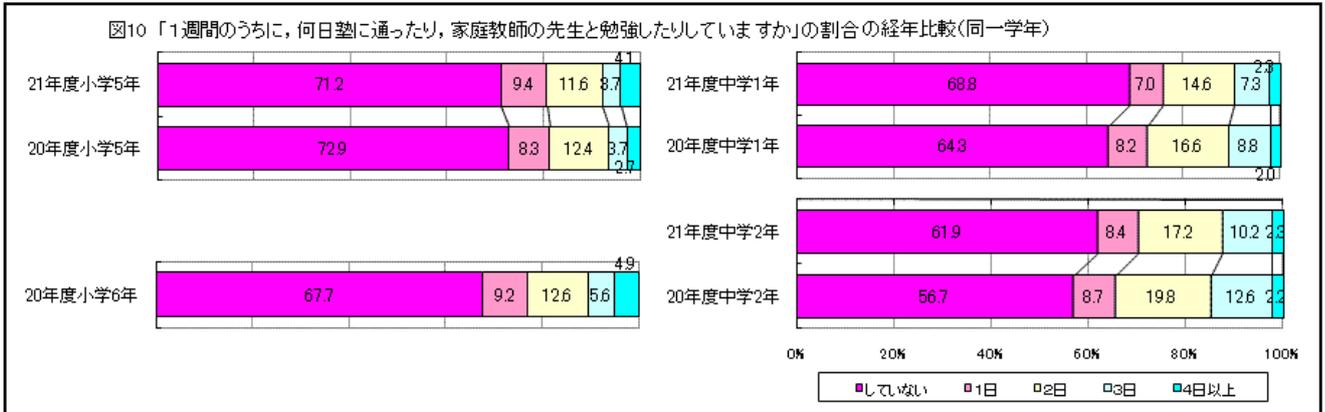


「まったくしない」と回答した児童生徒が各学年5%ほどの割合でいる。そして図6と図9で明らかなように、「まったくしない」と回答した児童生徒の平均正答率は他と比べて低くなっている。各学校においては、まったくしない原因について、学力面や家庭環境などから明らかにして、まったくしないと回答した児童生徒に対して支援することが望まれる。

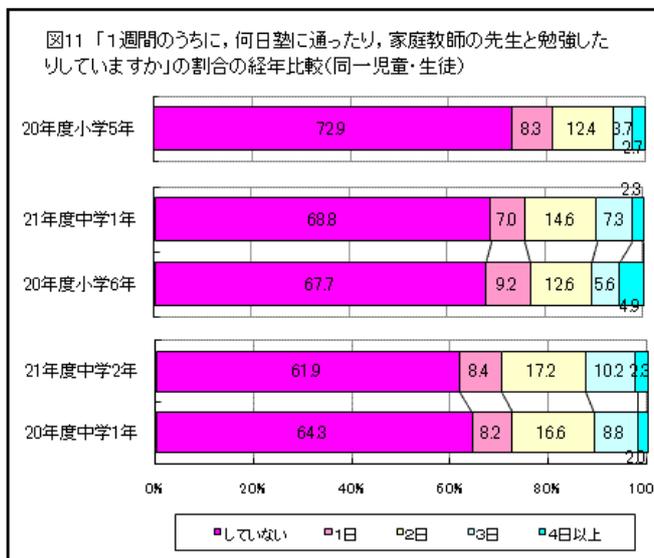
「宿題があれば宿題をする」と回答した児童生徒の割合が約9割に上ることから、宿題の効果的な活用や授業への生かし方、計画的な提示について教師や学校で再検討してみることが大切である。また、学習の手引きの活用や学習の意義等について家庭との連携を図り、学年の発達の段階に応じた学習に対する内発的な動機を高めることが望まれる。

「1週間のうちに、何日塾に通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしていますか」という設問については、学年が上がるにつれて、「2日」「3日」と回答した児童生徒の割合が高くなる傾向が見られる。すべての学年において「していない」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学5年71.2%、中学1年68.8%、中学2年61.9%になっており、次いで「2日」と回答した児童生徒が多くなっている。

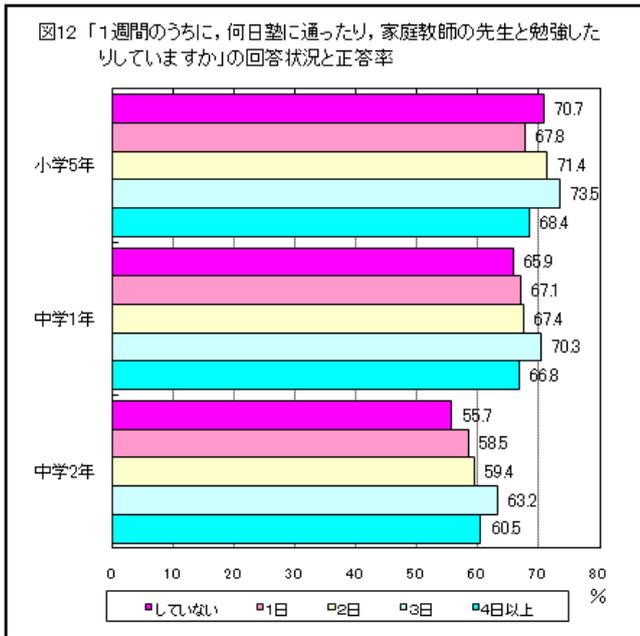
この設問を前年度調査と比較すると、「していない」と回答した中学1年と中学2年の生徒の割合は、ともに高くなっている。小学5年では、全体的な傾向に大きな変化は見られない。[図10]



同一児童生徒の経年比較で見ると、全体的な傾向として大きな変化は見られない。[図11]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな傾向は見られないが、すべての学年において「3日」と回答した児童生徒の正答率がいくぶん高くなっている。[図12]



最終更新日: 2009-07-28

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > IV 児童生徒意識調査の結果の分析

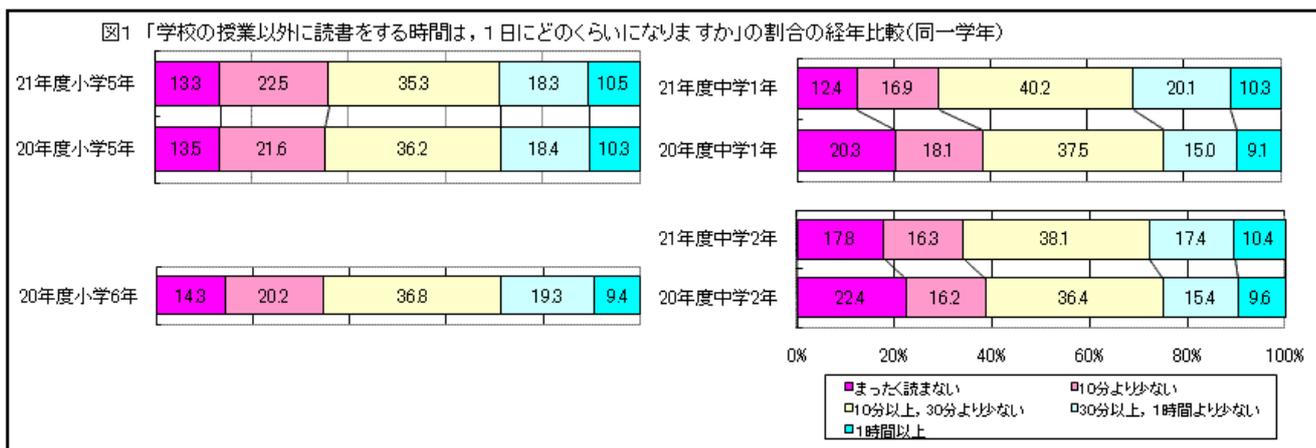
生活習慣

- 読書をする時間が10分より少ない子どもの割合は減少しており、小学校5年と中学校1年では読書する時間が長くなるにしたがって、正答率も高くなる傾向が見られる。[図3]
- 情報収集の方法は、学年が上がるにつれて「友人の話を聞く」割合と「インターネットを利用する」割合が高くなっている。[図16]
- 情報収集に対する関心がない子どもは正答率が低い傾向にある。[図18]

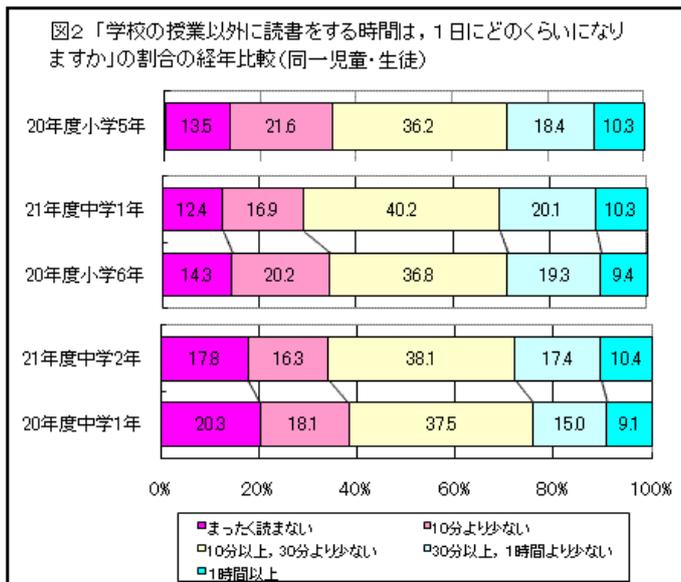
この節では、読書時間、テレビやゲームなど自由に過ごす時間、就寝時刻、朝食や家の手伝いの頻度、情報収集の手段など生活習慣全般についての質問から児童生徒の生活習慣についての調査結果を述べる。

「学校の授業以外に読書をする時間は、まんがや雑誌をのぞくと、1日にどのくらいになりますか」という設問については、「10分以上30分より少ない」と回答した児童生徒の割合がすべての学年において最も高く、小学5年35.3%、中学1年40.2%、中学2年38.1%になっている。「1時間以上」と回答した児童生徒の割合は小学5年10.5%、中学1年10.3%、中学2年10.4%になっており、各学年1割を占めている。「まったく読まない」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて、高くなる傾向が見られる。

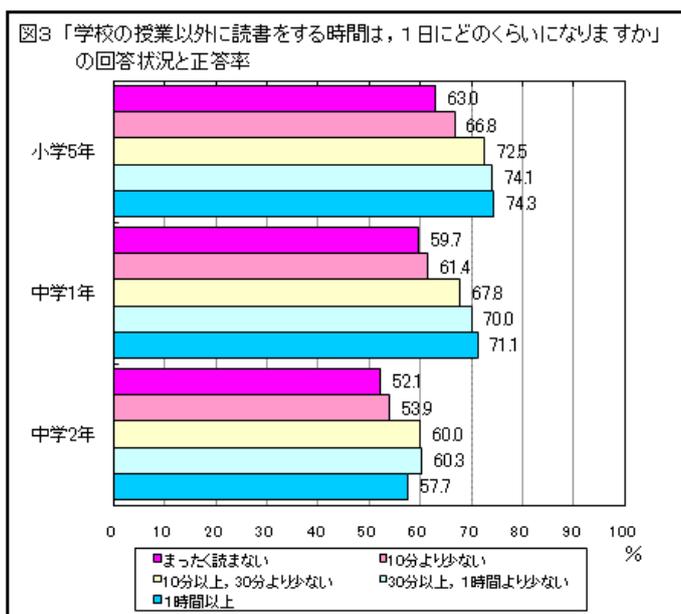
この設問を前年度調査と比較すると、中学1年では「30分以上、1時間より少ない」と回答した生徒の割合が高くなり、中学1年と中学2年で「まったく読まない」と回答した生徒の割合は低くなっている。[図1]



同一児童生徒の経年比較を見ると、30分以上と回答した児童生徒の割合は、中学1年から中学2年にかけて3.6ポイント増加している。また、「まったく読まない」又は「10分より少ない」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけては5.2ポイント、中学1年から中学2年にかけては4.3ポイント減少している。学年が上がり「まったく読まない」又は「10分より少ない」と回答した児童生徒の割合は減少して、読書をする時間がやや増加している。[図2]



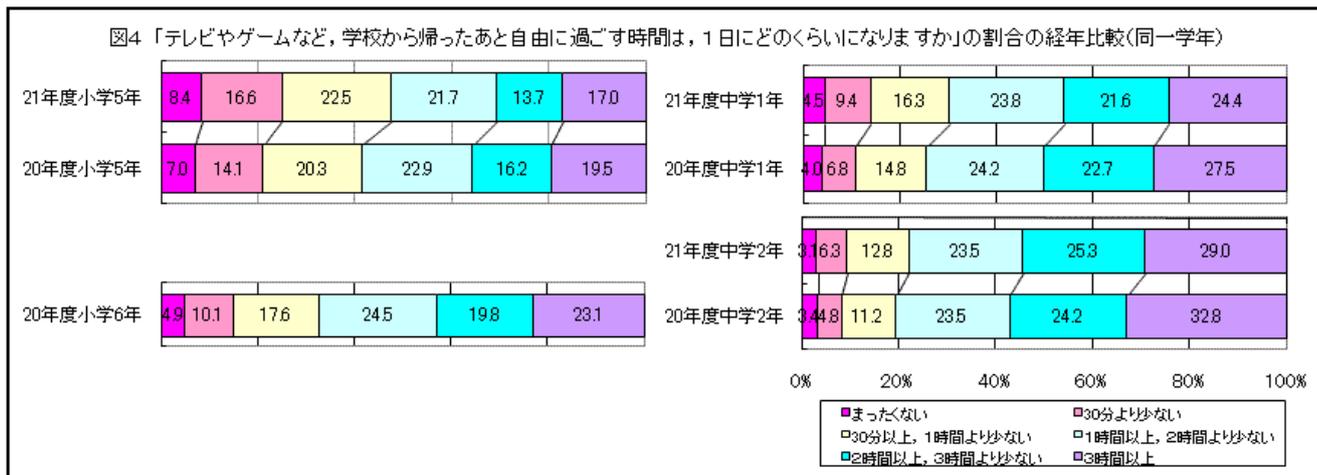
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったく読まない」と回答した児童生徒の正答率が最も低く、小学5年と中学1年では読書する時間が長くなるにしたがって、正答率も高くなる傾向が見られる。中学2年では、「10分以上、30分より少ない」「30分以上、1時間より少ない」と回答した児童生徒の正答率が高くなっており、必ずしも「1時間以上」という読書時間の長い生徒が正答率が高いというわけではない。[図3]



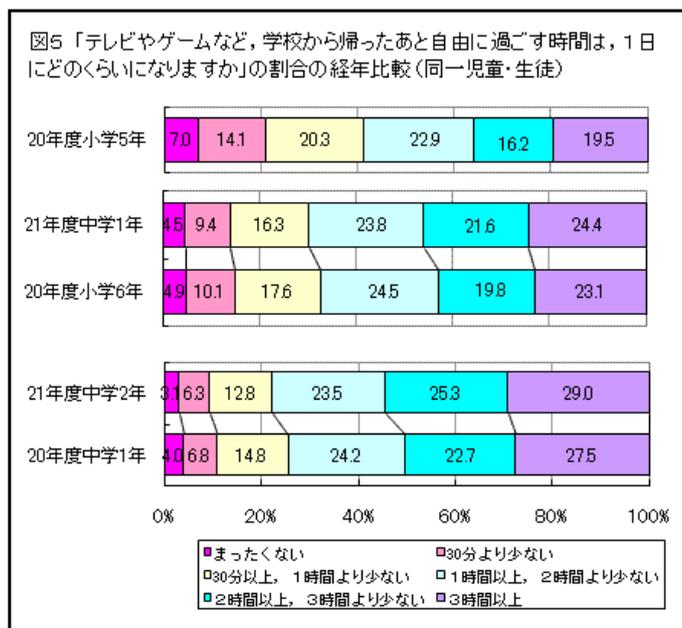
読書をする時間と全教科平均正答率との関連が見られることから、小学校段階で家庭での読書習慣を確立させ、中学校に上がっても継続して読書ができる環境を整えることが大切である。各学校において10分間読書や家庭との連携を工夫することが望まれる。

「テレビやゲームなど、学校から帰ったあと自由に過ごす時間は、読書の時間をのぞくと、1日にどのくらいになりますか」という設問については、「3時間以上」と回答した児童生徒の割合は、小学5年17.0%、中学1年24.4%、中学2年29.0%になっており、中学1年と中学2年で一番多くを占めている。学年が上がるにつれて、時間が増える傾向が見られる。

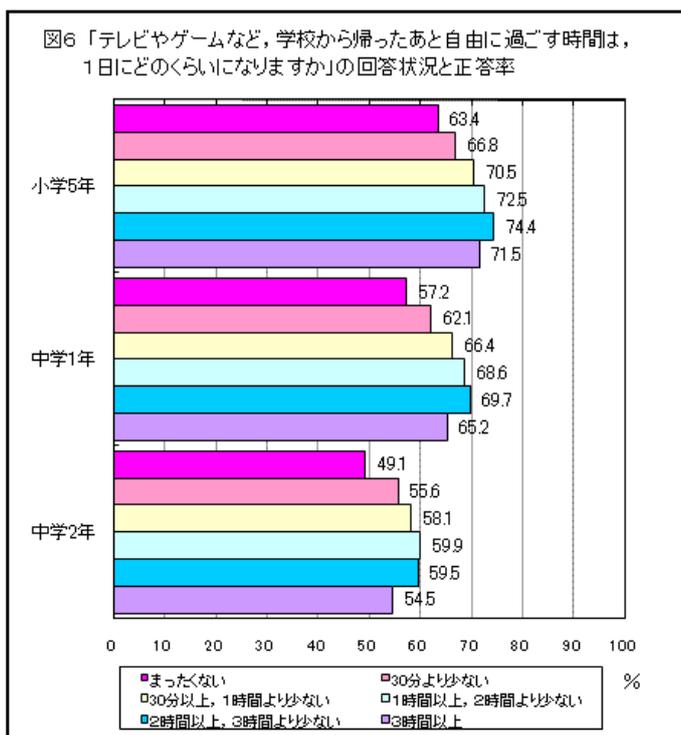
この設問を前年度調査と比較すると、2時間以上と回答した児童生徒の割合は、各学年とも低くなっている。1時間より少ないと回答した児童生徒の割合は、前年度調査と比較すると小学5年と中学1年で高くなっている。[図4]



同一児童生徒の経年比較で見ると、2時間以上と回答した児童生徒は、小学6年から中学1年にかけては3.1ポイント、中学1年から中学2年にかけては4.2ポイント増加しており、学年が上がるにつれ、自由に過ごす時間はやや増加している。[図5]



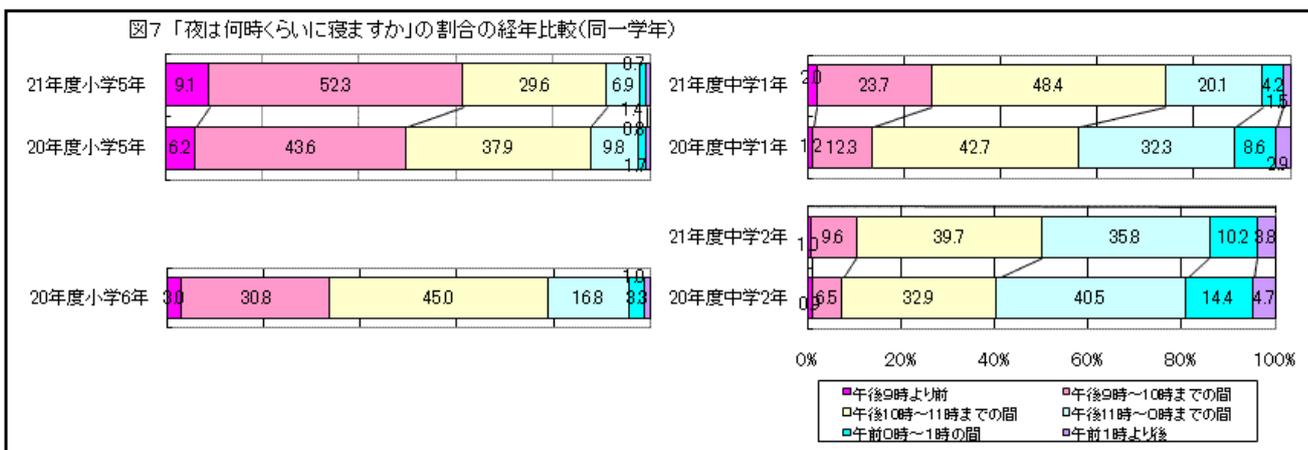
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年で「1時間以上2時間より少ない」又は「2時間以上3時間より少ない」と回答した児童生徒の正答率が高くなる傾向が見られる。また、すべての学年において「まったくない」と回答した児童生徒の正答率は最も低くなっている。[図6]



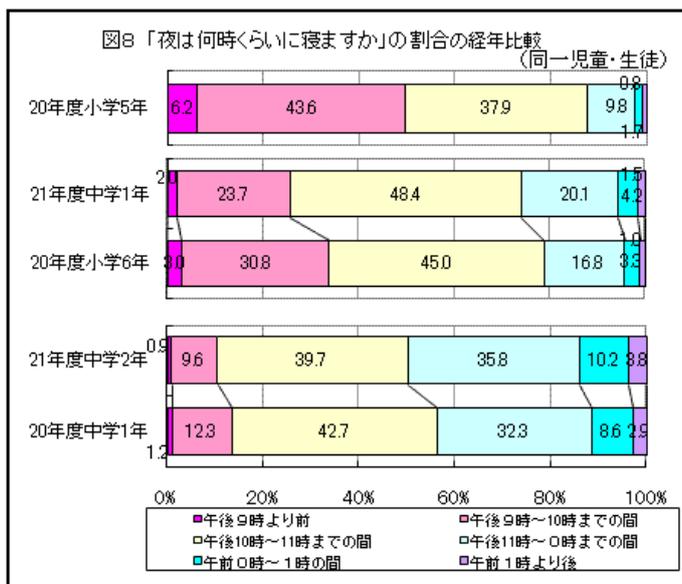
「まったくない」と回答した児童生徒の部活動や家庭での状況が把握できないが、「3時間以上」と回答した児童生徒は学習だけでなく、就寝時刻など家庭での基本的な生活習慣にもよくない影響を及ぼしている可能性がある。学校から帰宅後、就寝までの限られた時間の中で、自律的にテレビやゲームの時間を考えられるように指導することが大切であろう。

「夜は何時くらいに寝ますか」という設問については、小学校では「午後9時から10時までの間」と回答した児童の割合が最も高く、小学5年52.3%になっている。また、中学校では「午後10時から11時までの間」と回答した生徒の割合が最も高く、中学1年48.4%、中学2年39.7%になっている。午後11時以降と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて、高くなる傾向が見られる。

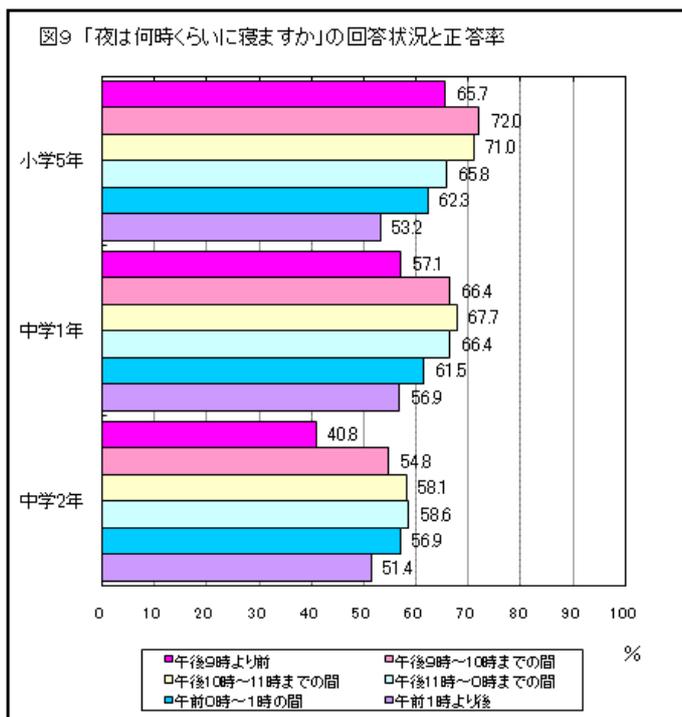
この設問を前年度調査と比較すると、中学校では11時間までと回答した児童生徒の割合は高くなっており、11時以降と回答した児童生徒の割合は逆に低くなっている。小学5年では、10時までと回答した児童の割合は、前年度調査と比較すると高くなり、10時以降と回答した児童の割合は逆に低くなっている。[図7]



同一児童生徒の経年比較を見ると、全体として学年が上がると就寝時刻は遅くなる傾向が見られる。小学6年から中学1年にかけては、10時以降と回答した児童生徒の割合は8.2ポイント増加している。中学1年から中学2年にかけては、11時までと回答した児童生徒の割合は6.0ポイント減少し、11時以降と回答した児童生徒の割合は6.0ポイント増加している。[図8]



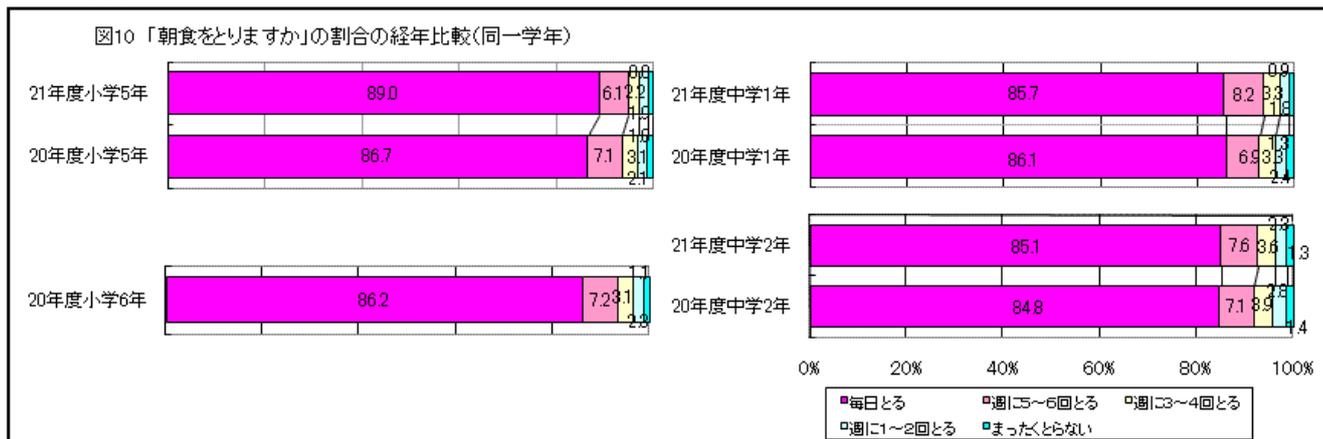
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学校5年では「午後9時から10時までの間」、中学校では「午後10時から11時までの間」又は「午後11時から0時までの間」と回答した児童の正答率が最も高くなっている。また、特に中学校において「午後9時より前」又は「午前1時より後」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。[図9]



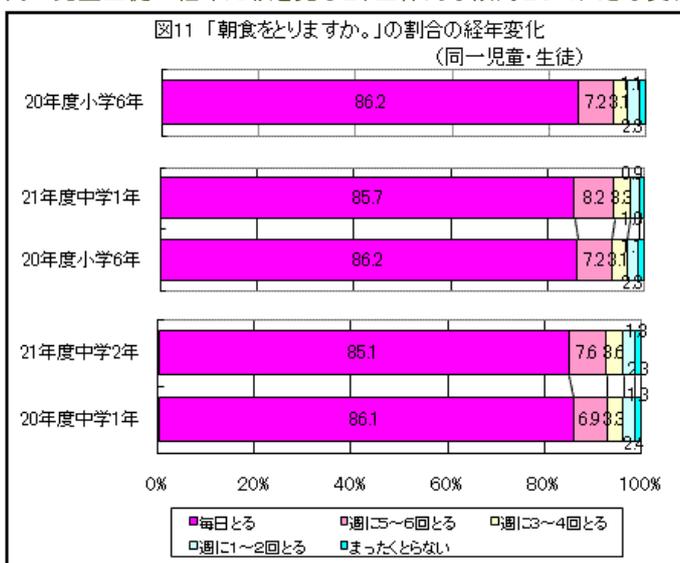
家庭学習の時間や読書時間、テレビやゲームなど自由に過ごす時間を考えると、就寝時刻が早ければよいというわけではないが、極めて遅い就寝時刻は学校生活や家庭生活にも悪影響を及ぼしている可能性があると考えられる。

「朝食をとりますか」という設問については、「毎日とる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年89.0%、中学1年85.7%、中学2年85.1%になっている。「週に5～6回とる」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも9割を上回っている。

この設問を前年度調査と比較すると、全体的な傾向として大きな変化はみられない。[図10]

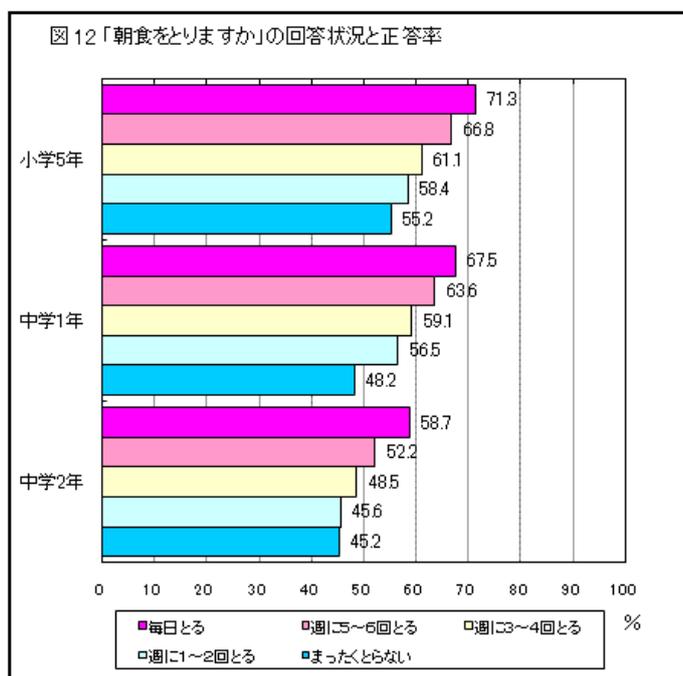


同一児童生徒の経年比較を見ると、全体的な傾向として大きな変化は見られない。[図11]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「毎日とる」と回答した児童の正答率が最も高く、朝食をとる日数が減るにしたがって、正答率も低くなる傾向が見られる。

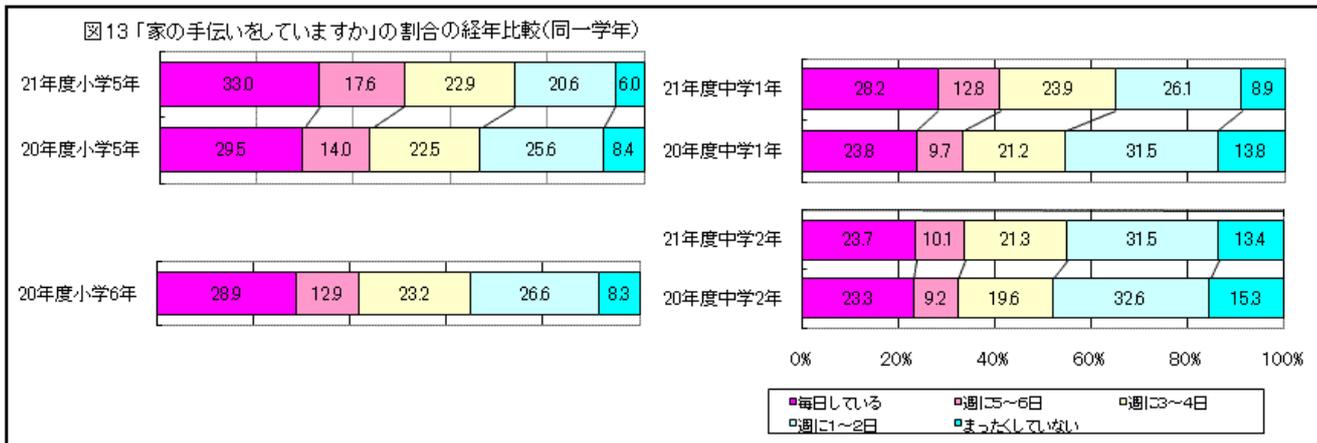
ただし、図10を見たら分かるように「まったくとらない」又は「週に1～2回とる」と回答した児童生徒の人数の割合は、いずれの学年においても3%未満と小さいため、比較する際は注意が必要である。[図12]



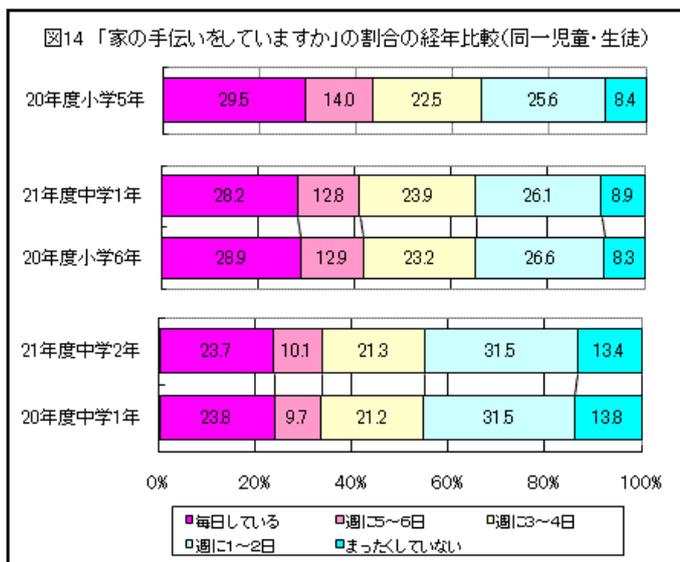
朝食を「毎日とる」と回答した児童生徒の割合は9割近くになっているが、独り、または子どもだけで食べていたり、栄養や量に偏食が見られたり、食事の質が問題となる。栄養のバランスや家族団らんの下、食事をとるように家庭と連携して啓発していくことが望まれる。

「家の手伝いをどのくらいしていますか」という設問については、「毎日している」と回答した児童生徒の割合は、小学5年33.0%、中学1年28.2%、中学2年23.7%になっており、小学5年と中学1年で最も高くなっている。「毎日している」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて低くなり、逆に「まったくしていない」と回答した児童生徒の割合は高くなる傾向が見られる。

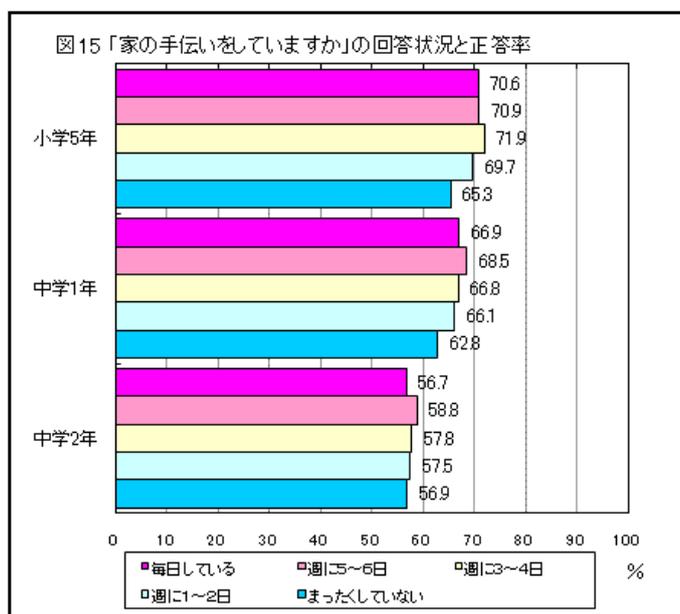
この設問を前年度調査と比較すると、「毎日している」と回答した児童生徒の割合は、5年と中学1年で高くなっており、週2日以下と回答した児童生徒の割合は、各学年とも低くなっている。**[図13]**



同一児童生徒の経年比較を見ると、どの学年も週に2日以下と回答した児童生徒の割合は減少している。[図14]



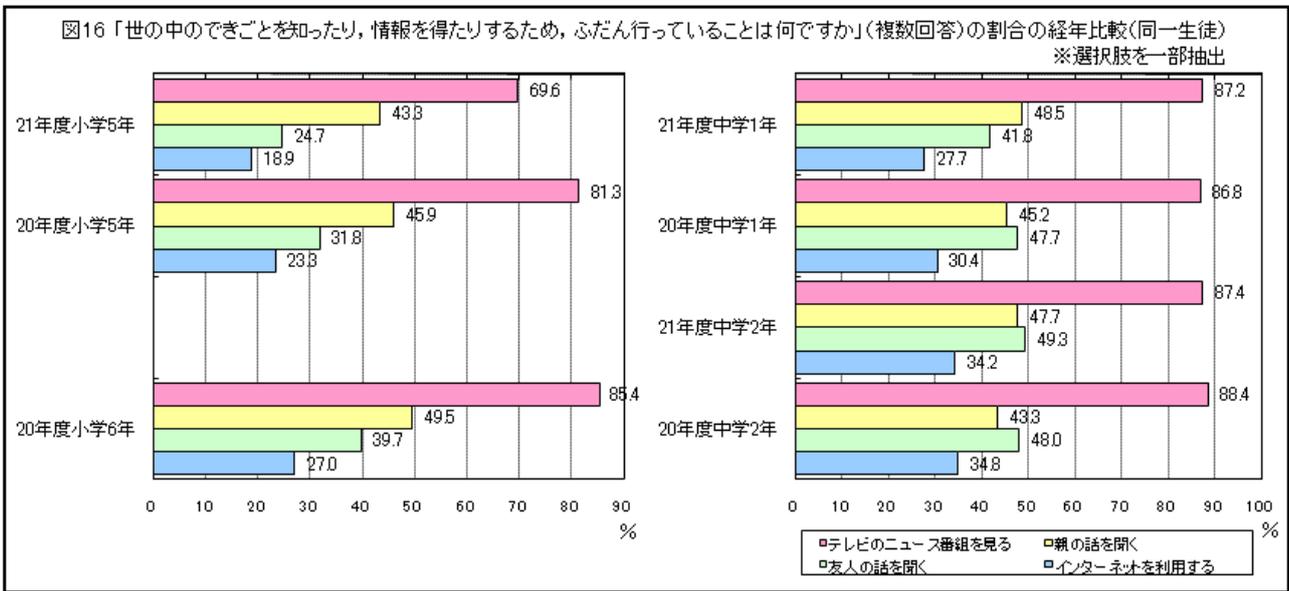
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな傾向は見られない。[図15]



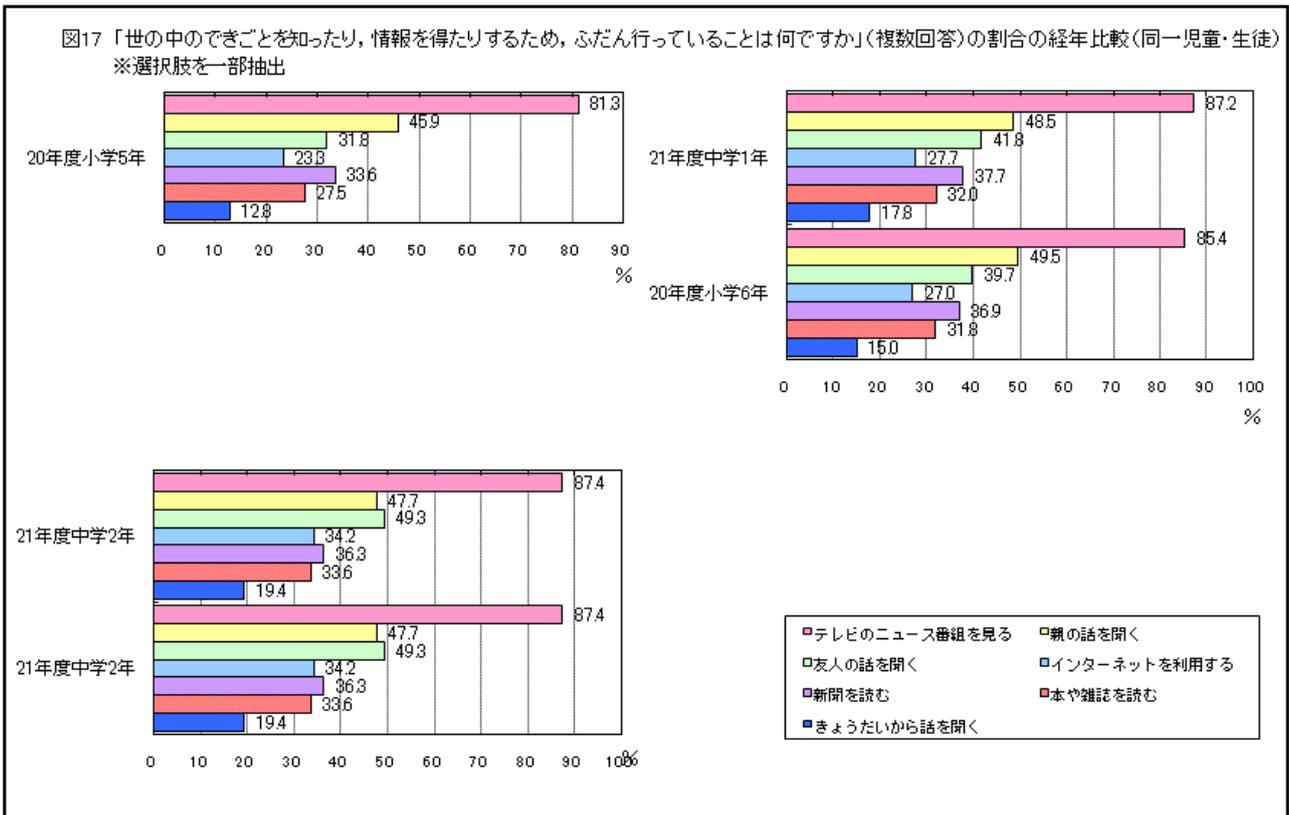
学年が上がると部活動や学習に多くの時間を費やすために、家の手伝いを「まったくしない」と回答した児童生徒の割合が高くなる予想される。生活体験を豊富にするために、各家庭において、責任をもたせた家での仕事や役割を決め、習慣化を図るように家庭と連携して啓発していくことも大切である。

「世の中のいろいろなできごとを知ったり、情報を得たりするため、ふだん行っていることは何ですか」(複数回答)という設問については、学年が上がると「友人の話を聞く」、「インターネットを利用する」と回答した児童生徒の割合が高くなる傾向が顕著に見られる。「テレビのニュース番組を見る」と回答した児童生徒の割合は、小学5年69.6%、中学1年87.2%、中学2年87.4%になっており、各学年ともいちばん多くを占めている。

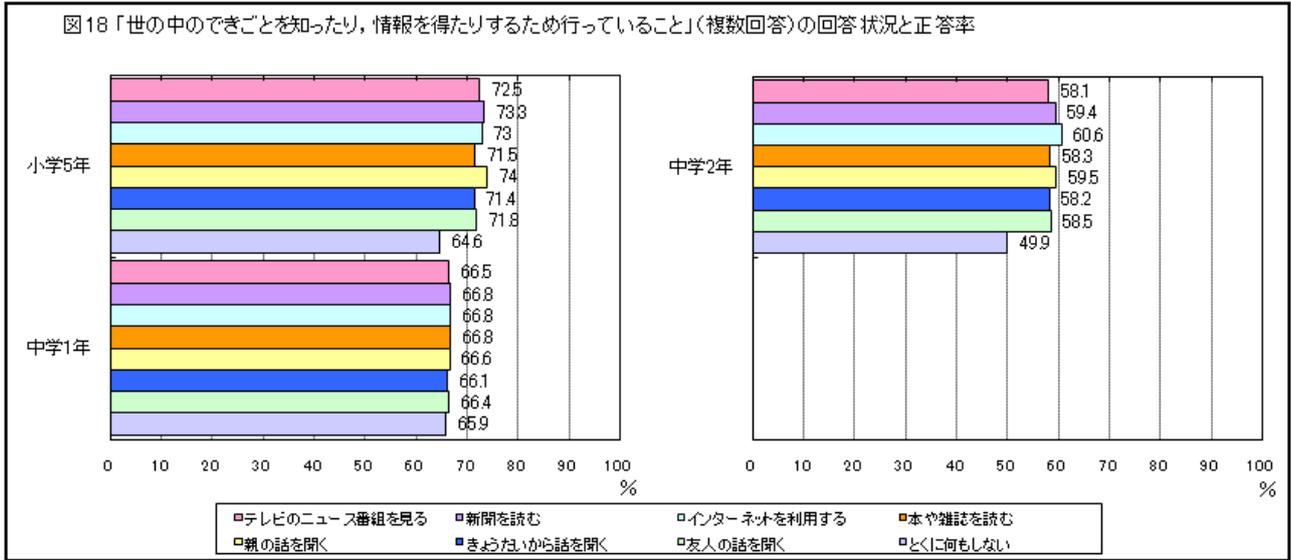
この設問を前年度調査と比較すると、中学2年では「親の話を聞く」と回答した生徒の割合はやや高くなっている。小学5年の「テレビのニュース番組を見る」「友人の話を聞く」と回答した児童の割合と、中学1年の「友人の話を聞く」と回答した生徒の割合は低くなっている。[図16]



同一児童生徒の経年比較を見ると、「インターネットを利用する」と回答した児童生徒の割合は、中学1年から中学2年にかけて3.8ポイント増加している。その他の項目については大きな変化は見られない。[図17]



回答状況と全教科平均正答率との関連をみると、明らかな傾向はみられないが、小学5年と中学2年においては「とくに何もしない」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。[図18]



最終更新日: 2009-07-17

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > IV 児童生徒意識調査の結果の分析

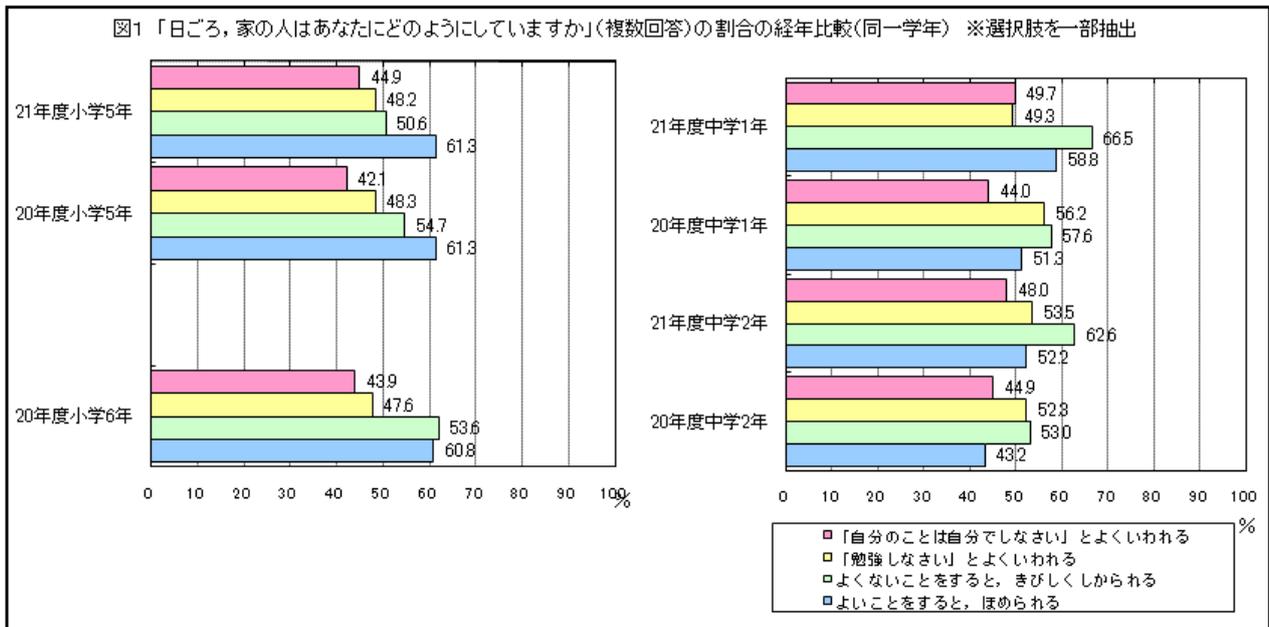
家族関係

- 家の人といっしょにいる方が楽しいと感じている児童生徒の割合は、小学校で8割、中学校で7割を上回っており、前年度と比べると高くなっている。[図4]
- 日ごろ家の人がかまうことはほとんどないと感じている児童生徒の平均正答率は、低くなっている。[図3]

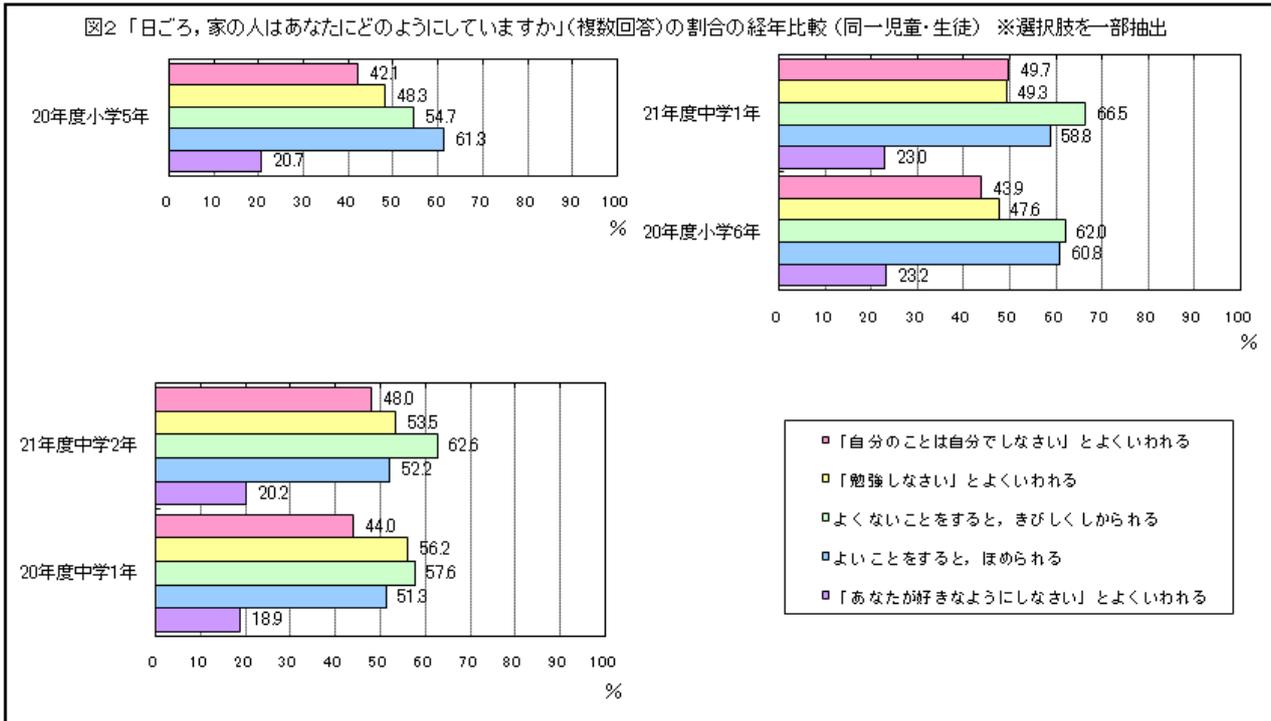
この節では、きょうだい数、家族の接し方、家族に対する意識についての質問から児童生徒の学習動機についての調査結果を述べる。

「日ごろ、家の人とはあなたにどのようにしていますか。」(複数回答)という設問については、すべての学年において「よいことをすると、ほめられる」「よくないことをすると、きびしくしかられる」と回答した児童生徒の割合が高く、いずれも全体の5割を上回っている。しかし、学年が上がるにつれて「よいことをすると、ほめられる」と回答した児童生徒の割合が低くなる傾向が見られる。

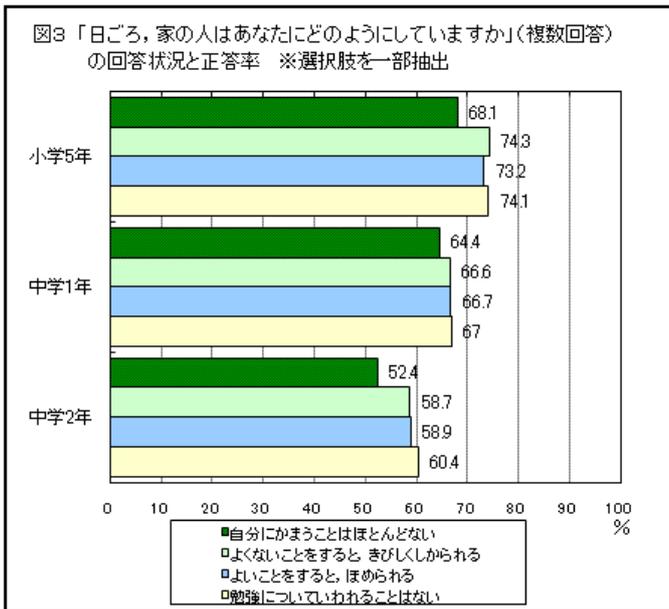
この設問を前年度調査と比較すると、小学5年では「よくないことをすると、きびしくしかられる」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。中学1年では特に「よくないことをすると、きびしくしかられる」「よいことをすると、ほめられる」「自分のことは自分でしなさいとよくいわれる」と回答した児童生徒の割合が高くなっており、「勉強しなさいとよくいわれる」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。中学2年でも「よくないことをすると、きびしくしかられる」「よいことをすると、ほめられる」と回答した児童生徒の割合が特に高くなっている。[図1]



同一児童生徒の経年比較で見ると、小学6年から中学1年にかけては「自分のことは自分でしなさいとよくいわれる」5.8ポイント、「よくないことをすると、きびしくかられる」4.5ポイント、「勉強しなさいとよくいわれる」1.7ポイントと、それぞれの項目に回答した児童生徒の割合は増加している。また、中学1年から中学2年にかけては「自分のことは自分でしなさいとよくいわれる」4.0ポイント、「よくないことをすると、きびしくかられる」5.0ポイント増加している。[図2]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな傾向は見られないものの、「自分にかまうことはほとんどない」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。[図3]

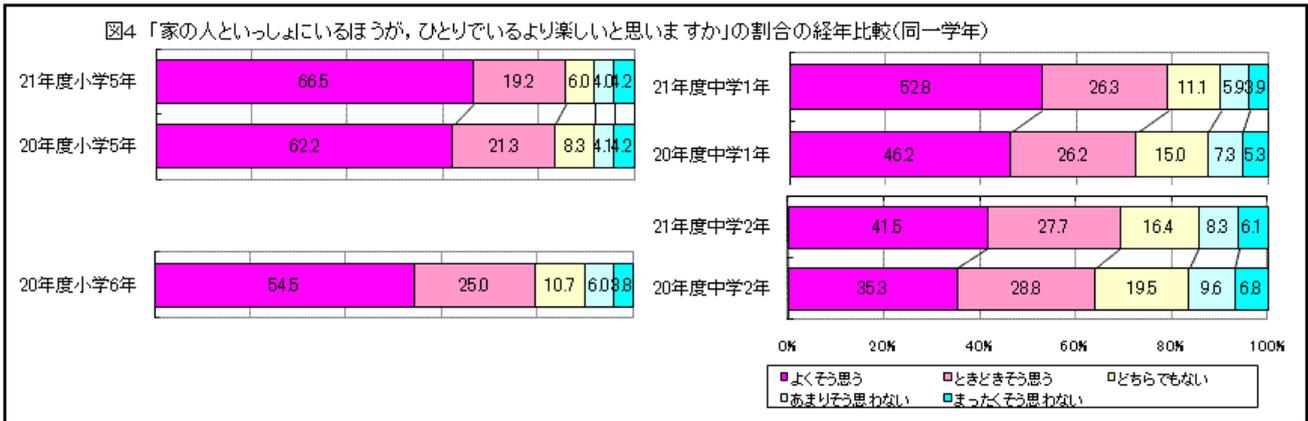


児童生徒の発達の段階に応じた家族の対応とも考えられるが、学年が上がると児童生徒の「家の人からほめられる」という意識が低くなっていくことは気になる点である。家族との温かなかわりは生徒にとって自己有用感を喚起するなどのよい影響を及ぼすであろう。

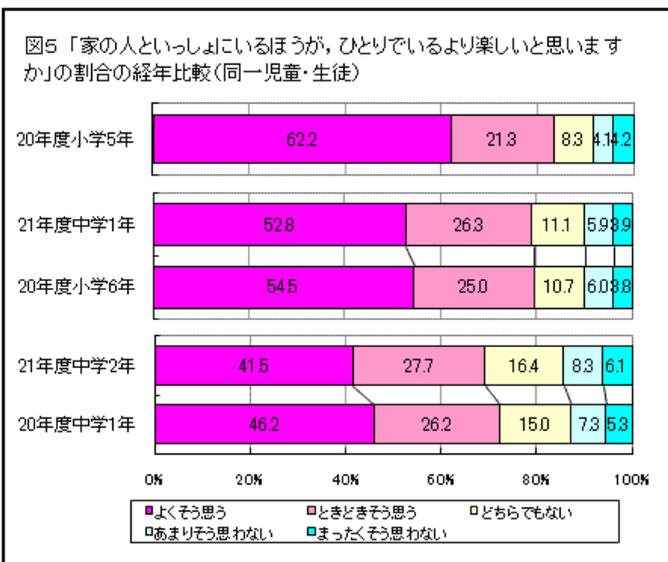
「自分にかまうことはほとんどない」と回答した児童生徒は少数ではあるが、これらの児童生徒に対して、教育相談などの個別の対応が望まれる。

「家の人といっしょにいるほうが、ひとりであるより楽しいと思いますか」という設問については、「よくそう思う」と回答した児童生徒の割合が小学5年66.5%、中学1年52.8%、中学2年41.5%になっている。「ときどきそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせても、学年が上がるにつれて、低くなる傾向が見られる。

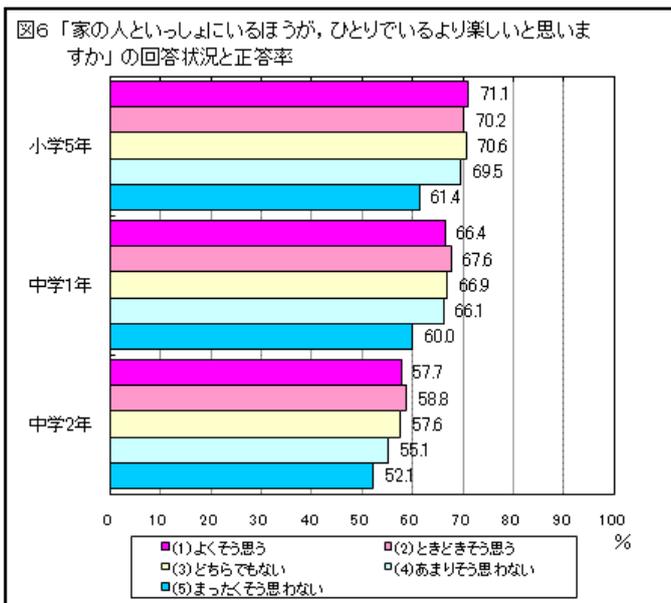
この設問を前年度調査と比較すると、「よくそう思う」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっている。また、中学校では「どちらでもない」と回答した生徒の割合はやや低くなっている。[図4]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「よくそう思う」と回答した児童生徒は、中学1年から中学2年にかけては4.7ポイント減少している。小学6年から中学1年にかけては全体の傾向として大きな変化は見られない。[図5]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな傾向は見られないものの、「まったくそう思わない」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。[図6]



「まったくそう思わない」と回答した児童生徒については、保護者との面談などを通して家族とのかかわり方を把握して、必要に応じて教育相談などの対応が望まれる。

最終更新日： 2009-07-17

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > IV 児童生徒意識調査の結果の分析

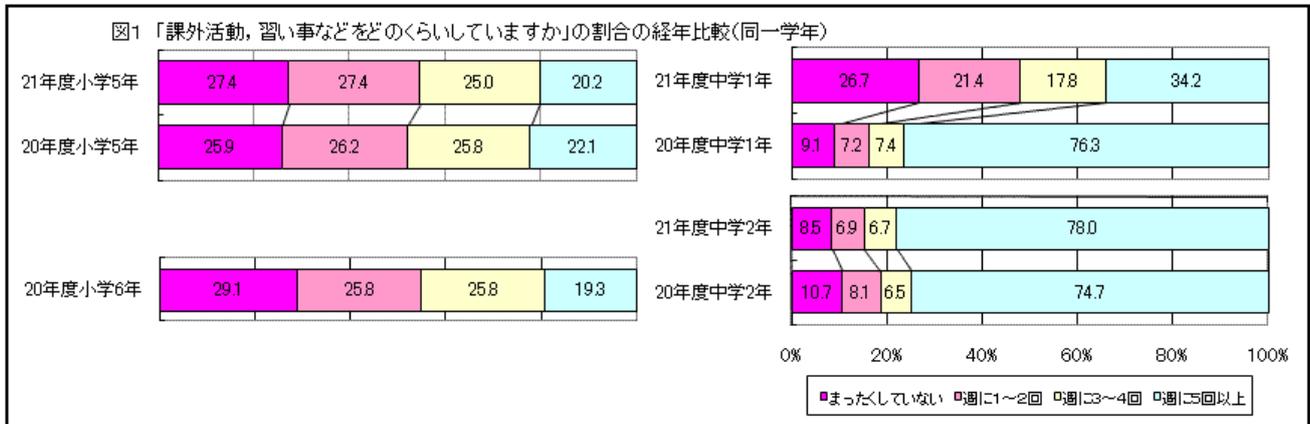
課外活動や部活動・地域における生活

- 課外活動や習い事に「まったくしていない」と回答した児童生徒の平均正答率は、各学年において最も低くなっており、中学校では「週に5回以上」と回答した生徒の平均正答率が高くなっている。[図3]
- 学年が上がるにつれて、地域行事やボランティア活動に「まったく参加しない」と回答した児童生徒の割合は高くなる傾向が見られる。[図4]

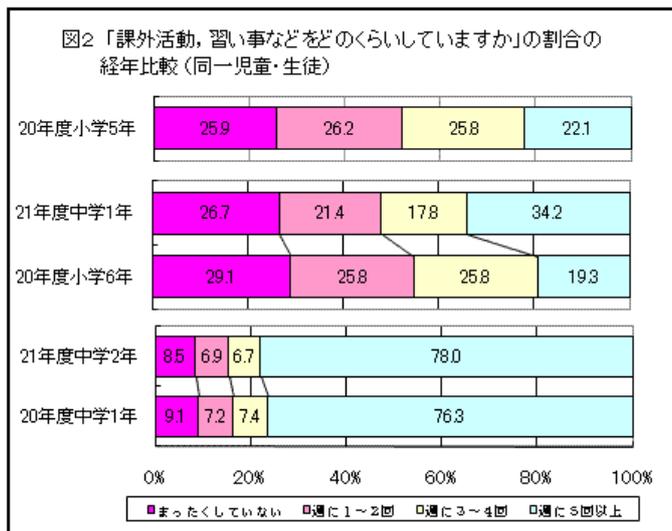
この節では、課外活動や習い事の頻度、地域における行事などへの参加の頻度についての質問から児童生徒の地域における生活についての調査結果を述べる。

「課外活動(中学校では部活動、社会体育)、習い事などをどのくらいしていますか」という設問については、小学校では「まったくしていない」「週に1～2回」「週に3～4回」「週に5回以上」と回答した児童の割合は、ほぼ均等になっている。中学校では「週に5回以上」と回答した生徒の割合は、中学1年34.2%、中学2年78.0%になっており、それぞれの学年で一番多くを占めている。

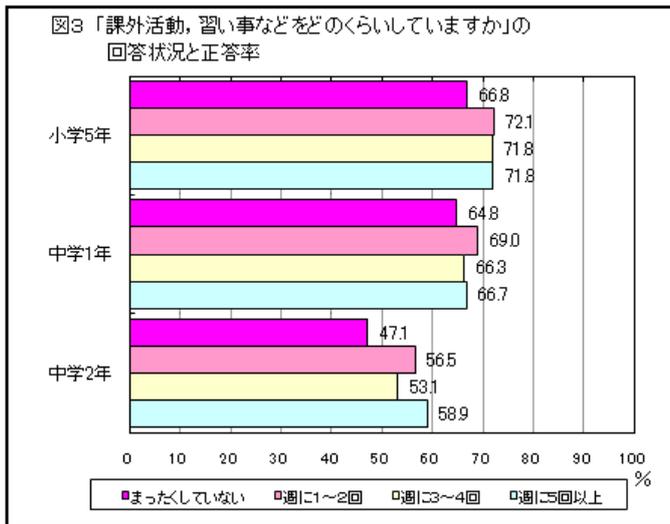
この設問を前年度調査と比較すると、小学5年では全体的な傾向として大きな変化は見られない。中学1年では「週に5回以上」と回答した児童生徒の割合は低くなっているが、今年度は4月調査になり、まだ入部していない生徒が多い状況のためだと考えられる。中学2年では「週に5回以上」と回答した児童生徒の割合はやや高くなっている。[図1]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「週に5回以上」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて14.9ポイントと大きく増加している。中学1年から中学2年にかけて、全体的な傾向として大きな変化は見られない。[図2]

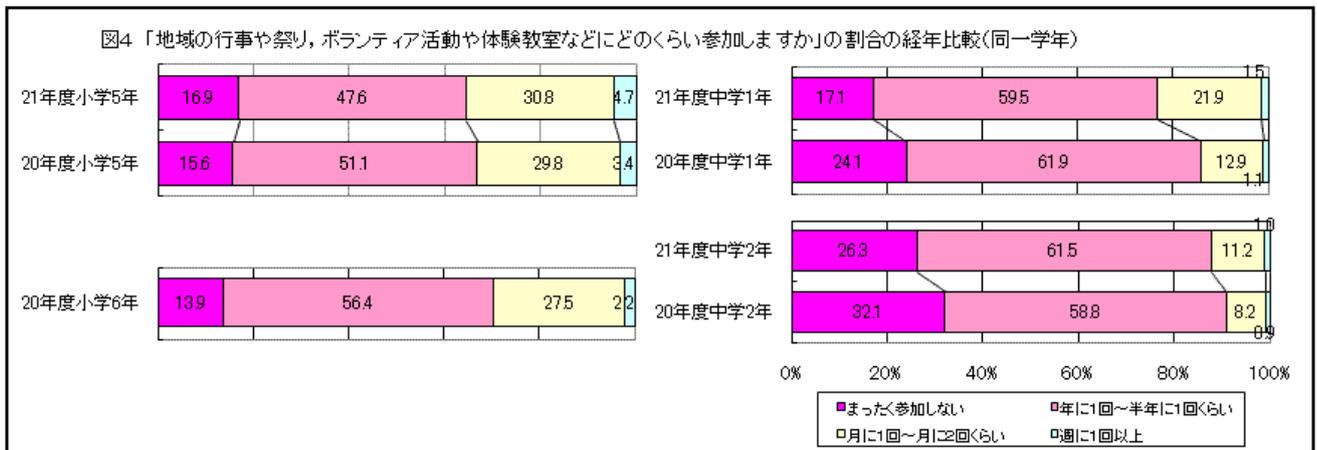


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったくしていない」と回答した児童生徒の正答率が最も低くなっている。また、中学校2年では、「週に5回以上」と回答した生徒の正答率が最も高くなっている。[図3]



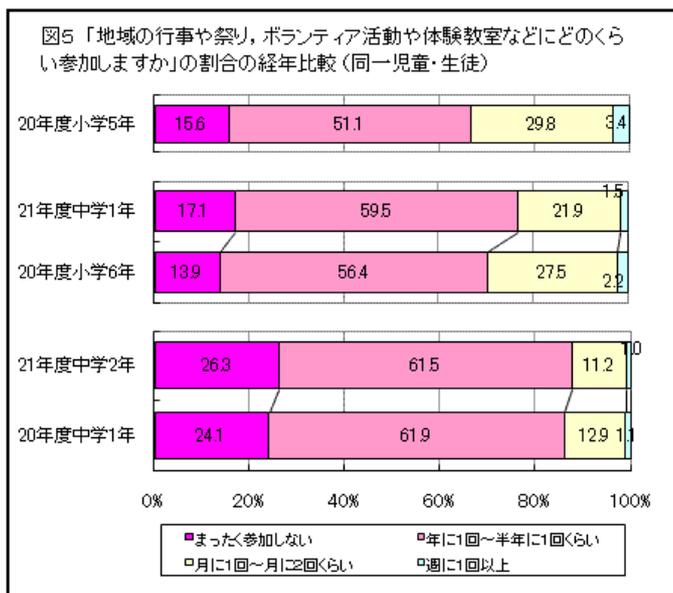
「地域での行事や祭り, ボランティア活動や体験教室などにどのくらい参加しますか」という設問については、「年に1回~半年に1回くらい」と回答した児童生徒の割合は、小学5年47.6%、中学1年59.5%、中学2年61.5%となっており、各学年ともいちばん多くを占めている。学年が上がるにつれて、月に1回以上と回答した児童生徒の割合は低くなり、「まったく参加しない」と回答した児童生徒の割合は高くなる傾向が見られる。

この設問を前年度調査と比較すると、小学5年では「年に1回~半年に1回くらい」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。中学校では「まったく参加しない」と回答した児童生徒の割合は低くなっており、「月に1回~月に2回くらい」と回答した児童生徒の割合は高くなっている。[図4]



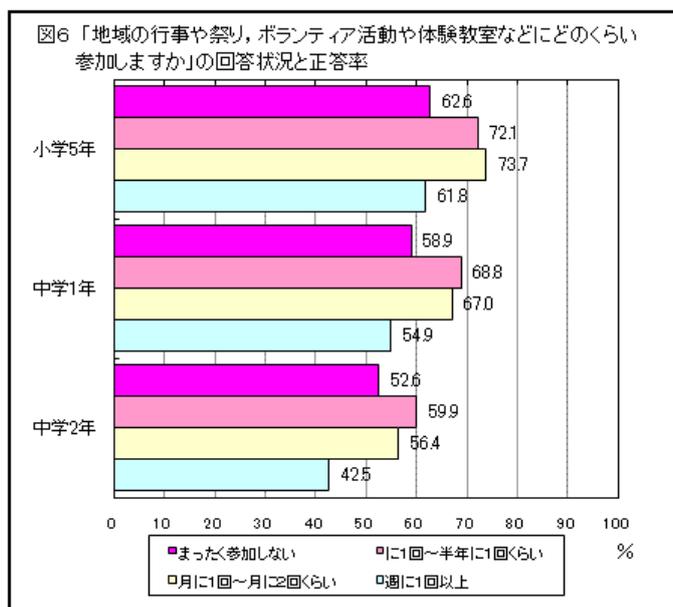
同一児童生徒の経年比較で見ると、小学6年から中学1年にかけて「月に1回～月に2回くらい」と回答した児童生徒が5.6ポイント減少し、「全く参加しない」「年に1回～半年に1回」と回答した児童生徒が6.3ポイント増加している。

中学1年から中学2年にかけては、全体的な傾向として大きな変化はない。中学校では、部活動へ参加する生徒も増え、地域の行事や祭りなどへの参加は少なくなる傾向にあると考えられる。[図5]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったく参加しない」と回答した児童生徒と「週に1回以上」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。[図6]

ただし、図5を見たら分かるように「週に1回以上」と回答した児童生徒の人数の割合は、いずれの学年においても4%未満と小さいため、比較する際は注意が必要である。



学校は、各家庭と地域を結んだり、地域行事をサポートする等が考えられる。また、児童生徒が地域や社会に目を向け、関心をもち主体的にかかわれるように、日常の学校生活や学習活動の中で働きかけることが望まれる。

最終更新日： 2009-07-17

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

全教科における指導法の工夫

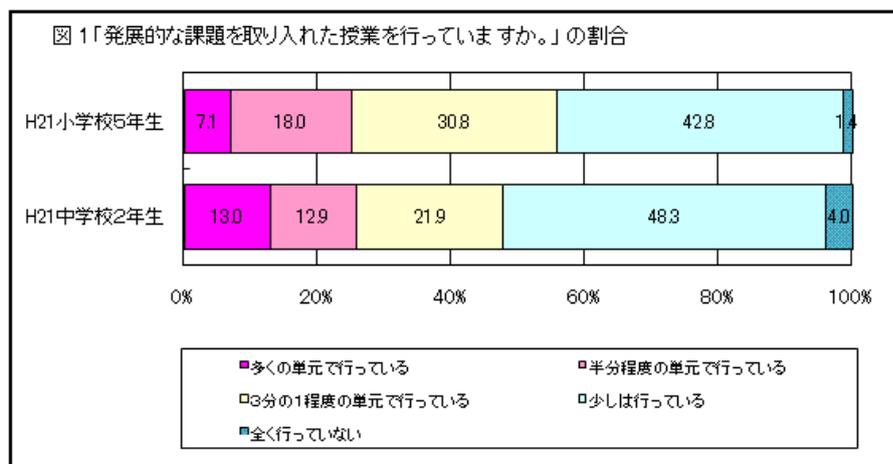
- 発展的な課題については、児童生徒の実態や学習の内容に応じて適宜取り入れていくことで効果が上がると考えられる。
- 表現する活動については、「書いて表現する活動」と「発表や話し合いなどの表現活動」との調和を図り、両者の関連を図った指導を工夫することで効果が上がると考えられる。
- 総合的な学習については、身に付けさせたい力を意識することによって、教科学習における児童の言語表現力や理解力により影響を与えていると考えられる。

この節では、

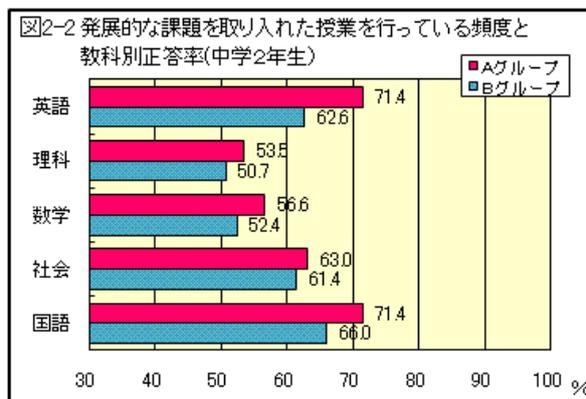
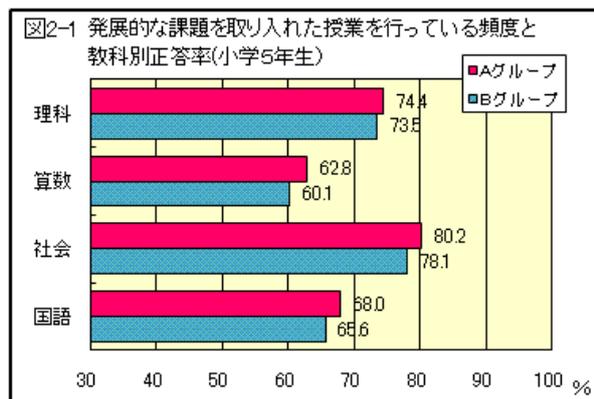
- ・発展的な課題を取り入れた授業の実施状況、理解が十分でない児童生徒に対する授業外での対応状況
- ・書いて表現する活動や話し合い活動を取り入れた授業の実施(教科の授業・総合的な学習の時間)
- ・身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間の指導
- ・学習方法についての指導状況、学習形態の工夫
- ・目標や評価規準を明確にした授業の実施

などについて問うことにより、発展的学習・補充的指導・表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習方法の指導、学習形態の工夫、目標を明確にした指導などの状況を把握する。

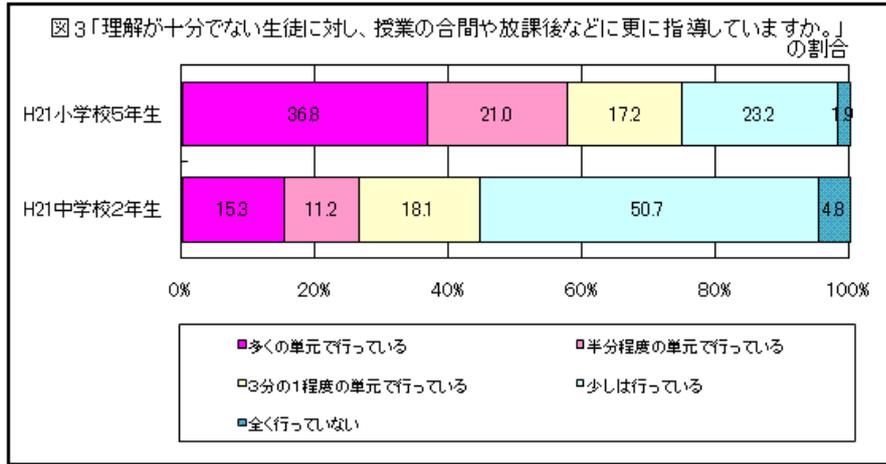
「**発展的な課題を取り入れた授業を行っていますか**」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は7.1%、中学校教師の割合は13.0%と小学校教師より中学校教師の意識調査の結果が高くなっている。[図1]



この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな傾向は見られないものの国語、算数、理科においてわずかにAグループの方が高くなっている。中学校ではすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっており、特に国語と英語においては顕著な傾向が表れている。[図2]

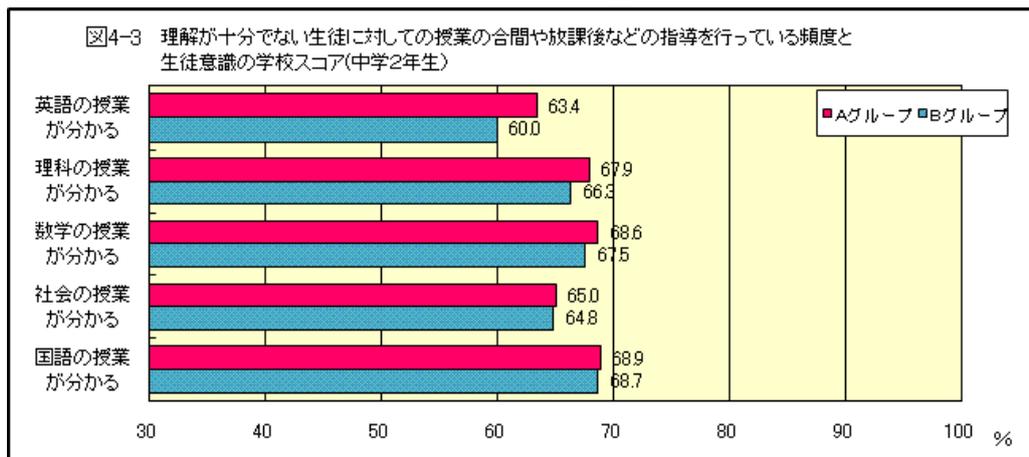
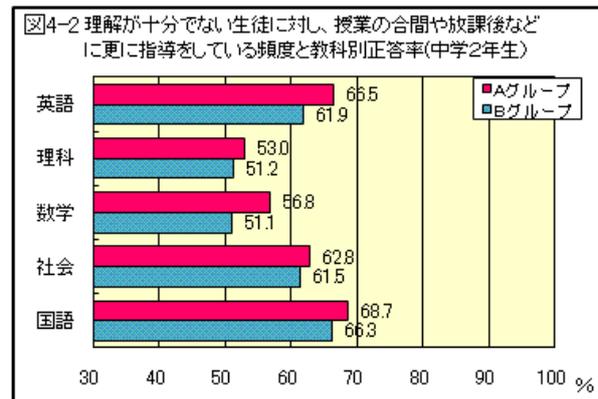
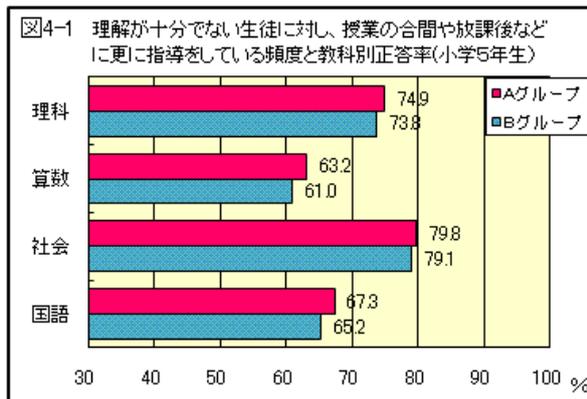


「理解が十分でない児童・生徒に対し、授業の合間や放課後などに更に指導していますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は36.8%、「半分程度の単元で行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると57.8%である。これは中学校教師の意識調査の26.5%に対して2倍以上高くなっている。[図3]

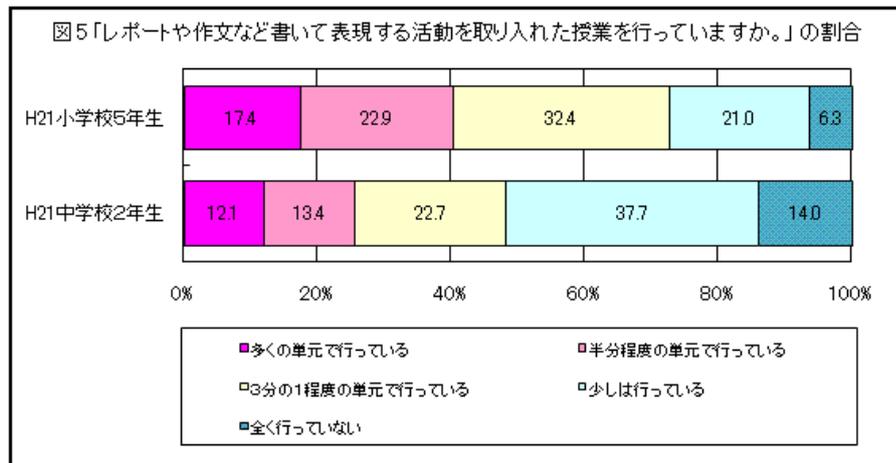


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな傾向は見られないものの、中学校では国語、数学、英語においてAグループの方が平均正答率が高くなっている。特に数学において顕著な傾向が表れている。

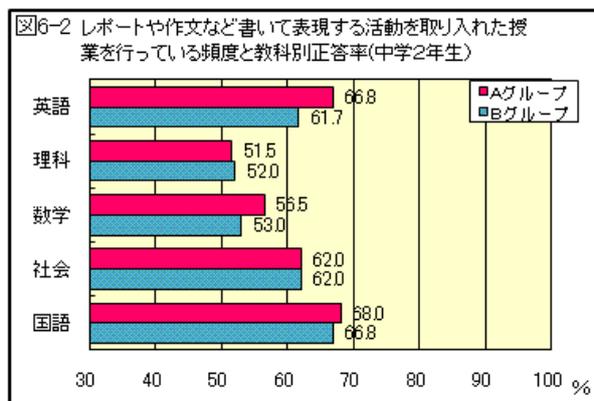
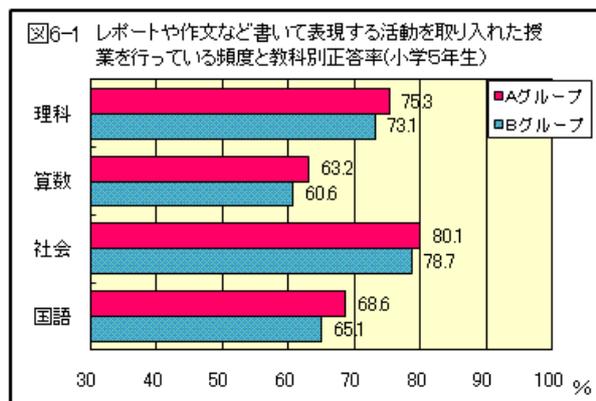
また、AグループとBグループを生徒の「授業が分かる」という学校スコアで比較すると、明らかな傾向は見られないものの、各教科においてAグループの方が高くなっている。つまり中学校では、理解が十分でない生徒に対して指導している頻度が高い学校の生徒の方が、授業が分かると感じているといえる。[図4]



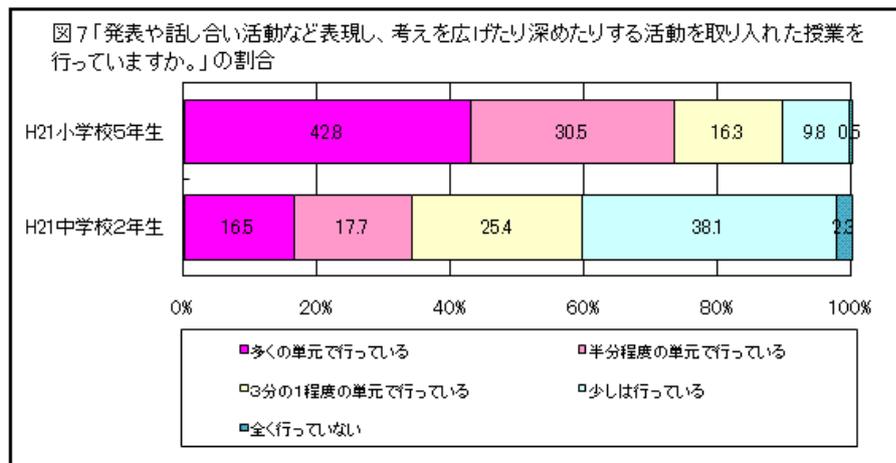
「レポートや作文など書いて表現する活動を取り入れた授業を行っていますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は17.4%、「半分程度の単元で行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると40.3%である。これは中学校教師の意識調査の結果よりも高くなっている。[図5]



この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな傾向は見られないもののすべての教科においてわずかにAグループの方が高くなっている。中学校では数学と英語においてAグループの方が平均正答率が高くなっており、特に英語において顕著な傾向が表れている。[図6]

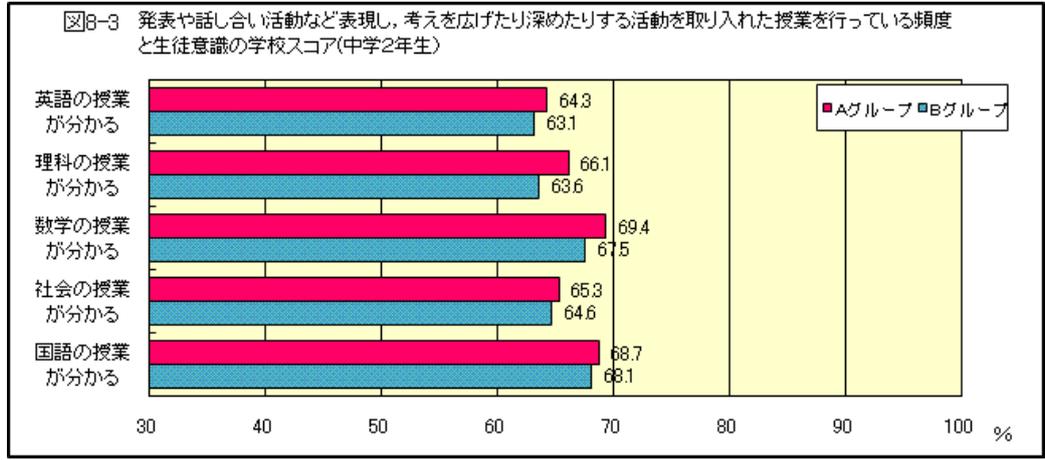
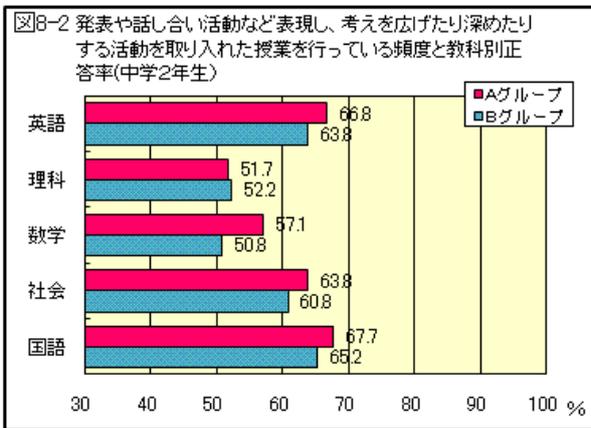
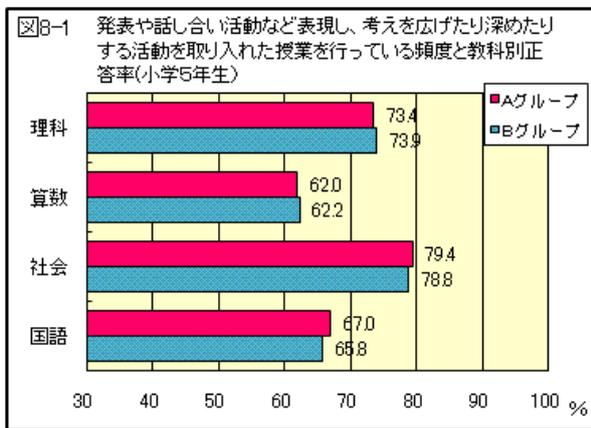


「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は42.8%、「半分程度の単元で行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると7割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果が3割ほどに対して2倍以上高くなっている。[図7]

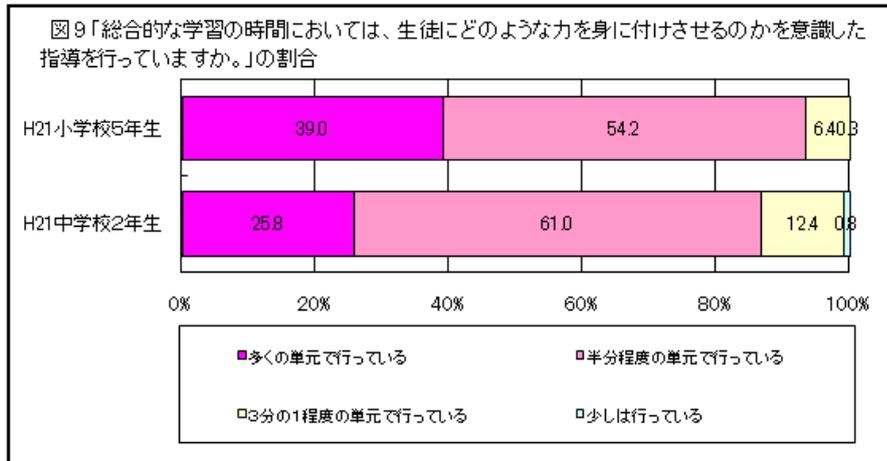


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな傾向は見られないものの、中学校では1年生の理科を除きAグループの方が平均正答率が高くなっている。特に数学において顕著な傾向が表れている。

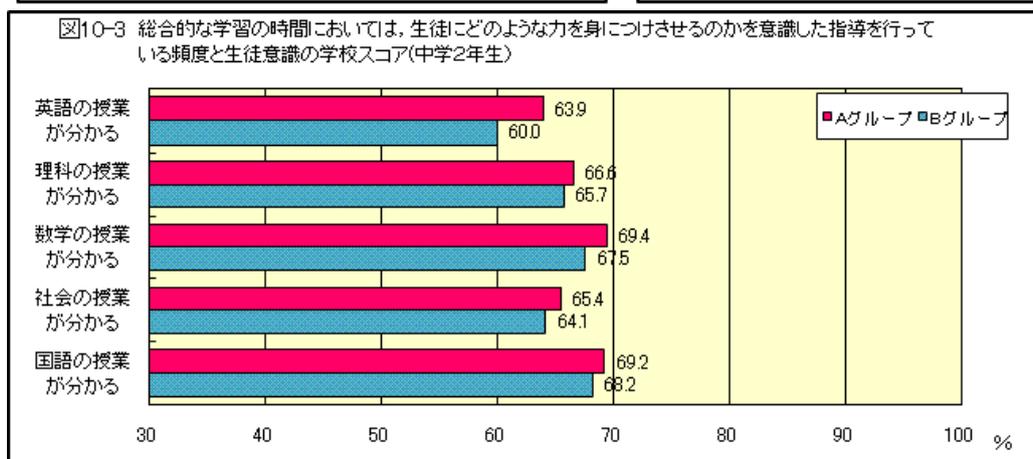
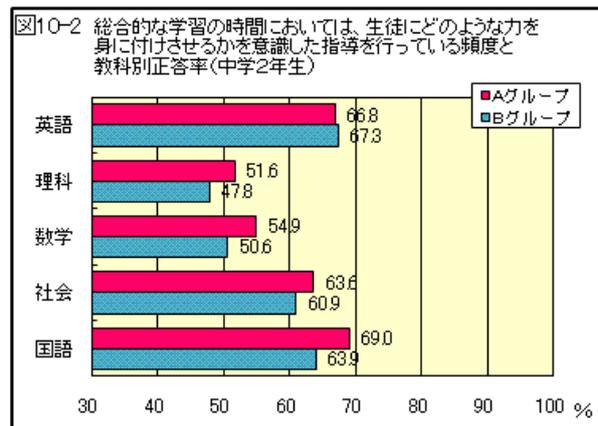
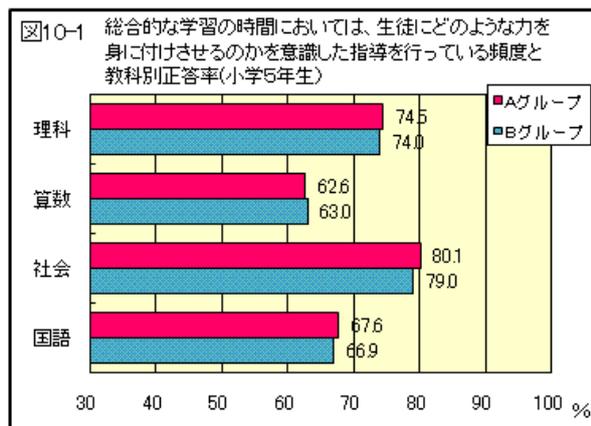
また、AグループとBグループを児童・生徒の「授業が分かる」という学校スコアで比較すると、明らかな傾向は見られないものの、各教科においてAグループの方がやや高くなっている。つまり中学校では、発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っている頻度が高い学校の生徒の方が、授業が分かると感じているといえる。[図8]



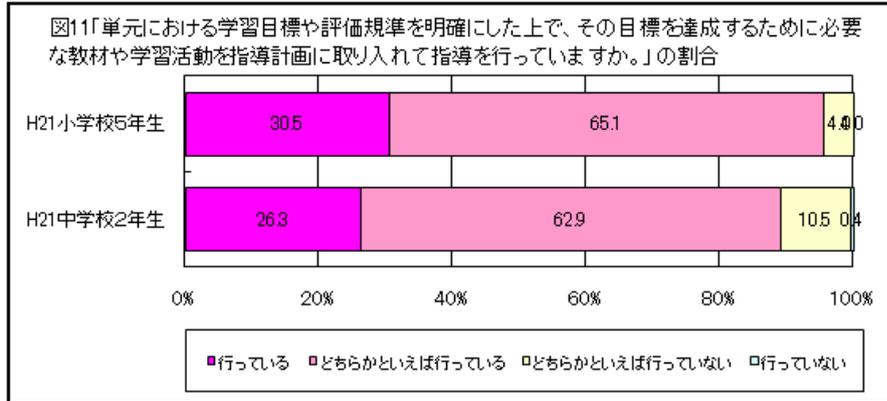
「総合的な学習の時間においては、生徒にどのような力を身に付けさせるのかを意識した指導を行っていますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は39.0%、「半分程度の単元で行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果よりも高くなっている。[図9]



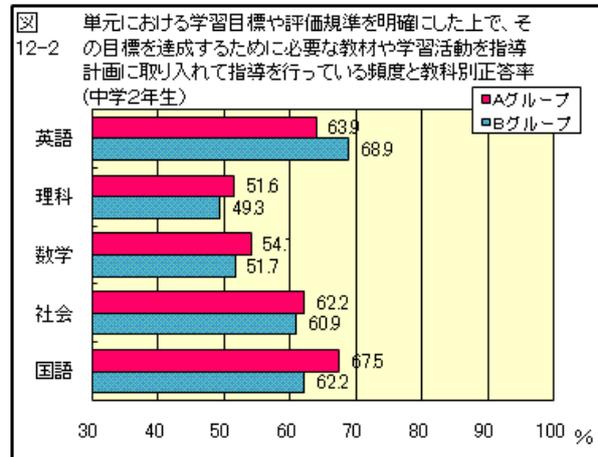
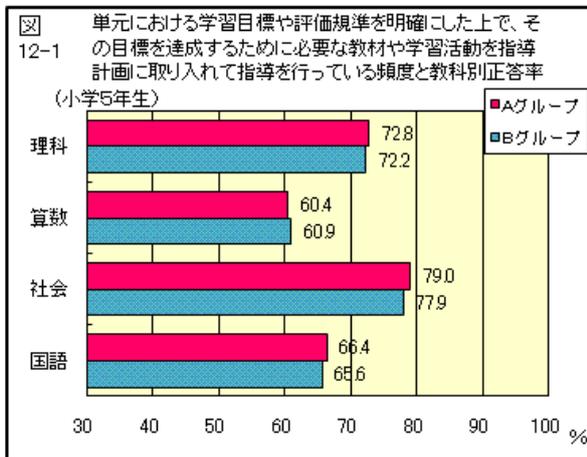
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな傾向は見られないものの、中学校では英語を除きAグループの方が平均正答率が高くなっている。特に国語において顕著な傾向が表れている。また、AグループとBグループを児童の「授業が分かる」という学校スコアで比較すると、明らかな傾向は見られないものの、各教科においてAグループの方がやや高くなっている。つまり中学校では、総合的な学習の時間において身に付けさせたい力を意識した指導を行っている学校の生徒の方が、授業が分かると感じているといえる。[図10]



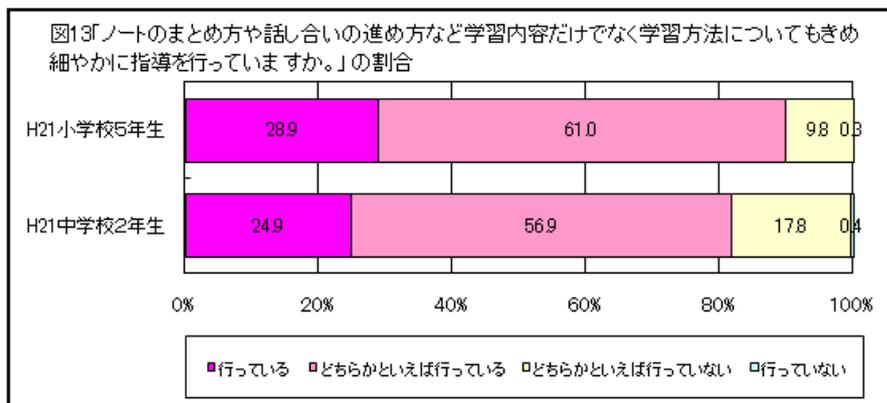
「単元における学習目標や評価規準を明確にした上で、その目標を達成するために必要な教材や学習活動を指導計画に取り入れて指導を行っていますか」という設問については、「行っている」と回答した小学校教師の割合は30.5%、「どちらかといえば行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果よりもやや高くなっている。[図11]



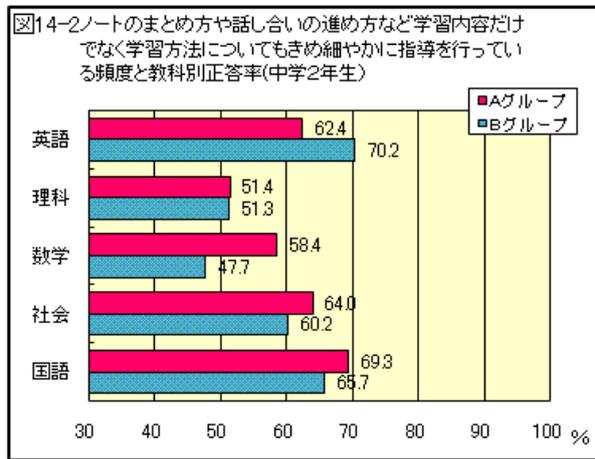
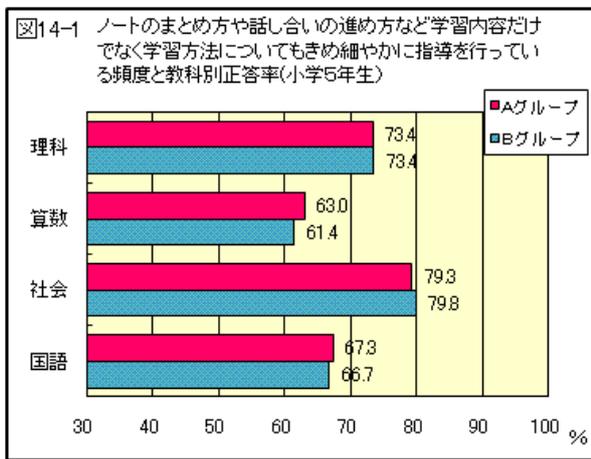
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな傾向は見られないものの、中学校では国語、数学、理科においてAグループの方が平均正答率が高くなっている。特に国語において顕著な傾向が表れている。一方、英語においては、Bグループの方が平均正答率が高くなっている。[図12]



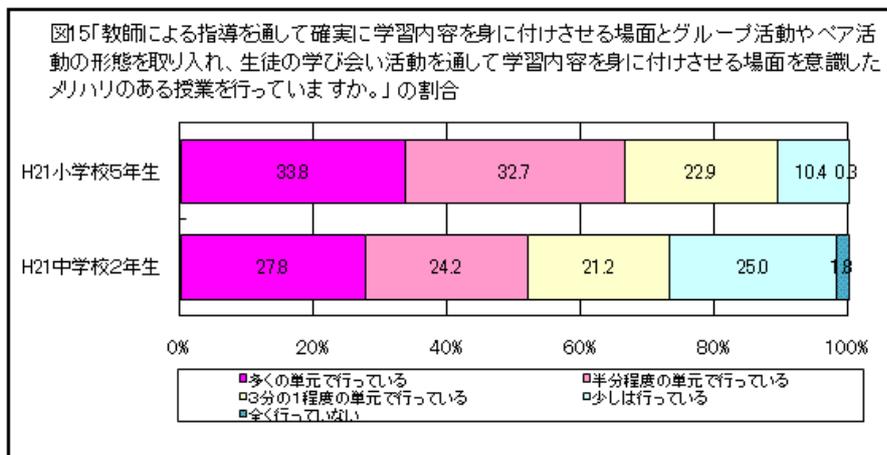
「ノートまとめ方や話し合いの進め方など学習内容だけでなく学習方法についてもきめ細やかに指導を行っていますか」という設問については、「行っている」と回答した小学校教師の割合は28.9%、「どちらかといえば行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると約9割である。これは中学校教師の意識調査の結果よりもやや高くなっている。[図13]



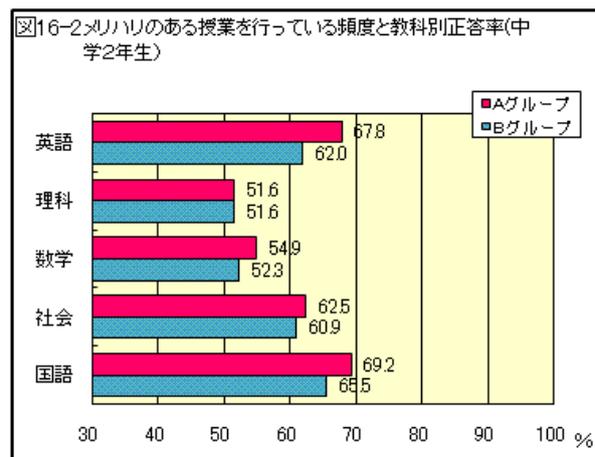
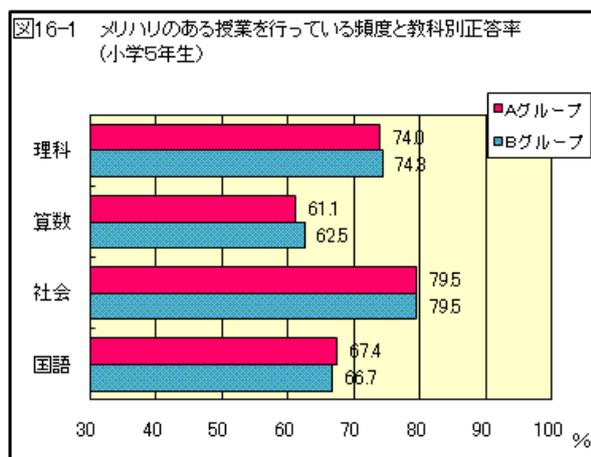
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな傾向は見られないものの、中学校では国語、社会、数学においてAグループの方が平均正答率が高くなっている。特に数学において顕著な傾向が表れている。一方、英語においては、Bグループの方が平均正答率が高くなっている。[図14]



「教師による指導を通して確実に学習内容を身に付けさせる場面とグループ活動やペア活動の形態を取り入れ、生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識したメリハリのある授業を行っていますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は33.8%、「半分程度の単元で行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると6割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて高くなっている。[図15]



この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな傾向は見られないものの、中学校では国語、数学、英語においてAグループの方が平均正答率が高くなっている。特に英語において顕著な傾向が表れている。[図16]



発展的課題を取り入れた授業

知識や技能は獲得された段階でとどまることなく、その知識を活用することによって、更に確かな定着へとつながると考えられる。発展的な課題を取り入れた授業の実施は、学びの面白さや楽しさを誘発するだけでなく、学習内容の理解や獲得した知識・技能の定着についても確かなもののできるであろう。また、発展的な課題は児童生徒の知的好奇心を高め、学習意欲の喚起にもつながる。授業においては、単元ごとに児童生徒一人一人の実態をしっかりと把握し、必要に応じて、その実態に合った発展的な課題を取り入れていくことが有効であると考えられる。これは前述した学力の重要な要素のすべてに有効に働くであろう。

今回の学習指導要領改訂において、多くの教科の授業時数が拡大され〔※1参照〕、このような学習活動を展開するための時数が確保されたことも今後有効に生かしていく必要がある。

※1 授業時数の拡大

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校学習指導要領の改訂について』（答申）
平成20年1月17日 30～39ページ及び150ページ

表現する活動を取り入れた授業

今回の調査においても、表現活動についてのより詳細な分析を進めるため、「レポートや作文など書いて表現する活動を取り入れた授業」の実施と「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業」の実施に分けて、意識調査を行った。その結果、前年度調査と同様、発表や話し合い活動などの表現活動を取り入れた授業に比べ、書いて表現する活動を取り入れた授業の頻度がいくぶん少ない傾向にあることが分かった。さらに、中学校は小学校に比べるといずれの活動も少なく、教師主導の一斉指導が多く行われていることがうかがえる。

発表や話し合い活動などの表現活動は十分にその有効性が認められるが、そのような活動に取り組む前の準備として、自分の考えを明確にしたり、発表したいことを、要点をまとめて分かりやすくまとめたりする活動があれば、発表活動や話し合い活動は充実する。また、レポートや作文など書いて表現する活動はそれのみで終わるのではなく、そのレポートや作文を発表する場が位置付けられていたり、そのレポートや作文を評価してもらう機会が与えられたりすることで、児童生徒にとっても活動の必然性が生まれ、満足感や更なる意欲にもつながると考えられる。

大切なことは、「書いて表現する活動」と「発表や話し合いなどの表現活動」との調和を図り、両者の関連を図った指導を工夫することが、児童の知識・技能の定着、思考力・判断力・表現力の育成に有効ということである。今後、更に言語活動を意識した指導の工夫が望まれる。

なお、表現活動においては、結果の評価のみではなく、その取り組みの過程で丁寧な評価をフィードバックすることにより、表現活動そのものの質も高まり、児童生徒の満足感や更なる向上への意欲にもつながる。また、表現活動の充実という視点において、コンピュータや学校図書館など学習環境の効果的な活用を図ることも一つの有効な方策である。

身に付けさせたい力を意識した総合的な学習における指導

総合的な学習の時間において、身に付けさせたい力を意識した指導を行うことによって、児童生徒の問題解決能力の育成につながり、教科学習における言語表現力や理解力により影響を与えていることがうかがえる。また、児童生徒の学習意欲の喚起や自己学習への態度化にもつながると考えられる。なによりも、総合的な学習の時間における教師のカリキュラムマネジメントは、教科をつなぐだけでなく学級や学年間などの教師集団の連携にもよい影響を与えていることが予想され、身に付けさせたい力を意識した教師の指導は教科指導においても発揮されていると思われる。

中央教育審議会の答申（平成20年1月17日）においても、総合的な学習の時間の学校間、学年段階間の取り組みの実態に差があることを課題としており〔※2参照〕、学校としてのカリキュラムマネジメント能力の向上が求められている。学習指導要領の改訂に伴い、総合的な学習の時間の縮減はあるもののその重要性については、更に強調されることとなる。各学校におけるカリキュラムマネジメント能力の向上がおおいに期待されることである。

※2 総合的な学習の時間の課題

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校学習指導要領の改訂について』（答申）
平成20年1月17日 130ページ～132ページに記載されているので、参照していただきたい。

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

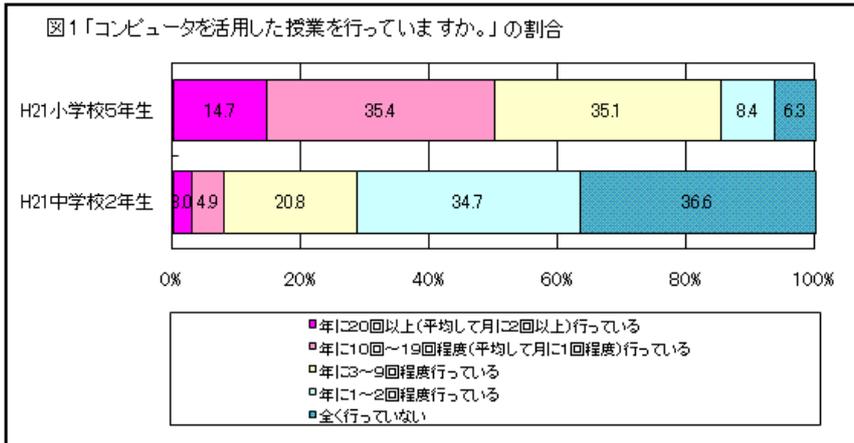
Web報告書もくじ > IV 教師意識調査の結果の分析

学習環境の活用

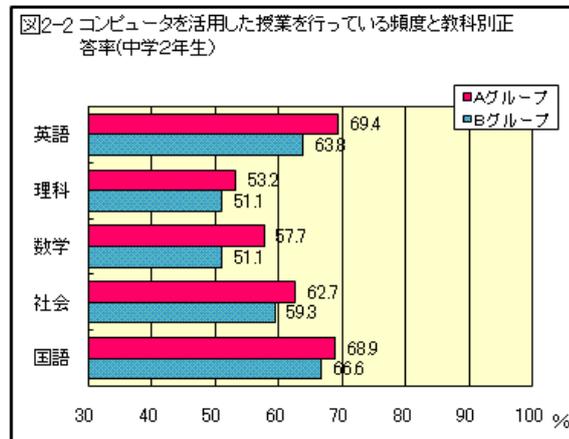
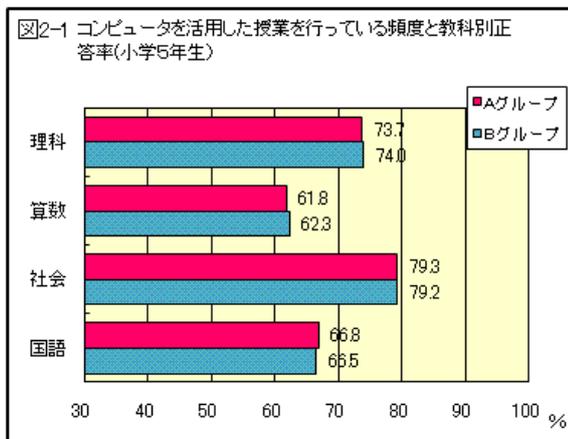
○ コンピュータ、学校図書館ともに、活用頻度や活用目的に小中学校の違いが見られる。児童生徒の実態や学習の内容に応じて、明確な目的をもって取り入れていくことで効果があがると考えられる。

この節では、授業におけるコンピュータや学校図書館の活用頻度とその活用内容を把握する。

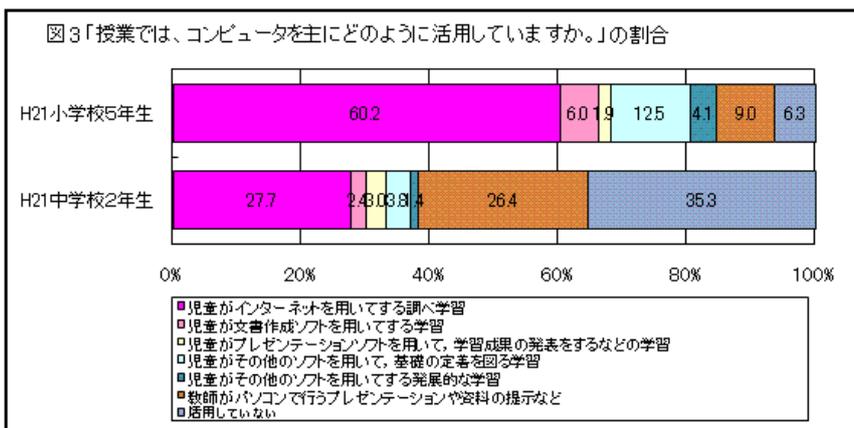
「コンピュータを活用した授業を行っていますか」という設問については、「年に20回以上(平均して月に2回以上)」と回答した小学校教師の割合は14.7%であり、「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)」と回答した教師の割合を合わせると50.1%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて高くなっている。【図1】



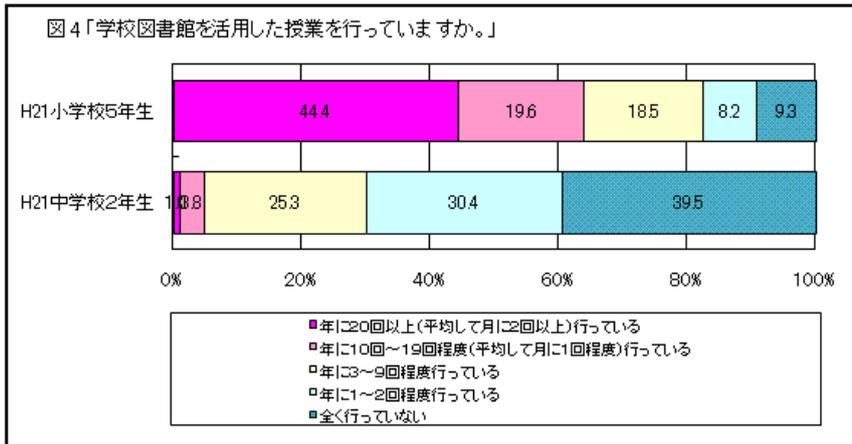
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな傾向は見られないものの中学校ではすべての教科においてAグループの方が高くなっている。特に数学と英語においては顕著な傾向が表れている。【図2】



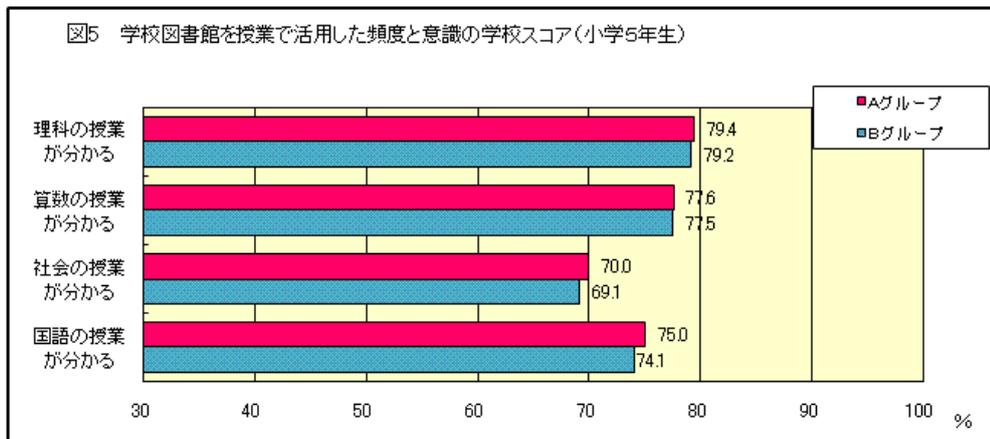
「授業では、コンピュータをどのように活用していますか」という設問については、小学校では「インターネットを用いて調べ学習」と回答した教師の割合が最も多く、60.2%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて2倍程度高くなっている。中学校では「教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など」として活用する割合が小学校よりも高くなっている。【図3】



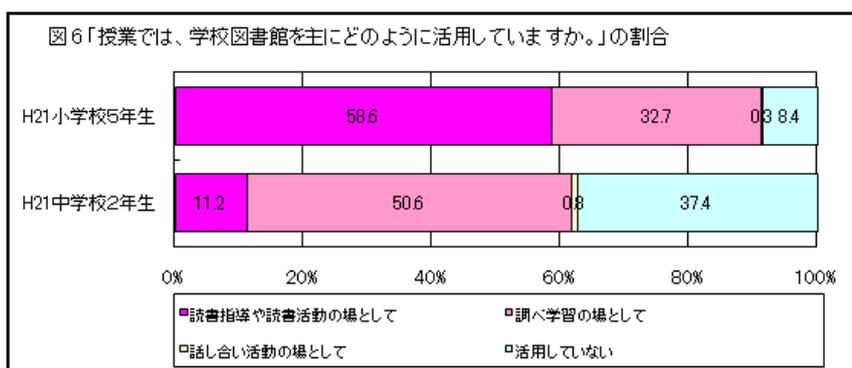
「学校図書館を活用した授業を行っていますか」という設問については、「年に20回以上(平均して月に2回以上)」と回答した小学校教師の割合は44.4%であり、「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)」と回答した教師の割合を合わせると6割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて、極めて高くなっている。[図4]



この設問においてAグループとBグループを児童の「授業が分かる」という学校スコアで比較すると、明らかな傾向は見られないものの、Aグループの国語と社会においてやや高くなっている。[図5]



「授業では、学校図書館をどのように活用していますか」という設問については、小学校では「読書指導や読書活動の場として」と回答した教師の割合が最も多く、58.6%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて高くなっている。中学校では「調べ学習の場として」活用する割合が小学校よりも高くなっている。[図6]



平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

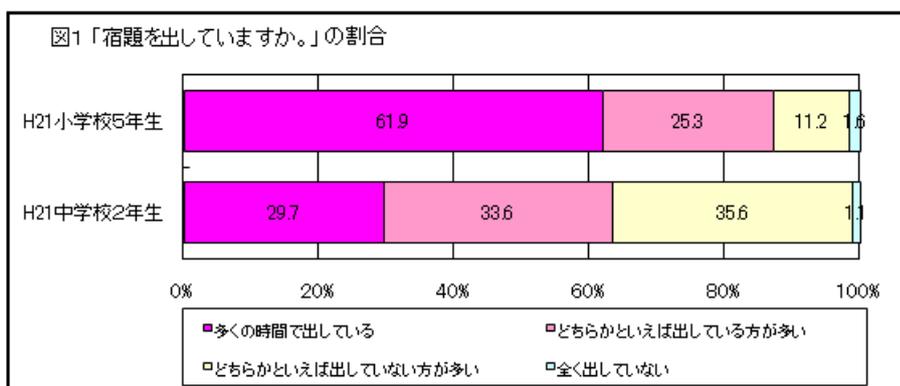
Web報告書もくじ > IV 教師意識調査の結果の分析

家庭学習の関与状況

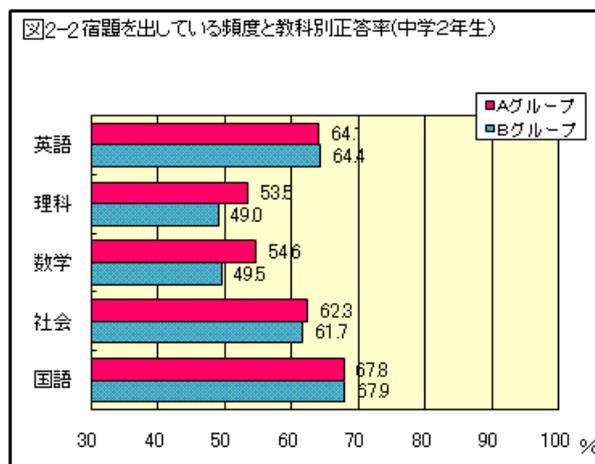
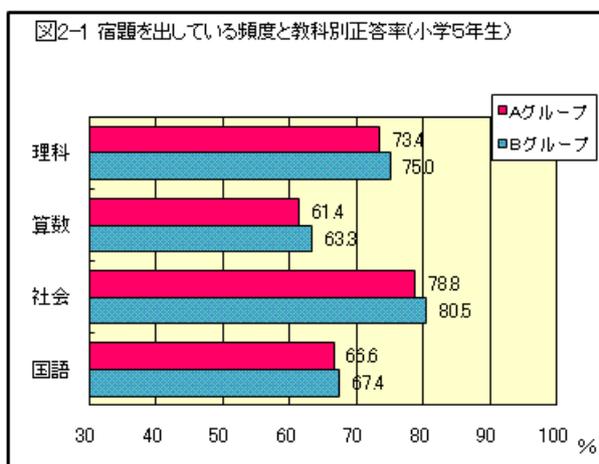
○ 宿題については、予習的な学習と復習的な学習をバランスよく組み合わせていくことで、学習事項の定着や家庭学習の習慣化のみならず、学習への意欲向上へも効果があがると考えられる。

この節では、宿題を出している頻度並びに出している宿題の質(予習的宿題・復習的宿題)について問うことにより、宿題の出題状況を把握する。

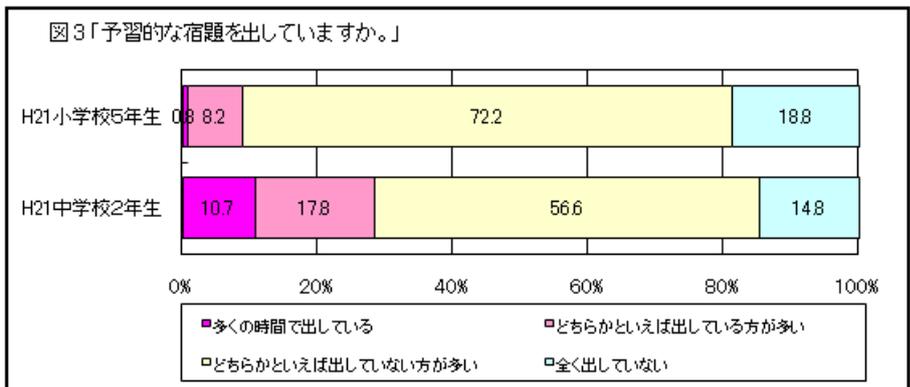
「宿題を出していますか」という設問については、「多くの時間を出している」と回答した小学校教師の割合は61.9%、「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合を合わせると8割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果よりも高くなっている。[図1]



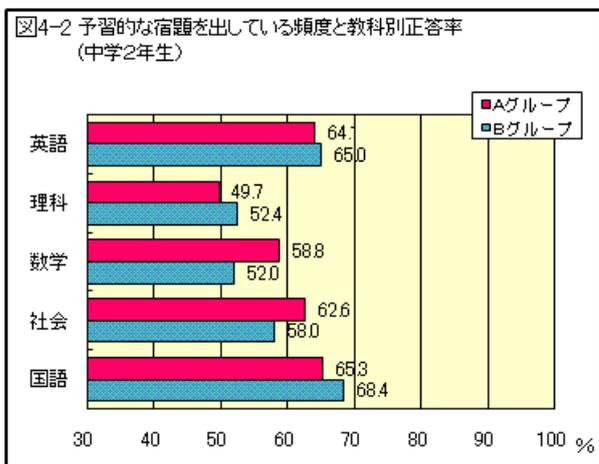
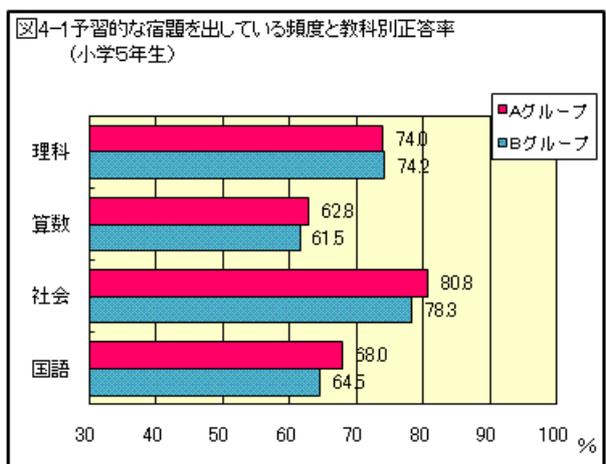
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな傾向は見られないものの、中学校では数学と理科においてAグループの方が正答率が高くなっている。[図2]



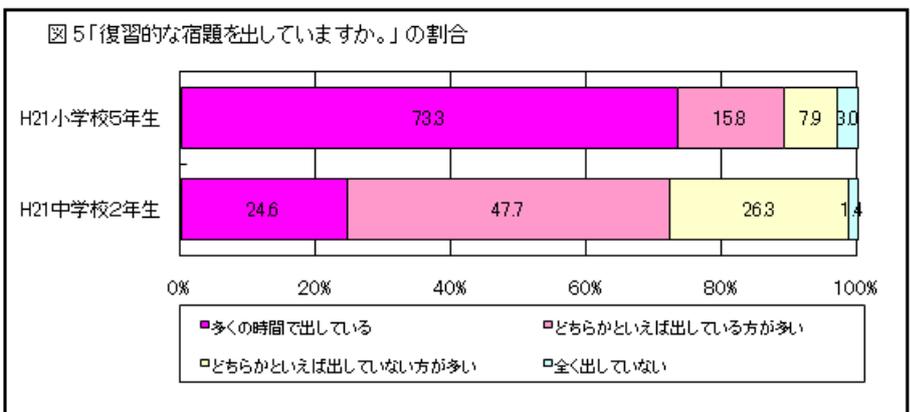
「予習的な宿題を出していますか」という設問については、「多くの時間で出している」と回答した小学校教師の割合は0.8%、「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合を合わせると9.0%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果よりもかなり低くなっている。[図3]



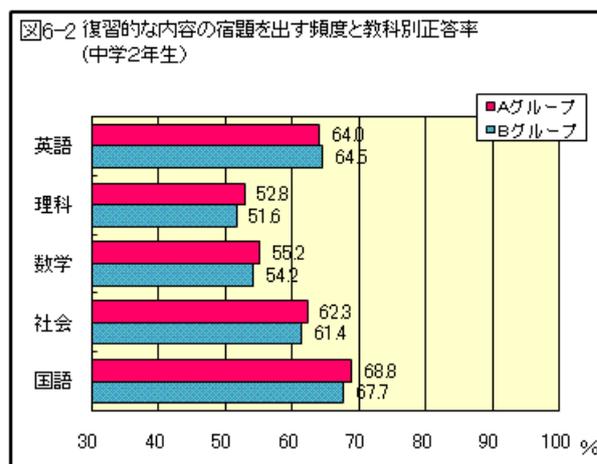
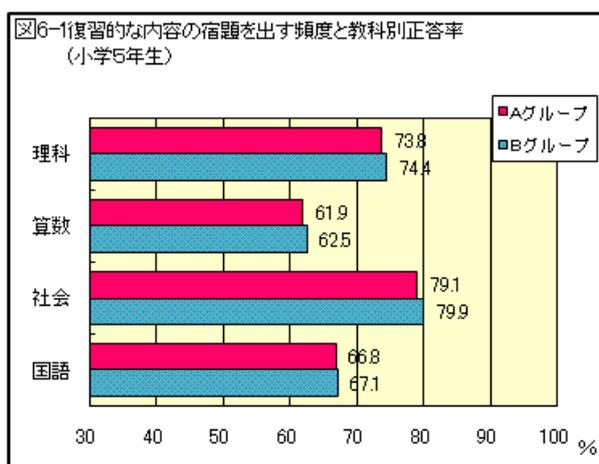
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では国語と社会においてAグループの方が高くなっている。中学校では社会と数学においてAグループの方が平均正答率が高くなっているが、国語と理科においてはBグループの方が高くなっている。[図4]



「復習的な宿題を出していますか」という設問については、「多くの時間で出している」と回答した小学校教師の割合は73.3%、「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合を合わせると約9割になっている。これは中学校教師の意識調査の結果よりも高くなっている。[図5]



この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校と中学校ともに明らかな傾向は見られない。[図6]



予習的な宿題と復習的な宿題

小・中学校共に、多くの教師が宿題を課しており、その多くは復習的な宿題である。このことから、宿題が授業における学習事項の定着や学習の習慣化を目的とされており、その効果を挙げているといえる。一方で小学校においては、中学校と比べて予習的な宿題を課す割合は極めて少ない。予習的な内容の宿題は、授業における児童の主体的な活動を促す手立てとして有効であり、児童の自己学習力を育てる上においても、大切な要件であると考えられる。

平成19年6月に公布された学校教育法の一部改正により、学力の重要な要素 [※3参照]として、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③学習意欲の三点が明確に示された。予習的な宿題を工夫し、その宿題と授業における学習活動をうまくかかわらせることによって、授業への関心や意欲を高め、主体的な学習活動に結び付けることが学習意欲を喚起するための手立ての一つとして有効であろう。また、復習的な宿題においても、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るとともに、知識・技能を活用して課題解決を図るような視点での内容について検討されることが望まれる。

※3 学力の重要な要素

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校学習指導要領の改訂について』(答申)
平成20年1月17日 10ページ

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

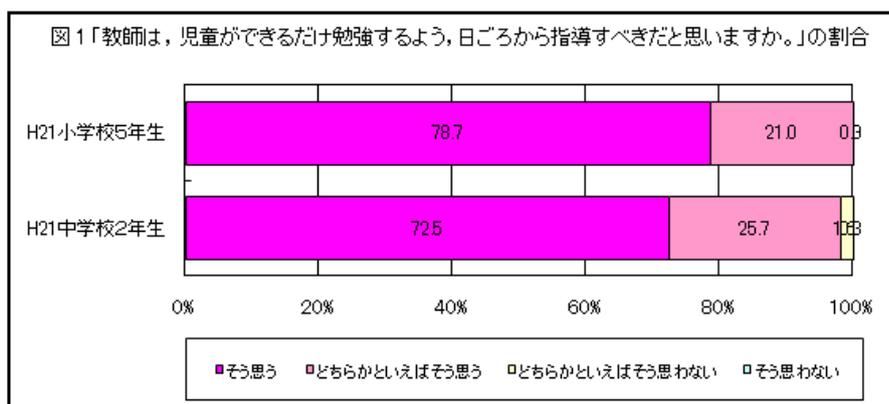
Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

教師の指導観

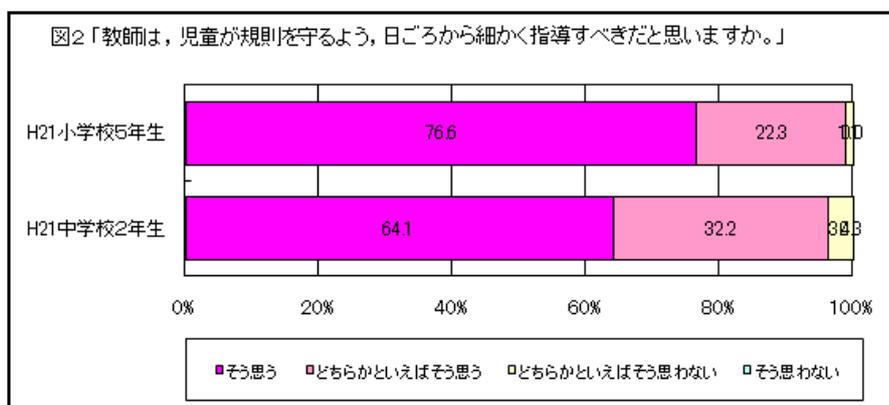
- 教師は、子どもたちができるだけ勉強するように、日ごろから指導し、勉強のことについて気軽に話しかけられるようにすべきだと思っている。
- 小・中学校の教師とも、すべての項目で意識が高いが、「そう思う」だけで見ると小学校の方が高くなっている。

この節では、教師の指導行動を主に課題達成の意識、集団維持の意識から問うことにより、教師の指導観を把握する。

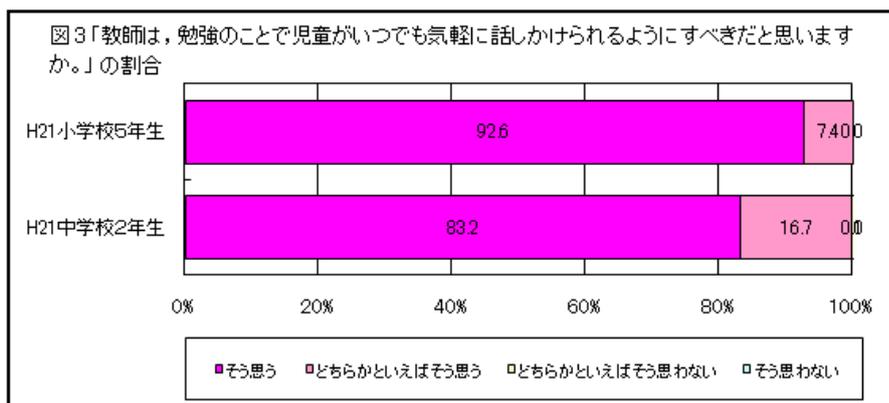
「教師は、児童・生徒ができるだけ勉強するよう、日ごろから指導すべきだと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は78.7%、「どちらかといえばそう思う」まで合わせると、ほぼ100%に近い割合となっている。これは中学校教師の意識調査の結果とほとんど変わらない。[図1]



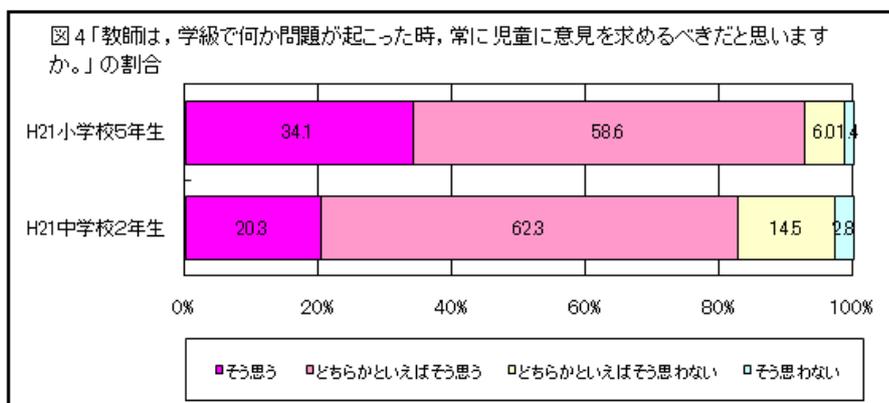
「教師は、児童が規則を守るよう、日ごろから細かく指導すべきだと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は76.6%、「どちらかといえばそう思う」まであわせるとほぼ100%に近い割合となっている。これは中学校教師の意識調査の結果よりもやや高くなっている。[図2]



「教師は、勉強のことで児童がいつでも気軽に話し掛けられるようにすべきだと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は92.6%、「どちらかといえばそう思う」まで合わせると、100%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果とほとんど変わらないが、「そう思う」の割合だけ比べると9.4%高くなっている。〔図3〕



「教師は、学級で何か問題が起こったとき、常に児童に意見を求めるべきだと思いますか」という設問については、「行っている」と回答した小学校教師の割合は34.1%、「どちらかといえば行っている」まで合わせると、9割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果よりも高くなっている。〔図4〕



最終更新日： 2009-07-01

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

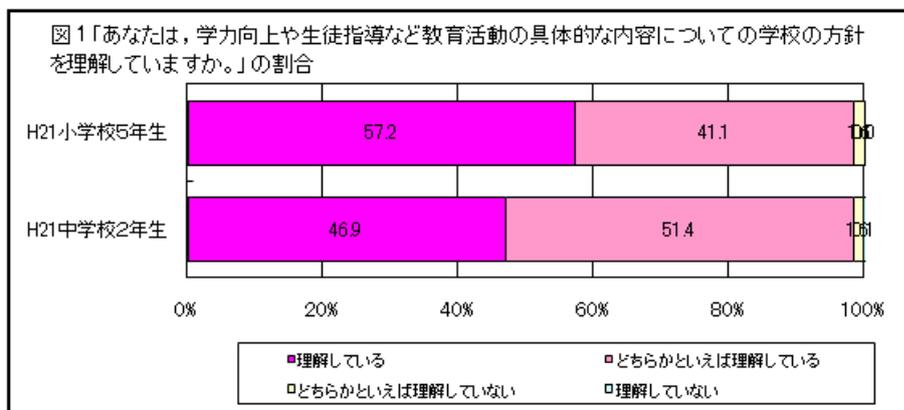
Web報告書もくじ>Ⅳ 教師意識調査の結果の分析

学校組織のマネジメントに対する意識

- 教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していると回答した教師は9割を大きく上回っている。
- 教育活動の具体的な内容についての共通理解が図られていると回答した教師は9割を大きく上回っている。

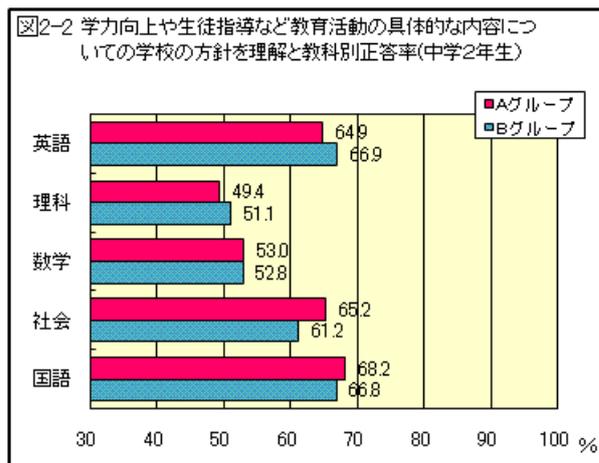
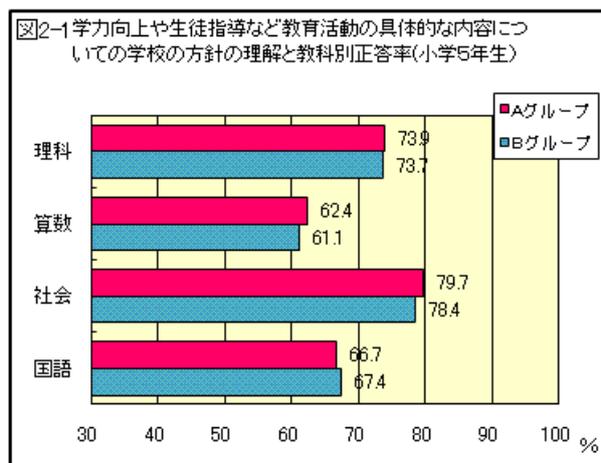
この節では、教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解、職員間の雰囲気について問うことにより、学校組織マネジメントが児童生徒の正答率や児童生徒の学習に対する意識に及ぼす影響を把握する。

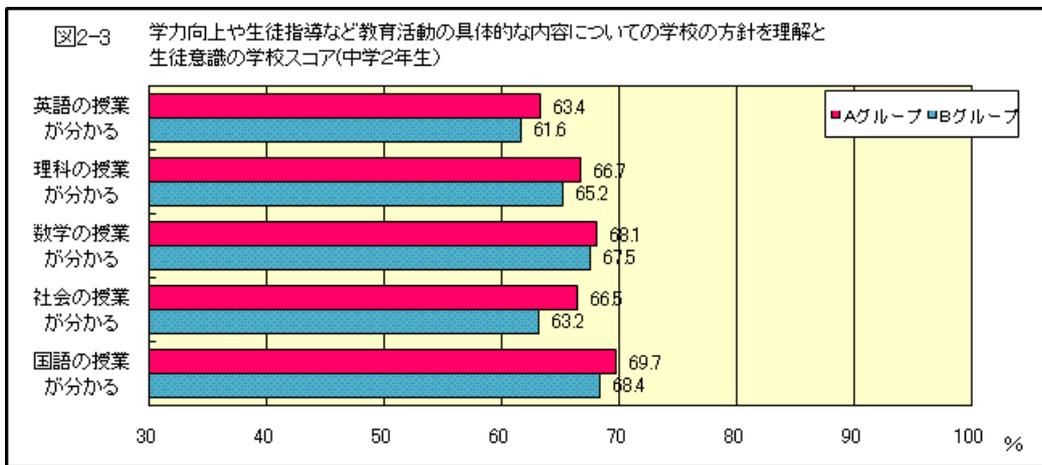
「あなたは、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していますか」という設問については、「理解している」と回答した小学校教師の割合は57.2%、「どちらかといえば理解している」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を大きく上回っている。「理解している」と回答した小学校教師の割合は中学校教師の意識調査の結果と比べて高くなっている。**[図1]**



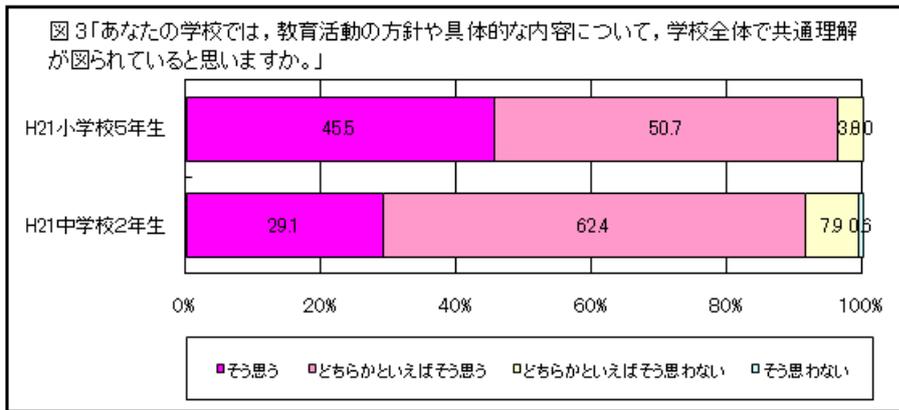
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな傾向は見られないものの、中学校では社会においてAグループの方が平均正答率が高くなっている。

また、中学校では、AグループとBグループを生徒の「授業が分かる」という学校スコアで比較すると、明らかな傾向は見られないものの、各教科においてAグループの方がやや高くなっている。つまり中学校では、教育活動についての学校方針を理解しているという学校の生徒の方が、授業が分かると感じているといえる。**[図2]**



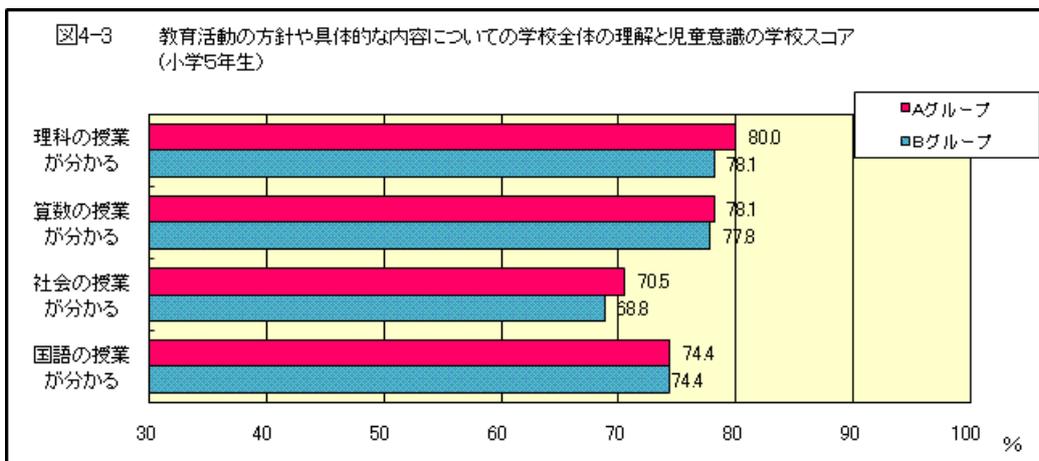
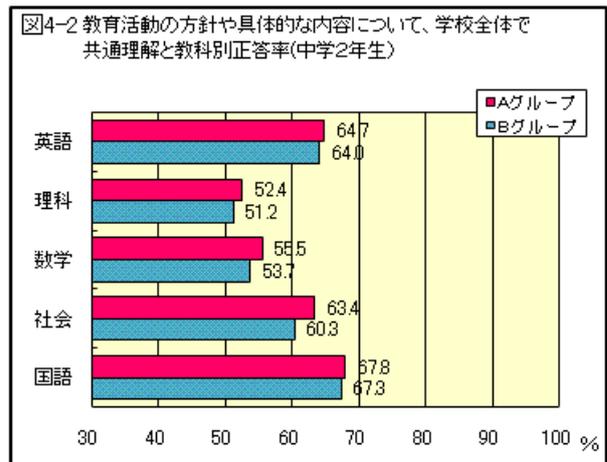
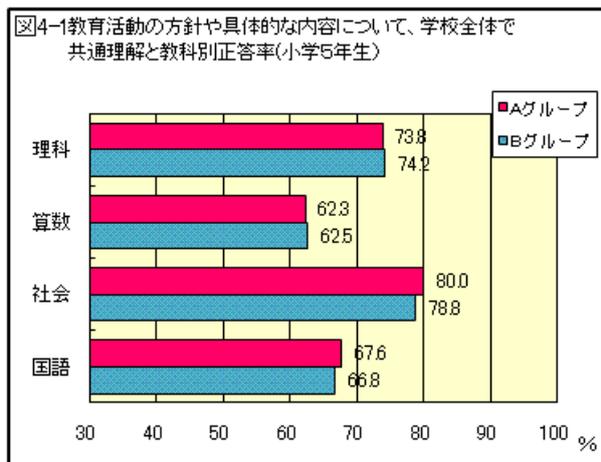


「あなたの学校では、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は45.5%、「どちらかといえばそう思う」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を上回っている。「そう思う」と回答した小学校教師の割合は中学校教師の意識調査の結果よりも高くなっている。[図3]

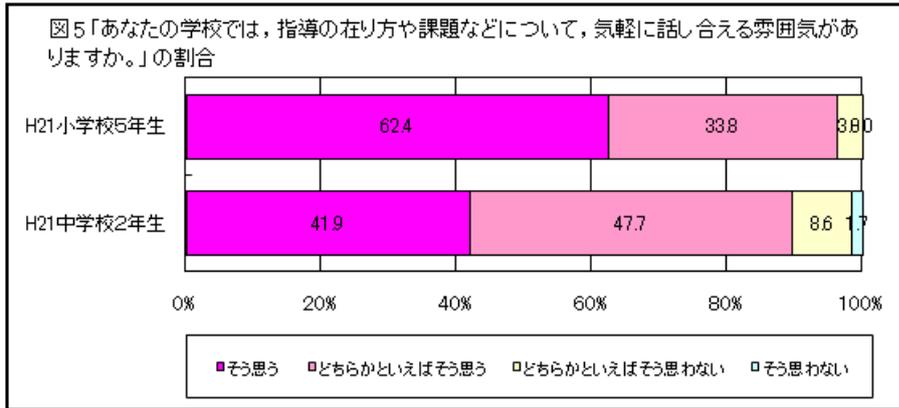


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな傾向は見られないものの、中学校では社会、数学、理科においてAグループの方が平均正答率が高くなっている。特に社会において顕著な傾向が表れている。

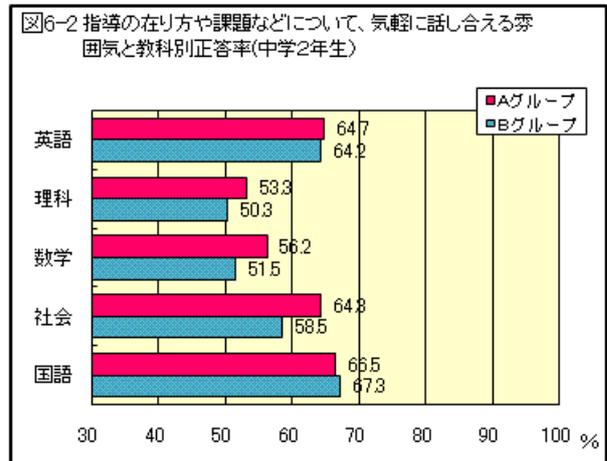
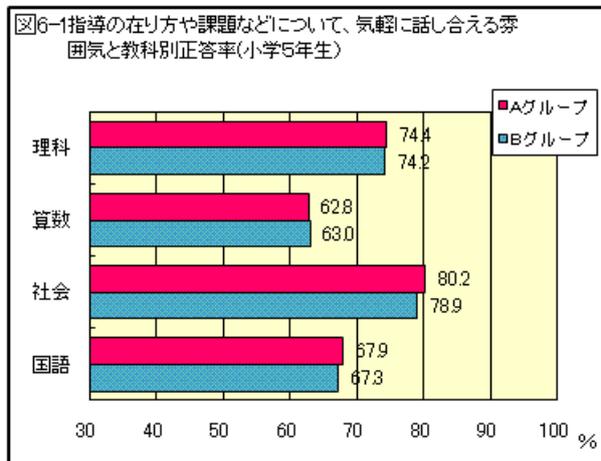
また、小学校では、AグループとBグループを児童の「授業が分かる」という学校スコアで比較すると、明らかな傾向は見られないものの、各教科においてAグループの方がやや高くなっている。つまり小学校では、学校全体で共通理解が図られているという意識が高い学校の児童の方が、授業が分かると感じているといえる。[図4]



「あなたの学校では、指導の在り方や課題などについて、気軽に話し合える雰囲気がありますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は62.4%、「どちらかといえばそう思う」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を上回っている。「そう思う」と回答した小学校教師の割合は中学校教師の意識調査の結果と比べて高くなっている。[図5]



この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな傾向は見られないものの、中学校では社会と数学、理科においてAグループの方が平均正答率が高くなっている。特に社会において顕著な傾向が表れている。一方、国語においてはBグループの方が平均正答率がやや高くなっている。[図6]



学校組織マネジメントとの関連

指導法の改善充実を図るためには、学校全体での取り組みが重要であり、学校組織マネジメントの充実は不可欠である。今回の調査結果からも、県全体として学校組織マネジメントの視点から見た場合、おおむね良好であるといえる。その中でも、学校全体として学校組織マネジメントへの意識が高い学校においては、正答率も高くなる傾向が見られた。これは、教師集団が目的を共有化しており、教師間の連携・協働体制が有効に働き、学校全体で教育に取り組む風土が醸成されていることの表われであり、教師の意欲や指導力の向上が、児童の学力向上につながっている結果であると考えられる。

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

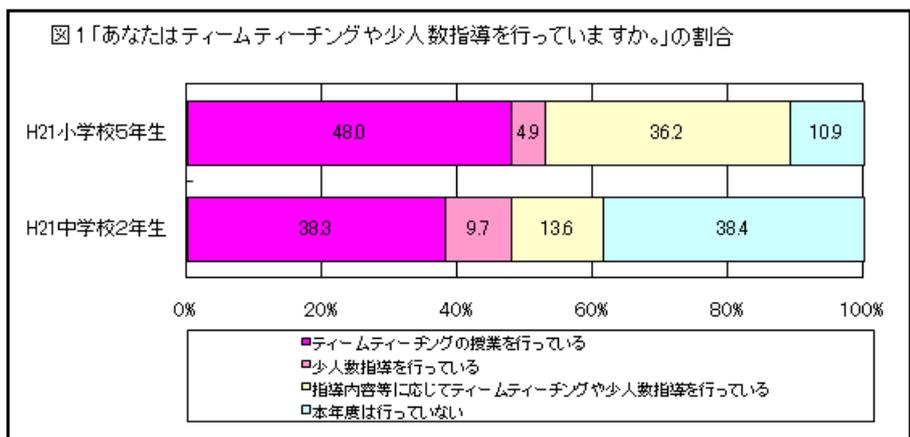
Web報告書もくじ > IV 教師意識調査の結果の分析

TT・少人数指導の成果と課題

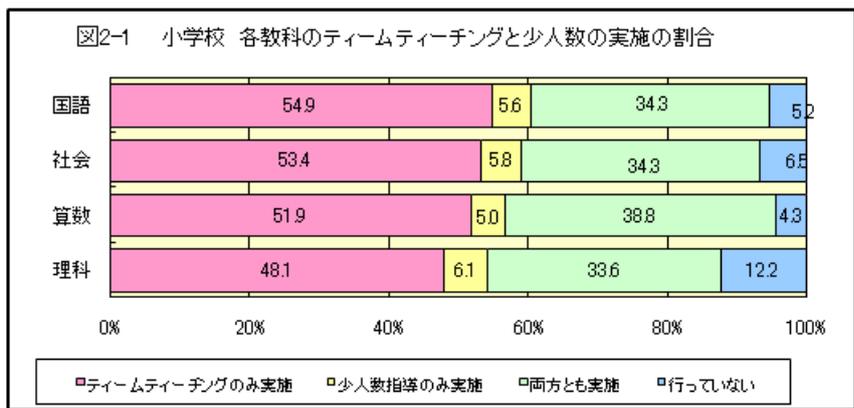
- TT・少人数指導の成果としては、小中学校ともに「学習状況が十分でない子どもに応じた指導ができる」と「子どもへの声掛けが増え、個別指導が十分にできる」と回答した教師の割合が多くなっている。
- TT・少人数指導の課題としては、打ち合わせ時間の確保についての工夫・改善を図るとともに、児童生徒のグループ編成や教師の役割分担などについても、更に検討を重ねる必要がある。

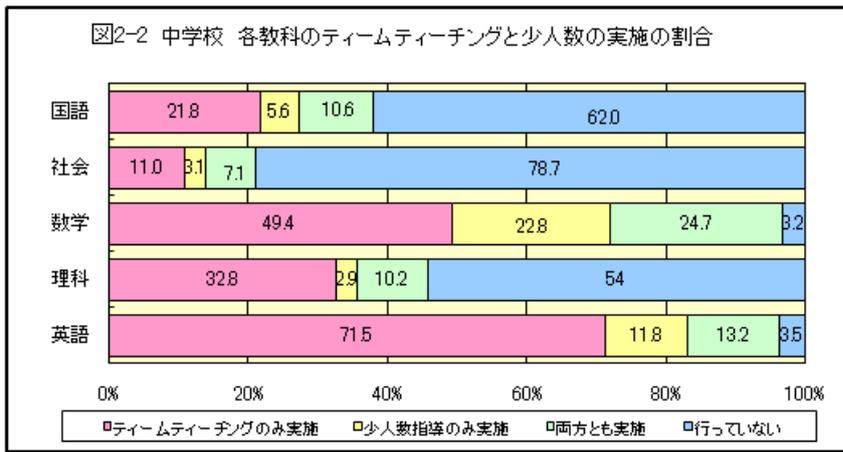
この節では、チームティーチングや少人数指導に携わる教師を対象に、チームティーチングの際の役割分担や少人数指導における習熟度別編成の導入頻度など実施方法にかかわる現状、指導法改善の頻度、チームティーチングや少人数指導の成果と課題について問うことにより、県の施策であるきめ細かな指導の実現状況と基礎学力定着の状況を把握する。

「あなたはチームティーチングや少人数指導を行っていますか」という設問について、小学校では「チームティーチング」と回答した教師の割合が最も多く、48.0%である。次いで「指導内容に応じてチームティーチングや少人数指導を行っている」と回答した割合が36.2%となっている。これらは中学校教師の意識調査の結果と比べて高くなっている。[図1]

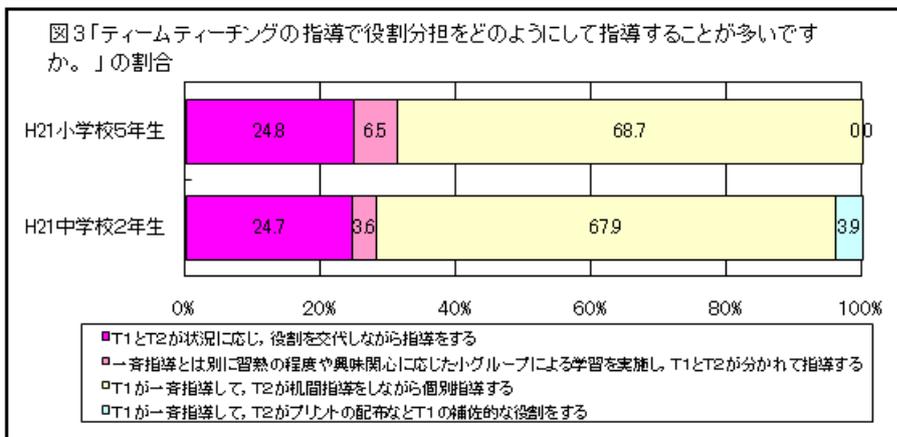


小学校において、全教科においてチームティーチング・少人数指導が実施されている。チームティーチングに取り組んでいる各教科の教師の割合は国語が54.9%、社会が53.4%、算数が51.9%、理科が48.1%となっている。「少人数指導のみ」「両方とも実施」を合わせると約9割になっている。中学校においても、全教科においてチームティーチング・少人数指導が実施されている。チームティーチングに取り組んでいる各教科の教師の割合は国語が21.8%、社会が11.0%、数学が49.4%、理科が32.8%、英語が71.5%となっている。小学校と中学校でチームティーチングを実施している教師の割合を比べると、すべての教科で小学校の方が高くなっている。また、両方とも実施していると回答している教師の割合も、すべての教科で小学校の方が高くなっている。 [図2]

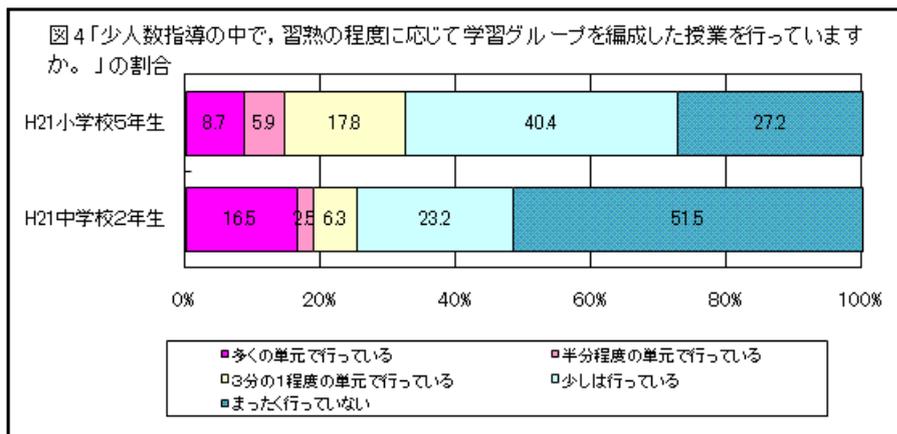




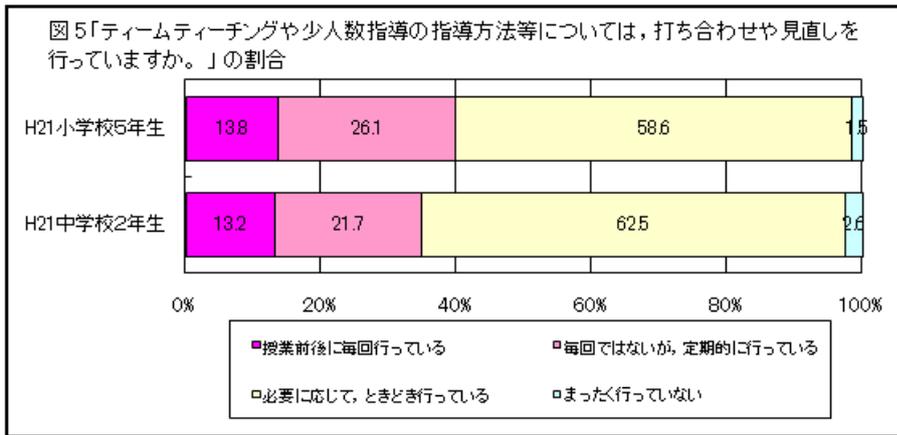
「**チームティーチングの指導で役割分担をどのようにして指導することが多いですか**」という設問について、小学校では「T1が一斉指導して、T2が机間指導しながら個別指導する」と回答した教師の割合が最も多く、68.7%である。次いで「T1とT2が状況に応じ、役割を交代しながら指導する」と回答した割合が24.8%となっている。これらは中学校教師の意識調査の結果と比べてほとんど変わらない。[図3]



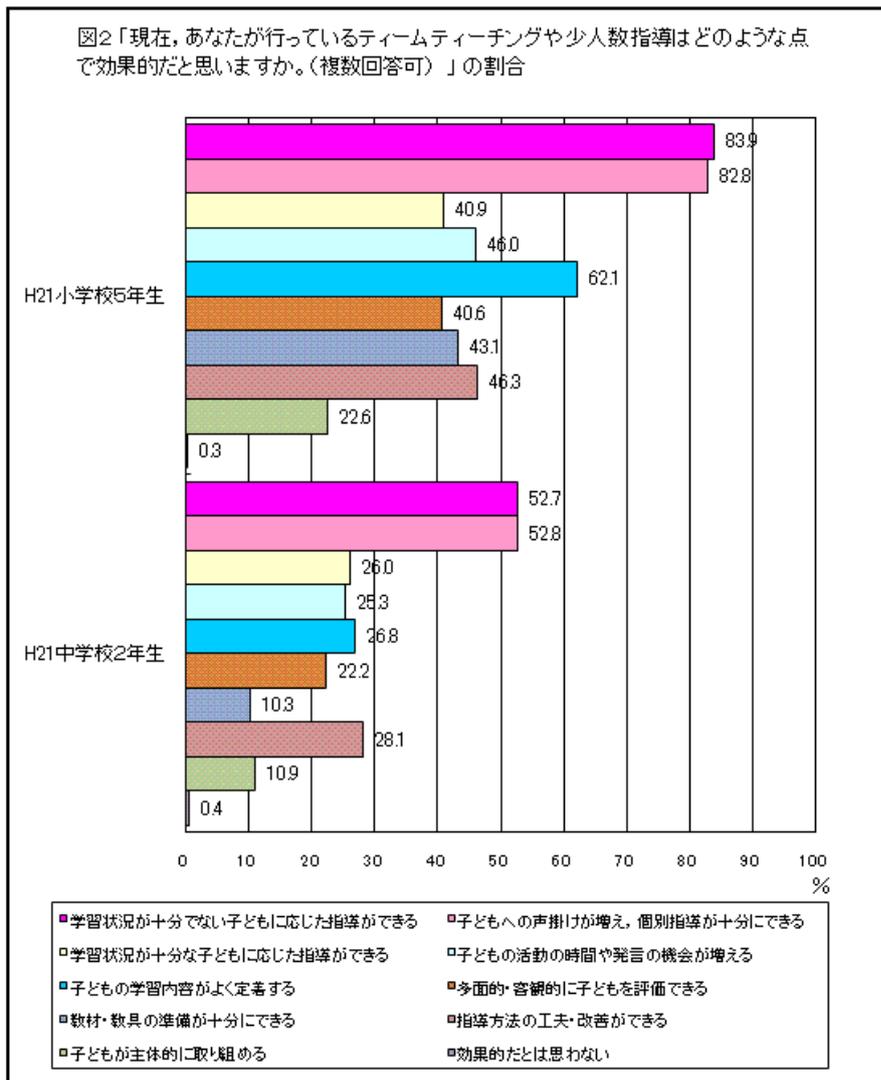
「**少人数指導の中で、習熟の程度に応じて学習グループを編成した授業を行っていますか**」という設問について、小学校では「少しは行っている」と回答した教師の割合が最も多く、40.4%である。ついで「まったく行っていない」と回答した教師の割合が27.2%となっている。「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は、中学校教師の意識調査の結果と比べて低くなっている。[図4]



「**チームティーチングや少人数指導の指導方法等については、打ち合わせや見直しを行っていますか**」という設問については、小学校では「必要に応じて、ときどき行っている」と回答した教師の割合が最も多く、58.6%である。ついて「毎回ではないが、定期的に行っている」と回答した割合が26.1%となっている。これらは中学校教師の意識調査の結果と比べてほとんど変わらない。[図5]

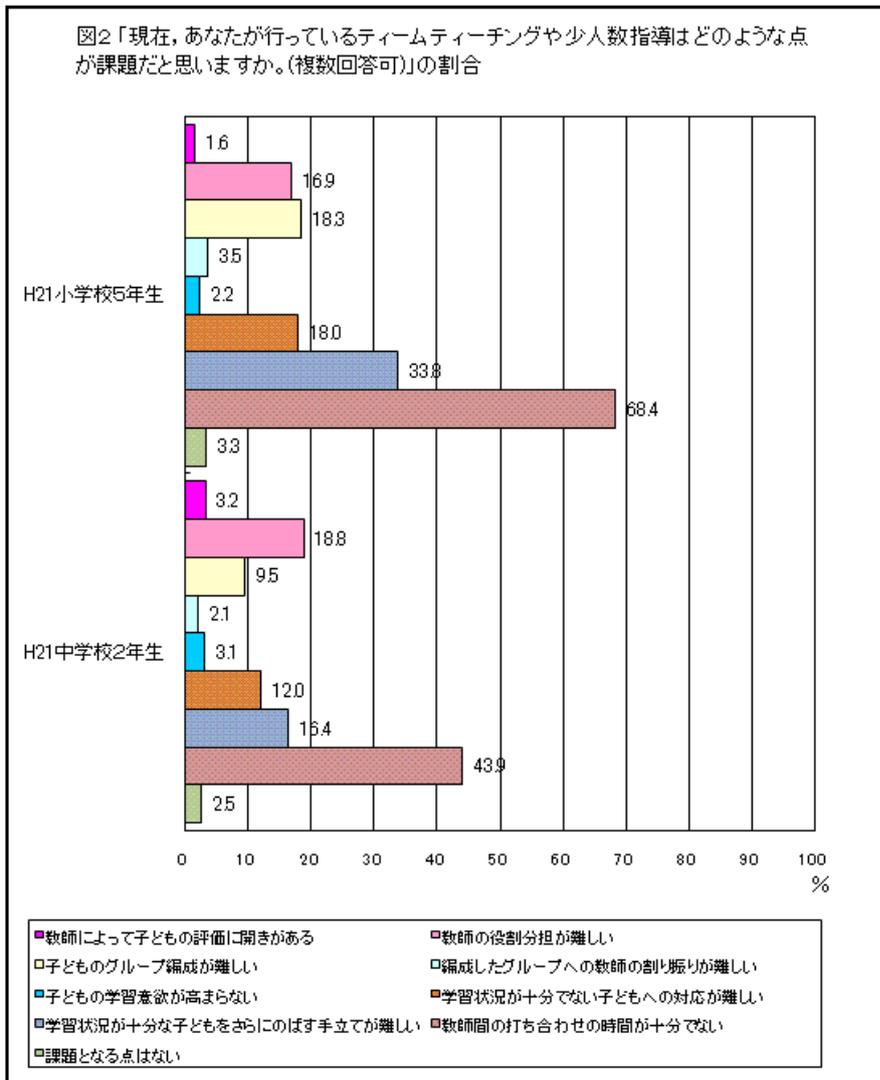


「**現在、あなたが行っているチームティーチングや少人数指導はどのような点で効果的だと思いますか。(複数回答可)**」という設問については、小学校では「学習状況が十分でない子どもに応じた指導ができる」と「子どもへの声掛けが増え、個別指導が十分にできる」と回答した教師の割合が多く、8割を上回っている。ついて「子どもの学習内容がよく定着する」と回答した割合が62.1%となっている。小学校教師の回答状況は中学校教師の意識調査の結果と比べて、すべての項目で高くなっている。[図6]



「**現在、あなたが行っているチームティーチングや少人数指導はどのような点が課題だと思いますか。(複数回答可)**」という設問については、小学校では「教師間の打ち合わせの時間が十分でない」と回答した教師の割合が最も多く、68.4%である。中学校教師の意識調査の結果と比べて、「教師間の打ち合わせの時間が十分でない」「子どものグループ編成が

難しい」「学習状況が十分な子どもを更にのばす手立てが難しい」と回答した小学校教師の割合が高くなっている。[図7]



チームティーチング・少人数指導

チームティーチング・少人数指導については、多くの教師がチームティーチングや少人数指導の効果について認めている。小学校では約8割、中学校では約5割の教師が「学習状況が十分でない子どもに応じた指導ができる」と「子どもへの声掛けが増え、個別指導が十分にできる」を効果的な点として挙げており、以下、「子どもの学習内容がよく定着する」「指導方法の工夫・改善ができる」などを挙げている。課題としては、小・中学校共に「教師間の打ち合わせの時間が十分でない」を挙げており、以下、「学習状況が十分な子どもを更にのばす手立てが難しい」「子どものグループ編成が難しい」「学習状況が十分でない子どもへの対応が難しい」などを挙げている。特に、チームティーチングを実施する場合には、教師間の授業前における十分な打ち合わせや授業後の評価についての情報交換などが欠かせないのであるが、このような時間が十分に確保できていない現状が見受けられる。

チームティーチング・少人数指導においては、目標の明確化や学習形態の工夫などを充実させることによって、その効果が際立つと思われる。その結果、児童の学習に対する楽しさ、充実感・満足感がより確かなものとなり、学力向上へとつながると考えられる。

また、チームティーチング・少人数指導については、児童のグループ編成の方法、教師の役割分担などについて更に検討を重ねるとともに、打ち合わせ時間の確保については、その原因を究明し、施策としての対応、及び各学校においての工夫・改善を図る必要がある。

最終更新日： 2009-07-01

平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#) > [V 自校データの分析と活用](#)

調査結果の分析から学校改善へのステップ

1 調査結果の分析及びデータ活用について

平成14年度から抽出調査で始まった佐賀県小・中学校学習状況調査は、平成18年度より全数調査に変更して実施されている。その間、各教科の正答率だけでなく、学習指導や児童生徒の学校生活・家庭生活の状況についても報告書を通じて調査結果を返却してきた。平成19年度からは、Webシステムによる分析ツールの提供及び報告書の発信も行ってきた。

昨年度からは、県内の各会場において「教育センター出前講座」を実施し、その中で「学習状況調査結果の分析と活用」をテーマとして、分析ツールを利用したデータ処理や見方についての研修を広めた。一方、各学校からも、同じテーマによる校内研修についての援助依頼があり、教育センターより学校に直接出向き、当該校のデータに基づいた研修を支援した。

調査結果の分析や活用にかかわる研修については、参加した多くの教師から、

「グラフの見方が分かった。」

「本校(当該校)の課題が見付かった。」

等の感想が寄せられる一方で、

「では、具体的にはどのようなことをこれから行ったらよいか。」

「まず、何に取り組むことが必要なのか。」

等の次の具体的なステップについての質問が寄せられるようになった。

今年度の所外援助についても、

「調査結果の分析よりもその活用について情報提供してほしい。」

といった依頼内容が多くなっている。

学校現場における学習状況調査の位置付けが、結果の見方からその活用へその比重がシフトしてきているといえる。そこで、調査結果の分析と活用から学校改善へのステップとして、各学校において以下のような視点で取り組むことを提案したい。

2 課題把握から実践への視点

(1) 校内研究と絡めた実践の成果と課題の把握

各学校では、毎年、もしくは複数年をかけて、校内研究に取り組んでいる。校内研究の成果や課題については、教師の主観を基にした表現や客観的なデータによって導き出されるデータを基にした数値で示されることが多い。佐賀県小・中学校学習状況調査が今年度より実施時期が4月に移行したのに伴い、当該年度前半のうちに改善へ生かすことが可能となったことを考えると、校内研究の実践についての成果と課題を検証する客観的なデータとしては、これまで以上に活用できると考える。

本調査では、教科の学習状況のみならず、児童生徒や教師の意識調査も実施しているため、幅広い視点からの分析が可能となる。また、今年度は、分析ツールの中に以下のような資料を追加している。

- ・クラスごとの観点別レーダーチャート及び各教科の設問ごと正答率
- ・十分達成を1としたときの観点別レーダーチャート
- ・県平均を1としたときの観点別レーダーチャート
- ・全教科平均と意識調査のクロス集計

調査対象学年の状況を概観するだけでなく、校内研究の実践と校内研究にかかわりのある調査結果とを照らし合わせることによって成果と課題を明らかにすると同時に、学力向上に向けた重点目標の具体化に結び付けたいものである。

(2) 課題の整理・分類から改善方針の策定

明らかになった課題については、各学校において整理・分類しておきたい。整理・分類することによって、具体的な改善方針の策定への観点が見付けやすくなる。整理・分類する視点としては、いくつか考えられるが、例として以下のものを挙げておきたい。

- (ア) 学校全体で考えるのか 校内研究の各部会で考えるのか
- (イ) 学校全体で取り組むのか 学年、もしくは学級で取り組むのか
- (ウ) 教師集団で共通理解して取り組むのか 教師自身で取り組むのか
- (エ) 学校独自で取り組むのか 家庭に協力を依頼するのか
- (オ) 短期的な取り組みとしてとらえるのか 長期的な取り組みとしてとらえるのか

このような視点で課題について整理・分類する作業については必ず全職員で行うことが必要である。全職員で取り組むことにより、課題についての共有化が図られ、改善方針が策定された場合にも共通理解の下に実践が行われることにもつながる。整理・分類した後は、例に挙げたような視点に立って各学校の状況に応じた具体的な改善方針を策定することが、実践化への鍵となるであろう。

(3) 改善方針に従った実践・評価

改善方針が定まったら、実践へと移すことになる。短期的な取り組みならばすぐに実践ということになる。ここで必要なのが、実践の評価についてどのような時点で行うのか、また、どのような方法で行うのかということをおおきく設定しておくことである。実践の内容によっては、その都度評価することも必要だろうし、学期末や年度末に評価するということも考えられるであろう。

大事なことは、明確な目標をもった取り組みをできる限り増やすことである。実践することが目的ではなく、児童生徒に十分な学力を身に付けさせることが教育活動の目的である。計画的な実践と合わせてその評価についても十分吟味しておきたいものである。

3 学校改善は評価にこだわること

学習状況調査の結果から見えてきた課題から、学校改善へと向かうには、まず、課題の具体的な改善方針とその評価について全職員で共通理解しておくことが重要だと考える。言い換えるならば、実践の評価の見通しが立っていないならば、改善へ向かうことは非常に難しいといえよう。実践の中身と、その結果を評価する手立てについてしっかり考えることが、次へのステップの具体的なイメージへとつながっていくものと考えられる。

加藤明は、評価にこだわる指導の在り方について、

「評価にこだわる指導とは、結果としての子どもの育ちの姿や学力にこだわり、責任をもつ指導であるが、それは具体的には次の三つの条件を満たす指導であると考えられる。

- ①『指導の成果は上がっているのか』の問いに、客観的な事実をもって答えることのできる指導
 - ②『その成果で十分なのか』の問いにも、客観的な事実や具体的な変容の姿で答えることができる指導
 - ③上がった成果を積極的に取り上げ、子どもに返すことによってほめたり、励ましたりすることを怠らなく行っている指導」(※1)
- と述べている。

学校における教育活動について教師と児童生徒がともに成果や課題を実感できる営みを繰り返していくこと、また、教師自身が常にこのことを意識しながら日々の実践に取り組むことが必要であろう。

《引用文献》

※1 加藤 明 『プロ教師のコンピテンシー 次世代評価と活用』 2008年 明治図書 p19